

鎧の勇者の成り上がり

JOKER1011

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「あなたは…死んでしまいました。」

「嘘だろ!?!おい!！」

「その代わりとなんですが……」

仮面ライダーの変身能力を貰えたけどよ。

全部ダークライダーじゃねえか!!!!

と、いった感じでオリジナル主人公が盾の勇者の成り上がりの世界に転生です。

この小説内のダークライダーの定義は

① p i x i v でダークライダーと調べた際に出てくるもの。

② 劇中で一度でも主人公と敵対した人物。（ここでは途中で仲間になったナイト、スベクター、パラドクスや止むを得ず敵対する形になったブレイブやマッドローグ、バルキリーも該当する。）

③ ニコニコ大百科で悪の仮面ライダーと調べた際に出てくるもの。

としています。ご理解頂けたら幸いです。

なお、この話はweb版とノベル版が混在します。

※実は前にダンブルドアが転生する話を書いていましたが、自分の不手際で投稿できなくなりました。ですので代わりに、こちらを書きます。

こんな馬鹿な私ですが、もしも見ていただける方がいらつしやったら幸いです。

目次

第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
182	168	142	119	103	87	73	55	38	18	5	1

第25話	第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話
398	384	364	349	331	317	305	288	270	253	237	216	197

484	太刀の勇者は立ち直れないコラボ④	446
477	太刀の勇者は立ち直れないコラボ③	439
464	太刀の勇者は立ち直れないコラボ②	430
457	太刀の勇者は立ち直れないコラボ①	418
	第30話	404
	第29話	
	第28話	
	第27話	
	第26話	

第34話		600
第33話		589
第32話		584
第31話		576
番外編	女装杯⑦	565
番外編	女装杯⑥	555
番外編	女装杯⑤	549
番外編	女装杯④	541
番外編	女装杯③	533
番外編	女装杯②	523
番外編	女装杯①	511
496	太刀の勇者は立ち直れないコラボ⑤	

4
7
話

4
6
話

4
5
話

4
4
話

4
3
話

4
2
話

第
4
1
話

第
4
0
話

3
9
話

3
8
話

3
7
話

3
6
話

第
3
5
話

701 693 687 680 676 672 662 654 644 637 630 619 613

6
0
話

5
9
話

5
8
話

5
7
話

5
6
話

5
5
話

5
4
話

5
3
話

5
2
話

5
1
話

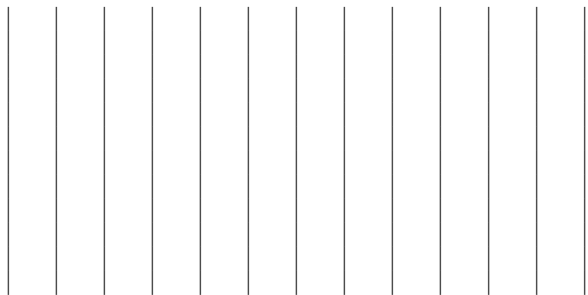
5
0
話

4
9
話

4
8
話

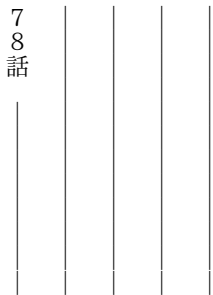
790 782 778 767 759 753 747 739 732 726 721 713 707

7 7 7 7 6 6 6 6 6 6 6 6 6
3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



866 860 854 848 838 833 826 820 815 811 805 801 797

番外編 7 7 7 7
話 話 話 話 話



900 893 882 877 871

第1話

「あなたは…死んでしまいました。」

「嘘だろ!?おい!」

俺は今、神と名乗る女性と向かい合って座っていた。

ここすばの〇リスと向かい合う空間を想像してほしい。あれだ。

「嘘じゃないです。本当ですよ?」

「Oh:::Jesus:::俺なんで死んだの?」

「なんで英語なのかは理解できませんが、突然死です。」

「突然死!?!」

「、この女神とんでもないこと言ったぞ!なんだよ、突然死って!

「あなたの場合は死因が分からないレベルの突然死です。ですが貴方が死ぬのはまだ早いです。そこで転生しませんか?」

「転生…?しかも条件付き?」

「ええ、元の世界には戻れませんが、別の世界なら可能です。そして条件は世界はこちらら

で決めるというものです。」

「まあ、いいよ。変な世界とかはやめてくれよ？迷わずチェンジするからな？」

「まあ、チェンジは2回までなら許しましょう。：では盾の勇者の成り上がりの世界なんかどうか？」

「盾の勇者：？なんだ、そのアニメ。」

——女神による説明中——

「なるほど。ならば5人目の勇者になりたい。」

「分かりました。武器ですが：貴方の記憶を読ませていただきます。」

急に女神が、悟○ますのポーズをしたかと思うと俺の記憶を読みだした。

「ふむ、仮○ライダーが好きそうですね。」

お前はサイ○・マンテ○スか！

「では、転生特典は仮面ライダーの変身能力ですね。」

「まあ、それで。（ありがとうございます。嬉しいです。）」

女神は指をパチンと鳴らすと、俺の後ろに扉が現れた。

「はい、最後に貴方の名前、年齢を聞いておきます。」

「俺の名は伊達 来人。歳は17です。」

「はい、ありがとうございます。」

女神はそれを聴くと何かに入力しだす。

すると扉は光り輝き、焼印がついた。

「これで全ての登録は完了です。あちらを通れば、向こうの世界に旅立ってます。」

「それで？本来の主人公って誰だっけ？」

「へ？盾の勇者です。」

「……だよな。タイトルにもなってるし。」

俺は立ち上がると、扉に手をかける。

「一つ忘れていました。貴方に、このメモを渡します。貴方の旅を快適にするための情報です。是非役立ててください。」

「これから先の貴方の活躍を天からですが見守っています。」

「何から何まですまない。じゃあな。」

「はい！お気をつけて！」

こうして、主人公である、名をライトと名乗る男は旅立った。憧れのライダー達の手を手に。

だが、この男はまだ知らなかった。それが普通じゃないことを。

第2話

来人改め、ライトは扉を開けたことによる光に視界を奪われ、光がなくなると魔法陣の前に立っていた。

「ここが盾の勇者の成り上がりの世界か。」

「おお、勇者様方ツツ…この世界をお救い下さいツツ!!!」

「「「は?」」」

状況の分からない4人は声を揃えてそう答えるしかなかった。

ライトはこうなることを聞いていた。女神からだ。

あの女神、俺にこの世界を説明するとか言ってネタバレしていきやがった。

とりあえず、盾の勇者のナオフミが不憫な目に合うんだよな?

「それはどういう事だ?俺たちは見たところ、突然ここに連れてこられて困惑している。出来る事なら丁寧な説明を頼む。」

ライトの落ち着いた声に安心したのか、ローブの男は落ち着いて説明をする。

「色々と込み合った事情があります故、ご理解する言い方ですと、勇者様達を古の儀式で

召喚させていただきました。」

「この世界は今、存亡の危機に立たされているのですッ！勇者様方、どうかお力をお貸しくださいッツ!!」

ローブを着た男は頭を深々とさげてライト達にお願いする。

「そうだな、まずは話を……」

「嫌だな。」

「そうですね。」

「俺たちは元の世界に帰れるんだよな？話はそれからだ。」

「もうちよつと詳しく説明してもらえないか？」

ライトの言葉を遮るようにして、4人は答えた。

「あの……ええと……」

予想外の言葉にローブを着た男もタジタジになるが、構わず、言葉は続く。

「人の同意なしに、いきなり呼び出した事に対する罪悪感をお前らは持つてんのか？」

「仮に、世界が平和になったら、用済みとばかりにポイツと元の世界に戻されてはタダ働き同然ですしね。」

「それで？こつちの意思をどれだけ汲み取ってくれるんだ？ 話によつちや俺達が世界

の敵に回るかもしれないから覚悟しておけよ?」

3人ともが自身の武器を突きつけてローブを着た男を威嚇している。

しょうがねえ、助けるか。

俺はローブを着た男を庇うように前に立つ。

「まあまあ、落ち着けよ。とりあえず話くらい聞こうぜ?それから判断してもいいんじゃないかね?」

「そ、そうです。まずは王様と謁見して頂きたい。報酬の相談や、その他諸々の重大な話はその場でお願いします。」

「なんで、そいつの肩を持つ。」

「そうですね。」

「お前そいつとグルじゃねえよな?」

「グルなわけねえだろ。俺だって戸惑ってるが、この人に、とやかく言っても仕方ねえだろ?それに異世界召喚大好きだろ?少なくとも俺は大好きなジャンルだ。」

「ふん。」

「まあ、嫌いではないですけど…」

「確かに俺も好きなジャンルだが、まだ認めた訳じゃねえからな?」

まったく。なんでこいつらは初対面の相手に対して、ここまで上から目線になれるんだよ。なんなんだ、コイツら。全員ヤンキーか？いや、ヤンキーにもいい奴いるから偏見か、今のは。

だが少なくとも俺は初対面の相手に対してのつけからタメ口や横柄な態度はできねえな。

そして、彼らはそう言いながらもローブの男の中の代表のような男が道を示した為、それに着いて行き、暗い部屋を抜けて石造りの廊下を歩く。

しかし、窓から見えた風景に5人は息を飲んだ。

どこまでも空は高く、中世ヨーロッパの様な街並みが広がっていた。

「すげえ：」

ライトはナオフミと被り、お互いに顔を見た。

こうして、歩いて行くうちに謁見の間に彼らは辿りついた。

「ほう、こやつ等が古の四聖勇者か。しかし、鎧などあったらどうか：ワシの記憶違いだろうか？」

謁見の間の玉座に腰掛ける老人がライト達を値踏みして考えながら呟いた。

なんか、すつごく偉そう。なんか、世界を救ってくる勇者に対して120G、たいま

つ、まほうのかぎ、かぎしかくれないどつかの王様みたいな奴だな。

臣下は何か王に耳打ちをしているが、その内容を知る術はライト達にはない。てか、聞こえるわけないだろ。

てか、アイツ俺の事、チラチラ見ながら喋ってねえか？おれおっさんにモテても仕方ないんだけど。

「面をあげい！」

俺たち5人が顔をあげたのを確認して王は言う。

「ワシがこの国の王、オルトクレイメルロマルク32世だ。」

こいつか。女神のネタバレの中にあつた要注意人物の一人。

「さて、まずは事情を説明せねばなるまい。この国、更にはこの世界は滅びへと向かいつつある。」

「終末の予言に、次元の亀裂………」

王の話をまとめると、まずこの世界には終末の予言なるものが存在するらしい。

予言によれば、いずれ波というものが幾重にも繰り広げられ、その波の齎す災害を退けねば世界が滅ぶという。

その予言の年が今年であり、予言の通り、古より存在する龍刻の砂時計という道具の

砂が落ち出した。

この龍刻の砂時計は波を予測し1ヶ月前から警告するという機能を持っている。伝承では1つの波が終わる度に1ヶ月の猶予が生まれ、また襲いくるという。

当初、この国の住民は予言をあまり信じていなかったが、予言通りに厄災が降り注いだ。

次元の亀裂がこの国、メルロマルクに発生し、凶悪な魔物が大量に亀裂から這い出てきたという。

その時は国の騎士と冒険者により辛くも乗り切ることが出来たが次の波は更に強力なものになる。

このままでは対処しきれないと考えた国の上層部は伝承に則り勇者召喚を行ったというのが事のあらまじだ。

言葉がきちんと通じるのも、伝説の武器の能力によるものらしい。

まあ、知ってるけど。と、というか俺の：恐らくベルトって伝説の武器か？ニチアサの武器の間違いだろ？

「話は分かった。つまり勝手に召喚した召喚された俺達にタダ働きしろと言いたいのだな？」

「都合の良い話ですね。」

「……そうだな、自分勝手としか言いようが無い。滅ぶのなら勝手に滅べばいい。俺達にとつてどうでもいい話だ。」

だから、また、こいつらは・はあ・百歩譲つてローブの男達に上から目線なのは分かるよ？でも相手は王だぞ？何？俺がおかしいの？

「だからさ、お前ら。目上の人に対する尊敬の気持ちとか無いわけ？」

「しかし、コイツらが文句を言うのも分かります。それでなのですが、私達が世界を救うに当たつて国からの援助とかは、ありますか？それさえ、分かればまだコイツら納得するかなと思うので。」

「鎧の勇者よ。安心せい、もちろんある。」

そう言うと、王はそばに控える大臣に目線を送る。

「はい。もちろん、勇者様方には存分な報酬は与える予定です。」

それを聞いた、ライト以外の4人は小さくガッツポーズをする。

「他に援助金も用意できております。ぜひ、勇者様たちには世界を守っていただきたく、そのための場所を整える所存にございます。」

「では勇者達よ、それぞれの名を聞こう。」

「俺の名前は、天木練。年齢は16歳、高校生だ。」

剣の勇者、天木練。体格は165cmと小柄で、線は割と細い。

顔は整っており、茶色がかった黒髪ของ ショートヘアで切れ長な瞳に白い肌、雰囲気は寡黙な印象を受ける。

「じゃあ、次は俺だな。俺の名前は北村元康、年齢は21歳、大学生だ。」

槍の勇者、北村元康。体格は175cmくらいで、線は割としっかりしていた。

顔は整っているが天木練と比べると、やや男らしく、金髪の長髪でポニーテールにしており、少し軽薄そうな印象だ。

「次は僕ですね。僕の名前は川澄樹。年齢は17歳、高校生です。」

弓の勇者、川澄樹。体格は160cmと勇者の中でもっとも小柄で、線も細く華奢とあった感じだ。

顔は整っており、天木練よりも中性的で、黄緑がかった金髪が若干天然パーマが入ったウェーブヘアで、物腰は穏やかながら芯は強そうな印象。

「次は俺だな、俺の名前は岩谷尚文。年齢は20歳、大学生だ」
年上だったのか、こいつ。

「俺は伊達来人。年齢は17歳、高校生だ。」

「ふむ。レンにモトヤスにイツキにライトか」

「王様、俺俺！」

「ああすまん、ナオフミ殿」

露骨すぎんだろ、こいつ。

「大方、分かった。それでじゃ。ええと、ライト殿。そなたは鎧の勇者らしいが、鎧はどこじゃ?」

「え? あ、はい。おそらく。この鉄の胸当てかと…」

「ああ、それじゃな。なるほど。」

そう言いながら控えている大臣に視線を送る。

大臣が俺に小さな光の玉を飛ばし、納得したような顔でうなづく。王に耳打ちをする。

「…何? 確かに鎧の勇者と出る? 真か? お主が言うのじゃからそうなんじやろう。分かった。とりあえず勇者として扱おうとしよう。」

なんかボソボソ言ってるが…?

「では皆の者、己がステータスを確認し、自らを客観視してもらいたい。」

そう言うが、全員が止まる。ステータス?

俺は試しに目の前の虚空を触るが、何も出ない。ただ空を切っただけだ。あれ? 詰んだ?
だ?

「えっと、どのようにして、見るのでしょうか?」

樹が王に問いかける。

「何だお前ら、この世界に来て真っ先に気が付かなかったのか？」

王の代わりに練が呆れた表情を浮かべながら、そう答えて、続ける。

「何となく、視界の端にアイコンがないか？それに意識を集中する様にしてみる。」

練に言われるがまま視界の端にあるアイコンに意識を集中するライト。

すると、軽い電子音がしてパソコンのブラウザの様な画面が大きく視界に映る。

『名前 伊達来人』

職業 鎧の勇者 Lv1

装備 仮面ライダーの変身アイテム

異世界の服

スキル 全ダークライダーに変身可能。』

……うん？全ダークライダー？

ダークライダーって：悪役……？

やりやがったな、あの女神。

「Lv1ですか……これは不安ですね。」

「そうだな、これじゃあ戦えるかどうか分からねえな。」

「と、いうよりも、なんなのだコレは？」

「勇者殿の世界では存在しないので？　これはステータス魔法というこの世界の者なら誰でも使える物ですぞ。」

「なるほど。」

「それで、俺達はどうすれば良いんだ？　この値は不安すぎるぞ。」

「勇者様方にはこれから冒険の旅に出て、自らを磨き、伝説の武器を強化していただきたいのです。」

「強化？　この持つてる武器は最初から強いんじゃないのか？」

「いえ！伝承によりますと召喚された勇者様が自らの所持する伝説の武器を育て、強くしていくそうです。」

「伝承ね。その武器が武器として役に立つまで別の武器とか使えばいいんじゃない？」

「元康はくるくると槍を回しながら話を進める。」

「俺達5人でパーティーを結成するのか？」

「来人は聞く。」

「だったら俺と錬と元康が前衛で、樹と尚文が後衛だな。みんな、とりあえずそれでいいか？」

「お待ちください勇者様方！」

「ん？」

これから冒険に出ようとする勇者達を引き留める大臣。

「勇者様方は別々に仲間を募り冒険に出る事になります。」

「それは何故ですか？分散せずにみんなで戦えば良いのではないのですか？」

「はい。伝承によると、伝説の武器はそれぞれ反発する性質を持っておりまして、勇者様達だけで行動すると成長を阻害すると記載されております。」

「本当かどうかは分からないが、俺達が一緒に行動すると成長しないのか？」

そんな説明を受けていると、皆、伝説武器のマニユアルとヘルプを見つけた。

『注意、伝説の武器同士を所持した者同士で共闘する場合。反作用が発生します。』

へー、本当だ。

『ただし鎧は例外です。』

は？

「どうやら俺には関係ないらしい。」

ライトは笑いながら答えた。

「嘘だろ!?!」

「まじかよ」

他にも武器の使い方等が懇切丁寧に書かれているのをライトは見つけたが、皆後回しにするようだ。

「となると仲間を募集した方が良いのか？」

元康の呟きに王が反応する。

「ワシが仲間を用意しておくでしょう。なにぶん、今日は日も傾いておる。勇者殿、今日はゆつくりと休み、明日旅立つのが良いであろう。明日までに仲間になりそうな逸材を集めておく。別々に旅立つとはいえ、波の時には肩を並べて戦うのじゃ。各々交流をしておくが良いぞ。」

「ありがとうございます。」

その日は皆、王の用意した来賓室で休む事になった。

第3話

通された来賓室にて、勇者達は皆それぞれ、割り振られたベッドに腰掛けて伝説武器の説明を熱心に読んでいる。

確認した所によると、まず、伝説武器は整備を必要としない特殊な武器であり、持ち主のLvと武器に融合させる素材、倒したモンスターによってウエポンブックが埋まっていく。

ウエポンブックとは、変化させることの出来る武器の種類を記載してある一覧表である。

だが、無い。奴らの話ぶりからして無いのは俺だけみたいだ。おっと？早速ハブられたか？鎧の勇者は元々存在しなかったみたいだし。

確かに、自分の武器は整備がいらぬ。だがウエポンブックがない。だが、そのかわりにライダーブックとかいうのを見つけた。

それを開くと出るわ出るわ、色々なライダーの凶鑑のようだ。

マジで全部ダークライダーじゃねえか。ラインナップからしてダークライダーの括りは過去に主人公に対して敵対したことがある、行動や雰囲気からダークなライダーだ。

また変身者によって敵対する形になってもいいらしい。

ライダーと言ったが、ブラッドスタークや魔進チエイサーのように厳密にはライダーでは無いのもある。

てか、滅や迅まであるのかよ。じゃあこれ増えるぞ。出てくるたびに。

「つていうかよ？コレってゲームじゃね？俺知ってるぞ、こんな感じのゲーム。」

元康がドヤ顔で言い放つ

「え？」

「というか有名なオンラインゲームじゃないか、知らないのか？」

「いや、俺も結構オタクやっていると自負してるが、知らないぞ。聞いたこともねえ。」

「お前知らねえのか？これはエメラルドオンラインっていうゲームだぞ？」

「何だよ。そのゲーム？聞いたことも無いぞ。」

「お前このタイトル知らねえって、本当にネットゲやったことあるのか？超有名タイトルじゃねえかよ。」

「俺が知ってるのはオーディンオンラインとかファンタジームーンオンラインとかだ。それ本当に有名タイトルなのか？」

「どっちも知らんな。メイプ○ストーリーとかマビノ○、○い砂漠なら知ってるが、なん

だそれ？」

「なんだよそのメイプ○なんとかっていうゲーム。初耳だぞ。」

「え？」

「え？」

「あ？」

「皆さん何を言っているんですか、この世界はネットゲームではなくコンシューマーゲームの世界ですよ」

「違うだろう。VRMMOだろ？」

「はあ？ 仮にネットゲの世界に入ったとしてもクリックかコントローラーで操作するゲームだろ？」

元康の問いに鍊が首をかしげて会話に入ってくる。

「クリック？ コントローラー？ お前ら、何そんな骨董品のゲームを言ってるんだ？
今時ネットゲームと言ったらVRMMOだろ？」

「VRMMO？ バーチャルリアリティMMOか？ そんなSFの世界にしかないゲームは科学が追いついてねえって、寝ぼけてるのか？」

「俺も知らねえな。嘘言ってるじゃねえだろうな？」

「はあ!？」

鍊は元康に威嚇した

そういうえば、コイツは一番早くステータス魔法つてのに気が付いたな。何か手馴れている印象を受ける。

「あの……皆さん、この世界はそれぞれなんて名前のゲームだと思っているのですか？」
樹が軽く手を上げて尋ねる。

「ブレイブスターオンライン」

「エメラルドオンライン」

「知らん。」

「知らない。っていうか俺はゲームの世界だと思ってるじゃない。」

話が何一つ噛み合わない。そこで尚文が提案をした

「じゃあ一般常識の問題だ。今の首相の名前は言えるよな？」

「「「ああ」」」

みんな頷く。

「一斉に言うぞ、せーのっ！」

「劍桃太郎」

「氷室泰山」

「朝倉啓太」

「大河内清次」

「武藤泰山」

「『……』」

聞いたことも無い首相の名前だ。間違っても歴史の授業に出てきた試しは無い。

それから俺達は自分の世界で有名なネット用語やページ、有名ゲームを尋ねあう。

俺も野○先輩や阿○いさじとか、ド○ルドとか尋ねるが、みんな知らないらしい。

それは他の奴らも同じで、そのどれもが知らないと言う結論に至った。

「どうやら、僕達は別々の日本から来たようですね。」

「そのようだ。間違っても同じ日本から来たとは思えない。」

「という事は異世界の日本も存在する訳か。」

「時代がバラバラの可能性もあったが、いくらなんでもここまで符合しないとなるとそうなるな。」

「確かにな。時代が違うくらいなら知ってる単語が少しはあるはずだからな。」

「あんまり無駄話をするのは趣味じゃないが、情報の共有は必要か。」

大人ぶってるのか、性格の問題か、錬が上からの物言い話し始める。

すげえ、むかつく。しばき回してやろうか。初期段階の装備だったらお前しばくのく

「らい訳ないからな？」

「俺は学校の下校途中に、巷を騒がす殺人事件に運悪く遭遇してな？」

「ほうほう。」

「一緒に居た幼馴染を助けて、犯人を取り押さえた所までは覚えているのだが…」
鍊はおそらく刺されたのであろう、脇腹を擦りながら説明する。

「十中八九、刺されてんじゃねえか。」

「俺もそうとしか思えない。そんな感じで気が付いたらこの世界にいた。」

「じゃあ、次は俺だな。」

軽い調子で、元康が自分を指差して語り出す。

「俺はさ、ガールフレンドが多いんだよね。」

「「……」」

「リア充、爆発しろー」

顔が整っていて、女好きの雰囲気そのままの発言に、元康以外の全員が呆れたような顔を見せる。

「それでちよーつと…」

「二股三股でもして刺されたか？」

鍊が小馬鹿にする様に尋ねると、元康は目をパチクリさせて頷いた。

「なんで分かったんだよ。それにしてもき？いやあ……女の子って怖いね。」

「マジかよ。」

そんな風に殺される奴、本当にいたんだな。フィクションの中だけだと思ってた。

次に樹が手を胸に当てて、話し出す。

「次は僕ですね。僕は塾帰りに横断歩道を渡っていた所……突然ダンプカーが全力でカーブを曲がってきまして、その後は……」

「……」

そのまま轢かれたのだろう、3人の中で1番理不尽な理由だ。

「異世界転生の基本パターンだな。」

「え？来人さんの世界では普通なんですか？」

「まあ、フィクションの世界で異世界転生するってなったら大概トラックとかダンプに轢かれてるからな。」

「そうなんですね。確かに：僕の世界にもそういう感じのがありますけど。少数派ですね。」

「やべえな、みんな濃いぞ。俺勝てるか？」

「あー……この世界に来た時のエピソードって絶対話さなきゃダメか？」

おや？尚文が口ごもってる。なんだったけ？確かチヨロつと聞いてんだよな。女神から。

「そりゃあ、みんな話しているし」

「そうだよな。うん、みんなごめんな。俺は図書館で不意に見覚えの無い本を読んで気が付いたらつて感じた。」

「……」

尚文に向ける3人の視線が冷たい。

いやさ？俺も最初聞いた時は首を傾げたよ？意味わからないもん。二股とかで刺されるのは知らんが、通り魔に刺されるとかダンプに轢かれるのは分かるよ？実際フィクションにあるし。だけど本読んではあんまり聞かないな。

ヒソヒソと三人は俺と尚文に聞こえないように内緒話をしだす。

「でも……あの人……盾だし……」

「やっぱ……所もそう？もしかしたら鎧も……」

「ああ……」

なんかまだ何も言ってない俺まで馬鹿にされてるんだが？

尚文の為に俺の為に話題を進めよう。

「最後は俺か。そうだな、俺はいつも通り宿題をして早めに寝たんだ。そしたらここにいた。」

もちろん、嘘である。神様が関わってますなんて言ってみろ。僻まれて終わりだ。

「寝てたらだと？」

「ああ、確か寝る前に少し心臓が痛かったな。だから俺は突発性の病死だと思ってる。」

「他に症状ありますか？」

樹が食いついてくる。

「ああ、確か妙な倦怠感と、少しの発熱・あと手足のしびれがあつたな。」

「え!?! それデクレール病じゃないですか!」

「「「デクレール病?」」」

「ええ、僕の世界では難病指定で、まだ特效薬はありません。それについて最近まで突然心停止から死亡だったので変死扱いでした。」

「じゃあ、俺の世界から何年か経ったら樹の世界になんの?」

「さあ? それは僕にも分かりません。」

「病死・まだ俺よりいいじゃねえか・」

尚文が俺を恨めしそうに見てくるが、知らん。

それから俺と尚文以外の3人は話をしだした。

「地形とかどうよ？」

「名前こそ違うが、ほぼ変わらない。これなら効率の良い魔物の分布も同じである可能性が高いな。」

「武器ごとの狩場が多少異なるので同じ場所には行かないようにしましょう。」

「そうだな、効率とかあるだろうし。」

俺以外……尚文は知らんが、とりあえず3人とも、この世界では自分がとてつもない存在だと思っっているようだ。

それこそ、ゲームの中に入り込んだという様に現実味が欠けている様な印象を受ける。死なねえ事を祈るばかりだ。

「なあ、お前本当に病死か？」

尚文が話しかけてきた。

「ああ、あくまでも推測だ。それに樹も言ってたろ？」

「お前らはいいいよな〜」

「勇者様、お食事の用意が出来ました。」

そこから食事を摂り、皆眠りについた。

次の日

朝食の後、案内役の男に後程、王からの呼び出しがあると伝えられた。

恐らく昨日言っていた旅に同行する仲間のことだろうか。

案内役の男に案内されて、謁見の間に通された。

日の昇り具合から、おそらく10時くらいだろうな。

「勇者様の御来場！」

謁見の間の扉が開くとそこには様々な服装をした男女が15人ほど集まっていた。

騎士風の身なりの者もおり、皆、それなりには腕に覚えがありそうだ。おそらくギルドとかから引つ張ってきたんだろう。

援助を行うという、王の言葉は守られたようだ。まあ、当たり前だよな。本当に一人で旅立たせて死にましたなんてなったら他国から非難轟々だろうしな。

勇者5人は、王に一礼をすると、話を聞く。

「前日の件で勇者の同行者を希望する者を募った。事前に希望を聞いたところ、どうやらみんな同行したい勇者がおるようじゃ。」

一人に付き3人の同行する仲間が居るのなら均等が取れるのだが。結果は分かっている。どうせ、俺と尚文の所には一人も来ない。

てか、普通防具の名がついてる勇者の仲間になりたいなんて奴いないと思うけどな。

「さあ、未来の英雄達よツツ。仕えたい勇者と共に旅立つのだ！」

しかも勇者が同行者を選ぶのではなく、同行者側が勇者を選ぶようだ。

まあ、事前に希望を聞いてたなら当たり前か。

そして、同行者となる者達が、それぞれ同行したい勇者の前に並ぶ。

天木錬 5人

北村元康 5人

川澄樹 5人

岩谷尚文 0人

伊達来人 0人

分かってたさ！分かってたけど、いざとなると悲しいな。別に泣かないけど？俺強もん！

「ちよつと王様！これはどういうことですか！」

「そうです。確かに俺らは防具の名がつく勇者ですし、俺に至っては前例がないから仲間がいなのは分かります！ですが！」

俺と尚文は国王にクレームを入れる

「う、うむ。さすがにワシもこのような事態が起こるとは思いもせんかった、鎧の勇者殿に關しては運としか言えぬな……」

「人望がありませんな。」

王は狼狽えて、大臣は切り捨てるようにそう答える。

「はっはっは！ 大臣殿はおかしな事を言うな。昨日来たばかりの俺達に人望を求めるのは無理な話だと思わないか？」

来人の返しに、大臣はムツとしたような顔になる。

「まあ、いいや。俺は尚文と旅に出ます。俺には勇者の武器は互いに反発し合うっていう制限がないようですし。それによ？ 尚文。一から仲間集めと行こうじゃないか。そっちの方がRPG感があって楽しいぜ？」

「いや、それは……」

来人の言葉に、何やら都合が悪そうな王。

「あ、王様！ 私は盾と鎧の勇者様の下へ行つても良いですよ。」

元康の所に並んでいた、女冒険者の1人が手を上げて名乗り出る。

マイン：いや、マルティ。この悪女め。

「他にナオフミ殿とライト殿の下に行つても良い者はおらんのか？」

王が最終確認を行うが、他に誰一人手を上げることは無かった。ちよつとやってみるか。

「いえ、僕ら二人で行くんで大丈夫です。それに君も無理する必要はない。本当は元康のもとで戦いたいんだろ？自分の気持ちに正直になりな？」

「いえ、でも……！」

マインは慌てながら仲間になろうとする。

「これこれ、ライト殿。せつかくの好意を無碍にするでない。マインとやら。本当にそれでいいんじゃない？」

「はい、私は構いません！」

「それではマインは二人の仲間になるがよい。それとナオフミ殿とライト殿はマインの他にこれから自身で気に入った仲間をスカウトして人員を補充するのじゃ。」

「そして月々の援助金を配布するが、ナオフミ殿とライト殿のもとに同行者を用意できなかった事は申し訳なく思う。代価として他の勇者よりも今回の援助金を増やすしよう。どうじゃ？それで手を打ってくれんか？二人とも。」

「ああ、それはありがたい。それも、出来るだけ努力しようとするかな。なあ、尚文。」
言葉ではそう言うものの、今日の様子を見る限りでは、仲間の勧誘は望み薄と見てい

いだらう。

「それでは支度金である。勇者達よしっかりと受け取るのだ。」

勇者それぞれに、それなりの重さがある金袋が手渡される。

中でも、一際重い金袋が来人と尚文に渡ったところで、王が発言する。

「ナオフミとライト殿には銀貨800枚、他の勇者殿には600枚用意した。これで装備を整え、旅立つが良い。」

「えっと盾の勇者様、鎧の勇者様、私の名前はマイン＝スフィアと申します。これからよろしくね。」

「よ、よろしく。」

「こちらこそ。」

警戒すべき要注意人物。ヤバいレベルの女だな。

「じゃあ、行こうか。マインさん、ライト。」

「はーいー！」

「ああ。」

俺は大体の流れを知っている。気を引き締めていこう。

「これからどうします?」

マインは尚文と来人に訪ねた

「まずは武器とか防具が売ってる店に行くべきかな。これだけの金があるんだ。良い装備が買えそうだしな。」

尚文は答えた。

「そうだな、尚文には必要だろうな。」

装備できないけどな。

「いやいや、ライトも必要だろ? お前だって、その鉄の胸当てだけなんだから。」

「じゃあ私が知ってる良い店に案内しますね。」

「お願いできる?」

「ええ」

マインはスキップするような歩調で走って行った。

やれやれ、助け舟は出そうか。

来人は尚文に耳打ちをした

「尚文、あの女に気をつけろ。」

「なんでだ? あんなにいい子なのに。」

「俺の経験だ。ああいう奴には裏がある。それも大多数が邪悪に満ちてる。」

「だから、気を許すな。いいな？」

「考えすぎな気もするけど……ああ、分かった。」

すまねえな。俺にはこれくらいしか教えられねえんだ。

城を出て10分くらい歩いた頃、大きな剣の看板を掲げた店の前でマインは足を止めた。

「ここがオススメの店です」

「おお……」

「中々だな。」

来人と尚文は店の扉から店内を覗き見ると壁に武器が掛けられており、まさしく武器屋という面持ちに感心している。

「いらつしやい」

店に入ると店主に元気良く話しかけられる。筋骨隆々の絵に書いたような武器屋の店主がカウンターに立っていた。

「へー……これが武器屋か」

「お！お客さん方初めてだね。当店に入るたあ目の付け所が違うね。うん。」

「ええ、彼女に紹介されて。」

そう言つて尚文はマインを指差すと、マインは手を上げて軽く手を振る。

「ありがとうよお嬢ちゃん。」

「いえいえこの辺りじゃ親父さんの店つて有名だし?」

「嬉しいこと言つてくれるねえ。ところでその変わった服装の彼氏達は何者なんだい?」

異世界の服のままの2人を見てそう言う。

「もう親父さんも分かつてるでしょ?」

「となるとアンタらは装備を見るからに盾の勇者と鎧の勇者様かい!」

まじまじと親父さんは来人と尚文を凝視する、気の良さそうなおやつさんだな。エルハルト。

「俺は来人。こいつは尚文。これからよろしく頼む。」

「おう! お得意様になつてくれるつてんなら大歓迎だ!」

「ここで尚文はとりあえず鎖帷子を購入し、外に出る。」

「あ! すまねえ。ちよつと外で待つてくれ。」

「はーい。」

「ああ。」

マインと尚文を外に残し、俺はもう一度中に入る。

「いらつしや・どした？忘れ物か？」

店主は俺に声をかける。俺はまっすぐ店主のもとに向かい、話す。

「頼みがある。」

「：どうした？その雰囲気からはマジのようだな。」

「ああ、この話は俺とアンタだけにとどめてくれ。約束してくれるなら話す。」

「内容にもよるが、聞いてやる。」

「この後、恐らくだが俺たちはもう一度この店に来る。その時、女が武器と防具を買うはずだ。ええと、これとこれだ。その時にだが、なんとかして買わせないでほしい。」

「どういうことだ？武器と防具を買わせないなんて死なす気か？」

「違う。俺の中で何かが叫んでいる。アイツを信じるなって。それにもしハズレたら、俺が、予言した武器と防具、プラス実際に選んだものの代金分、買い物するなり飯や酒を奢る。」

「おいおい、冗談だろ？」

店主は笑う。

「……………」

「その目は本気のようなだな。……わかった。」

「すまない。近い未来、武器と防具を買いに来る。そして奴が手に取る武器や防具分くらいは払う。」

「それともう一つ。尚文が購入した鎖帷子が本当に尚文が購入したものであって、誰が見ても分かるような証明書みたいなのをくれないか？」

「ああ、それも次来た時に渡す。約束だ。ほら！早く行け。外で仲間が待つてるぞ。」

「ああ、ありがとうな。信じてくれて。」

「いいってことよ。それよりハズレた時の約束忘れんなよ？」

「忘れねえよ、エルハルト。」

俺の言葉に武器屋の店主こと、エルハルトは驚いた顔をする。

だって、俺たちに一回も名乗ってないからな。

俺は二カつと笑うと外に出た。

「アイツ・一度も名乗ってねえ、初対面の俺の名を当てやがった。やつぱりアイツの話は本当かもな。」

自分以外誰もいなくなった店内にエルハルトの呟きだけが聞こえた。

第4話

関所の門を抜けると、限らない大草原が広がっていた。

一応、石畳で道が舗装されてはいるが、少し外れると、一面の緑が眼前を覆う。

「では勇者様、このあたりに生息する弱い魔物を相手にウォーミングアップしましょうか。」

「そうだね。俺は喧嘩はあるけど、魔物は戦ったことないしな。まあ、どれだけ戦えるかやってみるさ。」

「頑張れよー！盾だつてやれるつて所見せてやれ！」

「頑張ってくださいね。」

「え？マインとライトは戦つてくれないの？」

「私が戦う前に勇者様の実力を測りませんと。」

「そうだそうだ！もし俺たちとはぐれた時にも戦えるようにならないとな。」

「そ、そうだね…そんな状況になりたくないけど。」

しばらく3人で歩いていると魔物が飛び出してきた。

「あれはオレンジバルーンですね。弱そうな魔物ですが、気を抜かないようお願いし

ます。」

「つまりス○イムだ。気抜くなよ？」

「まずは俺からだ。」

尚文が意気込んで前に出る。

「ガアアッ！」

凶暴な声と二つの鋭い目が尚文達の姿を捉えると襲い掛かる。

「頑張つて！勇者様！」

「おう！」

マインの応援が飛び、それに尚文も答える。

尚文は盾を右手に持ち鈍器の要領でオレンジバルーンに向けて拳を振るう。

当たったが、決定打にならず、しかもオレンジバルーンはその場で跳ね返り、牙を剥くと尚文に噛み付いた。

「いッ!？」

硬い音が響いた。オレンジバルーンは尚文の腕に噛み付いているが効果が無いようだ。

「オラオラッ!!」

尚文はオレンジバルーンをボコボコと殴り続けた。

それからオレンジバルーンは軽快な音を立てて、弾けた。

「よく頑張りましたね。勇者様。」

「ゲームのシールドバツシユみたいに盾で裏拳するような感じで殴るのはどうだ？」

「ああ、参考にさせてもらおうよ。次、来人。頼んだ。」

「任せろ。」

そう言い、俺は右手に銃を手に持つ。

「銃!?!お前…」

俺はそれに答えずに左手にフルボトルを握り、振る。

そしてそれを装填した。

コブラ!

重低音の変身待機音が鳴り響き、俺はお決まりのセリフを言う。

「蒸血。」

俺はトリガーを引き、黒い煙に包まれる。

ミストマツチ!

コブラ! コブラ! ファイヤー!

体から火花が飛び散り、俺の姿が露わになる。

「俺…う、うん! こっちの声の方がしっくり来るつてもんだ。」

「おいおい、ちゃっかりエボルトボイス付きかよ。」

「来人様……?」

「お、おい……来人……なんだ、その姿……」

「お?この姿か?これが俺の鎧の一部なんだよ。まあ、ちゃつちやと片付けるとするか。」

俺は首をコキツと鳴らすと右手にトランスチームガン、左手にスチームブレードを持ち、歩き出す。

無抵抗に近づいてくる俺に対してオレンジバルーン3体は噛み付こうと突進を仕掛けてくる。

俺は一体目を無言で撃ち抜き、二体目を斬り捨てた。

「ラストだ。」

俺はすぐにスチームブレードとトランスチームガンを組み合わせてライフフルモードにする。

「終わらせてやるよ。」

俺はコブラロストフルボトルを装填する。

コブラ!

コブラ! スチームショット!

オレンジバルーンに吸い込まれるようにまっすぐ光弾が飛んでいき、炸裂すると特撮でお約束の大爆発を起こした。

「上出来ですわ！ 鎧の勇者様！」

「そうか？ まあ、悪い気はしねえな。」

俺は変身を解いて元の姿に戻る。

「ふう、これが俺の鎧だ。」

「お前、本当にLv1なのか？」

それから尚文は俺が倒したバルーンも含めて盾に吸収させる。

「お前は吸収しないのか？」

「ああ、俺の装備は吸収じゃなくてLvアップで増やしていくらしい。」

「そろそろ日が暮れますね、今日は早めに帰って、もう一度武器屋を寄りましたよよ。」

「そうだな。」

「賛成だ。」

じゃないと、賭けに負けるからな。

「私の装備品を買ったほうが明日には今日行くより先に行けますよ？」

空を見上げると夕方を過ぎようとしていた

「そういえば、そうだね」

「……………」

城下町に戻った来人達は武器屋へと再び顔を出した。

「お、盾のあんちゃんと鎧のあんちゃんじゃないか。他の勇者達も顔を出してたぜ？」

儲けて嬉しいのかエルハルトはニコニコ笑顔で来人達を迎え入れた、よほど儲かったんだらうな。

「そうだ、これって何処で買い取ってくれるんだ？」

オレンジバルーン風船を見せるとエルハルトは店の外へと指を指す。

「魔物の素材買取の店があるから、そこに持ち込めば大抵の物は買い取ってくれるぞ。」

「ありがとう。」

「で、次は何の用で来たんだ？」

「ああ…マインの武器を買おうと思ってる。」

尚文がそう答えるとエルハルトは俺の方を見る。

俺が無言でうなづく、エルハルトは俺にだけ見えるようにサムズアップをしてみせる。

「予算額は？」

武器屋の親父に尋ねられると尚文は金袋を開けて中身を確認する。手元に残ってい

るのは銀貨680枚だった。

「マイン、どれくらいにしといた方が良い？」

「…」

マインはとても真面目そうに装備品を見比べていて、尚文の言葉は耳に入っていない。

マインが選んでいる間、エルハルトが俺に話しかけてきた。

「おいおい、マジで買いにきたじゃねえかよ。」

「言っただろ？」

「ああ、だがまだだ。武器や防具を揃えずに戦って、そのあと武器や防具を求める。当たり前前の光景だ。」

「確かにな。だが、勝負はまだ分からねえぞ？」

「ふ、勿論だ。まだお前が指定した装備を選んでねえからな。勝負といえばだ！暇潰しに値下げ交渉でも受けてやろうか？」

「良いのか？」

「構わねえよ。あくまでも雑談みたいなもんさ。どんと、こい。」

店主は機嫌が良いのか、人が良いのか、そんな話を持ちかけてくる。

「そうか。ならば、遠慮はいらないな。8割引。」

「あんちゃん見た目に反してえげつねえな。いくらなんでもやりすぎだろ。 2割増。」

「俺がいた世界ではこのくらい当たり前だったぜ？そして、どさくさに紛れて増やして俺が気づかぬとでも？7割9分。」

「嘘つけ！それに、商品を見ねえで値切る野郎には倍額でも惜しいぜ！」

「そちらから持ちかけてきた話じゃないか。忘れたとは言わせねえぜ？妥協して9割引
！」

「チツ！2割1分増！」

「おいおい、更に増やすのかい？面白い。ならば、その漢気に免じて12割引。」

「ふざけんな！それじゃあ、こつちが金を払う事になるじゃねえか！しようがねえな：

5分引き。」

「甘い！まだまだ、行けるはずだ！9割2分——」

くだらない問答をしていると、マインが選り終り戻ってきた。

持ってきたのは、可愛らしく凝ったデザインの鎧と、来人が想定していたものよりも値が張りそうな剣だった。

「勇者様、私はこのあたりが良いです。」

本当に俺が予言した装備だった為、目を丸くする。

「お？嬢ちゃん。それ値札は？」

「え？あ、ないですね。」

「マインは鎧や剣をクルクルと回しながら値札が無いことを確認した。」

「ああ、やつぱりな。そこに紛れてたか。実はその鎧と剣だが、すまねえ。非売品なんだよ。その次に良い商品がこれなんだよ。これで我慢してくれ。」

「そう言うと、カウンターから出て、商品を持つてくる。」

「マインは鎧のデザインを見て、一瞬嫌な顔をしたが、すぐに笑顔に戻った。」

「残念ですけど、これにしますね！」

「いくらですか？」

「銀貨370枚だ。」

「じゃあ、ここは俺が……」

「いや、俺と割り勘にしよう。」

「尚文が払おうとしたため、割り勘を申し出た。」

「買った物を済ませた来人達は店を出ると宿屋へ移動した。」

「二部屋で頼む。」

「はいはい。ごひいきにお願いしますね。」

「宿屋の店主が揉み手をしながら、来人達を部屋へと案内する。」

「その後、宿屋に併設している酒場にて、別途料金の銅貨5枚の食事を3つ注文する。」

森からの帰りがけに購入した、地図を広げながら、来人は尚文とマインと打ち合わせをした。

「この辺りが、今日俺らが魔物を狩った森で合ってるんだよな？」

「ええ、そうです。そして、明日行くとすれば、この少し先のラファン村の先のダンジョンが良いかも知れませんね。」

「ダンジョンか。なるほどな、面白そうだ。」

マインの話を聞きながら、地図を頭に叩き込む来人。

Lv上げをする際に場所というのはかなり重要になってくる。

それは昨日奴らも言ってた事だ。

「ところで、勇者様達はワインは飲まれないんですか？美味しいですよ。」

食事を頼む時、マインが店員と話していたが、その後一緒にワインが運ばれてきた。

他の客のテーブルを見た所、このワインはセットではないらしい。

「俺はいいや。」

「俺もあんまり酒は好きじゃない。」

「そうですか：残念ですね。」

「明日も早いから俺は寝る。」

「じゃあ、俺も。」

「それじゃあ、私はもう少し飲んでますね。」

こうしてマインと別れて来人たちは部屋に入る。

尚文は疲れがたまっていたのか、すぐに寝てしまった。

さて、展開通りなら今夜枕荒らしにあう。本来なら撃退してやつてもいいが、展開を変えると後々帳尻を合わせないと世界が狂う。

……向こうは俺たちを散々な目に合わせるんだ。イタズラの一つや二つ構わねえだろ。

俺はウオズのベルトを巻き、未来ノートを出す。

そこにサラサラと書き込み、本を閉じる。

そして眠った。

次の日

「おい！起きてくれ！やられた！」

「あ？何がだよ？」

「俺の装備も金もない！」

来たか。俺の装備は……ある。金もある。

やはり尚文だけを狙ったか。

すると部屋扉の扉を蹴破るようにして兵士達が入ってきた。

「盾と鎧の勇者だな？」

「ああ、それがどうした？サインなら、また後でにしてくれ。寝起きなんだ。」

「国王様から貴様等に召集命令が下った。ご同行願おうか。」

「召集命令？いや、それよりも俺、枕荒らしに遭っちまったんだ。犯人を——」

「さあ、さっさと着いて来い！」

「おい、少しくらい話を聞いてやったらどうだ？」

「黙れ！」

そう言いながら俺の腕を掴む兵士。

それにイラツときたため、トランスチームガンを出し、右手からステイングヴァイ

パーを出して目の当たりで寸止めする。

「ひっ！」

「なんだ、てめえ。その言い方は。さっさと手を離せ。さもないと両目に刺さるぞ？」

兵士は俺を睨んだまま、離さない。

「俺は本気だ。」

そう言うのと、舌打ちしながら手を離した。

「さあ、連れてけよ。俺たちを。」

来人達は兵士達に連れられて歩く。

そして王城につき、騎士達が拘束しようとするが、来人がつぶやく。

「触るな。少しでも触れてみる。暴れるぞ?」

先程の場面を見ていた騎士達は、少し間をとって囲み、謁見の間に通される。

そこには、不機嫌な面持ちの王と大臣、そしてマインや元康、練、樹がいた。

「やあー皆さん、お早いお着きで。それとマイン。君は宿屋にいるものと思っていたが?てか、お前さつきからどうした?」

マインは、来人が声をかけると元康の後ろに隠れて、睨みつけていた。

そして苦しうに腹を抑えている。

これが俺がやったイタズラ第一号。金と鎖帷子を盗んだ者は我慢ができないほどの腹痛に悩まされ、3日間トイレに行きつぱなしになる。というものだ。

ほう、耐えてるのか。だがいつまでもつかない?

「ぐっ・なん・でも・ありません・」

その後、無言で走り去っていった。トイレだな。

「で?俺達が何かしたか?心当たりが無いんだが。」

「マインがいなくなったため、王を見つめながら、少し困った様に問いかける。」

「本当に身に覚えが無いのか？」

「元康が仁王立ちになり、来人と尚文を問いたです。」

「ねえな。」

「俺もだ。」

「本気で言ってるのか!?まさか、お前らがそんな外道だとは思わなかったぞ！」

「外道?は?何言ってるんだ?てか、その鎖帷子どうしたんだよ。」

「これか?昨日マインがプレゼントだって言ってくれたんだよ。」

「そうか。」

「来人の返答を他所に、裁判所の様な雰囲気の話が進んでいく。」

「して、盾と鎧の勇者の罪状は?」

「罪状?何かやったのか?」

「黙れ!マインが言ってたぞ!昨日酒に酔ったお前らがマインの部屋に乱入して服を引

きちぎると無理やり関係を持つとしたって!そのあと、あの子はお前らを振り払って

俺に助けを求めにきたんだよ!」

「何言ってるんだ? 昨日、飯を食い終わった後は部屋で寝ただけだぞ。」

「嘘を吐きやがって、じゃあなんでマインはあんなに泣いてたんだよ!」

「あれは悲しくて泣いてたんじゃねえだろ。完全に腹痛で泣いてただろ。」

来人は元康に反撃する。

「そうだ！ 王様！ 俺、枕荒らし、寝込みに全財産と盾以外の装備品を全部盗まれてしまいました！ どうか犯人を捕まえてください！」

「てか、そもそも俺ら是指一本マインには触れてません、証拠はあるんですか？」

「黙れ外道共め！」

国王は尚文と来人の進言を無視して言い放った。

「嫌がる我が国民に性行為を強要するとは許されざる蛮行、勇者でなければ即刻処刑物だ！」

「だから誤解だつて言ってるじゃないですか！ 俺はやってない！」

「落ち着け、尚文。俺に任せてくれ。」

「マインの証言通りなら、彼女は何かしら痣なり、擦過傷を負っている筈だ。それを確認してくれ。」

「それとだ。俺は昨日金と鎖帷子を盗まれても分かるように、ある細工を施した。一つは金と鎖帷子を盗んだ者には3日間トイレにこもりっぱなしになるレベルの腹痛。そしてその盗まれた鎖帷子を俺の許可なく着た者には俺が許可するまで着たら最後、一生脱げないようにした。もちろん無理に脱ごうとしたら皮膚ごと脱ぐことになるだろう

な。他には鎖だからランダムで鎖で縛られたかのように行動不能になる呪いだな。」

それを聞いた元康は青い顔をして鎖帷子を引つ張ってみる。

俺はそれを見たが、あえて気がつかないふりした。

「俺たちはやっていない。だが信じられないのだろう？なら全ての波が終われば俺達を殺せばいい。王が考えうる最も残酷な方法で。」

「ふむ・確かに勇者を今殺す訳にはいかん。…よかろう。それまで待つてやろう。」

「それと、これを。」

俺は貨幣が入った袋を床に置く。

「ここに俺が王に渡された全財産が入っている。多少使ったが。これを王とマインで分けてくれ。」

「よかろう。好きにせい。」

「ふん！強姦魔が偉そうに！罪を認めないつもりか！」

「黙れ、マインが尚文から盗んだ鎖帷子を勝手に着ているくせに。違うというなら今すぐ脱いでみろ！」

「ぐっ。」

そこに鍊と樹の援護射撃が加わった。

「おい、お前それマジで尚文のじゃねえのか？」

「な!?!ち、違う! マインが買ってきたって!」

「ならば、彼がいう通りに脱げばいいんですよ。脱げば。」

「いや、鍊、樹。いいんだよ。こいつが違うって言ってるなら違うんだろう。そうだろう？」

「元康?」

「…ああ。」

「と、いう訳だ。俺たちは行く。あばよ。」

第5話

「来人！なんで金なんか渡しただよ！あれじゃあ認めたようなもんだろ！」

尚文が食つてかかってくるが、俺は言い返す。

「確かにあの場で無理やり逃げることもできたさ。だが、あそこで反抗してみろ。俺たちは指名手配犯になって確実に街を歩けなくなる。だろ？」

「そうだけだよ……」

尚文は俺の言葉に理解を示すが、金を取られた事に納得がいつてなかった。

「まあ、金なら……また稼げばいい。」

普通の服を着た俺とインナー姿の尚文で話しながら歩いてみると、声をかけられた。エルハルトだ。

「おい！盾と鎧のあんちゃん！仲間を襲つただつて！一発ずつ殴らせろ！」

「アンタも疑うのか。分かった。代わりに俺を2発殴れ。」

尚文の前に立ち、身構える。

「な!？」

「どうした？俺は逃げも隠れもしない。やるならやれよ？」

俺は目を閉じる。だが、いつまで経っても拳がとんでこない。

「どうしたんだよ？ 殴るのか？ 殴らないのか？ はつきりしろ。」

「いや、いい。やつぱ、あんちゃん達がそんなことする訳ねえよな。これをやるよ。」

袋を投げ渡され、中には煤けたマントと、安物の服が入っていた。

「在庫処分品だが無いよりマシだろ？」

「すまない。」

尚文は服を着て、マントを羽織った。

「待てよ……あ！ そうだ！ 昨日なんだが俺達が帰った後にマインは店に来たか？」

「いや？ 来てねえ。それより、ほれ。これが盾のあんちゃんが確かに俺から鎖帷子を

買ったって証明書だ。もちろん登録番号付きだ。」

「そうか……分かった。じゃあな。」

それから俺たちは草原でストレスを発散するかのようには魔物を倒しまくる。

「そつちいったぞ！ 来人！」

「任せろ！」

最後の一匹をスチームブレードで斬り倒して、辺りが静かになる。

「レベルが上がったな。」

「俺もだ。」

あれからレベルが上がったこともあり、魔進チェイサー、ゲムム、スペクター、ローグを解放した。

因みに今はナイトローグだ。

ブックをよく読んでなかったな、知らなかった。解除していくのか、てつきり最初から使えるものだと思ってた。

「それにしてもお前の鎧はなんなんだ？見たことがねえ。」

「あれだ。仮面ライダーって知ってるか？」

「知らない。」

「マジか、あんな子供から大人まで楽しめるコンテンツを：俺の鎧はそのシリーズに出ってくる悪役や一度でも主人公と敵対した戦士の鎧だ。」

「めっちゃ強えじゃねえかよ。」

「俺もびつくりしてるよ。よし、これくらい売れば生活はできるだろう。」

グー

尚文が俺をみる。

「俺の腹だ。売れるもん売ったら飯食いに行こうぜ。」

それから魔物の素材を売り、飯屋で飯を食う。

魔物の素材を売る時もナメられたので、かましてやった。

「盾の勇者様く鎧の勇者様く仲間にしてくださいよお〜」

ガラの悪い酔っ払い達が上から目線で偉そうに話しかけて来る。

尚文と来人は顔を見合わせアイコンタクトをする。

「帰れ。死にたくないなら。」

「まあ、待てよ、来人。じゃあ先に契約内容の確認だ。」

「はい」

「まず雇用形態は完全出来高制、意味は分かるな？」

「わかりませーん！」

「チツ！そんなのも分からねえのか。バカは足手まといだ。失せろ。」

「なんだと!？」

威嚇する若い冒険者達

「はあ・分かった。じゃあ戦力になるかどうかの面接してやるから表出ろや。」

「尚文、すぐ戻る。」

一人残された尚文はおもむろに来人の食べ残しを一口食べてみる。

「うまつ！俺もやっぱこっちにすりゃよかったな。だが少し味が薄いな。」

1分後、来人は帰ってきた。

魔進チエイサーの姿で。

足手まといなんじゃねえかって思ってたさ。」

「そんなこと思っちゃいねえよ。お前は十分やってるさ。」

「だが、ギルドに依頼したら余計に変なの来ただろ？ 仲間のアテもねえし。」

そうなのだ。ギルドを探し当て、仲間募集の依頼を出したせいで、街に帰って飯を食うと100パーセント絡まれるようになってしまったのだ。

その度に尚文のバルーンや、俺の変身で返り討ちになっているが。

「お困りのようですな。」

二人はすぐに振り返る。

そこにはシルクハットに似た帽子にサングラス、燕尾服を着た奇妙な奴が立っていた。すつごく胡散臭い。

街中が中世の世界観だからか、余計に逸脱しており、こいつだけ浮いている印象を受ける。

「誰だ、アンタは。」

俺はすぐにも攻撃できるようにトランスチームガンを構える。

「人手が足りない。と私は聞きましたよ？」

「それをお前は解決できるって言うのか？」

「ええ、もちろんですとも。」

「私が売っているものは奴隷です。奴隷ならば契約する事で服従させることができます。」

「服従・俺はそこまで望まないが・まあ見てみるだけいいか。なあ？尚文？」

「そうだな。」

昼間だというのに日が当たらない道を進み、まるでサーカスのテントのような小屋が路地の一角に現れる。

「こちらですよ勇者様方。」

「ああ。」

軽い足取りで、男はテントに入っていく。

俺たちもそれに続く。

「そうだ、一応言っておくが、もし俺たちを騙すつもりなら……。」

「ええ、私は無事では済まないでしょうね。お得意のバルーン攻撃と、奇妙な鎧ですよね？」

二人のゴロツキに対する行動は有名になっているようだ。

「勇者を奴隷として欲しいと言うお客様はおりましたし、私も可能性の一つとして勇者様にお近付きしましたが、一目見た時点で考えを改めましたよ。はい。」

「ほう？俺たちを商品として見たと？」

「ええ、一度は。勇者を奴隷にしたがる方々もたまにいますよ。でも、それを私が考えてたのも過去の話。」

「あなた方は良いお客になる資質をお持ちだ。良い意味でも悪い意味でも。」

「どういう意味だよ？」

「さてね。どういう意味でしょう。」

なんとも掴みどころのない男のようだ。

重々しい金属音をさせて、サーカステントの中で嚴重に区切られている扉が開いた。

「ふむ……」

店内の照明は薄暗く、仄かに腐敗臭が立ち込めている。

獣のような匂いも強く、環境はあまり良くないようだ。

見渡す限り檻が設置されていて、中には人型の影が蠢いている。

「さて、こちらが当店でオススメの奴隷です。」

奴隷商が勧める檻に近づき覗き込んで中を確認する。

「グウウウウ……ガア！」

「狼か？」

「二足歩行だから……人狼だな？」

鍛えられた肉体を毛皮で覆った様な外見の、所謂人狼が檻の中で暴れ回っている。

「ええ、鎧の勇者様、正解でございます。こちらは獣人といって、一応は人間の部類なのですよ。」

「人間の部類？」

「ええ。しかしメルロマルク王国は人間種至上主義ですから。亜人や獣人には住みづらい場所なのですよ。」

「ふーん……」

「複雑だな。」

「で、その亜人と獣人とは何なんだ？ 違いはあるのか？」

「亜人とは人間に似た外見ですが、人とは異なる部位を持つ人種の総称。獣人とは逆に亜人の獣度合いが強いものの呼び名です。はい。」

「なるほど、カテゴリーでは同じという訳か。」

「ええ、そして亜人種は魔物に近いと思われる故にこの国では生活が困難、故に奴隷として扱われているのです。」

「そしてですね、奴隷には。」

奴隷商はパチンと奴隷商が指を鳴らす。すると奴隷商の腕に魔法陣が浮かび上がり、それに連動するかのように檻の中に居る狼の胸に刻まれている魔法陣が光り輝いた。

「ガアアア!!」

狼は胸を押さえて苦しみだしたかと思うと悶絶して転げまわる。

もう一度、奴隷商がパチンと鳴らすと狼の胸に輝く陣は輝きを弱めて消えた。

「このように指示一つで罰を与えることが可能なのですよ。」

「そうやって指示を出すわけだな。」

仰向けに倒れる狼を見て、来人が呟く。

「誰にでも使えるのか?」

「ええ、何も指を鳴らさなくても条件を色々と設定できますよ。ステータス魔法に組み込むことも可能です。」

「なるほど……」

「便利っちゃ便利だな。」

使役者に対して、どこまでも便利に出来ている。

「二応、奴隷に刻む文様にお客様の生体情報を覚えさせる儀式が必要でございますがね。」

「それは：使役する者の命令を、それぞれの奴隷へ確実に伝えるためか?」

「流石物分りが良くて何よりです。」

説明しながら奴隷商は、不気味な笑みを浮かべている。

「一応聞いておくが、値段はいくらだ？」

「何分、戦闘において有能な分類ですからね……」

吹っ掛けるのはリスクが伴うし、あまりに高値だと手が出せない。

「金貨15枚でどうでしょう？」

「右腕と左足が悪いようだが、それを加味した上での値段か？」

金貨は銀貨100枚に相当し、今回の場合は銀貨1500枚となるが、戦闘要員であれば、もつと高いはずだ。

「一目見ただけで気付くとは流石ですね。もちろんでございませう。」

来人と尚文のジト目に対して、奴隷商は笑顔で答える。

「俺たちが買うつもりがないのを知りながら、勧めてきたんだな？」

「はい。あなた方はいずれお得意様になるお方、目を養っていたただかねばこちらも困ります。下手な奴隷商に粗悪品を売られかねません。」

会って間もないのに、随分と気に入られたようだ。てか、次来るとは限らねえし。

「参考までにこの奴隷のステータスはコレでございませう。」

小さな水晶を奴隷商は来人と尚文に見せる。するとアイコンが光り、文字が浮かび上がる。

戦闘奴隷Lv75 種族 狼人

その他色々取得技能やらスキルやらが記載されていた。

「コロシアムで戦っていた奴隷なのですがね。鎧の勇者様のご指摘通り、足と腕を悪くしてしまい、処分されていた所を私どもが拾い上げたのですよ。」

「コロシアムか……」

「そんなのあるんだな。」

「もうちよい安いやつはいないか？性別は問わなくてだ。」

尚文の発言に奴隷商は困ったようにポリポリと頬を掻く。

「些か愛玩用にも劣りますがよろしいのですか？」

「そういう趣味はない！」

「Lvも低いですよ？」

「戦力が欲しいなら育てたらいい。」

「……面白い返答ですな。横にいらつしやる鎧の勇者様以外の人は信じてないと聞いておりましたか？」

「奴隷は人じゃないんだろ？物を育てるなら盾とそう変わらない。裏切らないって保

証付なら安心して育てられるもんさ。」

「これはしてやられましたな。」

「さてよ尚文、俺も買うぞ。」

「おお！あなたもですか！いいですね！目が輝いております！やはりあなた方は私が見込んだ通り！」

クツクツクと奴隸商は何やら笑いを堪えている。

「それではこちらです。着いてきてください。」

そのまま、檻がずつと続く小屋の中を歩かされること数分。

暴れる様な声かしていた区域を抜けると、今度は啜り泣く様な声かする区域に入る。不意に視線を向けると薄汚れた子供や老人の亜人か獣人が檻で暗い顔をしている。

悲壮感が漂いすぎて、しんどい。

そしてしばらく歩いた先で奴隸商は足を止めた。

「ここが勇者様方に提供できる最低ラインですな、仮にこれより下を求めるなら：もう何をさせようにも使い物にならない奴隸になりますので。」

そうして指差したのは三つの檻だった。

一つ目は片腕が変な方向に曲がっているウサギのような耳を生やした男。見た限りの年齢は20歳前後。

二つ目はガリガリにやせ細り、怯えた目で震えながら咳をする、犬にしては丸みを帯びた耳を生やし、妙に太い尻尾を生やした10歳くらいの子。

三つ目は妙に殺気を放つ、目が逝っているトカゲの様な亜人だ。

「左から遺伝病のラビット種、パニックと病を患ったラクーン種、雑種のリザードマンです」

「皆問題を抱えているのか？」

「ご使命のボーダーを満たせる範囲だとここが限界ですな。しつこいようですが、これより低くなると、正直……」

チラリと奥のほうに目を向ける奴隷商の視線を追う来人と尚文。

遠目でも分かる、死の臭い。

葬式で微かに臭う、あの臭いの濃度が濃い。あの先には何かが充満している。

なんとなく腐敗臭もしてきている。

あそこは目に入れると流石の自分でも心が病みそうだ。

「ちなみに値段を聞いておこう。」

「左から銀貨25枚、30枚、40枚となっております。」

「なるほど。」

「レベルはどんなかんじだ？」

「左から5、1、8ですね。」

即戦力だけで考えたら雑種のリザードマンか。雑種？どう言う事だ？それに値段を見たなら納得だな。続いて遺伝病のラビット種か。確かに全体的にやせ細ってんな。

ラビット種と呼ばれた男は片腕が使えなくても他の部位は問題がなさそうだな。

「そういえば、ここの奴隷はみんな静かなんだな。向こうと違って。」

俺は元来た道を指差す。

「静かすぎて空気が重いんだが。」

尚文は嫌な顔をしている。

「空気の重さは我慢してください。そして静かなのは騒いだら罰を与えます故。」

「なるほど。手厳しい。」

「徹底されてんな。」

さて、原作通りなら尚文はラフタリアを選ぶ。

なら俺は両端をもらおう。

「じゃあ真ん中の奴隷をかうとしよう」

奴隷商は檻の鍵を取り出してラクーン種の女の子を檻から出して首輪に繋ぐ。

奴隷商はあなたはとうする？と言いたげな目で俺をみる。

「安心しろ。ちゃんと買う。そのラビット種とリザードマンをくれ。」

「鎧の勇者様は初来店で二人ですか。いいですね、ますますあなたに興味が出てきましたよー！」

「よしてくれ。期待には答えられねえぞ。」

奴隷商はインクが入った小皿と果物ナイフを渡してくる。

「さあ勇者方様、少量の血をお分けください、そうすれば奴隷登録は終了し、この奴隷は晴れて勇者様の物でございます。」

来人と尚文は奴隷商から渡されたナイフを自分の指に軽く突き立てる、血が滲むのを待ち、小皿にあるインクに数滴落とす。

奴隷商はインクを筆で吸い取り、ラクーン種、リザードマン、ラビットの亜人が羽織っていた布を部下に引き剥がさせて、胸に刻まれている奴隷の文様に塗りたくる。

3人とも痛みにも声を上げるが、やがて落ち着く。

奴隷の文様は光り輝き、2人のステータス魔法にアイコンが点灯する。

奴隷を獲得しました。

使役による条件設定を開示します、色々と条件が載っている。

来人は、ざっと目を通し、設定を無しにしようとした。

しかし、システム上、それは許されないので、エラーが出てしまう。仕方なく寝込みに襲い掛かるや、主の命令を拒否するなどの違反をした場合、激痛で苦しむような必要最低限に設定する。

「これでこの奴隷は勇者様方の物です。では料金を。」

「ああ。」

尚文は銀貨31枚、来人は銀貨82枚を渡した。

「勇者様方、多く支払ってますよ?」

「ああ、儀式分だ。どうせ別料金で請求すんだろ?」

「そうだ。それにもし本当に多すぎるなら、また来た時にそこから払ってくれ。」

「ほう、また来ていただけるのですね。それはそれは、お待ちしておりますよ。」

来人と尚文は奴隷を連れてテントから出た。

これから自分たちはどうなるのか不安な顔をしながら後ろをついてくる。

「さて、名前が聞きたいな。左から順番に教えてくれ。」

「ピーターです。」

「:コホ!」

「ナーガだ。」

「おい、お前。名前を聞いてるんだ。」

ラクーン種の子は尚文の命令に背いた事で、早速奴隷紋の効果が発動する。

「う、うぐ。」

「ここら、尚文。やめなさい。お嬢ちゃん? ゆっくりでいいから言えるかい?」

「ら、ラフタリア。」

「ラフタリアか。いい名だ。」

「とりあえず宿屋に行こう。こいつらの治療をしなきゃ。」

第6話

「さて、尚文。俺は今からこいつらを治療する。また明日会おう。」

そう言うのと、ピーターとナーガを連れて路地に入った。

「ピーター、ナーガ。俺は今から二人に選択してほしいことがある。一つは怪我だけ治して一生俺の奴隷か、もう一つは怪我を治して俺の仲間になるか。だ。選んでくれ。」

「後者を。」

「俺もだ。」

「よし、分かった。早速治療しよう。」

俺はガシヤットギアデュアルを出し、ダイヤルを回す。

What's the next stage!

軽快な変身待機音が流れる。

「な、なんですか！その音！」

「なんだ！敵か！」

「俺のだよ。」

そう言いながらスイッチを押す。

DUAL UP!

Get the glory in the chain! Perfect puzzle!

来人は仮面ライダーパラドクス。パズルゲームに変身した。

「さて・あつたあつた!」

来人は能力でエナジーアイテムを取り出し、それをピーターに付与した。

「ぬおおおお!!!」

ピーターはやせ細った体に筋肉が付き、覇気のある姿になる。

「ですが・まだ腕が…」

ピーターが残念そうに自身の腕を見た瞬間だった。

バキバキバキバキツツ!!!!

「い!痛い痛い痛い!!!」

曲がった腕が元に戻ろうと動き出した。

「耐えろ!」

「……!!!」

ピーターは目を閉じ歯を食いしばり、必死に耐える。

やがて腕の回転は止まり、腕は元の状態に戻った。

「はあ…はあ…はあ…」

「よく頑張ったな。これでお前の腕も元どおりだ。」

ピーターは恐る恐る手や腕を動かし、正常に動くことを確認すると俺に礼を述べる。

「感謝します。ええと…」

「来人だ。」

「ライト様。」

「様はいらねえよ。様は。」

「そんじゃあ、次はナーガお前の番だ。」

「おう！いつでも！」

「よし、その心意気だ。えい！」

ピーターの時と同様に回復の効果を持つエナジーアイテムをナーガに付与する。

「うおお!!!力が漲るぜ!!!」

ナーガもヒョロヒョロのヤモリみたいなのからリザードマンらしい体格となった。

「じゃあ、明日からよろしくな！」

俺は変身を解くと、両手を差し出す。

「はい！」

「おう！」

ピーターとナーガは俺の手を握り返した。

「さて、もう一回奴隷商の所へ行くぞ。」

そう言うのとピーターとナーガは露骨に嫌な顔をする。

「うっ！」

「ぐっ！」

なるほど、態度だけでも命令を拒否した扱いになるのか。

「大丈夫だ。俺はお前たちを売らない。だって仲間だからな。」

そう言い聞かせて再びテントを訪れた。

「これはこれは！思ってたよりもお早いですな。お！」

「あの奴隷達が治ってますね・私の目もまだまだってことですか。して、状態が良く

なってますので、査定額は・」

「待て。売るわけねえだろ。」

「そうでしたか。てつきり治しただけかと。」

「：それよりもだ。なあ、今日見せてもらった狼なんだが、まだいるか？」

「ええ、いますよ。」

「よかった。買おう。」

「ほう、どういった風の吹きまわしですかな？」

「気にしないでくれ。」

「ふむ、まあいいでしょう。やはりあなたは素晴らしい。内緒にしてほしいですが、盾の勇者様よりもです。」

「それ絶対尚文の前で言うなよ？ 気を悪くするぞ。」

俺は奴隷商に金を払い、狼を引き取る。

そいつも同様に負傷箇所を治し、名を名乗らせる。

「私はミコ。」

お前女だったのかよ!!!

次の日

俺はとりあえず絡んできた酔っ払いを返り討ちにして、ローブを盗んでピーターとナーガとミコに着せ、武器屋へ向かった。

「うへえ・酒臭い・なんか、微かに吐いた臭いするし・」
狼故に鼻が利くミコにとってはキツイらしい。

「我慢してくれ。あとで新しいの買ってやるから。」

そこにはもう尚文とラフタリアが到着して待っていた。

「よう、来人：つて一人増えてないか？」

「ああ、どうしても気になつてな。」

「私はミコ。」

「最初に見たやつか。この金持ちめ：」

「はつはつは！お前もこれからなれるさ！」

「いらつしやい！盾のあん：マジかよ。」

武器屋に顔を出すと親父がラフタリアを連れた尚文を見て絶句しながら声をかける

「コイツが使いそうで銀貨6枚の範囲の武器をくれないか？」

「……はあ。」

武器屋の親父は深い溜息を吐いた。

「国が悪いのか、それともアンタが汚れちまったのか……まあいいや、銀貨6枚だな。」

「後は在庫処分の服とマント、まだ残つてるか？」

「……良いよ、オマケしてやる。」

「エルハルト、こつちもいいかい？」

武器屋の親父は来人を見て更に呆れた様子で声をかける

「鎧のあんちゃんもかい……しかも盾のあんちゃんよりも多いし……やれやれ2人共どうし

ちまったんだ？」

「仲間を募集しても、マトモな奴が来なくてな。しかもギルドに依頼を出してからは余計にだ。なら仕方ねえだろ？」

「それは分かるが、盾のあんちゃんに至っては、まだ子どもじゃねえかよ。」

武器屋の親父が嘆かわしいと呟きながら、ナイフを数本持つてくる。

尚文はラフタリアの手に何度もナイフを持ち比べさせ、一番持ちやすそうなナイフを選ぶ。

「これで良い」

ナイフを持たされて顔面蒼白のラフタリアはオロオロしながら俺と親父に視線を送る。

「ホラ、オマケの服とマントだ。」

エルハルトは尚文にオマケの品を渡し、更衣室へ案内させる。

ナイフを受け取った後、ラフタリアにオマケの品を持たせて着替えてくる様に指示する。よろよろと咳をしながらラフタリアは着替えをする為に更衣室に入っていった。

「心配だわ。私行つてくる。」

「ああ、頼んだぞ。ミコ。」

ミコはラフタリアが可哀想に見えたのか、追いかけていった。

「俺のところも頼む。」

「ああ、鎧のあんちゃんは何がほしいんだ？」

「そうだな。ラビット種のピーターに片手直剣と盾、リザードマンのナーガには棍、さつき更衣室へ行つた狼人のミコには爪を貰おうかな。」

昨日得意武器を聞いた結果だ。

「ちよつと待つてろよ。よし、こんなとこだな。」

エルハルトは来人が頼んだ武器をテーブルに置いた。

「さて、選んでくれ。」

来人が言うのとピーターとナーガは武器を選び出す。

「では自分はこれを。」

ピーターは魔法鋼鉄製の剣と盾を選ぶ。

「じゃあ、俺はこれだな。」

ナーガは魔法鋼鉄製の棍を選ぶ。

ちようどうラフタリアがミコに手を引かれて着替えを終えて、ミコの手を離すとおらずと尚文の方へ無言で駆けてくる。

「ミコ、お前も選んでくれ。爪で合ってるよな？」

「ええ、ありがとう。」

「さて……」

ミコは流石元コロシアムの戦士なのか、念入りに選んでいる。

「これで。」

銀鉄製の爪を選択した。

「まあ、鞘とベルトとマントはサービスしておくぜ。」

「毎度すまねえな。」

「さて、ラフタリア、これがお前の武器だ。そして俺はお前に魔物と戦う事を強要する。分かるな？」

「……」

尚文はラフタリアに目線を合わせて説明する、ラフタリアは怯える目を向けながらコクリと頷く。

「じゃあ、ナイフを渡すから——」

尚文はマントの下で食いついているオレンジバルーンをラフタリアの前に見せ付けて取り出す。

「これを刺して割れ。」

「ヒィ!?!」

尚文が魔物を隠していた事にラフタリアは武器を取り落としそうになるほど驚いた声を上げる。

「お、オレンジバルーンじゃん。」

ミコがそう呟く。

「え……………いや」

「命令だ。従え。」

来人達はそれを黙ってそれを見つめる。

「ぐ……………」

「ほら、刺さないと痛くなるのはお前だぞ」

「コホ……………コホ！」

「尚文、ここは店の中だぞ？せめて草原まで待てよ、それにまだラフタリアは、まだ病氣治ってないんだろ？」

「……………やりませぬ。」

ラフタリアはしっかりと攻撃の意志を持って、尚文に喰らいつくオレンジバルーンを後ろから突き刺した

ブニーン……………

「弱い！ もつと力を入れろ！」

「……………!? えい！」

突きが跳ね返されたラフタリアは驚きながら勢いを込めてバルーンにもう一度突き

を加える。

だが、また跳ね返される。

その時、ミコが動いた。

そして震えるラフタリアの手に、そっと自分の手を添える。

いきなり手を添えられた事に驚き、ミコの顔を見る。

「いい？ラフタリア。ナイフを両手で持つ時は、こうだ。大丈夫、最初は誰だつて怖いさ。私も初めてコロシアムに出て、人の命を奪ったときは、一日中震えが止まらなかったし、物も食べられなかったし、無理して食べたら吐いた。でもね？これは、あなたがやらないといけないことなのよ。」

「じゃないと、ナオフミは死んじゃうし、あなたは最悪奴隷に逆戻りになっちゃうわ。それは嫌でしょ？」

「…うん。」

「だったら、戦うしかないわ。幼いあなたには酷かもしれないけど、やるのよ。あなたならできる。少なくとも貴女くらいの歳の頃には素手の喧嘩も碌に出来ないくらい臆病だった私が言うんだからできるわ。」

「ミコさんがですか？分かりました。」

ラフタリアはもう一度オレンジバルーンを見る。

その目はまっすぐと標的を見据えており、ナイフを握る手の震えはいつのまにか止まっていた。

そして、今度は腰が入った突きを繰り出した。

「えーい!!!」グサツ!

今度こそバアン!と大きな音を立ててバルーンは弾けた。

EXPI

同行者が敵を倒したのを理解させるテロップが尚文の視界に浮かび上がる。

「よし、どうやら戦えるようだな、行くとしよう。ほら武器しまえ。」

武器を腰にしまうように指示を出し、ラフタリアは素直に従う。

「……コホ」

「ああ、お前らも行くぞ。」

「はい。」

「おう!」

「ええ。」

「アンタらしい死に方しないぞ?」

店を出ようとした俺たちに対してエルハルトは言う。

「死なないように頑張るさ。」

来人はエルハルトに言い返した。

そして来人と尚文の一行は代金を支払って武器屋を後にした。

「さて。ここからはさ、別行動にしないか？」

「別行動？」

「ああ、そうだ。尚文はラフタリアを仲間にしたから、もう俺が手助けしなくてもいいはずだ。じゃないとお前の為にもラフタリアの為にもならない。」

「それもそうだな。分かった。次の波の時にでも会おうぜ。」

「ああ、約束だ。」

来人と尚文はガシツと握手をする。

するとラフタリアがミコの方に歩いていく。

「ええと…ミコさん…」

「どうかした？ラフタリア。」

「私…！強くなる！強くなってナオフミ様の為に頑張る！」

「うん、ラフタリアならできるわよ。頑張ってるね。」

ミコとラフタリアも抱きしめ合う。

そして尚文達を見送ってから来人は自身の仲間の方に向いた。

「さて、俺は知っての通り勇者だ。波と戦う使命がある。波と戦って死ぬかもしれん。だが俺は死にたくない。みんなだつてそうだろ？」

来人の問いかけに3人ともうなづく。

「だからだ。俺はみんなで強くなるうと思う。俺たちは家族だ。やるぞ！」

「「おー!!!」」

第7話

あれから月日が経った。

来人はLv42、ピーターはLv41、ナーガはLv41になった。

ミコはLv75で変わりがなかった。

今は装備などの整備を終え、砂時計の前に立っている。

「お前ら用意はいいか？」

「ええ。」

「もちろんだぜ！」

「私も。」

「すまん、遅くなった。」

後ろから尚文達が走ってきた。

「久しぶりだな！それにしてもラフタリア！お前見違えたな！」

「ええ、私も頑張ったんですから！」

「と、話してる内にそろそろだ！」

来人がそう言った瞬間、ワープしていた。

視界が鮮明になり場所を確認するとリユート村の近くだと分かる。

「ライト！」

ナーガが指さした方を見ると他の勇者達が我先にと大型の魔物達と戦っているのが見えた。

「ピーター！ナーガ！ミコ！民間人の救出が最優先だ！行くぞ！」

「おーーーー！！！」

3人が自身の武器を構えて走っていく。

俺もだな。

俺はベルトを巻き、ガシヤットを二つ取り出す。

マイティアクションX！

デンジャラスゾンビ！

「グレードX—0……変身！」

ガシヤット！ガツチャーン！レベルアップ！

マイティジャンプ！マイティキック！マイティーアクション！X！

アガツチャ！

デンジャラー！デンジャラー！ジェノサイド！デス　ザ　クライシス！　デンジャラス
ゾンビ！

「コンティニューしてでも……クリアする！」

走りながらガシヤコンブレイカー（ハンマーモード）を右手に、ガシヤコンバグヴァ
イザー（ビームモード）を左手に装備して魔物が群がる辺りに駆け出す。

虫型の魔物達に向けてビームを乱射することで、こちらに注意をひき、ハンマーで叩
き落としていく。

「誰だ！」

「俺だ！鎧の勇者だ。ここは俺が引き受ける。村人達を連れて逃げてくれ！」

「あ、ありがとうございます！みんな行くぞ！」

兵士たちは後ろで守っていた村人達を引き連れて離脱した。

「さあ！来い！」

来人が応戦し、ピーターが1匹1匹を斬り倒し、ナーガが殴り倒し、ミコが斬り裂い
ていった。

「みんな！伏せろ！」

来人一行、尚文一行は到着した魔法が使える兵士たちが放った魔法による火矢から防
御体制をとる。

「助けてええ!!」

来人は後ろを向く。そこには倒壊した建物の下敷きになった男がいた。

このままでは十分あの男に当たる!

俺はすぐに駆けつけ、建物から男を引つ張り出す。

後ろを向くが、男を矢の射程距離から逃がせる程の時間はない。

来人は男を突き飛ばして射程範囲から追い出すと無数の火矢に貫かれた。

ゲームオーバー!

来人の姿はゲームのデータのように崩れ去ってしまった。

「ライト! 貴様ら!」

ピーター、ナーガ、ミコはすぐに兵士達に襲いかかる。

「テメエら、ふざけんじゃねえぞ! こら!」

「チツ! 盾は無事か。死に損ないが。」

その言葉でスイッチが入ったのか、ラフタリアがピーター達に加勢しにいった。

「貴様ら!」

ピーターが一人の兵士に馬乗りになり、首に剣を突きつける。

ナーガとミコは殺してはいないが既に何人か戦闘不能にしていた。

「貴様ら! 亜人や獣人の分際で人間に刃向かうつもりか!」

「ふざけんな！わざと人ひとりの命を奪ってにおいて、その言い方はねえだろ！」

「ただ殺すだけでは生ぬるい！じわじわと息の根を止めてやる！」

ミコがそう叫んだ瞬間、地面に紫色の土管が生えた。

紫の土管から勢いよく来人が飛び出し着地した。

「よつと！たく、残りライフ99。危ねえだろうが！馬鹿野郎！」

「ライト！生きてたのですね！」

「ライト！俺死んじまったのかと思つたぜ！」

「ライト！心配したんだからね！」

ピーター、ナーガ、ミコが屠っていた兵士たちを放り投げ、戻ってくる。

「ふん！運がいいヤツめ！」

「おい、大丈夫だったとはいえ、一度死んだんだぞ！謝罪くらいしたらどうだ！」

「なんだと：執行猶予中の身分で…」

「それがどうした！テメエ、小せえ頃に教わらなかつたのか？悪いことをしたら謝れっ

て！」

「黙れ！」

「あ、そう。よく分かつた。じゃあ、残りの魔物全部お前らに任せるわ。」

「だな。お前らだけでやれ。」

自分たちが到着するまでの間、誰が魔物達を駆除していたかは明白である。そして、残りの魔物達を自分たちだけで倒すことが、どれだけ危険なことなのかも分かっている。

兵士達は青い顔をしながら引き下がった。

「ナーガ！お前は逃げ遅れた人達の救出！ピーターとミコは俺と一緒に食い止めるぞ！」

「はい！」

「おう！」

「ええ！」

「ラフタリア！お前もナーガと一緒に救助に回れ！」

「はい！」

来人は変身を解き、次は眼魂を出す。

眼魂のスイツチを押し、ベルトを開き、中に入れる。

「アーン！バツチリミロー！バツチリミロー！」

ベルトから飛び出したゴーストが襲いかかる魔物達を蹴散らす。

「変身！」

レバーを引く。

カイガン！スペクター！レディゴー！カクゴー！ドキドキゴースト！

更に眼魂を入れ、レバーをひき、仮面ライダースペクター ノブナガ魂に変身した。
「行くぞー！」

前線でピーターとミコが敵を屠り続け、その後ろで来人がガンガンハンドを銃モードにして敵を撃ち抜き、尚文が魔物の進行方向を盾によつて妨害、そして更に後ろで兵士たちが横に広がり、包囲網を突破されないようにしたこととで魔物の群れを止めることに成功した。

こうして、波による亀裂は閉じ、波は収まった。

帰ろうとした来人と尚文の一行のもとにリユート村の住人が話しかけてきた。

「あ、あの……」

「何か用かい？」

来人は笑顔を浮かべながら応対する。

「ありがとうございます。あなた方がいなくなったら、みんな助かっていなかったと思います。」

「気にすることないさ。俺たちはやるべき事をやっただけだ。」

「気にすんな。これが俺たちの仕事だから。」

「いいえ。」

来人の答えに、別の住人が割って入ってくる。

「あなた方がいたから、私たちはこうして生き残る事が出来たんです。」

「ふむ、よし。ならば俺たち盾と鎧の勇者の一行の良い噂を広めてくれねえか？何分王国では評判が悪いんだ。」

「はい！ぜひ！」

住人達は、来人達に深々と頭を下げた後、帰っていった。

「やりましたね！ライト！」

「ああ、やってやったぜ！ライト！」

「ええ、私も久し振りに暴れられて楽しかったですよ。」

「ああ、今回は良くやったな！」

それから、来人達は王城にて宴会に参加する。

「いやあ！さすが勇者だ。前回の被害とは雲泥の差にワシも驚きを隠せんぞ！」

日が落ちて、辺りはすっかり夜になってから開かれた宴会で国王が高らかに宣言した。

前回の波に比べて、大幅に被害を減少させる事に成功し、死傷者も一桁で済んだという。

「なんか、騎士団や冒険者の皆さんの手柄も、みんな勇者様達に取られてる感じがしますね……」

「その方が分かりやすい宣伝になるからだな。奴らにとつて誰が頑張ったのかはさして重要ではない。だが俺たちだけはお前らの活躍を認めてるぞ！ピーターもナーガもミコも尚文もラフタリアも全員で力を合わせて戦ったからこそリユート村は救われたんだ！」

波に関して、調べたいことがあつた来人はヘルプを確認する。

『波での戦いについて』

砂時計による召集時、事前に準備を行えば登録した人員を同時に転送することが可能です。

この内容からするに、勇者の仲間以外も、それこそ騎士団の様な軍隊でも一緒に転送出来るようだな。

「……どうやら、連中は協力して闘うという事を知らねえらしい。俺たちが言った所で大人しく聞いてくれるかも分からねえし。」

「そうかも知れませんが……」

納得出来ない様子のピーターだが、周りに並ぶ料理を見て、気持ちを切り替える。

「すごい！ 馳走でだな！ 食い尽くしてやるぜ！」

ナーガがピューと風のように走っていった。

並べられた料理に舌鼓を打ちながら過ごしていると、怒り心頭という様子の元康が近付いてくる。

「おい！ 尚文！」

「なんだ？ いきなり？」

「…… どうした？ 声を張り上げて。何もせんもお前ぎが食べる分くらいは残しておくように仲間達には言っておくよ。」

茶化すような態度で振り向いた尚文に手袋を外し投げ付ける元康。

「決闘だ！」

マズイな…… 本当だったら代わりに戦ってやりたい…… だが尚文が戦わないとカースリリースが：

すまん、尚文。仇はとってやる。

「聞いたぞ！ お前ら奴隷を使ってるんだってな？」

「ああ、使ってるぞ？」

「同じく。だって仕方ないだろ？ 真剣にこんな悪評まみれの俺たちの仲間になりたいな

んで、そんな物好きいると思うか？」

「だからって！奴隷を使つていい理由にはならないだろ！人は隷属させていいものじゃない！」

「それは良い心がけだ。是非ともその考えを王にも聞いてもらおうか。」

「黙れ！俺が勝つたらラフタリアちゃん達は解放してもらおう！俺が負けたらラフタリアちゃん達は好きにしろ！」

「何故お前の許可がいる？」

「その通りだ。それに俺たちは負けたら大切な仲間を失うつてのに、お前は自分が負けた時のリスクを負わないなんてな。話にならねえ。」

「話は聞かせてもらつた！」

人の波がモーゼの十戒のように二つに分かれて王が歩いてくる。

「貴様らは勇者のくせに奴隷を使つているのか！ここに槍対盾の決闘を言い渡す！」

「待てよ！」

来人は叫んだ。

「なんじゃ？鎧。」

「その勝負、俺も混ぜてくれ。」

「だつておかしいだろ？元康は奴隷を解放したいんだろ？だつたら普通尚文よりも多く

奴隷を抱えてる俺に決闘を挑むはずだ！なのに尚文を選んだ！尚文は攻撃手段がない盾だ。だから勝ち抜きにしてくれ。元康が俺たち二人に勝ったら奴隷は全員解放、奴隷を持ったことによる罰金をそちらの言い値で払う。払えなかったとしても一生払う。逆に元康が俺達のどちらか、もしくは両方に負けた場合、今回元康がもらう筈の報奨金と援助金を俺たちがもらう。でどうだ？」

「よかろう。元康殿もそれでかまわんか？」

「ええ、構いません。」

「それでは決闘じゃー！」

城の庭は今、決闘会場と化していた、辺りには松明が焚かれ、宴を楽しんでいた者達がいみんな勇者の戦いを楽しみにしている。

さすがに元康自身のプライドが許さなかったらしく、尚文VS元康の1対1になった。

「では、これより槍の勇者と盾の勇者の決闘を開始する！ 勝敗の有無はトドメを刺す寸前まで追い詰めるか、敗北を認めること」

「最強の槍と盾が戦ったら、どっちが勝つかなんて話があったよな。尚文！潔く負けを認めろ！」

「始め！」

「うおおおー!!」

開始と共に元康が尚文に突っ込む。でもそれを尚文は防ぐ。槍と盾のぶつかり合いが始まる。

「止めたか。流石は盾の勇者ってところだな！」

「お前の負けだ。これが最強の槍と盾の勝負なら俺の盾を貫けなかった時点でお前の負けだ！」

確かに防御に隙がない限り、攻撃は通らない。尚文が槍を弾いた。

「乱れ突き！」

すると元康が槍を物凄いスピードで無造作に突く。こんな事も出来るのか。尚文に無数の槍が迫る。あれは流石に防ぎようがなく、受けてしまった。

「尚文！」

「ナオフミ様！」

それでも彼は立ち上がり元康に向かい、腹に盾による打撃を与えた。覚えたのか！
シールドバツシュ！

「盾の攻撃なんて効くはずは…あっ?」

「いてっ！」

元康の腹にはオレンジ色の丸いものが噛み付いていた。ははっ、やっぱり持ってやがっ

たか！

尚文はマントで隠されていた自分の体を見せる。

尚文の体にはオレンジバルーンがいっぱい噛みついていて、武器が使えないからそれを武器に。まあ、魔物を使ってはいけないうってルールで言っただけでなかったし。

「何のマネだ？」

「どうせ勝てないなら嫌がらせでもしてやろうと思っただけ？」

嫌がらせか、いいねー！

「正々堂々戦えっつてんだ！」

元康が槍で再び攻撃した。だが、鎖帷子の呪いで動きが急に止まる。そこに尚文が自身の盾を黒い犬の顔が付いた盾に変え、それが飛び出し元康に噛み付いた。

『双頭黒犬の盾』

「エアストシールド！」

今度は盾を出現させ、攻撃をした。今のは効いたぞ！

「シールドプリズン！」

オレンジバルーンを2個投げ、元康を閉じ込めた。

「いっくら！やめろ！地味にいてえ！」

中でオレンジバルーンの攻撃を受けているみたいだ。しかし尚文も考えたな。いく

らオレンジバルーンが弱いとはいえ、あんな逃げ場がないせまい場所で、しかも得物が槍の人間が襲われたらひとたまりもない。

それにしてもさつきから尚文の悪口などが聞こえるな。耳障りだな。

すると元康を閉じ込めていたやつが消えた。

「さつきと負けを認めろ、これ以上醜態を晒すなモテ男。」

「誰が降参なんか…」

「そうか。ならお前の顔と股関を集中的に攻撃してやろうか?」

うわあ、悪役だよ。ライダーの世界にもいたよ。あんな顔。

「ぬー!ライト!あれを!」

「やったな、あのアマ!」

「どうした?」

ピーターとミコの耳がピコピコと動き、先ほどの言葉を発したと思えば、ある一点を凝視しだした。

「どうしたんだよ、お前ら!」

そちらを見る。

すると元康の仲間であるマインが尚文に向かって攻撃をした。

なっ!?!横槍だど!?!なんて卑怯な事を!

そしてそれで隙を突かれた事を皮切りに元康の猛攻を受け始めてしまう。

「ライトニングスピアー!」

「うわぁぁー!!」

必殺技を受け、倒れてしまった。

「俺の勝ちだ」

第8話

城の庭で行われた尚文と元康の決闘は、序盤は尚文が優勢だった。俺も驚くほど。だが尚文は負けてしまった。実力：ではなく、横槍によって。

犯人はマインだ。

「ちくしょう！尚文は横槍で負ける。そういうことか！」

来人は女神からネタバレを受けていたが、詳しい内容は聞かされていなかった。聞かされたのは、尚文と元康が決闘して元康が勝つ。という情報だけだった。

「おい！待てよ！今のは不正だ！お前の仲間が横槍を入れたのを見たぞ！」

「は？お前何言ってるんだ？」

「お前の仲間が卑怯にも魔法で尚文を狙い撃ちしたって言ってんだよ！」

「はっ！何を言うかと思えば：それ負け犬の遠吠えってやつだぜ？てか証拠あんののかよ？」

「お前：！マジで言ってるのか！ああ？」

「俺たちも見た！その女が卑怯にも魔法を放つたのをな！お前らも見たはずだろ！」

ナーガが、マインが魔法を放ったのを証言し、周りのみんなにも証言を求めた。しかし、誰一人何も言わずに目を逸らしたり、俯いているばかりだ。

「この人間共……！」

ピーターが拳を握りしめて怒りに震える。

「モトヤス殿よ。罪人の勇者とその仲間の言葉に耳を貸すことはない。儂が認める。そなたの勝利だ！」

「流石ですわモトヤス様！私信じておりました！」

「ああ！ありがとうな！」

元康と抱き合うマインの姿を見るだけで吐き気がする。

そうか、こいつら最初からこれが目的だったのか。尚文と決闘した元康を、どんな手を使つても勝たせ、尚文のパーティーの中で唯一攻撃ができる奴隷出身のラフタリアを救済すると言う名目で奪い取り、尚文の心を完全にへし折るつてか。

「見事だったぞ！モトヤス殿！」

「はっ！」

元康のもとに王がやってきて、マインと一緒に勝利を称えだす。

「流石は我が娘マルティが選んだ勇者だ！」

「ええ、パパ。」

「それにしてもマインが王女様と知った時は驚いたよ。」

「はい！私も世界平和の役に立ちたくて！」

貴様らがやってる事は世界平和への貢献じゃねえ、吐き気を催すほどの邪悪だ。

だが、お前らの計画には誤算があるぞ。それは：

「尚文様！」

ラフタリアが悲痛な声をあげた。

俺はすぐにそちらを見る。

すると、そこには膝をつき、目に見える程の邪悪なオーラが身体中から溢れ出している尚文がいた。

「尚文！」

俺は尚文に近寄った。

「寄るな！」

俺は思わず立ち止まってしまう。

「俺は…やってない…やって…ないんだ…」

尚文は涙を流しながら、壊れたロボットのようにながめ続けている。

尚文：

俺はまたクズどもの方を見る。

貴様ら：人の人生をここまで狂わせておいてそんなに楽しいか！貴様らは人間じゃねえ！

その時だった。

パン！

音がした方を向くと、ラフタリアが元康にピンタをしていた。

「この卑怯者!!!」

よく見るとラフタリアも泣いていた。

「なっ!?モトヤス様になんて事を!」

「私がいつ助けてくださいなんて頼みましたか!」

「で、でもラフタリアちゃんはいっつも酷使されてたんだらう?それにほかの奴隷だって!」

「貴方がナオフミ様とライトさんの何を知っているのですか!ナオフミ様はいつだって私に出来ない事をさせませんでした!私が怯えて嫌がった時だけ戦うように呪いを使っただけです!ライトさんの事も聞いています!自分たちを平等に人間のように接してくれて、家族とも呼んでくれたと!」

「それが駄目なんだよ！誰にだって権利はある！戦いは本来強要するもんじゃないんだ！それに來人が言う家族なんて言葉もただの戯言だ！」

「ナオフミ様は武器が何一つ使えないのです！ならば！誰かが戦うしかないじゃないですか！それを私は引き受けたんです！それに私はライトさんを見てきました、彼が使う家族って言葉は決して戯言なんかじゃありません！」

「だからといって君が、その役目を担う必要なんてないだろ！きつと奴らのことだ！ポロポロになるまで使われるに決まってる!!今はそうじゃなくても、いずれそうなる!!君も！他の奴隷も！」

「ナオフミ様もライトさんも私達を必ず守ってくれます！疲れたら休ませてくれます!!それに私達は自ら進んで仲間になって戦う事を決めました!!」

「嘘だ！尚文と來人はそんな奴じゃ：そうだ！君達は奴隷紋を結んでいる！そう言わないと呪いが発動するように設定されてんだろ！」

「これを見てまだあなたはそんな事が言えるのですか！だったら貴方は病を患ったいつ死ぬかもしれない奴隷に手を差し伸べる事が出来ますか？」

「ナオフミ様は私が食べたいと思つたものを食べさせてくださいました！病で苦しむ私に貴重な薬を分け与えてくださいました！貴方にそれが出来ますか！」

「ライトさんも同じです！あの人は言っていました。今回は仕方なく彼らと奴隷紋を結

んだが、いずれは外す。その時に晴れて俺たちは真の家族になれるんだって！貴方は心の底からそんな事が出来て、心の底からそんな事が言える人間ですか！」

「で、出来る……！少なくともアイツらよりかは……！」

「なら貴方の隣には私ではない別の奴隷がいる筈です！それに！ナオフミ様とライトさんの事をよく知りもしない癖に少なくともなんて軽々しく言わないでください！」

尚文：お前良い仲間に出会えたな。ラフタリアは君の事をここまで思ってくれる、この子がいたら尚文は大丈夫だ。

言いたい事を言うと、ラフタリアは流れる涙を拭いながら、こちらへ歩いてくる。俺はラフタリアの方へ歩く。

「ラフタリア、尚文をこれからも頼んだぞ。」

「ライトさん……はい！」

「今の彼を救えるのは一番彼と長くいる君だけだと思ってる。」

「私が……ですか？でも何をすれば……」

「簡単な事だ。そばにいてやってくれ。尚文が絶望に飲まれそうになった時、寄り添い、手を差し伸べて絶望からすくい上げてくれる存在になってくれ。そういう存在がいて……自分は一人じゃないって思えた時、人は救われるもんさ。そして。」

俺はそこまで言うと目を鋭くする。

「後は任せろ。尚文の分も君の分も仇をとってやる。」

「は、はい!」

ラフタリアは俺の殺気に当てられたのか、一瞬ビクツとなるが、力強い返事をしてくれた。

俺は王、マイン、元康を睨みながら歩く。

俺から尚文に似たオーラが出てるのが分かる。

その時、システム音声が届いてきた。

カースシリーズを解放します。

条件達成により、デイケイド激情態、オーズプロティラコンボ、ビルドラビットタンクハザード、鎧武・闇を解放します。

「なんじゃね? ライト。」

「: : せろ。」

「は?」

「約束だ。元康と戦わせろ。」

「: : ああ、いいぜ。来いよ!」

俺たちは再び舞台上がり、対峙する。

「お前は騙されてる側かもしれないが、そんなもんで許されない程、お前はやりすぎた。もうこれ以上。」

「俺の心を滾らせるな!!!」

俺はガシャットギアデュアルを出して、ダイヤルを回す。

KNOCK OUT FIGHTER!

The strongest fist! Round 1 Rock & am

p; Fire!

「変身!」

DUAL UP! Explosion Hit! KNOCK OUT FIGHTER!

俺は仮面ライダーパラドクス ファイターゲーマーに変身した。

「覚悟しろ、クズやろう。立って帰れると思うなよ。」

「な・マインが言つてた姿と違う・だが! 覚悟するのはお前だ! 返り討ちにしてやる!」

元康が槍を構えて突っ込む。

「乱れ突きー！」

尚文にやつたみたいに槍の刃先が俺に迫る。

悪いな、全部見えるんだよ。

俺はそれを全て最小限の動きで避ける。

元康はもう一度乱れ突きをしようとするが、またしても鎖帷子の呪いにより動きが止まってしまふ。

「今度はこっちの番だ！」

マテリアライズスマッシュャーを振りかぶり突き破るように思いつきり腹に食らわせて、吹き飛ばす。

元康はゴロゴロと地面を転がるが、なんとか体勢を整える。

「くそ・なんで鎧のくせにこんなな攻撃力があるんだよ……」

マテリアライズスマッシュャーの効果により防御を無効化、そして爆発する拳によるダメージを受けたのに元康は槍を支えにしてヨロヨロと立ち上がる。

「なぜだ！なぜ尚文の肩を持つ！お前だけは尚文を切つて王に擦り寄れば、許してもらえないはずなのに！」

その言葉を聞き、俺は元康の顎を思いつきり蹴り上げる。

「ガハッ！」

俺に蹴り上げられた衝撃で亀のようにひっくり返る。

「当たり前だろうが！俺も尚文もやってねえからに決まってるのが、まだ分からねえのか！！いい加減目を覚ませ！！」

俺がトドメを刺そうとした瞬間、またしても魔法が飛んできた。今度は量が多い。おそらくリユート村で俺たちに攻撃してきた騎士団のも含まれているだろう。

だが、俺にはちょうどいい盾があるじゃないか。

俺は咄嗟に元康の胸倉を掴み上げ、盾にする事で事なきを得る。

「キヤアアアア！！モトヤス様！！！！」

まさか来人が元康を盾にするとは思ってなかったのか、マインは悲鳴をあげる。

「鎧の勇者！！貴様卑怯だろうが！」

騎士団長が俺を非難する。

「なんのことだ？俺は盾が転がってたから使っただけに過ぎん。それでも誰が悪いかわりたいなら……近くにいたこいつが悪い。そして……」

「マインツツ！！また貴様かツツ！！！！」

俺は変身を解き、カースシールドズによって解放されたベルトを巻く。

すると体から三つのメダルが飛び出したため、それを掴んでベルトにセットする。

キン！キン！キン！

スキヤナーがメダルを読み取る音が響く。

その瞬間、俺の目が紫色に変化した。

「変身！」

プテラ！トリケラ！ティラノ！

プットティラーノザウルス！

仮面ライダーオーズプットティラコンボに変身した。

「観衆が邪魔だな・ふん！」

手を振るだけで周りを全て凍らせ、これ以上妨害が出来ないようにする。

「な!?!一瞬でこれほどの氷を・な!?!マイン!!」

元康はマインを見つけて絶句する。

マインは来人が放った氷に串刺しにされていた。

「安心しろ。傷口を凍らせてるから失血では死なん。だがお前が早く俺を倒さないと死ぬだろうな？」

「貴様!!マインは無関係だろ！」

「まだ分かんねえのか! 奴はお前が勝てるようにと横槍を入れてんだよ! お前が尚文に勝ったのはお前の実力じゃねえ! 横槍のおかげだ！」

「黙れ! 証拠もねえ癖に好き勝手言うな！」

「情けねえもんだよな！21歳になつてもまだ、自分一人の力で戦えないなんてな！あ！そうか！お前は槍の勇者だから、横槍も立派な槍の攻撃だつて言いたいのか！失礼したよw」

「黙れ！マインを今すぐ元に戻せ！」

「断る！それより早くしたらどうだ？本当に死ぬぞ？」

「この外道が！」

元康は槍を振るうが、そんな攻撃に当たつてやるほど今の俺は優しくない。

槍を掴み、引き寄せると顔面を殴り抜く。

鼻血を吹き出しながら元康は仰け反った。

のけぞらせた事で元康から距離を取れたことを確認すると俺は地面に手を突っ込む。

そこから出てきたのはプティラコンボ専用武器メダガブリューだ。

「終わりだ！」

斧の形にして振り下ろす。

だが、それを元康は槍で受け止める。

「ぐっ、重い・な!?!力が！」

跳ね返そうと力を込める。しかしまたしても鎖帷子の呪いにより動きを止められ、力が抜けてしまう元康。

「話にならん。」

俺は槍に集中している事でガラ空きになった腹に渾身の前蹴りを叩き込んだ。

元康は吐血しながらも槍を支えにして踏ん張ろうとしたが、それすらも力が入らずに前のめりに倒れる。

「おい、コラ。まだ勝負は終わってねえぞ?」

意識を失った元康をゲシゲシと蹴り続ける来人。

「オラー・さつさと立て! お前からまだ、降参、つて言葉を聞いてねえぞ! 早くしねえとマインが死ぬぞ? それでもいいのか?」

反応はもろろんない。それでもゲシゲシと蹴り続ける。

その頃には観衆も、ようやく事態の深刻さに気付き始めた。

ザワザワと声が聞こえ始める。

「おいおい、あれ止めないと死ぬんじゃねえか?」

「誰が止めるんだよ? 止めに入ったら俺たちまでやられるぞ?」

騎士団も止めに入りたいが、来人の暴力的なパワー、そして槍の勇者が、ここまでボコボコにされている、しかも王女を人質に取られているせいか、武器に手をかけたまま動けずにいた。

「あ、そう。じゃあ王様! 俺の声聞こえてんだろ? 早く決闘を止めないと、この斧で元康

の首を刎ねて、マインにもトドメを刺すぞー！」

だが、王様から中止の声がしない。

「よし、わかった！残念だったな！元康にマイン！お前ら捨てられたらしいな？じゃあ処刑5秒前！ 4！3！2！」

「はあっ！」

その時、周りを囲っていた氷の一部が砕け、鍊と樹が入ってきた。

「もうやめてくれ！」

「そこまでです！」

二人とも、武器を抜いているが、俺に向けず下に向けている。

「ああ？なんだ、お前ら。あれか？仲間の勇者がやられてるから敵討ちつてやつか？いげ？元康とマインを葬ってから二人同時に相手してやるよ。」

来人は元康の頭を踏みつけながら言う。

「俺たちは見ている！マインが尚文に魔法を放ったのを！」

「お前らは見たつてのか？これだけの観衆がいて誰も答えないのか？」

「ええ！」

「そうか！だが王からまだ中止の声を聞いてないからな？つまり、まだやれつてことだろ？」

そう言いながら、更に力を込めて頭を踏みつける。

「王様！もう止めてくれ！このままじゃ！本当に二人が殺されるぞ！」

「そうです！今回の決闘は盾と鎧の勇者の勝利です！さあ、早く！」

「だが：鎧はまだしも、何故盾まで！」

「この国では決闘の際に横槍を入れるのが、正義であり作法なのですか？」

「：ぬう。分かった！此度の決闘は盾と鎧の勇者の勝利とする！」

「運が良かったな。元康。」

来人は元康の頭から足を退け、槍を持ったままの手を無理やり逆手にして元康の顔の横スレスレに突き立てた。

手首が折れたような音がしたが、知らん。

そして来人が変身を解くことで、氷は溶けてマインが解放された。

「早く元康殿とマルティの治療を！」

尚文のもとへ行くと、ラフタリアに抱きしめられて眠っていた。その顔は憑き物がとれたように穏やかだった。

「「ライト！」」

ピーター達が駆け寄ってくる。

「やりましたね！ライト！」

「ああ！見ててスカツとしたぜ！」

「ええ、あなたがやってくれて良かった。私なら迷いなく殺してたから。」

こうして宴は御開きとなった。

第9話

次の日、尚文と来人は朝食を食べていた。

「普通に味がする…」

「良かったですね。ナオフミ様！治ったんですね！」

「え？お前味覚障害だったのか？」

「ああ、ストレスからくるやつだな。味付けを濃くしたらなんともないくらい軽かったけどな。だが治ったみたいだ。だが一番驚いてるのはラフタリアのことだ。お前いつのまにそんなに成長したんだ？」

「もう！鈍感すぎです！」

「ははっ！ちげえねえ。そうだな、これだけやってもらったんだ。もう尚文はラフタリアに足を向けて寝られねえな。」パクツ

「うん？」パクツ！

「嘘だろ…」

「どうした？来人？」

尚文は首を傾げながら飯を食う来人を見て不思議がる。

「味がしねえ…」

朝食後に調べたが、俺が味覚を失ったのは恐らくプトティラコンボに変身したからだ。だって。そういうや、映司も作中にグリード化が進んで味覚がなくなってたよな。鏡見たらちよつと目が紫っぽいし。

副作用あんのかよー　　つてか、いつ治るんだよ。

味がしない朝食を食べ、謁見の間に移動した。

「では今回の波までに対する報奨金と援助金を渡すでしょう。」

王の声で金袋を持った側近が現れる。

「ではそれぞれの勇者達に、だが鎧の勇者の来人殿と盾の勇者は前回の件で未だに執行猶予のままなので援助金はない、忘れたとは言わぬよな？来人殿？」

「ああ、忘れてねえよ。それより元康の分をもらおうか。」

「うぐ…」

「本来、元康殿に渡る報奨金と援助金の銀貨4000枚は大変遺憾だが、来人殿に、次に錬殿、やはり波に対する活躍と我が依頼を達成してくれた報酬をプラスして銀貨3800枚、そして樹殿……貴殿の活躍は国に響いている。よくあの困難な仕事を達成してくれた。銀貨3800枚だ。」

「うん？ 困難な仕事？ 樹、なんだそれは？」

「え？ 知らないんですか？ 僕たち勇者は度々王様からの依頼で魔物退治や治安維持をしているのですが…」

初耳すぎる・

王も樹に対して余計な事を言いやがって…といった顔をしている。

「なんじゃ？ 来人殿？ そなたもやりたいのか？」

「ああ、あるなら受ける。」

「ほう、ならば…何かあるか？」

「はい。」

近くに控えている大臣に伝えるとペラペラと書類をめくりだす。

「これなんてどうでしょうか？」

「ほほう、これか。」

「よし、では来人殿には盗賊退治を命じる。奴らは度々、略奪を繰り返しておる。幸い、死者は出ておらんが、いつ出るかも分からぬ。それを退治し、証拠品を持って参れ。」

「は！…かしこまりました。」

城を出て、尚文に貰った金の半分を渡した。

「いいのか？」

「当たり前だ。」

「すまん。」

「謝んじやねえよ。いつか何かしらで返してくれたらそれでいいから。」

「さて、こつからまた別行動だ。じゃあな。」

「ああ、がんばれよ！」

尚文一行と別れて俺たちは路地に入る。

「さて、俺は今からあるところに行く。お前らは武器屋で待つててくれ。」

「分かった。」

さて、俺は：

トランスチームガンを使って場所を移動した。

来人が移動したのはメルロマルク城の地下牢。

メルロマルク内での罪人が収容される施設。施設内は所々ボロボロでチヨロチヨロと小さなネズミのような魔物が走り回っていた。

ここに用がある。なにせ、女神から渡されたメモにここにいるエクレールと名乗る女騎士を助けて仲間にしなさいって書いてあるからな。

やっちゃうか。

でもなー ゲームだったら、たまに期限付きクエストってあるじゃん？

あれみたいな感じで時間切れとかないよな？

俺はパラドクス パズルゲーマーに変身、透明化を使って探索を開始した。

「地図くらいあればいいんだけどなー」

「あ、いた。」

そこには女性が一人繋がれていた。両手を手枷で繋がれ、無理矢理立たされた状態で。いつからそこでそうしていたのかは定かではないが、ストロベリーブロンドの髪は乱れ、整った顔立ちにも、少しやつれた感じが見て取れる。

だが、そのような状況になつてなお、目は死んでおらず、しっかりと見開かれていた。

「女王が帰還するまでの辛抱だ：それがいつになるかは分からぬが。」

「やあ、君がエクレール・セーアエツトかい？」

「誰だ！姿を現せ！」

「ここだよ。」

俺は透明化を解いて姿をあらわす。

「な!?! 化け物! どうやって入った!」

「化け物じゃないのに：俺はれっきとした人間でこれは鎧だ!」

そう言いながら変身を解く。

「人間：？」

「人間だよ。そして勇者だ。」

「勇者だつて!？」

「ああ、ある人から頼まれて君を助けに来た。今すぐ出よう。」

「確かに、これを逃したら次はいつ助けが来るか分からん。ならば乗ってやる。」

「決まりだな。じゃあ、まずここから出ないと。」

そう言いながら鏡になるものを探すと、水たまりを見つけた。

そこにカードデツキを出し、構える。

すると水たまりからベルトのバックルが飛んできて、腰に巻きついた。

「変身！」

カードデツキを挿し、仮面ライダーシザースに変身した。

カードを二枚抜き取り甲冑シザースバイザーを開き、二枚カードを入れる。

アドベント！

ストライクベント！

自分の隣に契約モンスターボルキョウサー、右手にボルキョウサーのハサミを模したシザースピンチを装備する。

「やれ！ボルキャンサー！」

ボルキャンサーは両手のハサミを振り上げると、檻に体当たりをし、破壊してしまつた。

「さて、次は手枷だな。動くなよ？は！」バギン！

手枷を真つ二つに破壊したところで物音を聞きつけて兵士達が駆けつけてきた。

「な!?侵入者か！」

「化け物だ!!!」

「来やがったな！ボルキャンサー！足止めを頼む。但し殺したり、捕食は無しだ！やれ！」

ボルキャンサーが兵士達の方に走って行ったのを確認し、来人はエクレールの手を引いて鏡、もしくはガラスを探す。

「あ！あつた！」

地下水によつて出来た水たまりを見つけた。

「エクレール！絶対何があつても俺が良いと言うまで手を離すなよ？いいか！」

「ああ！」

俺はその声を聞いてしつかりエクレールの手を握り直すと水たまりに飛び込んだ。

その頃、来人の仲間達は武器屋で待っていた。

「……………」

「……なあ、気まずいんだが。いやな？お前らだから別に待ち合わせ場所にしてくれるのは、こつちとしてもいいんだよ。だけどな、せめて武器を見たりとかしててくれよ。他の客が不審がつてるだろ？」

エルハルトは苦言を言う。

「それについては申し訳ない。」

その時、店に置いてあった鏡から仮面ライダーシザースに扮した来人とエクレールが飛び出す。

「はあああ!!??誰だ、お前!どっから入った!」

「すまんすまん、俺だ。」

そう言いながら変身を解いた。

「ああ、もう手を離していいぞ。」

「なんだ、あんちゃんか?つてならねえからな!てか、次はどこから連れてきたんだよ。」

「ああ、聞いて驚くなよ?今度は城の地下牢だ!」

「:はあ:あんちゃんの事だから何か事情があるんだろうけど、犯罪だぜ?それ。」

「人助けと言ってもらいたい。」

「はあ：あんちゃんがここに新しい仲間を連れてくることに慣れそうな自分が嫌になる。」

「はっはっは！慣れる慣れる！それよりエルハルト。両手直剣をくれないか？」

「ああ、そこで戸惑っている女性にだろ？ちよつと待つてろよ。」

エルハルトは奥に入っていった。

「ここはどこなのだ！」

「ここ？武器屋。」

「武器屋……」

「ほれ、この中から選んでくれ。」

「ああ、どれ選んでもいいぞ？払えるし。」

「そ、そうか？じゃあ……これで。」

エクレールは銀鉄製の直剣を選んだ。

「ほれ、鞘とベルトもサービスしてやる。」

「毎回悪いな。サービスしてもらって。」

「いいんだよ。がんばれよ。」

店を出て、みんなにエクレールを紹介する。

「この人は新しく仲間入りしたエクレールだ。みんな仲良くしてくれ。」

「私はメルロマルク国騎士のエクレール・セーアエツトだ。よろしくお願ひする。」

「ピーターです。よろしくお願ひします。」

「ナーガだ。よろしく頼むぜ？」

「ミコよ。女子同士仲良くしましょ？」

「さて、みんな今から俺たちは盗賊を討伐しに行く。各自怪我がないように無理しすぎないように頑張りましょう！」

「「「おーーー!!!」」」

「お、おーー！」

1週間後・

「ええと・地図の通りだと・ここだよな？」

「ああ、ここだよとおもう。」

エクレールの先導のもと、洞窟にたどり着く。

見張りが二人いるな。よし！

「よし、ナーガ。眠らせてこい。」

「わかった。」

「たあ！」

ナーガは走りだすと棒を振り上げ、飛びかかった。

「な！誰だ！」

「チエストー！」ドムツ！

「おま……！」

「とりや！」ドムツ！

ナーガが繰り出した棒で二人とも腹を突かれ、昏倒した。

「どうよ！」

「ナイスー！」

ナーガとハイタッチをする。

中に入っていくと盗賊団が何人もいる。

「ピーター、目測で何人くらいだ？」

「ええと……ひい、ふう……100ですな。」

「100か。一人20人だな。」

「やれます。」

「楽勝だ。」

「簡単ね。」

「まあ、なんとかなる。」

そう言いながらピーターは目と鼻を覆う仮面を着ける。

実はこの前、俺が変身してる姿を見て、ピーターが欲しいと言ってきた為、作った逸品だ。

まあ、あれからみんな欲しいと言ってきたから徐々に作っていく予定だ。

俺たちは横に広がって歩いていく。

それに気がついたのか、盗賊たちが武器を取り出して威嚇し始める。

「なんだ、アイツら！」

「おい、見張りはどうした？」

「やられたから入ってきてんだろ？」

「ちげえねえや。」

「一体なんの騒ぎ？」

この場には似つかわしくない女性の声がして、100人の盗賊たちがサツと横にずれる。

それにより出来た間を二人の男女が歩いてくる。

「やあ、ここに何の用だい？」

「俺達はお前らを捕縛しにきた。大人しく捕まってもらおうか。」

「嫌だね。」

「だよな。良いよって言ったら俺も困惑してたよ。」

「だよね。あたしだってそんな素直な盗賊じゃないと思うよ?。」

「はっはっはっは!!。」

「ライト。何を普通に談笑してるんですか。」

「リーダー、敵と打ち解けるのが流石に早すぎです。」

俺はピーターに、盗賊団のリーダーは隣の男に怒られていた。

「気をとりなおして：あたしはこのリーダー、隣は副リーダーだよ。悪いけどアンタの要望を飲むわけにはいかない。」

「だから、あたしを捕まえないなら1対1のタイマン勝負をしようよ。あたしが勝てばアンタらには有り金全部と装備やアイテムを全てあたし達に譲渡して、もう二度とあたしらに関わらないこと、あたしが負けたら：大人しく捕まるよ。」

「分かった。ルールはどうする?。」

「①勝敗はどちらかが降参するまで。②もちろん戦う者以外の攻撃や介入は禁止で破ったら負け。でいいね?。」

「構わない。」

「こつちからは、もちろんあたしだけど、そつちは？」

「俺だ。」

「だよね。じゃあ、やる？」

「ああ。」

俺と盗賊団のリーダーは対峙する。

「あたしの名はターニャ。ここの盗賊団のリーダー！」

「名乗りがあるのか。俺はライト・ダテ。鎧の勇者！」

「へえ、アンタ勇者なんだ。今までで一番手強そうだね。」

「そりやどうも！」

俺はスクラツシユドライブを巻き、ボトルを捻る。

デンジャー！

不安を煽るような待機音を鳴らしながらボトルを挿す。

クロコダイル！

ちゃんと音声が鳴ることを確認してレバーを倒した。

割れる！ 食われる！ 砕け散る！

クロコダイルインローグ！

オラア!

キヤー!

「大義のための犠牲となれ」

俺はトランスチームガンを手にして構える。

「戦う前に聞きたい。お前はなぜ人を襲う。」

「理由? あたしは好きで略奪をしてる訳じゃない。、家族、を養うためさ。私の家は元々あるお方に仕えていたんだけど、冤罪をかけられて一家離散さ。それからあたしみたい、世間からはみ出した者達を集めた。居場所を作りたかったのさ。みんな! 手は出さないでよ。万が一あたしが負けても。」

「それじゃあ、いくよ!」

そう言うのとターニヤの姿が消えた。

「出た! リーダーの十八番!」

盗賊達が騒ぎ立てる。

そして姿が現れる。

「へっへっへ! これなーんだ!」

手にはいつのまにかトランスチームガンが握られていた。

「ほら！武器奪ったよ！これでk・」

ドン！！

ローグはネビュラスチームガンの射撃でトランスチームガンを弾いた。

弾かれた銃は宙を舞い、ターニヤの後ろに落ちる。

「これで・なんだって？」

「へー、やるね。」

そう言うのと腰からナイフを抜き、逆手に構える。

「やあああああ!!!」

ナイフを振り上げ、走ってくる。

ネビュラスチームガンを撃つが避けられ、ナイフの射程範囲に入った時、ターニヤは

煙のように消えた。

「な?!・・・そこか!」

俺は咄嗟に頭を下げると、そこをナイフが通過していく。

「避けれるんだ、それ。おもしろそー!」

それからも壁や石を蹴りながら飛び上がり、斬りかかってくる。

「ふん!」ドムッ!

「ガハッ！」

いい加減痺れを切らした来人の回し蹴りが腹にヒットし、吹っ飛ぶターニヤ。
「イタタタ。」

「喰らえ！火遁！火竜撃！」

印を結ぶと口から炎を吹き、それが竜の形をなすと来人に襲いかかる。

来人はクロコダイルクラックボトルをネビュラスチームガンに装填する。

「ファンキーアタック！」

銃口から大きなワニの口が撃ち出され、火の竜と押し合いになる。

「うおお!!!」

「はああああ!!!」

「カッ！」

光ったと思うとエネルギーのぶつかり合いによって大爆発を起こした。
煙が晴れると、そこには来人が立っていた。

ターニヤは大の字になって倒れており、勝敗は一目瞭然だった。

「完敗だよ。さあ、煮るなり焼くなり好きにしろ。」

来人はネビュラスチームガンを向ける。

しかし、それを降ろし、背を向けた。

「何？殺さないの？」

「ああ、殺すのは惜しい。報告では跡形もなく消しとばした事にしといてやるから、真つ当に、立派で誇れる仕事に就け。じゃあな。」

「待つてよ！本当にいいの？」

「ああ、俺たちは、この近くでキャンプをしてる。それだけだ。じゃあな。」

来人は洞窟を出て、歩くがすぐにピーターとエクレールが文句を言う。

「ライト。良いのですか？彼女達は殺しはしてないとはいえ、立派な罪人です。」

「そうだ、奴らが改心するとは限らない。」

「いいんだよ。これで。」

「まさか、アンタ：」

「ああ、ミコ。そのまさかだ。」

「アイツ、おもしれえから仲間になんねえかな〜！」

その夜。

「リーダー、また稼ぐならおそろく奴らがいなくなるであろう5日後くらいからですぜ？」

「そうです。それか・殺さない程度に襲撃しますか?」

「馬鹿を言わないで。言つてたじやない。立派で、誇れる仕事に就けて。」

ターニャはお酒を飲みながら言う。

「あたし思うんだ。あの人達、なにか大きな事するんじゃないかなつて。」

「だからね? 今までだったら、そんなこと無視したら良いつて思うんだけどね? 守らなきゃつて・そんな気がするんだよね。」

「リーダー、まさか・」

「あの勇者の仲間になる気ですか?」

「……」

ターニャは黙つてしまう。

「待つてください! 俺たちはどうなるんですか?」

「俺たちを見捨てるんですか?」

それを聞いた盗賊達が騒ぎ出す。

「待て待て、みんな! リーダーに任せろ! な?」

「「「へい!!!」」」

副リーダーの助け舟により、なんとか騒ぎは収まった。

酒が入った事もあり、皆がぐつぐつと寝静まった頃、ターニヤは寢床から起きると、部屋を出る。

少し歩いて洞窟内の奥にある泉にたどり着く。

ここは夜になると星が泉の水に映り、キラキラと水面が光りだす。ターニヤにとつては安らぎの場所で何かあるたびにここに来ていた。

ターニヤは懐中時計を開き、魔力を込める。すると蓋の裏に貼られた絵が炙り出しのように浮かび上がる。

それは父、母、兄、姉、自分が描かれた絵だった。

実は来人の前では一家離散と言ったが本当は家族は自分以外殺されてしまったのだ。自分は当時の屋敷の執事長に助け出され、逃げ延びた。

「パパ・ママ・お兄ちゃん・お姉ちゃん・あたしどうしたら良いんだろう…」

返事が返つてこない絵を見ながら一人か細い声で呟く。

「ここにおられましたか、ターニヤ様。」

久しぶりに自分の本名を呼ぶ者の声がして流れた涙を拭いて顔を上げる。

「セバス…」

副リーダーだった。

「私はあの日、息絶える寸前の旦那様から最後の命令としてターニヤ様を託されました。」

「ご存知とは思いますが、元々私は行き倒れていたところを先代の旦那様に拾われ、そして次代の：ターニャ様のお父様にも長年お仕えして参りました。私はターニャ様の為ならば何でもする所存です。」

「セバスには、本当に助けられたよ。あたしに戦い方を教えてくれた。全てを無くしたあたしを慕ってくれる家族もできた。あたしは、みんなが好き。でも：あたし：」
「自分に素直になってください。あなたがしたい事をすれば良いのです。」

次の日、来人達は野営の荷を片付けていた。

「本当にいいんですか？捕まえなくても。」

「うん。」

「まあ、ライトが決めた事なら従うさ。」

「私も。」

「私もだ。」

「さあ！出発だ！」

「待ってください。」

自分たちを呼び止める声が出て、振り返る。

そこにはターニャと副リーダーのセバス、全団員が来ていた。

ザッ!

来人以外の仲間が咄嗟に武器を構える。

「待て。」

来人は武器の構えを解除させると一人で前に出る。

「どうしたんだ？」

「あたし：あなたの仲間になりたい。」

「おいおい、真つ当な仕事に就けとは言ったが、別に俺の仲間になれとは：」

「分かってる。」

「でも、あたし貴方と戦って楽しかった。家族と暮らしてる時も、もちろん楽しかったけど、それとは違った楽しさがあった。」

「だから：だから：」

ターニヤは俯く。

「じゃあ、来いよ。」

「え：？」

「俺たちと行こうぜ？」

「いいの：？」

「もちろん。」

「ありがとう…」

ターニャは目をグッと拭くと、笑顔で家族の方を向く。

「ターニャ様、こちらを。」

セバスは一本の短剣を手渡す。

「これは、ご主人様がいずれターニャ様が一人立ちするであろう時の為に用意しておりました。持つていってください。」

「ありがとう、セバス。元気でね？」

それから全体を見る。

「あたし、ちよつと行つてくる！」

「「「「リーダー!!!行つてらっしゃいませ!!!!!!」」」」

部下達の声に見送られ、駆け出す。

「歓迎するよ。俺たちは家族だ。」

「うん！」

第10話

「ライト。本当にこれでいけるのですか？」

「ああ、任せろ。」

謁見の間に縄で縛った男：ではなく男の顔をしたターニヤを連れて来た。

ちなみにエクレールがいてもマズイので、こつちも顔を変えている。

「おお！大義であった。して、何故そこに盗賊のリーダーがおるんじや？」

「ええ、倒すには倒しました。しかし、こいつは：救いようのないほどのクズ。殺す価値もありません。そこで！」

「今からこいつを女にします。」

俺はブラッドスタークに変身する。

「や、やめろ！女にだけはしないでくれ！あんな！あんなひ弱な存在に！」

「黙れ！貴様はそれほどの事をした！これからは可愛がってやるからな？抑えろ、ピーター！ナーガ！」

ピーターとナーガが暴れるターニヤを押しさえつける。

「じゃあ、やりまーす！」

「や、やめ…」

俺の手のひらから放出された煙に包まれたターニヤは煙が晴れると女の姿になっていた。

まあ、男の顔から元の顔に戻ただけだがな。

「な！お、俺の顔が！体が！ は!? 声まで！」

「これでどうです？」

「うむ、面白い物を見させてもらった。よし、報酬を出そう。」

王は大臣に命じると金が入った袋を持って来た。

「うむ、やはり鎧の勇者は槍の勇者を倒すだけあって頼りになる。同じ防具の勇者であるナオフミも見習ってほしいものじゃ。」

「それとじゃ。これからも儂の為にも、この国の為にも尽くしてくれたまえ。さすれば…近うよれ。」

王は大きな声で言えないのか、来人を呼ぶ。

そして耳元でこうささやいた。

「お主だけは、罪を無かつた事にしてやろうぞ。」

「ありがとうございます。」

「このやろう…その手には乗らねえからな！」

我慢我慢。

「下がって良いぞ。」

「はい。失礼いたします。」

そして城から出て、俺たちは大笑いした。

「はっはっは!!!ザマアねえなw」

「そうですねwまさか本当に引つかかってくれるとはw」

「そうだなw俺なんかバレた時用にいつでも武器抜けるようにしてたのによw」

「あんなのが王だなんてwこの国お終いでしょw」

「う、うむ。私はあんな王に仕えていたのか。」

「傑作だよねwあんな嘘、あたしの部下達でも気がつくよw」

ひとしきり笑った後、俺たちは街を歩く。

「さて、ミコ。尚文の匂い迎れるか？」

「待って。すんすん：こっちだわ。」

匂いを辿るとまさに教会に入ろうとしている尚文一行がいた。

「よー!」

「あ!来入。久しぶりだな。」

「お久しぶりです」

「あれから仲間が増えたんだよな。フィロロって言ってフィロリアルなんだが、人間化するんだ。」

「人間化？それ普通じゃねえのか？」

「ライト。普通フィロリアルは人間化しないよ？」

ターニャに訂正される。

「マジ？」

「うん。」

「：本当に人間化するのか？」

「するからな？」

「ところで、ライトさん。新しく仲間が二人増えてませんか？」

「ああ。二人とも、自己紹介して。」

「私はエクレール・セーアエツト。メルロマルク国騎士だ。」

「おい、尚文。一瞬でも殺気をエクレールに向けるな。こいつは無害だ。」

「あたしはターニャ。盗賊団のリーダーだ。」

「あの依頼のか。来人、アンタはあれか。物語の主人公みたいな奴だな。」

「おいおい、誉めんなよって。」

「それにさつきさき？王を騙してきたところだ。」

俺は事の顛末を話す。

「はっはっは！なんだ、そりゃ！俺も見たかったぜ！」

「も、もう：ナオフミ様笑いすぎ：プフツ！」

ラフタリアも耐えきれず笑い出す。

「さてさて、ひとしきり笑ったところだし、聖水貰おうぜ。」

「本日は我が教会に何の御用ですか？」

「ああ、仲間が酷い呪いを受けてしまったてな、呪いを解く強力な聖水を譲っていただきたい
い。」

料金表のような物が壁に掛けられている

「ではお布施を。」

「いくらだ？」

「聖水ですと安い物から銀貨5枚、10枚、50枚、金貨1枚と効果によつて上がつてい
きます。」

「じゃあ金貨1枚の強力なやつを頂こう。」

「いけません、尚文様。そんな高価な物は頂けません。」

「いいんだよ。」

「あ、ありがとうございます！」

「分かりました。」

神父はシスターに指示して聖水の入ったピンを持ってこさせた。

……目利キスキルが作動して品質をチェックしている尚文。

なんか、あの聖水。淀んでねえか？

尚文が渋い顔をして神父を睨む。

それを見て俺は理解した。

「おい、この教会は本当にこの聖水が一番品質がいいのか？作ってるやつのが信仰心が足りないんじゃないかねえのか？」

来人はシスターを睨む。

すると神父も聖水に視線を移して顔色を変えた。

「何故、質の悪い物を持つてくるのかね？」

「ですが……」

「ですがではありません。神は慈悲深いものです。あなた個人の正義感を満足させる為の蛮行なら今すぐ悔い改めなさい。」

「ま、誠に申し訳ございません！」

「すみませんね。我が教会の者が無礼を働いてしまいました。」

「金に見合った物を最終的に寄越すのなら文句は言わないさ。」

「間違えたんだろ？ わざと持つてきたわけじゃないならいいさ。 わざとじゃなければな？」

「慈悲に感謝いたします。」

神父らしき奴が直々に聖水を持つてくる。

尚文は聖水を再度チェックした。

呪い払いの聖水

品質 高品質

「まあ、こんな所だろう。」

「今度は間違えんなよ？」

尚文は高品質の聖水を貰った

「礼を言う。後、龍刻の砂時計の所にいるシスターにも同じ事を言っておけ。人をバカにしてほくそ笑みやがったぞ。」

「わかりました。信仰者としてあるまじき姿ですね」

「……そうか。じゃあな。」

「神の導きに感謝を。」

「……………」

あの神父：臭うな。信仰者からは普通漂わねえ俗物の匂いが。

来人達は話しに盛り上がりフィードの帰りを待っていた。するとホントに擬人化したフィードが戻って来た。

「ごしゅじんさまー、ただいまー！」

「おかえりー」

「この子がフィロリアルの子フィードか。本当に人間化してんだな。」

「ねえねえ、あなただーれ？」

「俺か？俺は来人。鎧の勇者だ。」

「自分はピーター。見ての通りのラビット種です。」

「俺はナーガ。リザードマンの武闘家だ。」

「私はミコ。狼人よ。」

「私はエクレール・セーアエツト。メルロマルクの騎士だ。」

「あたしはターニャ。盗賊よ。」

「わー！新しいお友達でいっぱいだー！」

「それじゃあ、どっか行くか？」

「武器屋で買い物か？」

「でやあああああ!!!」

突然の叫び声に全員驚く。

どうやら声の主は元康だったようで、尚文を見るなり殴りかかる。

だが尚文はその手を掴む。

「いったいなんのようだ!」

「お嬢さん! 早く逃げるんだ! コイツらはとても危険な男達なんだ」

「なんの真似だ? 元康?」

てか、お嬢さんって誰に言ってるんだ?

フィーロか? それともターニヤか? エクレール: ではないよな。

「えー? ごしゅじんさま危険じゃないよー?」

「ごしゅじんさま、だど!」

「君もだ! 君も早く!」

「何? あたし? ライトは危険じゃないし。てか、君の方が危険な目をしてるよ?」

「な!?!」

ターニヤの言葉に一瞬呆気に取られるが、元康の顔はみるみるうちに怒りに染められる。

「また奴隷か貴様!」

「うるせえな。お前はあれか。女なら何でも良いのか？」

「違う！」

「すげえ……こんな理想的な女性は初めてみた……」

「……は？」

「こんな魔界大地のフレオンちゃんみたいな子が実在するなんて思わなかった！」

「魔界大地？ライト。この男は何を言ってるんだ？」

エクレールが俺に問いかけてくる。

すまん、俺も知らん。

「俺、天使萌えなんだ……」

「知らんわ、バカヤロウ！お前の性的嗜好なんて知りたくもねえよ！」

「気持ち悪いな、こいつ。」

「こいつの顔無理。」

「不埒な！このような幼子に欲情するなんて！」

「フイーロ、とりあえず耳を塞いでいなさい。」

「はーい。」

ピーターがフイーロに耳を塞がせて、その上から自分の手で覆った。

「……………」

そしてラフタリアの目である。

養豚場のブタでもみるかのように冷たい目だ。

「かわいそうだけどあしたの朝にはお肉屋さんの店先にならぶ運命なのね」つて感じの目である。

まさか、この世界に来て、あの目を見る事になるなんて。

「おい、元康。俺たちに性癖を語りに来たなら帰れ。そして朽ち果てろ。」

俺が射殺すような目で見た事で、元康にあの日のトラウマが蘇る。

「てか、お前。どんだけ鎖帷子気に入ってるんだよ。」

「黙れ！脱ぎたくても脱げないんだよ！」

「お前あの日からずっと着てんだろ？いい加減脱げよ。中臭えだろ。」

「ちよつと待ってくれ、ライト。彼はいつから着てるんだ？」

「1ヶ月は経ってんじやねえかな？」

「…嘘…」

エクレールは手を口にやって絶句している。

おいおい、お前もずっと牢暮らしだったじゃねえか。

「この鎖帷子が脱げないせいで俺はずつとこの装備なんだよ！風呂入る時もこのままだ

しー」

「ワオ！」

「腹立ってきた。ぶっ殺してやる！デブ鳥諸共だ！」

元康は槍で攻撃してきた。

「鳥をバカにすんな！可愛いだろうが！チ○コボとか！ピン○ーとか！ウツ○ストックとか！」

俺はそう叫びながらベルトを巻く。

「滅亡迅雷 net に接続。」

したところで暴走しないけどな。

ウイング！

「変身！バーン！」

フォースライズ！

フライングファルコン！

ベルトからマゼンタカラーの鷹が飛び出し、来人の体を包んだ。

ブレイクダウン！

「ふう。来いよ。」

俺はアタツシショットガンを展開して構える。

「おま！ショットガンじゃねえか！」

「大丈夫だよ。君にしか当てないから。」

元康の攻撃によってなるべく被害が出ないようにするべく、尚文は盾で受け流し、俺はショットガンで撃ち落とし、牽制する。

だが弾いた流れ弾が地面を抉り、店を破壊し始めてしまう、
「お前ら！往來でやんじゃねえよ！」

「死人が出るわ！ぐわっ！」

「あ！一人当たった！」

通行人達も店員も被害を被りたくないのか、逃げていく。

「バカヤロウ！元康！周りを巻き込むな！」

「うるせえ!!」

俺に対して槍を構えて飛びかかってくる元康。

「仕方ねえ！」

俺はショットガンを構えて撃とうとした時だった。

「待つてください!!」

一人の若い兵士が間を割ってきた。

「あー！ドオウん！」

見事、元康の土手っ腹に散弾が命中し、吹っ飛ばされた。

「おやめ下さい！槍の勇者様！ここは民の往來の場です！ここでの私闘は許可出来ません！」

いやいや、ちったあ心配してやれよw何冷静に自分の仕事全うしてんだよw
尚文は驚いていた。

「お前……さっきの!?!」

「尚文、知り合いか？」

「お前らと合流する前に追いかけて来たんだよ。」

「なるほど。勇者同士の戦いに割って入るとは勇氣あるな、こいつ。」

すると騎士団が駆けつけ、その後ろからマインが出張って来た。

「いーえ、許可されますわ！」

またお前か、また貫いてやろうか。

「困め！」

「抜劍！」

すると騎士団達が劍を抜き、來人達を囲い始めた。

「騎士にあるまじき振る舞い・断じて許せん！」

エクレールも抜劍し、騎士達を睨みつける。

「貴様はエクレール！裏切り者の貴様がなぜここに！」

バレてしまったか。

来人はシヨットガンを構えた。その動きを見て全員武器を構える。

俺たちが戦闘の意思を見せた事でマインが書類を出してきた。

「皆様！ここに国が認めた正式な証があります！今ここで決闘を宣言します！」

「どうするよ？尚文。全員蹴散らすくらいわけないぞ。」

「ああ、仕方ないな。」

「剣を収めなさい！」

後から声が聞こえた。すると騎士団達が膝を付き始め、そこからは紫色の髪をした小さい女の子が歩いて来た。

「誰だ？」

「アイツ……」

「あれ？アイツ知り合い？」

「はい、途中まで一緒に来た子です。」

「え？ああ、フイーロと遊んでたって子か。」

「ここでの決闘は許可出来ません！」

マインは驚いていた。

「なぜあなたがここに!？」

「お久しぶりです、姉上」

「なっ!……」

尚文は知らなかった様だ、この2人は王女という事を。

「此度の騒動は姉上や勇者様の権力でどうにかなる問題と思わないようにして下さい。」

「……」

来人は変身を解いた。

「槍の勇者様、周りをご覧下さい!民を巻き込んで決闘する者を誰が勇者と認めますか!？」

元康はようやく周りが見え出したのか、何も言い返せず槍を下ろした。

「姉上、お戯れが過ぎるのでは?」

紫色の髪の女の子がマインに問い詰めた。

「あーら?私は槍の勇者様の補佐の責務を真つ当に務めてるだけですわ!」

「こいつらホントに姉妹かよ……こうまで違うとは……どう育てたら変わるんだ?」

「民の往来で決闘させるのが補佐の役目ですか!？」

「うぐっ……」

さらに問い詰められるマイン、傑作だぜ。

「くっ……妹の分際で私に齒向かうつもり？」

「事の次第に寄つては母上に報告をします。」

「ちっ……」

すると紫色の髪をした女の子が街の人達に頭を下げていく、立派な子だった、すると元康が懲りてないのかフィードに近付いてきた。

ピーターはすぐにフィードを庇うように立つ。

「フィードちゃん、君の名はフィードちゃんなんだろう？」

ピーターの事は視界に入っていないようだ。

「うん！フィードだよ！」

「可哀想に……尚文に馬車馬の如く働かされて……」

「フィード馬車引くの好きだよ！」

「フィード、例えそうだとしても今言うのは得策ではない。」

ピーターはフィードをフォロース始める。

「おのれ！尚文！あのデブ鳥の他にもフィードちゃんにまで馬車を引かせるなんて！」

「やっぱりあの時に私が代わりに決闘して潰しておくべきだったか。」

「一度出直してこい。」

「5回くらい死んできてほしい。」

俺の仲間の女性陣から非難轟々である。それとミコ、それだけはやめなさい。

「ファイロの事デブ鳥って言った……」

ファイロは俯きながらつぶやく。

「えっ……?」

「この前もファイロの事笑ったし!」

「え?俺がいつファイロちゃんの記事笑った!?!」

ドロンと煙が出てファイロはファイロリアル姿に戻った。

「槍のひときら……い!」

元康は驚いて震えだした。

「えっ……んじやファイロちゃんが……あのデブ鳥……」

元康が言った瞬間ファイロは元康の股間を蹴り上げた!

「ああああああああ!」

「鳥になってこーい!」

元康は高く飛ばされ、瓦礫に落ちた。

まるでラグビーのハイパントキックを見ているようだった。

「元康さまあ……早く!治療院に!」

マインは慌てて元康の元へ行く。

やれやれと頭を抱える紫色の髪をした女の子

「ファイロの勝ち!」

「ナイスです!ファイロ。」

「最高だぜ!ファイロ!」

「いい蹴りね。惚れ惚れするわ。ファイロ!」

「いいセンスだ。ファイロ。」

ファイロを称える俺たち。すると紫色の髪をした女の子が近付いてきた

「神鳥の聖人様いえ、盾の勇者様。そして鎧の勇者様、お話がございます……」

「ここじゃないだから武器屋に行つて話しようぜ? な? 尚文?」

「……………」

来人達は武器屋へ向かつて行つた、着くやいなやエルハルトは呆れていた。

「あんちゃんら……ここは話す場所じゃねえよ……」

「すまん、少し貸してほしい。」

「で? お前は何者なんだ?」

尚文は紫色の髪の子に尋ねる。

「改めまして、私はメルロマルク王位継承権第1位、第2王女メルティ・メルロマルクと

申します。」

「「「王女!」」」

来人と尚文の一行は驚いていた。

「おういけいしよう?」

フィードロは難しい言葉を聞き返した。

「ああ、そうだな。一番偉い人が辞めた時に次に偉くなる人のことだよ。」

ピーターはフィードロに優しく説明をする。お前は親か。それにほら、フィードロのやつ。今日会ったばかりのピーターにもう懐いてるし。

「メルさんは妹なのに継承権が1位なのですか?」

ラフタリアはメルティに質問をする。

「姉上があのとおりなので……」

「だろうな。あんなのが1位だったら国が崩壊する。」

メルティは話を続けた

「あなた方が盾の勇者様と鎧の勇者様だったとは……いえ、丁度良かったのかも知れませんがね。」

「なにになにー?」

「私は……」

話が途中なのに尚文は立ち上がってメルティを睨みつけた。

「おい、尚文。どうした？」

来人は尚文に座るように促す。

「悪いが、お前を信用出来ない」

「えっ……」

「出ていけ。」

「おい待てよ！尚文！」

そうだ、こいつは王女。まともとはいえ、憎つくきマインと同じ。しかも身分を明かさずに接近してきた。信用できないのも当たり前か。

尚文の威圧に耐えきれなかったのか、悲しそうな顔をしてメルティは出て行った。

「少しくらい話を聞いてやっても良かったんじゃないやねえか？」

「知らん。」

「ねえねえ！メルちゃんにかしたのー？」

「フイーロ、もうあの子とは遊んじやいけません！」

「ぶー！なんでー！」

フイーロは納得ができないのか、何度も尚文に聞いている。

「ピーター、お前ファイロの相手をしてやってくれないか？」

「わかりました。」

ピーターがファイロを連れて外に出て行った。

「親父、この鎧を頼む。」

「そうだ、尚文。お前クラスアップって知ってるか？」

「クラスアップ？なんだ、それ。」

「ああ、ターニャから聞いたんだがLvには上限みたいなのがあるらしくて、そいつをし

ないと上がりにくくなるらしいんだ。」

「へえ、俺やってねえな。」

「俺もだ。」

するとファイロ達が戻って来た

「ごしゅじんさまー、おきやくさんー！」

すると先程の若い兵士が仲間を連れてぞろぞろ入ってきた。

「盾の勇者様！」

「またお前達か……」

「まあまあ、何か用か？」

「お願いします！我々を波の時だけでも良いので御一緒させて下さい！」

「へえ、物好きがいたもんだ。」

来人は驚いた。城の兵士達は王の息がかかってるせいでみんな尚文を嫌ってると思っただが、一枚岩ではないようだな。

「俺じゃなくても他の勇者に頼めばいいだろ。」

尚文は突っ撥ねる

「我々はリユート村出身なんです！盾の勇者様と鎧の勇者様に家族を救って貰いました！」

「そうか、だが俺には外に一人、あとはここに居る俺を除いて4人の6人パーティーなんだ。定員だから俺は無理だ。」

「良いだろう、このネットワークスを金貨150枚で買い取ってくれ。」

「え……？」

若い兵士達は戸惑いを隠せなかった

「高っ！」

「どうした？これで俺の信用を買い取るんだぞ？」

「……分かりました！今から集めてきます！」

(尚文：なるほどな。)

若い兵士達は尚文の意図は掴めていないが、金を工面する為に店から飛び出した

「鎧が完成するまで龍刻の砂時計に行きましよう！」

「そうだな、行つてみるか！」

（大方権力振りかざして来るんだろうな……）

そこで俺はピーターとエクレールとナーガとミコとターニヤを連れて尚文達と砂時計のところまで行つた。

「……龍刻の砂時計——」

「じゃあ行こうぜ。」

「クラスアツプを頼みたい。」

「一人につき、金貨15枚です。」

「ほらよ。」

「ほれ。」

俺たちはシスターに人数分渡すが、シスターは嫌な顔をした。

すると奥から別のシスターが出てきて耳を疑うような事を言った。

「申し訳ございません。鎧の勇者様は構いませんが、盾の勇者様は王様直々に許可が下りていません。」

「な!？」

「どういう事だ？」

「お伝えした通りでございます。それでは鎧の勇者御一行様はこちらに。」

「あつそ。分かった、帰る。」

「またのお越しを。」

だが尚文と来人は帰らない。

「まだ何か？」

「金を返せ。」

「お布施ですn:。」

俺はネビュラスチームガンを突きつける。

「選べよ。」

「:分かりました。」

シスターは渋々と俺たちに金を返した。

「神に使える我々にこのような事をしたのです。あなた方には天罰が下るでしょう。」

「あ、そう。俺別に3勇教とか信じてねえし。」

俺たちは外にでる。

「すまん、お前まで。」

「いいんだよ。あんな質の悪いところ、こつちから願い下げだ。」

「勇者様!!!」

若い兵士達は大きな袋を持って走ってきた。

「約束の！金貨150枚です！」

「よし、よくやった！それで装備を整えてこい！死なれたら困るからな！」

「「はい!!!」」

そう言うともまた走って行った。

「あ、登録……！」

「また、明日だな。」

第11話

そして波発生の10分前

俺たちは武器屋にやってきた。

「来たか。」

苦言もなしにエルハルトが扉を開けて迎えてくれる。

もう、どうやら自分の店を作戦会議の場所にされる事には目を瞑る事にしたらしい。

「それで？作戦は昨日の感じでいいのか？」

「ああ、俺とナーガとエクレールとターニヤ、尚文とラフタリアはボスを叩く。あとのメ

ンバーは避難と雑魚の殲滅だ。」

昨日の会議でこう決まった。

「それにしてもお前の鎧変わったな。すげえな、世紀末じゃねえか。」

「言わないでくれ。一応オーダーメイドなんだ。」

話しているうちに残り10秒となる。

「いいな！誰も欠けずに全員で帰還する！行くぞ！」

俺たちは飛ばされた。

少しして景色が鮮明になる。ここは：

「ここ、俺が薬を届けた辺りだな。」

「じゃあ、尚文！先導は任せたぞ！」

俺たちは作戦通り、二手に分かれて走りだす。

走りながら空を見ると、やはり前回同様空がワインレッドに染まり、亀裂が走っている。

前回見た魔物もいるが、今回はそれに混じってアンデッド系が多いな。

俺たちが到着すると樹が矢を放って幽霊船の敵と戦っていた。

「来人さん！尚文さん！先にクラーケンを倒さないといけないのに二人は乗り込んでいききました！」

「そうか。」

そう答え俺たちも乗り込んだ。

そこには鍊と元康が魔物達と戦っていた。

アイツwまだ鎖帷子着てるwww

笑いそうになったところで鍊と元康が俺たちに気がつく。

昨日頑張つてレベルアップしたお陰で、俺にはこれがある！

俺はベルトを巻き、ボトルを二つ出す。

シヤカシヤカと振り、蓋をひねってベルトに挿す。

ラビット！ タンク！

俺はレバーを回し、構えをとった。

Are you ready?

「変身！」

鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！

「行くぞー！」

ベルトから骸骨兵を蹴散らしながらドリルクラッシュャーを出し、進む。

そこで死角から剣が振るわれ、前転をして避ける。

骸骨兵に囲まれて見えなかったが、船長みたいな骸骨がいるな。

「だつたら俺も！」

ボトルを二つ取り替える。

海賊！電車！

「ビルドアップ！」

定刻の反逆者！海賊レッシャー！ イエーイ！

カイゾクハッシュャーを出し、斬りかかる。

当たったのだが手応えを感じられない。

「アンデッドだからか!!」

アンデッドなら光：なんかないか!

「あ！そうか！」

ボトルを二つとも取り替え、新しいボトルを挿す。

タカ！ガトリング!

Are you ready?

「ビルドアップ！」

天空の暴れん坊！ホークガトリング！イエーイ!

俺はホークガトリングガーを撃ちマズルフラツシユを出す。だが所詮マズルフラツシユ。その程度の光で骸骨船長のアンデッドは倒せない。しかし、来人はあるものを見逃さなかった。マズルフラツシユに反応して影がモゾモゾと動き出したのを見逃さなかった。

「その影が本体だな！」

俺たちは影を攻撃した。

すると影は叫びながら一つになり、アイコンで名前が現れた。

ソウルイーター

「現れたな！」

俺はまた新たなボトルと変える。

忍者！コミック！

Are you ready?

「ビルドアップ！」

そこに樹も合流し、5人の勇者が揃った。

「行くぞ！」

「流星剣！」

「流星槍！」

「流星弓！」

「くらえ！手裏剣！」

4人の技がソウルイーターに炸裂した。てか、何？流星って流行ってんの？

だが少し削っただけのようだ。

「硬いな。。。」

だがソウルイーターが反撃してきた。

「危ない！エアストシールド！」

尚文が出した盾に攻撃がはじかれる。

「ナイスだぜ！尚文！」

「火炎斬り！」

「流星弓！」

俺と樹の必殺が炸裂する。

その時、尚文が前に出た。

「憤怒の盾！」

そう叫んだ瞬間、尚文の鎧と盾が黒い炎で燃え出し、盾も禍々しく変貌する。

「カースシリーズか！続くぞ！ナーガ！エクレール！ターニャ！」

「はあっ！」

俺は4コマ忍法刀のトリガーを一回引き、分身をし、分身の内の2体が火炎斬りと竜巻斬りを繰り出す。

「くらえ！フォークロス！」

エクレールが光の剣で十字にソウルイーターを斬り裂く。

ターニャはその後ろで印を高速で結ぶ。

「火遁！」

「ターニャ！力を貸すぜ！ドラゴニック！」

「火龍炎！」

「ブレイザー！」

二人の龍の炎がソウルイーターに炸裂し、激しく炎上させる。

「仕方ねえな。クラークンは俺が相手してやる！」

鍊が劍を構えて走っていった。

「はあ！　大丈夫か！尚文！」

分身3体にソウルイーターを牽制させながら尚文に近づく。

「はあ・はあ・クソが！シールドプリズン！」

「チェンジシールド！ビーニードルシールド！」

尚文はソウルイーターが来人と分身に翻弄されている瞬間を見逃さずシールドプリズンで動きを止め、盾を棘のある盾に変え、その盾の棘がソウルイーターに何本も突き刺さった。

「その愚かな罪人への我が決めたる罰の名は鉄の処女の抱擁に全身を貫かれる一撃なり！叫びすらも抱かれ苦痛に悶絶するがいい！アイアンメイデン！」

尚文は取り憑かれたように唱えると拷問具のアイアン・メイデンが現れた。

「あれが……尚文の技……」

来人は驚く。

そしてアイアン・メイデンはソウルイーターを閉じ込めた、数秒し、開いた時にはソウルイーターは蜂の巣の様に穴だらけになった。

「すげえ……」

「なんだよ、ゲーム知識がないとか言いながら戦えるじゃないか……」

「今回は完敗だな……」

「怠けていたから力が有り余ってたんですね!？」

3勇者達も驚いていた、すると…尚文は力を使い果たしたのか膝をついてしまった。

なんで、コイツを倒したのに空が戻らねえんだ？まさか……

まだいるのか！更に上が！

「ライトー！上だー!」

ターニヤが気づき、全員上を見上げる。

すると黒髪で和服を着て両手に扇を持った女性がマストに座っており、俺たちが気がついたことで降りてきた。

降り立った瞬間、俺たちが相手をしていたソウルイーターの影から別のソウルイーターが現れ、襲いかかった。

しかし、その女性は何事もなく扇で斬り裂き、消滅させた。

「おや、どうやら…勇者は二人のようですね。」

二人？どういふことだ？

それよりもソウルイーターを一撃で葬った力……コイツ、できる！

「「おりゃあ!!!」」

鍊、元康、樹が攻撃を加えようと駆け出す。

「よ、よせつ！お前ら！」

「甘いですね……輪舞零ノ型 逆式雪月花！」

俺の一行、尚文の一行以外の勇者は全て吹き飛ばされた。

「やはり、この程度ですか。紛い物……あなた方に使われている眷属器が泣いていますよ？」

「でも、あなた方は違う。一人は死にそうになってますけど。」

鍊、元康、樹を一瞥して蔑むと、俺たちの方を見てそう言う。

「あなた方には名乗りましょう。私の名はグラス。あなた方勇者と敵対するものです。」

「あ、そう。俺は来人。」

「な、尚文だ。」

見るからに尚文が弱っている。カースシリーズでパワーを使いすぎたか。

「ラフタリア、尚文を頼む。ここは俺がやる。」

「それでは真の波の戦いを楽しみましょうか！」

「待て！」

踏み出そうとしたグラスは驚いた顔で俺を見る。

「一回降りねえか？ここじゃあ、足場が悪くてアンタと本気でやれねえ。」

「それもそうですね。蹂躪は面白くないのですし、本気のアナタが見たいので。」

俺の提案をあつかりと承諾し、下に降りる。

俺は降りてすぐに変身を解き、ベルトを変えて、ガシャットギアデュアルのダイヤルを回す。

バーン！バーン！シミュレーション！

「第五十戦術」

俺はそう言い、ベルトに挿す。

デュアル！ガシャット！

I r e a d y ! f o r B a t t l e s h i p !

「変身！」

ドライバーのレバーを倒す。

デュアルアップ！

スクランブルだ！ 出撃発進！バンバンシミュレーションズ！発進！

仮面ライダーズナイプシミュレーションゲーマーに変身した。

「ほう、仮面ライダーですね。」

「な!?!お前：知ってるのか：!」

「ええ、知ってますよ。仮面ライダーエグゼイドに登場する仮面ライダースナイプの強化形態ですよ。私の友達が教えてくれました。」

「マジかよ！すっげえ！初めて、この世界に来て分かる奴がいたか！」

「何を喜んでいるのですか？私がそれを知ってるということは：ですよ？」

「あ：。」

「そして、あなたは私のことを知らない。と、いうことです。」

「：落胆してるところ、申し訳ないのですが、そろそろやりますか？私には大切な人が待ってますので。」

「：あ、ああ。いいぜ。」

来人とグラスは走り出した。

グラスの扇の一撃を右手で受け止め、左手の砲塔で腹を殴りながら撃ち抜いた。

「がはっ！やりますね！」

「まだまだ！」

両腕の砲塔に加え、肩の砲塔も使い彼女を追い詰める。

「ふふ、こうすればいいんですよ。」

俺が砲塔で殴りかかる。それがいけなかった。

グラスは咄嗟にしゃがみ、俺のガシヤットをベルトから引き抜いた。

「な!？」

「残念でしたね。」

ガシヤットギアデュアルをポイッと投げ捨ててしまう。

「だから知ってるって言ったじゃないですか。」

俺は扇の一撃を食らって吹き飛ばされ、岩肌を体ぶつける。

「ガアッ!」

ぶつかった衝撃で強制変身解除されてしまい、更に口の中を切ったのか、血の味がする。

俺は口の中の血をプツと吐いて立ち上がる。

「ふふ、さしてどうしますか? 変身する時間くらいはあげますよ? 友からも、変身は待たないといけない」と口を酸っぱくして言われているのでね。」

「へへっ、特撮をよく分かってる友人なこと・しょうがねえ。お前ら!」

俺は尚文や仲間達を呼ぶ。

「俺が今から使う力は暴走する危険性を秘めている! いや、確実に暴走する! だから離れる! あとターニヤ、お前は一回来い。」

「なんで!？」

「暴走した時は、お前しか止められない。止め方を教えてやる。耳を貸せ。」

「ゴニョゴニョ。」

「え?それでいいの?」

「ああ、それで止まる。だが気をつけろよ?」

「うん!任せて!」

「そう言い、ターニャは走っていった。」

「暴走ですか。見せてもらいましょうか。」

「見せてやるよ。」

俺はベルトを巻き、赤い機械を取り出す。

コイツは：正直使いたくねえ。もし、これのせいで誰かが死んだら：だが、これじゃねえと奴を倒せねえ。

もってくれよ!俺!

「俺がお前を止める。この身をかけても。」

俺は、その機械のカバーを外し、スイッチを押した。

ビー!ハザードオン!

俺はベルトに赤い機械ごと、ハザードトリガーを挿す。

そして二本のボトルを挿す。

ラビット！タンク！スーパーストマツチ！

ドンテンカン！ドンテンカン！

「スー……ハー……！」

目を閉じ深呼吸をして覚悟を決めた。

俺はベルトのレバーを回す。

ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！

Are you ready!

「変身……！」

アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！ヤベーイ！

黒と黄色の警戒ラインが巻かれた黒い鑄型のようなものに挟まれて、出てきた姿はまさに真っ黒なビルド。

「……」

来人は仮面ライダービルドラビットタンクハザードに変身した。

第12話

「さて、早いとこケリつけてやるよ。」

「面白いわね、私もこの姿は聞いてないから楽しめそうだわ！だけどー！」

グラスは一瞬消え、来人の目の前に移動する。

「はあっ！」ドガッ！

来人にハイキックが炸裂する。

「そんなもんか？」

「嘘……でしょ……？」

完全に不意を突いた一撃は来人の右手にしつかりと受け止められていた。

「ハイキックつてのはな……こうやるんだよ！」

足を掴む手を離れた瞬間、来人の高速のハイキックがグラスの側頭部を捉えた。

「ああっ！」

すんでのところでガードするがグラスは衝撃を逃がしきれず、地面をゴロゴロと転がる。

「輪舞破の型・亀甲割！」

グラスが開いていた鉄扇を閉じて突きの動作をする。

すると鉄扇から光の矢が飛び出して来人に迫る。

「甘ッー」

来人はすつと肩をずらす事で避ける。が矢はもう一つ飛んできており、左肩に突き刺さる。

「あら？甘いのはどちらかしら？」

「ハ」のやろu..」

その時、来人は脳に向かって電流が走っていく感覚を覚える。

それはあの日、テレビで見えていたものと一緒だった。

(マ、マズイ……これは……)

来人はすぐにベルトからハザードトリガーを引き抜こうとしたが、遅かった。

引き抜く前に電流が脳に達してしまい、頭と両腕がダランと垂れ下がる。

「あら？もしかしてそれが暴走つてやつかしら？暴走だなんて短絡的な動きで私に勝てるだけでも？それっ！」

グラスはまた鉄扇から光の矢を放つが、来人には刺さらない。

無駄のない洗練された……まるで瞬間移動をしているかのような動きで避けながら着実にグラスに近づいていく。

「嘘でしょ！どうして！どうして当たらないのよ！」

暴走する来人の動きに合わせて光の矢を放つ。時には偏差射撃を試みたりしているが、それを見透かされているのか全く当たらない。

流石に力を使いすぎたのか、膝に手をつき、肩で息をするグラス。

しかし、来人は空高く飛び上がった。

ふと、グラスの全身にゾクつと鳥肌が立つ。

ゆつくりと顔を上げるとライダーキックの体勢の来人が眼前に迫っていた。

避けることができず、ノーガードでお腹辺りにヒットし、体をくの字に曲げながら吹っ飛ぶグラス。

岩に思いつきりぶつかり、血を吐くが、高速移動で来人が近づいてきているのに気がついた。

自分を砕こうと振り下ろされた拳を避け、標的を見失った拳が後ろの岩を粉々に砕く。

当たったらマズイと距離を取ろうとするが、肩を掴まれ、思いつきり顎を殴りつけられる。

グラスは軽い脳震盪になるが、なんとか両足を踏ん張って持ちこたえた。

だが、容赦のない膝蹴りが鳩尾に刺さり、胃の中の物が逆流し吐いてしまう。来人に

も少しかかったが、気にすることなく顔を掴まれ、膝が顔面に突き刺さる。

(こいつ…人体の急所を的確に…殺される…)

来人はグラスと戦う際に仮に敵だとしても女性を相手にしていた為、どこか遠慮しながら戦っていた。だが暴走をしたことでそんな気持ちなど起こるはずもなく、リミッターも外れたことで桁違いのパワーに目覚めていた。

グラスは逃げようとするが、それよりも速く来人は瞬時にハザードトリガーのボタンを押し、レバーを回す。

来人から紫色のオーラが漏れ出し、右の拳がグラスの鳩尾に突き刺さり、体がくの字に曲がる。だが、すぐにもう一発が背中に刺さり地面に叩きつけられる。

叩きつけられた衝撃で地面をバウンドするが、すぐにキックが飛んできて、グラスは吹き飛ばされる。

「ううっ…」 ボタツ…ボタツ…

(に、逃げなきや…殺され…る…)

「私は…死ねない…あの子を…助けるまでは…」

ヨロヨロと立ち上がろうとするが、すぐに頭を掴まれ、無理やり立たされる。

グラスは何とかその手を振り払おうとするが、振りほどけない。

なおも抵抗を続けるグラスに見向きもせずに来人はまたハザードトリガーのボタン

を押し、レバーを回す。

すると抵抗を続けるグラスに電流が走り、力が抜ける。

抵抗しなくなったのを見たからなのか、定かではないが来人は掴んでた手を離し、構える。

ready! go!

そして無抵抗のグラスの喉に右のキックを叩き込んだ。

その衝撃でグラスは地面を転がり、動けなくなってしまう。

来人は追い討ちをしようと走って近づく。

グラスはその時、殺される恐怖に震えていた。骨も何本かは確実に折れた。

そしてポロつと涙が流れるのを感じた。

(私……ここで死ぬんだ……)

どンドン来人が走って近づいてくる。

それをターニャ達は岩陰に隠れて見ていた。

(あたしが止めないと! 来人はあたしを信じてくれたんだ!)

「あたしが! 止めなきや!」

ターニャが隠れていたところから飛び出す。

「ターニャ! 戻れ!」

仲間の制止を振り切り、隠れていた所から飛び出し、仲間の名を呼んだ。

「ライトー！」

ターニヤが叫んだ。叫んだことで自分が標的となる。だが、それでいい。

その声に来人がゆっくりと振り返る。

だが今の来人には敵味方の区別は付いておらず、ただ動くものを破壊する殺戮マシンと化していた。その為、振り返ったのもただ声が出ただけであるし、もちろんターニヤを敵と判断し、襲いかかる。

ターニヤは怖気付きそうになるが、来人から言われた事を思い出す。

（いいな？ターニヤ。いくら俺が眼に映るものすべてを破壊する殺戮マシンと化しても眼に見えなかつたら意味がない。だから透明になってハザードトリガーを奪い取れ。いいな？お前にしか頼めない事なんだ。）

「う、うわあああああああ!!!」

ターニヤは叫びながら走り、透明になる。そして距離を詰めてきた来人の攻撃をスライディングで股下を越える事で回避する。

そして標的を見失った事で再度グラスの方に振り向いた。だが来人はその場で動かなくなる。

ターニヤが透明化を切り、姿を現わす。その手には先程までベルトに刺さっていたハ

ザードトリガーがしっかりと握られていた。

それは来人のベルトからハザードトリガーを抜き取る事に成功した事を意味する。

「やった！取った！」

そのハザードトリガーを取られた事で、ビルドは元の赤と青に戻り、変身は強制解除され、来人はバタツとその場で倒れる。

だが意識は失っていない。

「グラス！もうアンタの負けだよ！」

「ええ…その…よう…ね…」

地面に倒れたまま、そう言うと徐々に体が透け始め完全に消え去った。

それと同時に空が元の色に戻り、亀裂も閉じた。

それは波が収まった事を物語っていた。

その後、回復した来人は気絶した勇者たちを村人達に引き渡すと、村人達はすぐに治療院に引つ張っていった。

「なあ、俺たちの方が治療されるべきだよな？」

「だよな、だが諦めろ。俺たちは嫌われもんの勇者だからな。」

尚文の苦言に来人が笑っていると、ザツザツと音を立てながら兵士たちが走ってくる。

「おい！盾と鎧！三勇者様はどうした！」

「三勇者？ああ、あそこの治療院だろ。」

「急いで勇者様とその仲間を運び出せ！早急に城下の治療院へ送るのだ！」

「気は確かか？奴等はあつさりやられたから軽傷のはずだ。それより被害に遭った村人の中には重症を負つてる奴もいるんだ。そっちを優先するべきじゃねえのか？」

「勇者とその一行を最優先するのは、我が国、そして世界の為だ！」

「あ、そう。世界平和のためには村人の犠牲は仕方ないんだな。」

「あと、その勇者の括りには俺たちが含まれてねえ事もよく！分かったよ！さつさと連れてけよ。俺たちは忙しいんだ。」

俺たちは兵士達に背を向けて帰ろうとした。

「待て、お前ら。王がお呼びだ。城にこい。」

「嫌だね。」

「同じく。どうしても連れて行きたいなら無理やりにも連れていくんだな。もちろん全力で抵抗させてもらうが。」

「ぐっ・っ」

盾と鎧の勇者に対していつも横柄な態度を取る兵士達であるが、正直この二人と戦つて勝てる訳がない。それが分かつてるからこそ、こう言われてしまつては強く言えない

のである。

「お願いします。どうか来て頂けませんか？」

俺たちと一緒に来ていた兵士が必死に頼み込む。

「……分かった。行つてやる。だが俺たちはお前の命令を聞いたわけじゃねえ。この若き兵士の顔に免じてだ。」

そうして俺たちは城へ向かった。

そして城に着くが、俺たちは玉座ではなく一旦別室に通されて待機を命じられる。ナメてやがる。

そしてしばらく経つてから、呼ばれ、玉座へ向かう。

「まず、此度の波を沈めてくれた事を感謝するぞ、鎧。それと忘れておつたが、この前の賊の討伐の報酬を渡しとらんかったな。今回の波での尽力の分の報酬と合わせて何が欲しい？申してみよ。」

「は！私が聞いた話なのですが、今は亡きセーアエツトと名乗る騎士が治めていた領地があるとか……？」

「よく知つておるのう。確かにある。まあ、今は領主が死んでからは誰も住み着いておらんがのう。」

「ならば、その領地を頂きたいとうございます。」

「あそこをか？ふむ、よかろう。使うが良い。これ、この者に土地の権利書を持って参れ。」

「は！」

そうして俺に領地の権利書が渡される。

「それと全く遺憾だが。盾よ、波を沈めてくれた事、感謝する。まあ、お主が一役買った事に関しては信じておらんが。」

「……」

「抑えろ、尚文。」

「それでだ：盾のお前に聞きたい。ワシはもちろん嘘じゃと思っておるが。」

「お主の能力じゃ。盾、お前の力で盾が真っ黒に燃え出し、三勇者が手こずった相手を恐るべきパワーを誇って倒したと聞いている。どうやったのか、教えろ。もちろん嘘偽りなく話せよ？まあ、盾のことじゃから嘘をつくのは分かっておるがな。」

もう、だめだ。俺が抑えられねえ。

「こら、クズ！てめえ一体誰のおかげで波を退けられたのか分かってんのか？あ？分かってんなら、ちったあ讚えろや！グチグチ言いやがって！文句あんなら殺すなりなんならしてみろや！ゴミ！」

「なん：だど：：貴様！このワシに向かつて：クズだ、ゴミだど：：なんだ、その口の聞

き方は！」

王が怒鳴つたのを合図に俺と尚文を兵士たちが囲み、武器を構えてくる。

「抜いたな？ 抜いたって事は殺される覚悟ができてるってことだよな!!!ゴラアア!!!」

「者共!!!構わぬ!!!打ち首じゃあああああ!!!」

兵士たちはその声を聞いて一瞬武器を持つ手に力が入るが、動けなかった。

何故なら、この兵士達は過去に來人が槍の勇者と第1王女をいとも簡単に半殺しにしたところを見ていたからだ。

更に今回の波で三勇者が敵わなかった敵を、この二人は倒したと聞いている。

いくら王に対して忠誠を誓っていても、自分が可愛いのだ。

「サガークー！」

來人が王のもとへ歩きながら叫ぶと蛇が飛んできて、腰に巻きつき、ベルトと化する。

「変身。」

ジャコーダーをバツクルの横に挿し、引き抜く。

仮面ライダーサガに変身した來人はジャコーダービュートを構えながら王のもとへ歩く。

「な、何をしておる！ワシを守らんか！」

王は叫ぶが、誰も動かない。

「王の判決を言い渡す……」

「王じゃと……！血迷うたか！」

グエツ！

王は鼻を鳴らすように笑うが、ジャコーダービュートが首に巻き付く。

「死だ……」

「と、言いたいところだが、殺すにも満たん。」

そう言うのと、一瞬キュツと締めてから解放する。

「オエツ！ゲホツ！ゲホツ！」

「せいぜい屠られる豚のようにいつ殺されるか怯えながら暮らすがい。さらばだ。」

「いくぞ、尚文。」

「ああ。」

「待て……盾と鎧。このままで済むと思うなよ？必ず……」

俺は今度はジャコーダーロッドに変え、もう一度王の目の前に突きつける。

「必ずなんだ？殺しに来たければ殺しにこい。ただし、その分、貴様の寿命が縮まると思え。」

俺たちが歩くと兵士たちが自然に道を作っていく。

俺たちがドアを開け、閉まった時に中から「許さんぞ！盾と鎧!!!」と聞こえてきたが、

知らん。

負け犬の遠吠えだ。

俺は変身を解き、尚文と共に別室に待たせている仲間のもとへと歩いていく。

俺たちは階段を降りたところで、貴族の女性っぽい人とすれ違う。

高そうな扇で口元を隠し、これまた高そうなドレスを着た女性だ。

顔はよく見えないが、これだけ豪華なんだ、整ってるに違いない。背格好からして、年齢はおそらく20代後半くらいかな？あと、髪の色が紫だ。

「此度の活躍、お疲れ様でした。でござる。」

ぼつりとすれ違い気味に眩かれた。

ござる？

俺たちは立ち止まり、その女性を見る。

女性の後ろを小さい頃のラフタリアや人型のファイロくらいの子が付いて行っている。

髪の色が青っぽい。横の女性同様あんまり見ない色だな。

身なりも良い子供か？

ただ、なんとなく誰かに似ている。そう、メルティにそっくりだ。

本人か？

じゃあ、横にいるのは女王か……？は！ナイナイ。ありえねえ。

俺たちは珍しいものを見たなど話しながら別室へと歩いて行った。

「よう！待たせたな！」

バツチリ声真似しながらドアを開ける。

「似てんな、来人。だが……どつちかという……者よりだな。」

「あのレジエンドは無理だ。真似できねえ。」

「全くだ。俺も生まれ変わるならあんな声になりてえ。」

「なんの話をしているのですか？」

ピーターが怪訝な顔で俺たちを見る。

「いや？こつちの話だ。それより変わったことなかったか？」

「ああ、これですか？」

よく見たらミコとナーガとターニヤが気絶した兵士に座っていた。

ああ、やりやがったんだな。アイツら。

「なんか、いきなり攻撃してきたから、後頭部掴んで床に叩きつけたら、ちようど良い椅子に早変わりさ！」

「俺は壁だ。ほら、くつきりと跡が付いてるだろ？」

ナーガが指差す方を見たら、少し血が付いていた。

「ターニヤも?」

「え?! いやいや! あたしはそんな事できないよ! ただ、後ろに回って首を叩いたら気絶しちゃったから・そ、それに! 座ったのだからミコさんに勧められたから・」

尚文は何かに気づいてラフタリアに苦言を言う。

「それで? どうしてフイーロも座ってんだよ。ラフタリア。」

「わ、私は止めたんですよ!?! でもミコさんとピーターさんが!」

「あのね? ピーターおにいちゃん! ミコおねえちゃんがすわっていいって!」

「エクレール: お前だけはストツパーになると思ったのだが?」

「止めたさ! でも多勢に無勢だ!」

「まあ、いいよ。怒ってねえ。攻め込んできたコイツらが悪い。だろ? みんな?」

「ああ!」

「「ええ!!」」

「「うん!!」」

「私たちが間違ってるのか?」

「: そのようですね。」

第13話

それから俺たちは城下に出て歩く。

「と、言うわけで…」

「その前に聞かせてくれ。何故自分の褒美で私の領土を取り戻した？」

エクレールが来人の言葉を遮って質問する。

「何故かって？実は俺拠点が欲しかったんだ。」

「拠点？」

「ああ、誰しも家つてやつがあると違うんだ。帰る場所があるってのはな。」

「なるほど…」

エクレールだけではなく、他の仲間たち、尚文の一行もうなづく。

「と、いうわけで俺たちは町づくりをする。尚文とはここでお別れだ。」

「ああ、そうだな。」

俺と尚文はガシツと握手をする。

「安心しろ。俺の街にお前らの居場所は用意しておく。」

「感謝するよ。じゃあな。」

尚文は武器屋に馬車を預けており、それを取りに行くと言い、別れた。

「まずは、どの程度のもんか見ないとな。」

「それなら私が案内しよう。私がいうのもなんだが、良い所だぞ。」

俺たちはエクレールの案内のもと、街まで歩く。

5日後

「……か？」

「ああ、これでも、私が捕まる前は栄えていたんだがな。」

確か一回目の波でエクレールは捕まったから、それほど時は経っていないはずだが、荒れすぎだろ。

建物は全て廃墟と化し、草木は荒れ放題。

「まずは開拓だな。」

「ライト。これ全部ですか？」

「そうだ、ピーター。全部だ。」

その俺の発言で全員の顔が引き攣る。

「待ってくれよ、ライト。無茶だつて！」

「そうよ、6人でできる広さじゃないわ！」

「安心しろ。俺たちには大勢の仲間のツテがあんだろ？なあ、ターニヤ？」

「：！！　　そういうことだね。あたしの部下100人とセバスを使いたいんだね？」

「そういうことだ。だから100人分の宿舎・10人ずつに分けて10個家を作るか。」

まあ、それくらいなら・とみんなが呟いた為、それで作り始める。

「とりあえず俺とターニヤは副リーダーに話をつけに行く。」

俺はブラッドスタークに変身して、トランスチームガンでターニヤを連れてあの洞窟へ飛んだ。

「あれ？もう着いちゃった！」

「すごいだろ？この銃！」

「うん！でも、その声どうにかなんないの？なんかすっごい違和感しかないよ？」

「そうかく？俺はこの声気に入っただけだな？」

金尾ボイス、俺気に入っただけだな。

「む！侵入者か！」

その時、近くを盗賊が通りかかる。

「あたしだよ！ターニヤ！」

「リーダー！！リーダーが帰ってきた！みんなに知らせなきゃ！おーい！！リーダーが帰ってきたぞ！」

そいつが呼びに行つた事で続々と部下が集まってくる。

「お嬢様。おかえりなさいませ。」

「セバス。ただいま。」

「みんな！ただいま！！」

「「うおおおおお！！」」

「それにしても、どうなさつたのですか？意外と早いお帰りでしたが？」

「うん、実はみんなの新しい家を作ろうかと思つててね？」

「家ですか？」

「うん。最近領地が手に入つてね？そこを村からスタートして最終的には街にしようか
なつて思つてるの。」

「リーダーすげえ！領主様じゃねえか！」

「いや：あたしは：」

「まあ、いいじゃねえか。違うけど。」

「そうだ、俺は他にも寄らねえといけなところがある。話でもしてきたらどうだ？」

「そうだね、ありがとう。」

「リーダー！旅の話聞かせてくれよ！」

「武勇伝を聞きたいでさあ！」

「武勇伝ってほどでもないけどいいよ！話したげる！よし！みんな！広場行くよ！」

そうしてターニヤ先導のもと、広場へみんな走って行った。

「さて、次は…」

「お待ちください。」

セバスに呼び止められる。

「あれ？ターニヤの武勇伝聞かないの？」

「ええ、聞きたいですよ。しかし、あなたにはお礼を言わなくてはならないと思います
て。」

「お礼だなんて、そんな…俺はやりたい事やつてるだけですよ？」

「しかし、そのやりたい事で、お嬢様は笑顔を取り戻しているように思えます。」

「私はその街作り応援致しますし、喜んで尽力させていただきます。」

「ありがとうございます。それでは。」

俺はトランスチームガンの煙で移動した。

そして現れたのは奴隷商のテント。

「よー！」

「これはこれは鎧の勇者様！今日はどのような御用で？」

「ああ、近々奴隷を爆買いする予定だという事を伝えに来た。」

「ほう、爆買い！いいですねえ！やはりあなたは私が見込んだ通りの方です！」
「それで：あれ何？」

俺は木箱を指差す。

「あれですか？魔物の卵クジとなっております。」

「魔物を？」

「ええ、魔物は卵から育てないと人に慣れませんので。」

「そうか、一ついくらだ？」

「銀貨100枚です。」

「ラインナップは？」

「まず当たりは騎竜ですね。飛行型の。後はフィロリアルですね。」

「ああ、フィーロか。」

「そうなんですよね、盾の勇者様にいくら聞いても人型になる育成方法を教えていただけませんので。ここは是非！同じ勇者であるライト様に当てていただかなくては！と思っております、はい。」

「まあ、分かんねえけどよ。とりあえず2個くれ。」

「まいどありがとうございます！」

「それと奴隷だがキープってできるか？」

「キープですか：ううむ。本来は断るのですが、条件付きでいいでしょう！」
「条件？なんだ？」

「ええ、卵を一個買うごとに1週間待ちましょう。なので現段階では2週間ですね。」
「やったな？」

「ええ。こちら商売ですから。そしていい目になってまいりましたよ！ゾクゾクしますー！」

「：はあ：。負けたよ。あと2個くれ。」

「はい！ありがとうございます！それでは計4個で、1ヶ月待ちます！それでは選んで行ってください。」

俺は色んな所に行ってみる。

俺が指を指すごとに奴隷商は部下に命じてメモをとらせて、一際デカイ檻に移していく。

「これで全部かな！」

「誠にありがとうございます！私最高です！」

「誉めんなよwまあ、また買いに来るから。それより乱暴すんなよ？」

「もちろんいたしませんよ。ありがとうございます！」

奴隷商はメモを取っていた部下まで連れて、わざわざ外まで見送りに来てくれた。

こりや本格的に気に入られちったな。まあ、あそこ以外の場所知らねえからいいけど。

その時、頭の中に声が響く。

(ライト君。ライト君。)

うん？女神か？

(よう、久しぶりだな。どうした？)

(緊急ミツシヨンだよ！)

そう聞こえた瞬間、俺はその場から消えていた。

気がつくとも最初の空間に呼び出され、椅子にすわっていた。

「やあ！久しぶり！って、ブリーダーやってんの？」

「ちがう。卵を買っただけだ。」

俺は孵化器を左右の肩に二つずつかけた状態だ。

「そっか、それより緊急ミツシヨンだよ。」

「要件を聞こう。」

「Mr. ○郷！これはあなたにしか頼めない事です。……実は弓の勇者が素性を隠して奴隷解放とか色々やってるの知ってるよね？」

「ああ、知ってる。」

「実はまだ弓の勇者も気づいていない奴隷買いをして不当に扱う輩がいるんだよね。あと実は、救出対象の中にはラフタリアちゃんの友達がいるんだ。一人は確実に生きてる、でももう一人は……」

「そうか、残念だ。」

「……あ！まだ生きてる！なんで……原作通りだと時期的に……そうか！そう言うことか！」

「何一人で盛り上がってんだ？」

「君だ！君というイレギュラーが送り込まれた事で、世界の歯車は違う動き方をしたんだ！その結果、彼女はまだ生きてる！でも、それでも、もって3日だね。もちろん時間が経つごとに生存率は下がっていくわ。」

「わかった、場所を教えてください。」

「任せて！成功したら新たなライダーを解放するよ。」

「わかった、やってみよう。」

「これ前金代わりね！それ！」

——新たなライダーを解放しました。——

ナイト、グリス、滅を解放しました。

そうして俺はまた現世に姿を現した。

「さて、救出ミッションだからな。レインボ○シックスで行くか、スネー○で行くか：」
「まずはターニャだな。」

俺はトランスチームガンで洞窟へ戻る。

「よう、ターニャ！」

「あ！ライト！待ってたよ。みんな了承してくれたよ！」

「それでだ。とある筋から依頼が届いた。奴隷の救出だ。」

「行く。」

「言うと思ったよ。」

「ふむ、その依頼私も同行できませんかな？」

セバスが名乗り出る。

「セバスさんですか？」

「はい、私は老兵ですが、まだまだそこら辺の俗物に遅れを取りませんよ。」

「わかった、じゃあセバスもだな。あと一人は決めてる。」

俺はターニャとセバスを連れて街へ戻る。

「おお！だいぶできてんな！」

なんか民家が6軒立ってた。

「頑張ったぜ？おれたち！」

「ああ、よくやってるよ！それでピーターいるか？」

「呼びましたか？」

「ああ、依頼が入った。お前も行くぞ。」

「はい、喜んで。」

それをセバスは驚いた顔をして見ていた。

「セバス？どうしたの？」

「え？いえ、なんでもありません。」

こうして俺たちは屋敷に辿り着く。ここか。

これはこれはデツカい屋敷だ。

ここに趣味の悪い奴が住んでると。

「偵察でもしますかな。」

セバスは印を組むと、手のひらに鳥を4体出して飛ばす。

そしてそれを飛ばすと目を閉じた。

「ふむ……」

「なるほど。正門に2人、庭を6人が巡回中ですね。私達にとってはなんでもない相手ですが、油断をしないように行きましょう。」

だったらこれでいくか。

コウモリが描かれたカードデッキを出し、ターニヤが抜いた短刀に翳す。するとそこからベルトのバックルが現れて腰に巻きつく。

「変身！」

カードデッキをバックルに差し込むと仮面ライダーナイトに変身した。

まあ、劇中では龍騎と対立した事もあつたからな。

「ほう、やはりライト殿の鎧は面白いですな。」

「へへー！」

「行きましようか。」

中に入るとそれはそれは広い作りになっていた。

「ふむ、恐らく地下でしょうな。」

「地下？」

「ええ、いくら黙認されてるとはいえ、普通奴隷を所有しているというのは公にはしたくないものです。なら隠せる場所が必要。と、いえば地下ですな。」

セバスの言う通りに必要最低限で見張りを排除していく。

そして地下に辿り着く。

光が差さないため薄暗く、不衛生だ。

綺麗好きな奴が足を踏み入れようもんなら、確実に卒倒するな。

するとターニヤとセバスが印を唱えている。

「なにしてんだ？」

「ああ、これ？暗視の術と言って、これを唱えたら暗いところでも目が見えるようになるの。二人にもかけるね。」

「ああ、頼む。」

「いえ、自分なら見えます。」

こうしてターニヤに術を施してもらって進む。

：スン：スン：

啜り泣き：？この辺りだな。

「いましたな。」

先頭を進むセバスが牢を見つける。

中には何人かずつで奴隷：しかも大体亜人が押し込められており、全員が下を俯いていた。

「誰？」

中に入っている女の子が警戒しながら聞いてくる。

「俺は鎧の勇者。お前らを助けに来た。」

とりあえず、対象は発見した。後はバレずに逃げるだけだ。

「鍵開けはあたし達がやるよ。」

ターニヤ、セバス、ピーターが開けに行つたのを見て、俺は鏡を取り出して壁に立てかける。

普通の奴らが絶対に干渉できない場所、ミラーワールドを使つて逃げるっていう作戦だ。つまりエクレールの時と同じだな。

「全員で何人だ？」

「30人です。」

「30。よし、まずピーターが一人背負つて外に送る。続いてターニヤだ。行くぞ。」

こうして何人かずつに分けてミラーワールドを介して外に連れ出していく。

「ピーター。今から言うことをみんなに伝えてくれ。もし俺が3分以内に戻らなければ鏡を粉々に破壊して逃げる。とな。」

「ライト。」

「約束だ。」

こうして奴隷を一人背負させたピーターを連れて外に連れ出した時、残りは女の子だけにになる。

その子はこの場にいた中で一番衰弱しており、ほとんど返事もない。そうか、この子

が女神の言つてたラフタリアの親友：ラフタリアに会わせないと。その為にも生きて連れ出す必要があるな。

その時だった。

「おやおや、いかな。せつかくのわしの玩具を奪つては。」

声がして振り向くと丸々と太り、髭を生やしてゲスな笑みを浮かべている男が後ろに武器を持った男達を連れて来ていた。

「くっ！」

俺は鏡に飛び込もうとしたが、飛んできた魔法により鏡は粉々に砕かれてしまった。ちくしよう、ここまで粉々だとミラーワールドに入れねえ。

「ふふ、その鏡に何かあるようだが、残念だったな。そして誤算だったな。玩具はもう一つある。：：おい。」

「はい、こちらに。」

見張りの男が領主に犬耳の男の子を渡す。

「ワシの名はイドル。この屋敷の主だ。」

「今日はコイツの気分だったから出してたんだよ。せつかくの楽しみを邪魔しよつて。」
「やろう：：！」

「おっと！その場から一步でも動いてみる。このガキの綺麗な顔にキズがつくぞ？一生

取れないようなキズがな！それが嫌なら武器をこっちに投げろ。」

何かないか？何か：あ！そうだ！

俺はバイザーを開き、気づかれないようにカードを一枚デッキから抜き取る。

「分かった。言う通りにする。」

そして、カードを挿し、バイザーを閉じた瞬間にダークバイザーを投げる。

アドベント！

その音声が流れた瞬間、イドルの持つ剣から仮面ライダーナイトの契約モンスターであるダークウイングが飛び出してイドルや周りの男達に襲いかかる。

「なに？どこから現れた?！」

俺はその隙にリファナを背負ったまま、宙に投げたダークバイザーを掴み、犬耳の男の子を奪い取ると周りの男達を一突きで絶命させていく。

そしてダークウイングの奇襲が止んだ頃には立っているのはイドルだけとなっていた。

「なに？まさかワシの部下が…」

「残念だったな。それと助けを呼んでも無駄だ。もう動けんのお前だけだぜ?」

「クソがつ!!!ぶつ殺してやる!!!」

剣を振り上げ来人に襲いかかってくるイドル。

「あー！ 足元に気を付けろよ？」

「あ？ ぶべらー！」

倒れていた男につまづき、派手に転んでしまった。

俺はゆつくりと近づき、肩に思いっきりダークバイザーの剣先を突き立てる。

「イテエか？ イテエよな？ これがお前が今まで苦しめた奴隷達の痛みだ。そしてこれは
！」

俺は思いっきり右足を振りかぶる。

「ラフタリア達の方だ!!」

顎を思いっきり蹴り上げ、壁に叩きつける。

「ま、待ってくれ…助けて…くれ…」

「お前は同じことを言った奴隷を助けたか？ そういうことだ。」

俺は背負ってた女の子を丁寧に床に降ろす。

「その君。この子を頼む。まだ死んでないから安心しろ。」

そう言い、俺はカードを一枚バイザーに挿して閉じる。

ソードベント！

俺の手にダークランサーが握られたのを確認すると、もう一枚カードを出す。

本来なら生身の人間に使うのはダメかもしれんが、今回ばかりは知らん。

ファイナルベント！

俺は走ろうにも距離がない為、その場でジャンプし、俺と融合したダークウイングにマントと化す。

そして回転しながらマントを体に巻き付け、ドリルのように体当たりをした。

俺の攻撃が当たった領主は俺と壁に挟まれ、更に爆発により、チリ一つ残さずに絶命した。

「終わったぜ？」

俺は奴隷二人に対して微笑みかける。

しかし、その子は俺に任された女の子を抱えながら震えている。

あ！そういうことね。

俺はその子達を無理やり抱え上げて、アイドルの剣を鏡に見立てて、ミラーワールドに入る。

その頃、ピーター達は。

「遅いな、ライト。」

「ええ、確かに。」

「でも、まだ30秒残ってるんだよ？待とうよ！」

しかし、待っている間に残り10秒となる。

「ライト殿には悪いのですが、約束ですからな。」

セバスは自身の刀を抜き、鏡を貫こうと構える。

その瞬間、間一髪来人が飛び出してきた。

「ライト！間に合ったのですね！」

「信じてたよ！ライト！」

「いやはや、安心いたしましたよ。もう少しで鏡を破壊する所でしたから。」

「すまねえ、もう一人奴隷がいてな？とりあえず早い所、ずらかるぞ！」

第14話

俺達の村に奴隷達を連れて帰ってきた事に早速仲間達が驚く。

「え…?どこから…?」

「依頼は奴隷解放だったんだ。それよりも、この子を回復させなくちゃ!」

「そうです!私の一味に医者があります。すぐ連れてきましょう!」

俺はすぐにセバスを連れて洞窟に戻り、元医者を連れてくる。

「副リーダー!本当に俺たちでいいんですかい?」

「ああ、お前達は元医者だろう。」

「これは…かなり衰弱しています。すぐに処置を!」

元医者達はリファナを担いで民家に駆け込んで行つた。

「彼らに任せれば安心でしょう。」

そして、次の日

俺は元盗賊団の一味を全員村に連れてきてからみんなの前に立つ。

「みんな、周りを見てくれ。見たら分かるが、ここには人間、亜人、獣人と様々な種族がいる。現在メルロマルクでは亜人や獣人を差別する傾向がある。だがそんなもの、俺は

許さん。もし、この中にそんな差別心を持つ者がいたら改めろ。もし隣にいる者に対して敬意を持つて接する事ができない者は改めろ。」

「俺たちは故郷も、種族も違う。だが仲間であり、家族だ。俺はここをみんなの帰る場所にしたい。今、ここに！共和国を作る！」

俺の演説に皆が手を叩き、歓声を送る。

「もうすぐお昼だ。昼休憩が終わったら大人達は来てくれ。一人一人、ここに来るまでに何の職業をしていたか、俺とセバスに聞かせてくれ。」

それから昼休憩後、大人達を一人ずつ呼んで話を聞きおわる。

「これで全員ですな。」

「ああ、そうだな。」

「それにしても盗賊団って改めてスペックがすごいな。」

「ええ、私も全ては把握しておりませんが、鍛冶屋に漁師、農家、傭兵、医者ですか。」

「ああ、捕まっていた人の中には教師や牧場主、大工、機織りなどもいたな。」

「ええ、それと話さねばならない事があります。」

「どうした？」

「お嬢様のことです。」

ターニヤのこと？なんだ？

「実はお嬢様のご家族は皆殺しではありません。まだ生死が明らかになっていない者が2名おります。」

「誰だ？」

「お兄様とお姉様です。」

「あいつ、兄弟いたのか。」

「ええ、兄に当たるグリーシャ様、姉に当たるアナスタシア様です。」

「ほう、なんで明らかになってないんだ？屋敷から遺体が出なかったのか？」

「違います。グリーシャ様は神童と言われており、当時8歳の頃、魔物との戦闘中に足を滑らせ、崖から落ちたのです。それから旦那様自らチームを率いて捜索が行われたのですが、発見には至りませんでした。」

アナスタシア様は襲撃された日、遠征任務に出ており、屋敷にはおりませんでした。しかし、消息を絶ちました。」

「私は信じております。お二人はまだ生きています！」

「で？なんでそれを俺に？」

「実は、確かめたい事があつてです。グリーシャ様は旦那様の本当の子ではありません。元々仲良くしていた亜人の子なのです。」

「巫人：」

「ええ、それもラビット種。」

「そしてライト殿のお仲間にはラビット種が一人おられる。」

「おいおい、ピーターの事言ってるのか？」

「そうです。もちろん理由があつてのことです。ピーター殿の顔を拝見いたしました
が、目の下に傷がついておりませんか？」

「ああ、確かにな。」

「あれは昔、訓練中に壊した剣の破片が刺さつた時の傷に似ております。そして何より
顔です。」

「グリーンシャ様の本当の父親、アダム殿に似ています。」

「だが、待ってくれ。兄ならなんで、ターニヤは気がつかないんだ？」

「ええ、実はグリーンシャ様が行方不明になつた時、ターニヤ様は2歳でございました。更
に家柄的に写真も残っておりません。」

「家柄？」

「ええ、この際ですので申しませう。お嬢様の家系は女王様から代々影を仰せつかつ
ておりました。」

「影？」

「はい、影とは国に仕え、文字通り影のように素性を隠し、公にできない仕事を生業とする者の総称でございます。」

なるほど、それなら家に写真がない事も納得できる。

「ですので、お嬢様はグリーンシャ様の顔を絵以外で見た事がないのです。」

「なら本人を呼べばいいだろう。」

使いを向かわせてピーターを呼びに行かせる。

しばらくして顔に泥をつけたピーターが汗を拭きながら部屋に入ってきた。

「お呼びですか？ ライト。」

「ああ、お前さ？ セバスに見覚えはないか？」

俺にそう言われてピーターはセバスの顔をじっくりとみる。

「分かりません。しかし、何か懐かしい感じはします。不思議なのですが。」

「あなたの親は？」

「分かりません。私は8歳の頃に奴隷解放を目指す亜人のレジスタンスに拾われ、そこで戦術を叩き込まれましたので。」

「じゃあ、あの時、どうして洞窟に入った時に仮面をつけたんだ？」

「分かりません。不思議と着けなければといった考えが芽生えたのです。」

「仕方ないですね。かなり荒療治となりますが、構いませんか？」

「ああ。」

「ええ。」

来人とピーターから許可をもらったセバスが口の中でモニヨモニヨと唱え、ピーターの頭に手を置く。

「うっ！う：ウガアアアア！！！」

ピーターが急に苦しみだす。

「あと少しです！！あと少しの辛抱です！」

「ウガアアアア！！！」

「………終わりです。」

ピーターは放心状態に陥ったが、構わずセバスが質問をしだす。

「貴方の目の下の傷は、いつ付いたか覚えておられますか？」

「俺の名は：グリーンシャ：勇敢なるラビット種の戦士、アダムの子：」

「グリーンシャ様：思い出されたのですね：」

「ああ、思い出した。俺はソードウルフの体当たりの衝撃で崖から落ちた。俺がいない間、どうなった！義父上や義母上は！アナスタシアは！義母上のお腹の中の子は！」

「残念ながら旦那様も奥方様も逝去されました。アナスタシア様も行方知れずです。し

かし、奥方様のお腹の中にいたターニャ様は生きておられます。」

「そうか：ターニャが俺の妹だったのか：」

「ライト。俺は：ターニャの兄の：グリーシャだったようです：」

「そうみたいだな。記憶が戻って何よりだ。」

「そうだ、ピー：グリーシャ。」

「ライト。ピーターでも構いませんよ？俺の名はピーターでもあるんですから。これからもピーターと呼んでください。」

「じゃあ、ピーター。」

「はい！」

「ターニャには言うのか？」

「いえ、まだいいです。奴隷紋が取れたらにします。」

ピーターは最初こそ戸惑っていたが、自分がグリーシャであることに慣れだしていった。

「聞いてください。女の子が目覚めました。」

「本当か！案内してくれ！」

一つの民家に入るとミコとキール：アイドルに人質にされていた奴の名はキールだった。

「あなたは？」

「俺か？俺はライト。鎧の勇者だ。」

「そっか：盾の勇者様と知り合いつて本当？」

「ああ、本当だ。短かったが奴とは一緒に過ごしてた時もある。」

「すげえんだぜ！リファナ！あのラフタリアが盾の勇者と一緒に旅してんだつて！」

「ラフタリアちゃんが：？いいな〜」

「ライトさん。」

リファナ達と話していると白衣を着た爽やかな男に呼ばれる。一瞬こんな奴仲間にしたっけと思ったが、左頬に斬られたような傷が付いており、元盗賊の一味だと分かった。

「お前本当に元盗賊か？」

「そうですよ！」

「それよりリファナちゃんはですね、退院はもう少し掛かりますね。でも、まあ安心してください。安静にして、それからリハビリをすれば元の生活に戻れますよ。」

「そりゃ良かった。頼んだぞ。」

治療院を出ると、今度はナーガに声をかけられた。

「よう！ライト！」

「ナーガ！建築はどうだ？」

「おう！順調だぜ！」

因みにナーガには現場監督を命じてある。

「そうか、こつから30人くらい増えてもいけるか？」

「え？ああ、問題ない。」

「よし、なら新しく奴隷を引き取ってこようか。エクレールは？」

「あそこ。」

指差した方を見ると、奴隷達に混じってエクレールも金槌を振るっていた。

「エクレール！用事があるから付いてきてくれ！」

「ああ、構わないぞ。」

俺はエクレールを連れてトランスチームガンでテント前までワープをする。

「よー！」

「おお！勇者様！よくお越しくできました。」

「引き取りに来たぜ！」

「ええ、どうぞどうぞ。」

「それとだ。よし、エクレール。今から自分の領にいた奴らを選んできてくれ。引き取

れるだけ引き取るから。」

「いいのか?」

「ああ。」

「ありがとう、ライト。」

「それと奴隷商。お前のツテで他の奴隷商に、セーアエツト領に住んでた奴らを探しておいてくれ。あと、貴族にも買われているかも知れないから、そっちも頼む。」

「ええ、いいですよ。それではお支払いの方を。」

「ああ、これで足りるか?」

俺は金貨の袋を渡す。

「おお!こんなに!」

「余ったら、それでセーアエツト領の奴らを集めてくれ。頼んだぞ?」

「これだけあれば容易いです!」

奴隷達全員に奴隷紋を結んでいく。

最低限の命令を設定して。

俺はトランスチームガンで全員を村に転送する。

「()は...?」

「ああ、俺の村だ。ここは人間も亜人も獣人も関係ない。平等だ。」

「信じられねえ、そんな楽園があるなんて・」

「ああ、流石に働けよ？」

「はい！」

そして夜になり、新しく来た30人の歓迎会をする。

みな、立食パーティ形式で飲み食いをして楽しむ。

今日来た30人も戸惑っていたが、同じように奴隷出身の奴らを見て、緊張が解けたように、馴染み出している。

みんなが飲んでいる中、おもむろに武器に手をやり、目を閉じるセバスが目に入った。

「セバス。どうした？」

「囲まれてますな。全部で10人。私と同じ影です。」

「影だと？」

「ええ、間違いありません。みんなを避難させた方がよろしいですな。」

その時、敵が動いた。

明かりが届いていない闇から矢が同時に放たれるが、それをセバスが全て手裏剣で撃ち落とし、指笛を吹く。

それと同時にターニャや宴会をしていた元盗賊の男達が顔を上げる。

「敵襲！子供達や非戦闘員を中に！」

「了解！」

「了解！！！！」

盗賊達はすぐにピンから手を離し、武器を手にして、避難誘導を始める。

影達は気づかれたとばかりに武器を抜いて襲いかかってくる。

「ピーターはエクレールと一緒に避難誘導、あとは迎え撃つぞ！」

ナーガが棍を抜き、一人の頭をかち割り、ミコが爪で斬り裂く。ターニャはセバスと敵を屠っていく。

「お前ら、何が目的だ。俺の命か！」

「……………」

「答えねえか、そりやそうだよな。」

報酬で解放した力、見せてやる！

俺は敵が構える短剣を鏡のようにしてカードデッキを構える。

するとバックルが巻きついたため、カードデッキをセットした。

「変身！」

俺は仮面ライダー王蛇に変身した。

俺はデッキから一枚抜いて、牙召杖ベノバイザーにカードを読み込ませた。
ソードベント！

空から王蛇の契約モンスターのベノスネーカーの尾を模した黄金の硬鞭、ベノサーベルが降ってきて、俺の手に収まる。

「イライラすんだよ…」

俺の発言を受けてか、短剣を振り上げて襲いかかる影。

「はあっ！」

ベノバイザーで受け止めて、ベノサーベルに斬る。怯んだ敵は俺から一度距離を取ろうとする。

だが、許すはずないだろ。

スイングベント！

エビルウィップを振るい、影に巻きつけて引き寄せ、それをサーベルの柄で殴りつける。

「終わりだ。」

ファイナルベント！

どこからともなくベノスネーカーが現れ、俺の後ろに立つ。

俺は宙返りをし、ベノスネーカーの口から発せられた毒液の力で俺はキックを撃つ。

俺の渾身のキックを受けた敵は爆発せずに地面を転がり、終わった頃には気絶していた。

「片付いたか！」

「ああ！」

「ええ！」

「生け捕りにできました！」

どうやらセバスとターニャは生け捕りにできていたようだ。

俺は縛られて転がされている2人のもとに行く。

「おい、答えろよ。何者だ？」

「盾の悪魔に与する貴様は悪魔だ！ 鎧！」

何かしらのペンダントを握り締めながら叫ぶ。

「ほほう、貴様らは三勇教会の影だな。」

「知らん！」

「ふむ、強情ですな。どれ、私におまかせください。」

セバスが手をボキッと鳴らしながら答える。

「まず右の男に布袋を被せなさい。」

「拷問か！ 残念だったな！ 我らは痛みの訓練を経験している！」

痛みのねえ。

「お嬢様、水を持ってきてくださらんか？桶に4杯ほど。」

「はい！」

ターニャは走っていく。

「お、おい！俺たちに何をするつもりだ！」

「なに、痛みに耐性があるのは、勿論知っておりますとも。でしたら、それ以外の方法を試みるだけのこと。」

あ、分かった。確かに殴られてる方がまだいいかもな。

そしてターニャが水を並々入れた桶を持ってきた。

「よし、最後のチャンスです。喋りますかな？」

「しつこいな！喋らねえって言ってるんだろ！老いぼれが！」

そう叫んだ男が、セバスの指示で仰向けに寝かされ、固定された。

「お、おい！どうすんだよ！」

「こうです。」

セバスは布袋の上から水をかけ始めた。

「ガボガボツ!!!」

うわあ：分かってたけど、あれやべえんだよな。俺友達に実験でやってもらったこと

あるけど、500mlペットボトル一本でギブアップしたもの。

そして桶の水が無くなると、被害を受けていない方の男に話しかける。

「では、貴方に問いましょう。喋りますかな?」

「ふん!」

「嘘!」

仲間にそっぽを向かれた事で、布袋を被らされている方が取り乱す。

「もう一回ですな。」

また顔に水をかけ始める。

「ガボガボツ!!!ガボツ!」

「ほら、どうです?喋りますかな?」

「嫌だね。」

「もう俺が喋る!喋るから!」

「そうですか。ですが、嘘以外でお願いしますよ?」

「俺たちは三勇教とメルロマルク国王の直属の影だ!盾の悪魔に与する同じ鎧の悪魔を

殺せて!」

「あのやろう:やっぱりやりやがったか:!」

殺したければ殺しに来いと言ったのは、こっちだがまさか本当にやるとは:

「どうしますかな？ ライト殿。始末しますか？」

「いんや、生かすとけ。大したカードにならねえだろうが、捕虜だ。」

「失礼するでござやる。」

「あ？ ああ、あの時の城の：何の用だ？」

「盾の勇者様を助けるために力を貸して欲しいでござやる。」

「待て、尚文に何かあったのか！」

「今盾の勇者様はメルティ王女誘拐の罪で指名手配中、しかし、それは真つ赤な嘘。本当は国からのメルティ王女様の暗殺を阻止するために一緒に逃げてるだけにすぎないでござやる。」

「メルティが：」

「黒幕は、三勇教にござやる。現在剣と弓の勇者様が向かっているでござやる。」

「分かった！」

次の日

俺は身支度を整え、村の出口に立つ。

「すまねえな、今回はお前らを連れて行けねえで。」

「いいんです。我々はライトの留守を守っていますので。」

「頼んだぜ。」

俺はゲーマドライバーを巻き、ガシヤットを押す。

爆走バイク！

「零速・変身！」

ガシヤット！ガツチャーン！レベルアップ！

爆走！独走！激走！暴走！爆走バイク！

俺は飛び回し蹴りでパネルを蹴り、仮面ライダーレーザーターボに変身した。

「今の回し蹴り、なんか意味あつたんですか？」

村人の一人に言われてしまう。

「そこは気にすんな、アイデンティティの一つだ。」

そう言いながらレーザーLv2のバイク形態を呼び出し、それに跨る。

「それじゃあ！行つてくる！」

来人はハンドルを回し走り出した。

三勇教か。なんかうさくせえと思つてたが、やつぱりか。三、勇教つて名乗つてる時点でおかしいと思つてたよ。最初この世界に呼び出された時、俺は王に不審がられたが尚文は、不審がられてはいなかった。つまり盾はイレギュラーな俺と違つて元から存在する。

そしてそうか。三勇：つまり剣、槍、弓を信仰してるからこそ、それに当てはまらな

い俺と尚文は迫害されるんだ。

ふざけた話だ。

そう思いながらバイクを走らせること、2時間：ようやく鍊と樹の姿を捉えることができた。

俺は減速させながら話しかける。

「よ！お二人さん！」

「来人！」

「来人さん！」

「影から聞きましたか！三勇教が！」

「ああ、知ってる。俺の村も昨日襲われた。返り討ちにしてやったが。」

「返り討ち：流石だな。」

「それよりバイクなんか、この世界にあっただんですね！」

「ねえよ、俺の能力で生み出したんだよ！」

「そうだ、コイツらは何故か比較的俺に対して協力的だ。だったら！」

「なあ、協力しねえか？」

「な!?!」

「貴方とですか？」

「ああ、敵は三勇教。この国に根付く馬鹿でかい宗教団体だ。ならここは協力した方が勝機がある。だろ?」

「その通りだな。」

「異存はありません!」

「なら! 乗れ! その方が速く着く!」

「3人も乗れんのか?」

「3人乗りつて犯罪なんじゃ・」

「つべこべ言うな! この世界にバイクに3人で乗ったら罰せられるなんて法律はねえ!」

「分かった。」

「分かりました!」

「行くぞ!」

ブロロロロロロ!!!

3人乗せたにもかかわらず、遅くならずに走り出すバイク。

だが、予想以上に道が悪路だった事もあり、鍊と樹は吐きそうになる。

「ちよつと・待って・」

鍊と樹は茂みに入って見えなくなるが、音だけはする。

「おーい！まだかー？」

「もう：少し：ヤバっ：」

「やれやれだぜ。」

第15話

俺、鍊、樹はなんとか現場に到着する。

「さて、この辺だろう。」

俺はギリギリチャンバラガシャットを挿し、チャンバラバイクゲーマーに姿を変え
る。

「もう少しで着くだろ。」

「どうしたのですか？」

「いやな？ 聞きたいんだがお前ら遠距離攻撃ってできるか？」

「できるぞ。」

「愚問ですね。」

「よし、なら奇襲といこうじゃないか！」

「なるほど、乗った。」

「いいですね。遠距離武器の真髄を見せてやりますよ！」

俺たちは横一列になり、武器を構える。

俺はガシャコンスパローを鎌にしてギリギリチャンバラガシャットを挿す。

キメワザ！ギリギリクリティカルフィニッシュ！

「はあっ！」

「流星剣！」

「流星弓！」

3人の必殺技が空から教皇に降り注ぐ。

決まったように見えたが、教皇にはバリアが張られており、攻撃を通していなかった。

「おや、神の裁きにより、浄化したはずの2人が生きていたとは。」

「ふん、残念だったな。俺たちは影に助けられた。」

「遺体の有無の確認をしなかった貴方が悪いのですよ！」

「しかし、鎧の勇者の方には、村ということもあって、もっと数を増やして向かわせたのですが、おかしいですね。」

「ああ、あれか。残念だったな。何人かは死んだが、生け捕りにしてるぜ。」

「ふむ、使えないですな。」

「おしゃべりはここまでだ。諦めろ。」

「私が何も準備をせずに貴方がた勇者に牙を剥いたと思いませんか？」

「来人！錬！樹！」

「尚文!」

「間に合ったか。」

「元康!」

これで勇者が5人集まった。

「聞いたぜ? お前からどうやって影から逃れたんだ?」

「ああ、影が助けてくれたんだよ。」

「ええ、あれほど間一髪が似合う状況はなかったですよ。」

「俺のところは元影といたからな。そこに現役の影が知らせに来てくれたよ。」

「元影?!」

「まあ、それはどうでもいい。今は奴に集中だ!」

「5人集まりましたか。ですが、私が負けるのはあり得ません!」

「いや、諦めろよ! もうすぐ討伐隊が来るぞ!」

鍊が言い返す。しかし、それでも教皇の勝ち誇った顔は変わらない。

「何が来ようと私たちの勝利は神により約束されております!」

「ふん! 全員が全員、お前の味方じゃねえよ!」

俺は新たにガシヤットを変える。

シヤカリキスポーツ!

「爆速！」

アガツチャ！シャカリキ！メチャコギ！ホットホット！シャカシャカ・コギコギ・シャカリキスポーツ！

少なくとも俺をこの世界に寄越した女神はお前の味方じゃねえよ！

俺はチャリに乗り、教皇の周りをちよこまかと動き回る。

「邪魔なハエですね！」

「ハエじゃねえよ！」

俺は後輪で体当たりし、結界を少し削る。

「やれ！」

その声に鍊と樹と元康が走り出す。俺もキメワザをうつ準備をする。

「流星剣！」

「流星槍！」

「流星弓！」

「キメワザ！シャカリキ！クリティカルフィニッシュ！」

3人の流星シリーズと車輪が教皇に迫る。が複製品の結界に阻まれてしまう。

三勇者の仲間たちがスキルや魔法を放つが、それも阻まれてしまった。

「その程度ですか？勇者は非力ですね。」

「くらえ！紅蓮劍！」

「イーグルピアシングショット！」

「エアストジャベリン！」

更に三勇者のスキルが発動されるが、それも結界に阻まれてしまう。

ガツシューーン！

だつたら！

俺はガシヤットを抜き、新たなガシヤットを起動する。

ジエツトコンバット！

ガシヤット！ガツチャーン！レベルアップ！

爆走！独走！激走！暴走！爆走！爆走バイク！

アガツチャァー！ぶっ飛び！ジエツト！トウ・ザ・スカイ！フライ！ハイ！スカイ！

ジエツトコンバァーッ！

「させるか！」

俺は空中から機銃を浴びせる。だがそれも雀の涙だ。結界が削れた側から再生していく。

「さあ、皆さん！構わず、裁き、の詠唱にはいつてください。」

教皇の命に教徒達はうなづく、詠唱を始める。

「偽者に与する者達は全て悪なのですよ！」

もはやコイツらがやつてる事はカルト教団が引き起こすテロじゃねえか。勝てば官軍とは、よく聞くが、勇者が全員揃っている状況で、臆することなく、その言葉が吐けるコイツは大したもんだ。

「さて、トドメです！」

どうやらチャージが終わっちまったみてえだ。

「尚文！来入！」

元康が俺を呼ぶ。

「しようがねえ！俺も本気でお前らと協力させてもらおう！」

「……お前とか？」

今までのことがあるため、尚文は露骨に嫌な顔をします。

だよな、コイツとは：俺も嫌な思い出しかねえ。

「仕方ねえだろ、尚文。俺たちは勇者だ。どれだけ憎くとも今は協力するのが得策だ。それでも無理ならこれで最後だって割り切れ！」

「：分かったよ。だがお前はいつかぶちのめす。」

「良い返事だ。」

「え!?どこが!?!」

なんか元康が言ってるが、知らん。尚文が譲歩したんだ。成長ってやつだ。

俺はガシヤットを引き抜き、ガシヤットギアデュアルを挿す。

デュアル！ガシヤット！

what's the next stage! The strongest
fist! what's the next stage!

「マックス大変身！」

ガツチャーン！マザルアップ！

赤い拳強さ！青いパズル連鎖！赤と青の交差！パーフェクトノックアウト！

「ノックアウトファイター、パーフェクトパズル レベル50の二つのゲームが混

ざって一つになった。」

「その名もパーフェクトノックアウト 仮面ライダーパラドクス、レベル99。」

「[[[99!]]]」

皆驚いているようだな、そりゃ99なんて誰も到達してないさ。教皇も。

「レベル99…どこにそんな力が！だが裁きは終わる！やりなさい！」

教皇の声に裁きは放たれる。

だが俺はすぐにエナジーアイテムを操り、鋼鉄化を尚文と自分に5枚、他の奴らに3枚ずつ付与する。

裁きは降り注ぐ。クレーターを作りながら。

そして完全に止んだ頃、俺たちは無傷とまではいかなかったが立っていた。

「な!? 裁きを食らってもまだ!」

「甘いんだよ!」

尚文は憤怒の盾を発動する。

「俺が接近するから誰か俺に敵意を持って攻撃しろ。俺の攻撃は味方を巻き込むからな、全力で離れていてくれよ!」

攻撃。ならやってやる!

「元康! それならお前が適任だ!」

「お、俺?!」

元康は尚文の巻き添えを食らいたくないのか、鍊や樹よりも早くに逃げ出そうとしていた。

「お前は今まで尚文に対して色々やってきただろ! 恨むなら過去のお前を恨め!」

「……分かったよ! やりや良いんだろ!」

それを聞いた俺はエナジーアイテムを操り、俺と元康にマッスル化を2個ずつ付与する。

「尚文! 俺たちの! お前を殺す気で放つ一撃だ! 受け取れ!」

俺はパラブレイガンの斧モード、元康は槍を上段に構え、盾に攻撃を与える。

「サンキュー！」

元康は離脱するが、俺は尚文に並走する。

「な!? 来人! 離れろって言っただろ！」

「大丈夫だ! 俺は: 死なん!」

ウラワザ! パーフエクトノックアウト! クリテイカルボンバー!

俺はその場で跳び上がり、空中で両脚をそろえる。

「はあああああ!!!」

「くらえええええ!!!」

尚文のセルフカースバーニングと俺の必殺技がヒットし、結界を全て破壊することに成功していた。

「お前ら! 今だ!」

「雷鳴剣!」

「イナズマスピアー!」

「サンダーシュート!」

3人の勇者達がスキルを放つ!

「ブリューナク!」

だが負けじと教皇もスキルを放つ。

三勇者と教皇のスキルがぶつかり合う。

「おらああああ！」

「いけえええええ！」

「このおおおお！」

そのスキルに他の勇者の仲間達も自身のスキルや魔法で加勢する。

「……その程度とは残念ですね！」

だが、教皇はまだ余裕がありそうだ。

「馬鹿な……まだ、まだ負けては居ない！」

「そうだ！ 俺達はまだいける」

「ええ、もつと出力を上げましょう！」

三勇者は互いに声を掛け合い、力を更に込める。

その瞬間、少しだけだが、教皇がニヤリと笑ったのをみた。

「マズイ！ 奴はまだ余力を残してる！」

俺が駆け出そうとした瞬間、尚文が駆け出し、三勇者を突き飛ばし、盾を構えた。

そこを特大のエネルギーが通る。

必死に尚文は耐える。

直接食らってない俺が聴覚と頭にビリビリとダメージを受ける。

そしてエネルギーが通り過ぎると、尚文はニヤツと笑いながら耐えきった。

「尚文！」

俺は駆け出し、一瞬崩れそうになった尚文の体をラフタリアとフィー口と共に支える。

「おい！なんであんな無茶を！」

「……へへっ……仕方ねえだろ……あんな奴らでも世界を守るには必要……なんだ……それに……」

俺は……盾の勇者……ゴフツ……」

相当なダメージを負っているのか、尚文は吐血してしまふ。

「死ぬなよ、尚文。」

俺は尚文に二個回復のエンジューアイテムを付与すると、立ち上がる。

「お前ら、尚文を頼む。恩着せがましく言うつもりはないが、お前らを守ったのはお前らが見下した尚文だ。突然この世界に呼び出され、あれだけ冤罪をかけられ、超ハードモードを味わったコイツがお前らを助けたんだ。少しはお前らも……変わることを祈ってるぜ。」

尚文を錬達に預けた俺は教皇の方を向く。

「ふっふっふ！ようやく一人ダウンしましたか。しぶといですね、勇者も。まるでゴキ

ブリだ。」

「……破壊してやる。テメエも、三勇教も、腐ったこの世界もだ！」

「黙れ！神を愚弄する貴様を裁いてやる！」

キーワード【破壊】【世界】を認識しました。

デイケイド激情態から、ネオデイケイド激情態に進化しました。

俺はネオデイケイドライバーを腰に巻く。

「変身」

カメンライド！デイケイド！

俺は仮面ライダーネオデイケイドに変身した。

従来のデイケイドとは異なり、顔は鬼のような形相になり、額のOシグナルも紫色に変わった。

「ほう、その顔。まさに悪魔。やはり裁きの対象！」

「インビジブル！クロックアップ！」

俺は姿を消して、高速移動を始める。

「む！ガハッ！」

「ど、どこから！ガハッ！」

教皇も戸惑っていることだろう、なにせ、いきなり相手の姿が消えたと思っただらどこ

からか攻撃を仕掛けられているのだから。

「見切った！そっち・ガハッ！な！後ろ！？確かに気配はこっちから！」

気配は読んだようだが、甘いな。分身だよ。

俺は自身のアタックライドのイリュージョンとナイトのトリックベントにより計6体で攻撃している。

完全に読めるはずねえだろ。

俺はそろそろ姿をあらわす。

「小癩な！」

教皇は更に攻撃をしてくる。

俺も応戦する。

その頃、尚文は。

「ラフタリア、フィーロ。俺を支えて立ち上がらせてくれ。ラフタリアは俺の手を。」

「はい。」

尚文は鍊に殺された龍を宿した憤怒の盾を鍊に向け、元康とマルティの方に視線を移した。

その瞬間、尚文の中でドクン！ドクン！と何かが目覚めようとしていた。

「くらえ！」

「トドメだ！」

「ファイナルアタックライド！デイデイデイケイド！」

俺は跳び上がり、デイメンションキックを放つ。

「私には神のご加護がある！負けはしない！」

教皇は自力で結界を20枚も張り、防御体制をとる。

対抗するように俺の目の前に20枚のカード型エネルギーが現れる。

「はあああああ！！！！」

ドン！

俺のキックと教皇の結界がぶつかり合う。

「ぐぐぐぐぐ！！！！」

教皇は必死に耐えるが、結界は次々と破壊されていく。

「ウオラアアア！！！！」

最後の一枚を破壊し、大爆発が起きた

更に大きなクレーターができ、煙が晴れると、教皇は仰向けに倒れていた。

「はあ・はあ・」

俺は肩で息をして、座り込んでしまう。

「ふ……ふ……どうやら私の勝ち……の……ようですね……」

教皇は膝を震わせながら立ち上がる。

「……いや、お前の負けだ。」

「何……!」

その瞬間、ラフタリアとフィーロに支えられて立ち上がっていた尚文が叫び出し、全身から血を吹き出し、うめきだす。

「なんですか……ただ味方の勇者が苦しんだだけですか。」

困惑している教皇の足元が凍りつき、教皇の足が固定されてしまう。

「その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は神の生贄たる絶叫！ 我が血肉を糧に生み出されし虎狭みにより激痛に絶命しながら生贄と化せ！」

尚文が詠唱をしだす。

「させるか……!」

教皇はボロボロの複製器でスキルを放とうと構える。

だが、俺はそれをライドブツカーを銃に変え、撃ち抜く。

「ブラッドサクリアイス！」

そして地面が盛り上がり、赤黒いトラバサミが現れ、教皇を挟んだ。

「ウギヤアアアアア!!!」

普通のトラバサミとは違い、噛み合わせる部分が多重構造となつてゐる。一言で表現するのなら地面から生えたサメの口のような物だと思えば良いだろう。

トラバサミは教皇を挟んだまま、ガジガジと開閉を続ける。

「なんのーこれしきー！」

「H a s t a l a v i s t a , b a b y . (地獄で会おうぜ、ベイビーー!)」

俺はライドブツカーを銃に変え、ヘッドショットしてやった。

額に穴が空いた教皇は即死し、トラバサミに挟まれたまま、地面に沈んでいった。

「きよ、教皇様が・悪魔に負けた・」

教徒達は失意で皆膝をつく。

「ええ、あなた達の負けです。」

雄たけびと共に討伐軍が三勇教徒達に突撃し、逮捕していく。

教皇も複製品も無くなった今、俺達の勝利は確実の物となった。

しかし、俺達が討伐軍を見送ると同時に尚文は糸が切れた操り人形のようにペタンと崩れ落ちた。

ラースシールドによって追加された新たな攻撃スキル、ブラットサクリファイス。強力な力だが、その代償はあまりにも大きかった。

第16話

「ナオフミ様！」

「ごしゅじんさま！」

血に濡れて倒れた尚文をラフタリアとフィーロが揺する。

「揺すっちゃダメだ。」

俺は変身解除後にくる：てか、今知った。疲労感と戦いながら仮面ライダーパラドクス パーフエクトノックアウトに変身して、回復を何枚も与え続ける。

その時、こちらに討伐軍の司令官を務めていたであろう女性が走ってきた。

「母上!? 何故ここに！」

メルティが驚愕の声をあげる。

母上? て、ことはコイツが女王か。けっ! 遅いんだよ。

「お前が女王か。遅かったな。色んな意味で。」

「それについては言葉ありません。ですが、今は盾の勇者様が最優先です。」

「皆の者! 盾の勇者様の治療を最優先にしなさい! これは女王命令です!」

それにより治療兵達が尚文を囲み、連れて行った。

ラフタリアとフィーロも着いて行く。その時に（一応ヤバイと思つたら尚文を連れて村へ逃げてこい）と伝えた。

「さて、鎧の勇者様ですね？」

「ああ、そうだが。」

俺は変身を解き、ガシャコンパブレイガンを構えながら答える。

俺の動きを見て、反射的に女王の後ろにいる兵士達が武器に手をかける。

「悪いが、俺はメルティ以外の王族を信用しちやいねえ。それだけの事をこの国はやつた。」

「それは：鎧の勇者様がそうなってしまったのは仕方がない事だと思います。皆、武器を下げなさい。」

「いいでしょう。ではあなたの武器はそのまま話をしませんか？」

「ああ。」

「まず、何故メルティは別なのですか？彼女も王族のはずです。」

「決まってるんだろ。仮にメルティが姉よりも演技が上手かったとしても抵抗されたところで殺すのは容易いからだ。」

それを聞き、兵士達はもう一度武器に手をかけた。

「おいおい、あんたの部下はかなり血の気が多いな。それに、影もいるな。俺は一人で話

してゐるつてのに、それだけガードを多くするとは。信用されてねえつてことだな。それかコイツらの中に三勇教の教えが根付いてて無意識に俺を威嚇しているつてとこだな。」

「それは…」

「おい！ 鎧の悪魔！」

女王の言葉を遮つて俺を悪魔呼ばわりする声がある。俺は振り向くと教徒の中でも一際大きな男が兵士3人に連れられて連行されているところだった。

「お前勝つたと思つていい氣になつてんじゃねえぞ！」

「何をしているのです！ 早く黙らせなさい！」

女王の言葉に兵士が布を持つてくる。

「おい！ 今から俺はコイツが聞きたがる話をしてやろうと思つてんだよ！ 邪魔すんな！」

御構い無しに口に布を巻こうとする兵士を止めて話を聞く。

「聞かせろ。くだらなかつたら、すぐに連行してやる。」

「いいぜ！ 俺はよ！ ちよつと教皇様が話してるのを聞いちまつた事なんだがな、勇者の中で一番厄介なのは鎧だ。ならば奴の一番大切なものを破壊してしまえばいい。それにちよつどいい場所がある。…つてな！」

「大切な場所：は!?まさか!」

「お!気づいちゃったみてえだな!だが、もう遅い!その攻撃は教皇様とお前ら勇者がぶつかったのと同時刻に始まってんだよ!」

そ：そんな：ピーター：：ナーガ：：ミコ：：エクレール：：ターニャ：：セバス：：リファナ
：みんな：

俺は膝をついてしまう。

「ライト様!すぐにもお戻りください!影よ!ライト様を援護しなさい!」

「は!」

俺は影の5人から一本ずつ手渡された回復薬を一気飲みすると村へ急いで戻った。

「嘘：：だろ：：」

ようやくたどり着いた俺が見たのは地獄だった。

村の至る所から火の手が上がり、真っ赤になっていた。

「う、うう：：」

ふと、うめき声が聞こえ、俺たちは駆けつける。そこには近くの木に磔にされた門番がいた。ご丁寧に両手をナイフで貫いた形で。

「大丈夫か!ニック!」

「その声は：ライトさん：すみません：村が：」

「それはいい！すぐに降ろしてやる！」

俺はナイフを手から抜かないように慎重に木から抜き、ニツクを横たえる。

「この者は私にお任せを！」

「頼んだ！」

「ライト様！指示を！」

「：全員、敵を殲滅せよ。敵は三勇教徒と恐らく何人か影を雇つてると思われる。だが

優先は要救助者の救助だ。いいな！」

「「「は！」」」

「散！」

シュバ！！！！

影は四方向に分かれて跳び上がった。

「たあ！」

誰かが戦つてる！

俺は駆けつけるとエクレールが僧兵5人に囲まれながらも戦っていた。

「へへっ！悪魔に与する愚か者め。」

「裁きを受けなさい。」

「黙れ！罪のない者まで巻き込んで、それがお前らの正義か！」

「正義？あなたは知らないのですか？勝てば官軍なのですよ？」

「それに我々は神のお導きにより、悪魔退治をしているだけに過ぎません。」

「この外道め！」

そう言い、また5対1に戻ってしまふ。

俺はスクラツシユドライバーを巻き、スクラツシユゼリーを入れる。

ロボツトゼリー！

「変身。」

潰れる！ 流れる！ 溢れ出る！

ロボツトイングリス！

ブラア！

「心火を燃やしてぶっ潰す！」

「オラツ！」

エクレールに斬りかかろうとしていた僧兵の首を飛び回し蹴りでへし折る。

「なら、今コイツが死んだのもお前らが言う神のお導きってやつだな？」

「ライト！」

「よう、待たせたな。」

「鎧の悪魔！ここにいますということは…」

「ああ、教皇とかいうテロリストは排除してやったぜ。それよか悪魔に負ける神官ってどうなんだ？やっぱ信仰心足りねえんじやねえか。」

「黙れ！聖なる炎に浄化されろ！」

僧兵たちは槍や剣を握りしめて襲いかかる。

振り下ろされた剣の腹を殴り、軌道を逸らし、ビームモードに変えたツインブレイカーで死角から来ていた僧兵を射殺する。

そして突いてきた槍の柄を掴み、止める。それで足止めできたと思ったのか、剣を持った僧兵がジャンプ斬りを放つ。

俺は掴んでいた槍を引っ張り、そいつを貫かせる。

「な!？」

俺はすぐにアタックモードに切り替え、顎の下から貫く。

「カハっ！」

すぐ後ろから僧兵が斬りかかってくるが、急に動きを止める。

そいつが倒れると、剣を振り抜いたエクレールが立っていた。

「ライト！よく戻ってきてくれた！そしてすまない。」

「謝んな。俺だつて油断してた。」

「それよりみんなは！」

「とりあえずみんなはセバスさん主導で避難誘導組、救助・鎮圧組に分かれて行動している。私は鎮圧と救助だ！」

「は！話してる場合ではない！行かなくては！」

「どこに！」

「治療院だ！あそこには、まだリファナとポールが！」

「2人か！急ぐぞ！」

俺たちは道中向かってくる僧兵を倒しながら進む。

治療院のドアを蹴破ると俺を呼ぶ声がした。

「ライトさん……」

「ポール！」

リファナを担当していた爽やか男こと、ポールが壁にもたれかかっていた。

「リファナちゃんなら……奥の部屋です……だが俺は……ゴフツ！」

「リファナは私に任せろ！ライトはポールを頼む。」

そう言うときエクレールは走って行った。

俺は改めてポールを観察する。

無残にも肩と胸と腹と足を鉄パイプ4本に貫かれていた。

「待つてろ！すぐに！」

「ダメ：です：！医者だから分かります：俺はもう助からない！」

「さつきから：呼吸が変：なんです：多分肺をやられ：ました！」

「諦めんな！すぐに助け出してやる！」

「最後のお願いを：2つ：聞いて：ください！」

「一つは：リファアナちゃんを守ってあげてください：彼女は：俺の：最後：の：患者で
す：だから！」

「ああ！分かった！約束する！」

「ありがとうございます：そして：最後！」

それは来人にとつて聞きたくない言葉だった。

「俺を：楽に：してください：どうせ俺は：火に：巻かれて死にます。だから：！」

「……本当にもうそれしかないのか？」

「はい！」

「分かった。お前の事は一生忘れない。」

俺はそう言いながらツインブレイカーをアタックモードに切り替える。

「またな。」グサツ！

首を一突きで刺し、ポールは眠った。

「先に行つててくれ。俺もいずれ追いつく。」

「ライト！」

リファナを抱えたエクレールが走ってくる。

その手には意識がないリファナが横たわっていた。

「まだ彼女は生きてる。　・ライト？」

反応がないライトに困惑するエクレール。

俺は静かに立ち上がり、振り返る。

「!?　ライト…」

エクレールはアタックモードに切り替えたツインブレイカーを見て悟っていた。

「すまない…私が代われば…」

「…やめてくれ。」

「…すまない。」

エクレールは何も言えなかった。ライトは変身しており、表情は読めないが、どんな顔をしているかくらいは分かったからだ。

それからは俺はエクレールとリファナを守りながら、向かってくる敵を殺害し続けた。

そうして広場にたどり着くとみんなが待っていた。

「「ライト！」」

ピーターとミコとターニヤが広場で生け捕りにした僧兵たちを尋問していたところだった。

「申し訳ございません！自分たちが残っていたのに！」

「ごめんなさい：あなたの留守を！」

「ごめん：ダメだった！」

3人は俺に頭を下げる。

「いや、いいんだ。それよりこの子は：？」

猫人の女の子が横たわっていた。

「ああ、燃える家屋から助け出した。だが！」

「ライト：しゃん！」

その子が目を微かに開ける。

「リナ！」

「ごめん：なしゃい：あたち：が：悪い子だった：から：村の：子と：喧嘩しちゃった

から……」

「ちげえよ！お前のせいじゃねえ！」

「にやかないで……これ……」

リナは俺に一輪の花を渡す。花びらが少し焦げていたが、綺麗な花だった。

「これ……ライトしゃんが……無事に……帰ってきたら……渡そうって……みんなと……」

「ありがとう。嬉しいよ。」

「もう眠い……あたち……」

「寝ちゃダメだ！しっかりしろ！」

「………」クタツ

その子は眠るように来人の腕の中で息を引き取った。

「おい！おい！死ぬな！死なないでくれ！頼む……頼むよ……」

俺は涙を流しながら、その子を静かに横たえた。

「貴様ら!!」

俺はピーター達が尋問してる最中の僧兵達をツインブレイカーのビームモードの乱

射で射殺していった。

1人殺せてなくてそいつは痛みからうめき声をあげる。

俺はそいつに馬乗りになり、顔を殴りつけた。

何度も、何度も殴りつけた。

何度も、何度も。

それはピーター達に止められるまで続いた。

「俺は・驕つていた・どこか・この力に・だからだ!!!だから!!みんな死んだ!!!こんな小さな子まで!!!」

「ライトーそれは違うー!」

「黙れ!!!」

「っ……!」

ターニヤが俺を慰めてくれようとするが、俺は一喝する。

「俺は・三勇教が憎い・こんな邪教を信じる奴らも憎い・俺は・鬼になる……」

その時、目の前が赤黒く染まった。

真カースシリーズを解放します。という目の前の文字と共に。

そうか、あの時感じたアレは本物ではなかったのか。

尚文から聞いた・カースシリーズは負の感情により解放される。尚文は死を考える

ほどの負の感情だったらしいが。

俺は・自分の、この力に驕っていた事により、災厄を防げなかった傲慢。

そして、そんな自分への怒り・憤怒。

それにより、俺の右目は赤黒く、左目は青黒くなった。

そして両手に一つずつベルトが握られているのを確認した。

「そうか：わかった。」

その時、散開させていた影達が帰ってきた。

「殲滅完了いたしました。」

「ご苦労。お前ら記録できる物持つてるか？」

「こちらに水晶が：」

「なら今から俺が言うことを記録しろ。」

「まさか：！」

「ああ、そのまさかだ。」

それから2日後、俺の言葉を記録した水晶を持った影達は城にたどり着いた。

そこでは女王による王とマルティが断罪されていた。

「申し上げます。」

「どうしたのですか？」

「こちらの映像を鎧の勇者様より預かって参りました。」

影は女王の許可をもらい、水晶の映像が映し出された。

「なんだ、あの姿は……」

「目の色が……」

「オーラが……どす黒い……」

「来人：マジかよ……」

「鎧の勇者だ。この映像を見て貰えば分かる通り、俺の村は襲われた。犯人は分かっている。三勇教の残党だ。それは女王も知ってるはずだ。」

「俺の大切な物を破壊する事で、俺を戦意喪失させる魂胆だったのだろうが、残念だったな。俺は余計にキレたぞ。そこで俺は声明を出すことにした。」

「俺たちは三勇教と、その教徒を滅ぼすことにした。だが俺は誰が三勇教徒かなんて知らん。だから無差別に攻撃することにした。止めたければ止めたらいい。その時は、三勇教に与する者として攻撃させてもらう。ああ、今やめるって言っても遅いぞ？それは口先だけかもしれないからな。」

「明日、俺達はメルロマルク国の三勇教会を攻撃する。その後に教徒だ。じゃあな。」

玉座の間に沈黙が流れる。召喚された勇者の中で一番強い鎧の勇者が三勇教と、その教徒を滅ぼそうとしている。

女王的には嬉しいことだが、教徒の括りに国民が含まれてしまっている。しかも誰が教徒かを知らない為、無差別殺戮が起こるのは必至。

「ど、どうするんじや・儂が殺されるではないか・」

「わ、私も！まだ死にたくないわ！」

「ここは私と勇者様達だけで話をさせていただけませんか？よろしいですわね？」

女王の睨みにより兵士や大臣、王やマルティ、メルティまで玉座から追い出されてしまった。

「今から私が行う事は他言無用でお願いします。」

そういうとひざまづき、頭を地面につけた。

すなわち、土下座の状態になった。

「「「な!」」」

「お願いいたします。この国には大勢の三勇教徒がおります。教会に属する者達だけならまだしも、信仰している者全員ですと、ほぼ全国民が殺害対象となつてしまいます。もちろん私の夫と娘も。特にナオフミ様には多大な迷惑をかけてしまった事は重々承知しております。皆様のお力をお貸しくださいませ！お願ひいたします！」

「あれは・俺たちも無事じゃ済まないぞ。」

「確かに。死人が出る。」

「あんな状態の来人さんと戦えつて言うんですか！」

「逆にどうして、あそこまで三勇教会を野放しにしていたんだ。」

4人の勇者達が苦言を言う。

「それは、承知しております。実は本来貴方方勇者様は、公平に一国に1人ずつ召喚するという取り決めとなっていました。しかし、三勇教会はそれを独断で強行してしまったのです。私は配下の影を使いながら、戦争が起きないようにと外交を進めておりました。それが不在にしていた理由です。そして本来なら皆様が教皇を倒した事で壊滅状態に追い込めるといふ計算でした。しかし、ライト様の村を襲撃するといふ誤算が生じたのです。」

「全ては…私のミスです。」

「分かった。やってやる。」

「「ナオフミ!?!」」

「俺がやってやる。俺はこの中で一番奴と一緒にいた。だから俺が説得する。ただし、失敗しても恨むなよ?」

「尚文さんだけでは心配です。僕もやります。」

「仕方ないな。俺もやろう。」

「まあ、マルティには死んでほしくないしな。やってみるか。」

こうして4人の勇者は団結することとなった。鎧の勇者を止めるために。

第17話

次の日、俺たちは朝早くから出発し、王都を目指して歩いた。

「お前ら、本当にいいんだな？俺がやろうとしてんのは、はつきり言ってテロやクーデターだ。俺に着いてきたらお前らまで犯罪者扱いだぞ？」

「構いません。」

「ああ、せっかく俺達が建てた建物たちを無残に焼きやがったんだ！許せねえ！」

「ええ。目に物、見せてあげるわよ。」

「私は国に仕える騎士だが、今回ばかりは許さない。叩き潰すしかないわ。」

「あたしも。あたし達を怒らせた事を後悔させるよ！」

皆、異存はないようだ。だが安心しろ。罪を背負うのは俺だけで充分だ。

あれからすぐ消えてしまったが、かろうじてステータスを少しだけが見ることができた。結果、傲慢や憤怒だけではなかった。俺は一気に7つの大罪全てを解放してしまっていたようだ。

そうして歩いていくうちに兵士達が陣を敷いているのを見つけた。

やはりな。一筋縄ではいかないよな。

「ライト。兵士達が陣を敷いてますね。どうしますか?」

「お前らは何もするな。俺だけで充分だ。」

俺はガシヤコンバグヴァイザーIIを腰に巻き、ガシヤットを鳴らした。

仮面ライダークロニクル!

その音声と共にガシヤットが宙を舞う。俺はAボタンを押し、手を動かす。

その手の動きに連動するようにガシヤットはバグヴァイザーIIに挿さる。

ガシヤット!

「変身。」

バグルアアップ!

天を掴めライダー! 刻めクロニクル! 今こそ時は極まれり!

俺は仮面ライダークロノスに姿を変える。だが変身の最中に後ろにゲムデウスが浮

かび、そのまま変身した。

俺は仮面ライダークロノスではなく、ゲムデウスクロノスに変身したようだ。

「うぐっ!」

体にバチバチとオレンジ色の電気が走り、急激な頭痛に襲われる。

「……ふう……ふう……」

カースシリーズ(傲慢):ゲムデウスクロノス

本来ならレベルを上げる事で解放されるが、カースシリーズを発動する事で一時的に変身できる。

デメリット：仮面ライダークロニクルに敵として現れる15体分のバグスターウィルスを一気に吸収するため、本来なら立つ事もままならない程のダメージを受ける。

「ら、ライト？」

「俺は大丈夫だ。先を急ごう。」

俺たちは堂々とまっすぐ兵士たちのもとへ歩いていく。

「来たぞ！鎧の勇者だ！」

みな、一様に武器を構える。だが大半が震えている。そりやそうだ。あの勇者でさえ、勝てるか不安がっているのに一介の兵士が勝てるはずもない。

まあ、生身でゲムデウスクロノスに勝てる方がおかしいが。

「止まってください！鎧の勇者様！」

みると3回目の波の時に共に戦った若き兵士だった。

「もうやめてください！あなたが憎んでいる三勇教会は僕らが終わらせませす！だから！」

「甘ったれた事言っつてんじゃねえぞ！クソガキ！」

来人は一喝する。

「あ？てめえは大切な人を、奪われた事があんのか！もう手遅れな家族を、自分の手で楽にしてやった事はあんのか！まだ年端もいかない子どもを目の前で失った事があんのか！答えろ！」

「……ありません。」

「なら、黙ってる。それとだ。貴様らにチャンスをやろ。解散しろ。ここから逃げ出す奴だけは見逃してやる。10秒待つ。」

来人は部隊を睨みつける。

兵士達はその目に見られている自分が震えてる事を感じていた。

これは後に兵士が証言した事だが、(あの時は自分が見られている訳が無いのに10秒間ずっと睨まれているような錯覚があった。後にも先にもあれほど長く感じた10秒はなかった。)

「時間だ。愚かな諸君。貴様らの終焉の刻だ！」来人は剣を振り上げると、地面に突き刺した。

するとその剣を媒介に14体のバグスターが現れた。

「お前らの相手はコイツらで充分だ。お前ら！1匹残らず叩きのめせ！」

その言葉にバグスター達はうなづく、兵士達に向かって走っていった。

「負けてられるか！者ども！かかれ！」

兵士側も号令で全員が武器を構えて突撃を始めた。

14体のバグスターに対して兵士の数、100。普通なら兵士が勝つと思う。だが相手はバグスターだ。

兵士は次々と蹂躪され、1人また1人と地面に倒れていく。

その時、自分の目の前に、あの若き兵士が立ちふさがった。

「はあ・はあ・」

みると鎧はあちこちボコボコにへこみ、口もとから血を流している。

「ほう、ここまで来たか。」

「ライトさん！今すぐやめてください！さもないと！」

「さもないとどうする？」

チャキ！

兵士は無言で剣を構えた。

「やめておけ。」

「いやです！あなたと刺し違えたとしても止めます！」

「面白い！来い！」

俺は地面に突き刺した剣を抜き、構える。

「うわああ!!!」

兵士は剣を振り上げ、走ってくる。

俺は振り下ろされた剣を剣で受け止め、盾で横っ腹を殴りつける。

「ガハッ！」

兵士は膝をつく。だがまだ剣を離さない。

「はあああああ!!!」

そして兵士は最後の力を振り絞って走ってくる。

「ほう、面白い。なら、それを受け止めて、終わらせてやろう。」

来人は剣と盾を放り投げる。

「くらえ!!!」

剣が当たりそうになった時、来人はニヤリと笑い、バグヴァイザーIIに手を伸ばし、両方のボタンを押した。

ポーズ！

カッチ：！

時は止まり、兵士は動かなくなる。

これがクロノスの特殊能力であるポーズ。いわゆる、時止めだ。

「本気で受け止めると思ったのか？」

キメワザ!

クリティカルクルセイド!

来人の足元に時計が現れ、その針が動くのと同じタイミングで回し蹴りを放った。
終焉の一撃!

リスタート!

ドガン!

爆発に巻き込まれ、若き兵士の鎧は完全に破壊され、前のめりに倒れた。

「行くぞ。」

その頃にはバグスター達は兵士達を全滅させており、俺達はその間を歩いていく。

ガシッ

「待て……」

若き兵士は俺の足を掴む。

それほどまでに忠を尽くすか。

俺はそれを無言で振り払うと歩いて行った。

エクレールは歩きながら、どこか引きつった顔をしていた。

知ってる顔でもいたのだろう。だが逃げるチャンスはやった。兵士にも、エクレールにも。

「待て。」

陰から鍊が現れる。

「ここからは先は行かせはしない。さもなければ！」

「ほう、面白い。さもなければどうした？」

「お前を倒す。」

「倒す…か。俺を殺す気で来ないと死ぬぞ？」

俺は変身解除し、ビルドドライバーを巻き、ハザードトリガーを挿した。

ハザードオン！

俺は真つ黒のボトルを出し、それを挿した。

タンク！タンク！

ガツタガタゴットン！ズツタンズタン！

ガツタガタゴットン！ズツタンズタン！

are you ready？

「変身。」

アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！

ヤベェイ！！

俺は仮面ライダーメタルビルドに変身した。

そして手にはホワイトパネルが。

これを使えてことか。

俺はホワイトパネルを胸に突き刺す。そして無理矢理押し込む。

「ふんっ！ぬう……ぐあっ！ううっ……うああっ!!」

パネルは完全に入り込み、俺と一体化した。

真カースシリーズ（憤怒）：ファントムビルド

デメリット：高濃度のファントムリキッドを大量に摂取する事に衰弱、顔に一時的に火傷を負い、常時炎上ダメージを受ける。また能力を行使した分、ダメージが増加。

「勝てば官軍・勝者こそが正義……これは俺の村を襲った奴らがほざいてたことだ。」

「俺も、この世界に来るまではそう思ってた。だが！違うことが分かった。」

「止めてみる。止められるものならな。」

俺はドリルクラッシュャーを出し、構える。

「ハンドレッドソード！」

鍊が剣を振るうと空中に展開された無数の剣が俺に襲いかかる。

「それがどうした。」

俺は同じ数だけミサイルを発射し、相殺する。

「雷鳴剣！」

鍊が剣身に雷を纏わせ、斬りかかる。

ガキン！

俺はドリルクラッシュャーで受け止め、鍊を前蹴りで吹っ飛ばした。

だが鍊も踏みとどまり、立ち上がる。

「流星剣！」

剣身から星が飛び出し、俺に迫る。だが俺は高速移動で全て避け、アッパーを叩き込んでやった。

鍊は打ち上がり、その隙に俺はトリガーのスイッチを押し、ドライバーのレバーを回した。

ガツタガタゴットン！ズツタンズタン！

ガツタガタゴットン！ズツタンズタン！

ready go!

ハザードファイニッシュ！

俺は大量にミサイルを撃ち出し、タンクのキャタピラを模したエネルギーで空中コンボを決め、まともにくらってしまった鍊は大爆発に巻き込まれた。

鍊はボロボロになった状態にもかかわらず、這ってくる。

俺は変身解除をし、それを無視して、通り過ぎる。が咳き込み、膝をついてしまう。

「お前……！」

「ああ、皆まで言うな。自分の体は自分がよく分かってる。」

「ライト。もうやめた方が……」

「うるせえ。」

次に目の前には元康が現れる。

「そこまでだ。来人。」

「元康か……邪魔をすんな。」

「これはお前の為にも言っている！」

「俺の為……？なら、邪魔をするな。」

「どうしてもやるしかないんだな。」

「ああ、選ばせてやるよ。Aの力かBの力か。」

「……Bだ。」

「そうか、Aなら昔決闘した時にお前を蹂躪してやった姿だったんだがな。Bならこれだ。」

「おい！蝙蝠もどき！」

「ふん！有り難く思え。絶滅タイムだ。ガブリ！」

キバットバットⅡ世が来人の手に嘔み付き、魔皇力を流し込む。

「うぐっ！」

「：変身：！」

俺は闇のキバの鎧に包まれ、仮面ライダーダークキバに変身した。

「有り難く思え。絶滅タイムだ。」

カースシリーズ（性欲）：ダークキバ

デメリット：膨大な量の魔皇力が体を駆け巡り、本来は一回変身するだけで死に至るが、来人の勇者補正と、キバットバットⅡ世に自身のライフエナジーを与えている為、維持できている。

「こりや、結構キツイな。」

「だったら！もうやめろ！」

「うるせえ！ごちやごちや言っつてねえでかかって来い！」

「望み通りにしてやるぜ！エアストジャベリン！」

光で出来た投擲槍が俺に迫る。しかし俺はそれを掴み握り潰した。

「嘘だろ!!？」

「嘘ではない。真実だ。」

「乱れ突き！」

シユバババ！とあの日よりかは成長し、精度が上がった乱れ突きだが、それまでだ。全て手で弾いて、逸らす。

「そんなものか。」

俺はそう眩くと思いつきり元康の顔面に向けて拳を振り抜く。

「グギャー！」

「・俺には時間がねえ。終わりだ。」

俺はキングの紋章を召喚して、元康を拘束し、紋章から発せられる赤い稲妻が元康に襲いかかる。

「ウガアアアアア！！！！」

俺はウエイクアップフェッスルをキバットバットⅡ世の口に挿し、二回笛を吹かせた。

ウエイクアップⅡ！

俺が腰を落とし、腕を顔の前でクロスする事で周りが夜になり、赤い月が上がった。

俺はそのまま空高く飛び上がり、紋章に囚われている元康に向けてキックを放った。

ウエイクアップⅡの技、キングスバーストエンドだ。

着地した俺が紋章を解除した事で元康は力なく倒れる。

俺は変身を解く。

「ガハッ！」 ベチャ

俺は咳き込み、手に何かが触れた事に気付き、手を見る。

血だ。そうか、俺は吐血しているのか。

そりやそうだよな。短時間に莫大な量のバグスターウイルス、ファントムリキッド、魔皇力を摂取したんだ。いくら勇者補正とはいえ、普通なら死んでる。

俺は化け物にでもなったのか？

ドクン！

「うぐっ！」

俺は胸を抑えて膝をつく。

「「「「ライト!!!」」」」

仲間たちが俺に駆け寄る。

「もう・やめてください!・!・!このままでは!」

「もう充分だ!」

「そうよ!このままじゃ死んじやうわよ!」

「後戻りができないのは分かってる!だが!」

「死んじやダメ!」

俺は、ピーターとナーガに肩を借りて立ち上がる。

「俺を連れて行ってくれ。」

そして王都の門を潜ろうとした時、足下に矢が刺さる。

「させませんよ！来人さん！」

「やはりな。お前も俺の敵か。」

「こんな事して何になるって言うんですか！それにもうあなたはボロボロです！」

「黙れ：お前に何が分かる？そんなお前に、いい事教えてやるぜ：？世の中はな：そんな綺麗事だけじゃやってけねえんだよ。」

「でも：：！」

「でもじゃねえ。まだ綺麗事を言うのならウンザリだ。地獄を見せてやる。」

俺はロストドライバーを巻き、ガイアメモリのスイッチを押した。

エターナル！

「変身」

エターナル！

「さあ、地獄を楽しみな。」

親指を下に向けながら言い放った。だがすぐに胸に激痛が走る。

「ぐう：流石に効くな：これだけやればな。」

カースシリーズ（怠惰）：仮面ライダーエターナル

デメリット：一時的に never となる為、長時間使用すると体の崩壊が始まってしまふ。またガイアメモリを使用した分だけ、追加ダメージを受ける。

「すぐに楽にしてあげます！サンダーシユート！」

俺はガイアメモリをエターナルエツジに挿す。

クイーン！マキシマムドライブ！

マキシマムドライブにより、俺の目の前に壁が現れ、矢は弾かれる。

「だったら！イーグルピアシングショット！」

今度はワシを象った矢が飛んでくる。

フアング！マキシマムドライブ！

フアングの力で切れ味が上がったエターナルエツジで簡単に斬り裂く。

「終わりか？俺の事を思ってくれてんなら…通してくれ。」

「嫌です！フラッシュアロー！」

光る矢を放ち、樹が見えなくなる。

「そして！流星弓！」

目が見えていない俺に流星の如く矢が迫る。

ズドドドド
!!!!

矢が何かに刺さる。

「やりました！僕が！僕が！」

樹は来人を食い止めることに成功して喜ぶ。

しかし、土煙の中からエターナルの腕が伸び、樹の首を絞め上げる。

「おいおい、何をやったんだって？」

なんと来人は無傷だったのだ。

「オラー……のまま絞め殺してやろうか！」

しかし、そうせずに来人は樹を放り投げる。

放り投げられた樹は壁に叩きつけられ、踞る。

「トドメを刺してやる。」

来人はドライバーからエターナルメモリを抜き、エターナルエッジのスロットに挿した。

エターナル！マキシマムドライブ！

俺は走りだし、きりもみ回転をしながら跳ぶ。

その頃、樹はようやく立ち上がれるようになったのか、フラフラしながら立ち上がる。

そして弓を構える。がもう遅かった。

眼前に広がっていたのは今まさに自分に振り下ろされていた右足だった。

「エターナル・ブレイク！」

その右足が樹の脳天に炸裂した時、樹を中心に大爆発を起こした。爆煙が晴れると樹は仰向けに倒れていた。

完全に気絶したようだ。

来人はまた歩き出す。

「ゴホッ！ゴホッ！ ガハッ！」

来人は、また吐血をした。しかも今回の吐血はすべての咳に混じっていた。

「もう・やめて・ライト！」

それでも進もうとする来人を見てとうとうターニヤが泣きながら懇願する。

「死んじやうよ！」

「止めるな・ターニヤ・あと一人だ・三人来たんだ・尚文も来ている・筈だ！」

「それさえ終われば・それさえ！」

もはやうわ言のように眩きながら進むが、石につまづき、転んでしまう。

それでもなお、立ち上がり、歩き出す来人を見て仲間たちは何も言えなくなつてしまった。

そんなことなど知らず来人は、もはやダメージの蓄積でボロボロとなり、目も虚ろになりながらも、教会を見据え、進み始めた

第18話

「止まってくれ。来人。」

ようやく教会にたどり着いた時、尚文、ラフタリア、フィーロがそこに立っていた。

「やはりお前も来たか：尚文！」

「何故だ：何故お前まで俺の邪魔をする：？お前なら俺の怒りが分かるはずだろ？」

「ああ、確かに分かる。だが、こんな事しなくても女王は約束してくれた。三勇教会は撤廃させ、これより先、邪教として扱おう！」

「そうか：それがもうちよつと早ければ俺はこうならなかったのにな：！」

「グオアアアアアアアアアア！！！！」

俺が叫ぶと体から更に黒いオーラが立ち上る。

目がオレンジ色に変わりだすのが分かる。

「ら、来人！」

「ライトさん！！！！ お願い！ミコさん！今すぐ辞めさせて！」

「ピーターお兄ちゃんも！！！！」

ラフタリアとフィーロが懇願する。

だが：

「ごめん、ラフタリア。もう私たちでは止められない。」

「残念だがな…」

「そんな…」

ラフタリアは悲しそうな顔をするが、ピーターとミコの手を見た。

彼らは拳をグッと握りしめていた。

彼らも悔しいのだ。来人を止める事が出来ないのが。

「さあ、選べよ。俺に協力するか、屠られるか…」

来人の問いに尚文達は武器を構える。

「だろうな。分かってたさ。」

俺はドライバーを腰に装着し、ボトルを挿す。

コブラ！ライダーシステム！エボリューション！

その音を聞き、俺はレバーを回す。

Are you ready?

「変身。」

コブラ！コブラ！エボルコブラ！

フツハツハツハツハツハ！

「エボル、フェーズー。」

「どっからでも掛かってこいよ。」

カースシリーズ（暴食）：仮面ライダーエボル

デメリット：急激なハザードレベル上昇により、普通なら消滅を迎えるが、勇者補正により大ダメージで済む。

俺はトランスチームガンを取り出し、発砲する。

だがそれは簡単に尚文の盾に阻まれ、尚文に気を取られていたせいか、右からラフタリアの剣、左からフィーロのキックが飛んでくる。

俺はすぐに避け、フィーロの後ろに高速移動し、ラフタリアの方に蹴り飛ばした。

来人ではなく、フィーロを斬りそうになったラフタリアはすぐに剣を止め、隙が生まれてしまう。それを逃すはずがない来人の拳が迫る。

「エアストシールド！」

来人とラフタリアの間に盾が現れた事でラフタリアに拳が届くことはなかった。盾によって防がれるがヒビが入ってしまう。

「流石カースシリーズ・もう少して盾が破壊されるところだった。元から強い来人のパワーが更に上がってやがる！」

来人はファイロを狙ってるのでは……?と感じた尚文はファイロの前に入り盾を構える。

「仕方ない。はあ!」

尚文が黒いオーラに包まれ、そちらも憤怒を使用した事が分かる。

「ほう、俺の暴食とお前の憤怒……どちらが強いかはつきりさせようじゃないか!」

俺はトランスチームガンにコブラエボルボトルを装填して引き金を引く。

銃口からコブラを模したエネルギーが撃ち出され尚文に襲いかかる。

が、それは尚文の盾に吸い込まれる。

「ほう、面白え。だったら、これでどうだ。」

俺はレバーをグルグルと回転させる。

右足にエネルギーを充填し、高速移動で、尚文……ではなく、その後ろにいたファイロ

の前に移動した。

「え……?」

ready go!

エボルティックファイニッシュ!

「間に合え! エアストシールド!」

目の前の盾は無残にも打ち砕かれ、爆発した。

煙が晴れると、フィードロではなく、元康が前のめりに倒れる。

「へ：天使は：守った：ぜ：い！」ガクツ

「はあ：やれやれ。」

俺はコブラエボルボトルを抜き、新しいボトルを入れる。

ドラゴン！エボリューション！

Are you ready!

「変身。」

ドラゴン！ドラゴン！エボルドラゴン！

フツハツハツハツハツハ！

「フェーズ2、完了：：い！」

今度は複眼が青くなった仮面ライダーエボル ドラゴンフォームになる。

「姿が変わった：？」

「姿だけじゃねえぞ？」

俺はフィードロに再度殴りかかる。

「エアストシールド！」

「甘い！」

俺は気にせず、殴りつける。

それにより先程は破壊できなかった盾を破壊し、そしてそれでもなお、止まらぬ勢いでフィーロに攻撃が当たる。

フィーロはかろうじて腕を交差する事で防ぐが、衝撃を逃がしきれず、近くの建物の壁に背中から激突する。

「フィーロ！」

「そんな……エアストシールドでも防げないなんて……フィーロちゃんをよくも！」

ラフタリアが俺に斬り掛かってくるが、それを避け、カウンターでボディに拳を叩き込む。

「グフツッ！」

ラフタリアは腹を殴られたことで、井の中の物が逆流しそうになるが、気合いで堪える。

「ああ。そういうやこの姿には武器があつたな。」

そう言い、俺はエボルドライバーから一本の剣を作り出す。

仮面ライダークローズが使用するビートクローザーという剣だ。

俺はそれを掴み、軽く素振りをし、使いこごちを確かめ構える。

「剣には剣つてやつだ！はあっ！」

ラフタリアと鏢迫り合いになるが、力で押し勝ち、前蹴りを食らわす。

「さて、まずはファイロからだな。」

「う…うう…」

ファイロは逃れようとするが、壁に激突したダメージで動けない。

「くっ…」

ミコが助けに入ろうとするが、エクレールが腕を掴む。

「!？」

「ライトを信じるんだ。」

「ファイロ！今助けるぞ！」

尚文がファイロを助けようと動こうとするが、急に目の前に俺が現れた事で驚き一瞬動きが止まるが、攻撃を繰り返す。

「カースド…」

「た、助けてください！勇者様！」

急に若い男性の声がある。

「な!?!民間人か!？」

尚文は咄嗟に後ろを振り向く。が誰もいない。

「なーんちゃって！」

スペシャルチューン!

ヒッパレー!スマツシユスラツシユ!

「な!?しまった!」

ズバン!

ビートクローザーの一撃が盾にぶち当たり、尚文は吹き飛ばされる。

「はっはっは!民間人がこんなところにいるはずねえだろ?それは俺の声マネだ。」
今のはエボルトが得意とした万丈の声を使っただまし討ちだ。

俺はようやくファイロの前に立つ。

「終わりだ。」

ready go!

エボルトティックフィニツシユ!

俺の右手に青い炎が宿り、ファイロを殴りつけた。

ファイロは衝撃で気を失ってしまう。

「まずは一匹」

「ファイロ!」

「ファイロちゃん!」

「次だ。」

ラビット！エボリューション！

ラビット！ラビット！エボルラビット！

フツハツハツハツハツハ！

「フェーズ3、完了…！」

「来人さん！私はあなたを！」

「どうした？」ガキン！

俺はスチームブレード、そしてベルトからドリルクラッシュャーを取り出し、応戦する。

「ほら！俺を殺したいほど憎いだろ？」

「それは…！」

「なら、こうしてやるよ！」デビルスチーム！

ブレードから出た煙をスマツシユに変貌しない程度に少しだけラフタリアに吸わせる。

「ゴホッ！ゴホッ！なんですか…！今の…！」

「やはり俺が睨んだ通りだ。さて、進めるとしよう。」

「お前は冷酷な奴だな！大切な仲間を一人やられてもなお、奮起できないのか！なら、尚文をやってやるか！」

俺はドリルクラッシュャーをガンモードに変え、尚文を撃つ。

「グアッ！」

「ナオフミ様！」

「許せません！」

「おおう!!ハザードレベル4。0!一気上がるじゃないか!そうだ!それなんだよ!
俺が求めてるのは!それにしても、この世界の奴にもハザードレベルがあるとはな!驚
きだ!」

その後もラフタリアの攻撃を何度も来人は食らい続ける。

「ハザードレベル5。5!あと少しだ!...6。0!今だ!」

俺はラフタリアの中に入り込む。

俺が急になくなり、ラフタリアが剣の構えを解いて静かになる。

「ラ、ラフタリア:??」

「ふふ..」

「!?!」

「フツハツハツハツハ!!乗っ取ってやったぜ!」

ラフタリアが急に高笑いを始める。

しかも先ほどまで来人が出していた声でだ。

「お、お前：まさか：」

「あ？そうさ！俺だ！来人さ！」

「ど、どういう事なんだ：」

「ああ、実験だよ。この姿に変身していた戦士は体に乗っ取った者から新しくエボルポトルを精製していた。それがドラゴンとラビットだ。そこで考えた。ならこの世界の人物に乗っ取ればオリジナルのポトルを新しく精製できるのでないかと！」

「結果は、成功だ！新しくポトルが生まれた！」

「そう言い、俺は新しいポトルを掲げる。」

「ほれ！これがだ。名付けるなら：ラクーンエボルポトルだ！」

俺はラビットと交換してドライバーに挿した。

ラクーン！エボリューション！

ラクーン！ラクーン！エボルラクーン！

フツハツハツハツハツハ！

「フェーズ：：すう：：3. 5でいいだろう。」

「来人!!!」

「いいね、その怒りだ。お前にはネビュラガスを打ち込んでいないが、それでも上がりそうなくらいだ。」

「来人！なぜそこまで悪に堕ちる！」

「決まってるだろ……！俺には時間がない。勇者補正で無茶してきたが流石にガタが来てる。早いところ、お前を倒して……教徒に割く時間は無くなった。なら教会だけでも潰さねえとな。」

俺はベルトからラフタリアが使っていたのに似ている剣を取り出す。

「おらー！」

俺は剣を振るい、尚文に襲いかかる。

盾でガードする尚文。

俺は猛烈に剣を振るい続けるがそれを全てガードする尚文。

「キリがねえな。お……これなんかどうだ！」

俺はラフタリアの幻術のスキルを用いて分身を作り出す。

「俺は4人だ。行け！分身！」

3体が尚文に襲いかかる。

「ニードルシールド！」

「ありがとよ。これでたまったぜ！セルフカース……！」

「た、助けて……ナオフミ様……！」

来人からラフタリアの声がする。

「まさか！ラフタリアか！」

尚文はセルフカースバーニングを解除してしまう。だが、それがいけなかった。

「はあっ！」ズバン！

来人がラフタリアの声を維持したまま斬りつける。

「どうだ？似てるだろ？」

またしても、来人の声マネに尚文は騙される。

「許さねえぞ！来人!!!」

「いいのか？俺を焼き殺したらラフタリアごと死ぬぞ？」

「知ってるぜ？最初お前は消耗品としてラフタリアを購入したが、今では情が湧いてるってことをな！」

「くっ…」

「俺は勇者の中で一番お前と行動したんだ！分かるさ！」

「甘いのはお前だ。来人。ラフタリアなら、こう言うはずだ。、私の事は構わず、攻撃してください、ってな！セルフカースバーニング!!!」

盾から放たれた炎が俺に迫る。

俺はハザードトリガーに似た石を掲げ、炎を受け止める。

炎は石に吸い込まれていき、石が崩れると真っ黒の機械が現れる。

「ありがとよ。これで新たに進化ができる！」

俺は変身を解いてラフタリアを解放する。

「ラフタリア！おい！ラフタリア！」

尚文が駆け寄り、ラフタリアを揺する。

「安心しろ。死んじやいねえよ。じきに目を覚ます。」

「それより良いものが手に入ったぜ！」

俺はエボルトリガーを掲げ、ドライバーに挿した。

オーバー・ザ・エポリューション！

コブラ！ライダーシステム！レボリューション！

俺はドライバーのレバーを回す。

Are you ready?

「変身！」

ブラックホール！ブラックホール！レボリューション！

フハハハハハハ！！

俺の姿が空間に吸い込まれるようにして消え、もう一度現れることで仮面ライダーエ

ボル ブラックホールフォームへと変身が完了した。

「はっはっは！！！！これでどうだ！」

俺は手をかざして教会の上にブラックホールを生み出す。

「見ろ。ブラックホールだ。俺が手を下せばアレは吸引を開始するぞ?」

「エアストシールド! チェンジシールド!」

俺の近くに盾が現れ、その盾がトゲが生えたものになる。

「それで勝てると思ってるのか?」

俺は高速移動でそこから離脱し、尚文に殴りかかる。

「させるか!」

ボゴツ!

来人の拳が尚文の盾にぶち当たる。

盾が来人の拳を焼こうとしている事に来人は気が付き、瞬時に離れる。

「ちっ、気づいたか。」

「おいおい、狡い真似すんなよ。」

「ぐっ・!」

ドツ!

来人は膝をついてしまう。

「来人!」

尚文は近寄ろうとするが、来人は手を前に出して止める。

「安心しろ……これで終わりにしてやる……」

俺は震える足に鞭打って立ち上がるとレバーを回す。

ready go!

ブラックホールフィニッシュ!

俺は右手に力を込めて尚文を殴りつけた。

もちろん尚文も盾で防ぐが、衝撃を抑えきれずに吹き飛ばされた。

「グアッ!!」

尚文は地面を転がり、壁に激突する。

「さて、終わりだ。」

ready go!

ブラックホールフィニッシュ!

俺が生み出したブラックホールが教会を吸い込み始めた。

どんどん吸い込まれていき、とうとう屋根と、三勇教の紋章が吸い込まれた時、突如俺の変身が解ける。

「そうか……限界か。」

パタッ!

俺は体が負荷に耐えきれずに変身が解け、うつ伏せで倒れると気絶した。

尚文はヨロヨロと立ち上がり、来人の容体を確認しに行く。

すると、それを合図に女王率いる衛生兵達が走ってきて、来人を担架のようなものに
乗せ出す。

「いいですね。これは王命です。ライト様を死なせてはなりませんよ！」
こうして鎧の勇者こと伊達来人の三勇教への復讐は終わりを告げた。

第19話

鎧の勇者による三勇教壊滅作戦は被害を最小限に抑えて終結した。

そして現在、鎧の勇者は城の一室にて治療が行われ、意識を失ってから2日経っていた。

そして来人の精神は：

「あのね？確かに君は勇者補正+神の使者つてことだから普通よりかは強いよ？でもあれはやりすぎだよ。私が干渉をして止めてないと死んでたからね？君。」

最初の部屋にて女神に説教されていた。

「仕方なかったんだよ。俺が本気だぞ！つてとこ見せないと、絶対まだ三勇教が廃止されずにのさばってただろ？」

「まあ、そりやそうだけど。まあ、うん。」

女神はため息をつきながら紅茶を啜る。

「あれ？もう使うな！つて言わないの？」

「言っても使うでしょ？人助けのために。」

「分かってんじゃない。」

「だと思つたよ。だから仕方ないね。免疫だけあげとくよ。」
「サンキュー。」

来人はビシツと敬礼をしていた。

「それ帽子被つてないから厳密には違うんだけどね？でもさ？あれから大変だったんだよ。勝手に干渉したから上からは始末書だよ？やんなつちやう。」

「すまない。」

「え？いいよ、別に。それよりそろそろ目覚めたら？」

「ああ、そうだな。」

俺は立ち上がつて椅子の背もたれに背を向けて立つ。

だがいくら待つても扉が現れない。

「なあ、まだか？」

「え？座つてくれないと戻せないんだけど。」

「それ先に言つてよ。」

「ごめんごめん。ささっ！座つて座つて！」

女神に促され、俺は座り直すと、女神は笑いながら言つた。

「まあ、でも君はなるべく原作を変えないように立ち回つてくれてるよ。ありがとう。」

それを最後に俺の意識は遠のいていった。

「う・うう・」

俺は目覚めた。

ここは：治療院か？いや、壁とか見る限り城っぽいな。

「ライト！」

ナーガが俺が目覚めたことに気づいた。

「大丈夫なのか？」

「ああ。どうやら神様はまだ俺を殺したくないようだ。」

「ははっ！それだけ言えたら大丈夫っぽいな。みんなを呼んでくるよ。」

そう言い、ナーガは走って部屋を出ていった。

それからしばらくしてナーガがみんなを連れてきた。

そこには尚文やラフタリア、フィーロもいた。

「目覚めたようだな、来人。」

「尚文か。すまなかつたな。ラフタリアとフィーロもだ。すまなかつた。」

「いや、いいんだ。俺もお前の立場なら同じことをしていたはずだ。」

「ええ、もう怒ってません。」

「うん！フイーロも怒ってないよ？それにあの時もわざとフイーロじゃなくて近くの壁を殴って気絶させたんでしょ？」

フイーロにはバレていたようだな。その通りだ。

「他の勇者達は？」

「アイツらも、大丈夫だ。」

「そうか…だがお前らは国を救った英雄、俺は狂人のテロリストだな。」

「…かもな。」

それから、ようやく波が去った記念のパーティーが行われるようになった。

あと、俺が眠っている間に王とマルティは女王により罰せられたらしい。

それにより王の名はクズ。マルティの名はピッチ、冒険者名の方はアバズレに改名。

王家の称号の剥奪。

マル：いやピッチの方はもつと酷い。奴はそれでもなお、尚文に嘯み付いたため、女王によって奴隷紋を刻まれた。

（嘘をつくこと、そして尚文に攻撃すること。）で罰が発動するようだ。

主人は尚文ということにされた。

そして俺が望んでいた三勇教会の廃止、そして俺の村への攻撃を指揮した教皇の後継

者は逮捕の後に処刑。

これより先、三勇教は邪教と見なされ、信仰するものは逮捕という重罪に処されることとなった。

そして、パーティは今日らしい。もう一度言う。今日だ。

ふざけんなよ。出られねえじゃねえか。

料理とかは会場に出てるものと同じものが俺にも出されるらしいが。

仲間達が俺を不憫に思ったのか、全員残ろうとしたが俺が断つたため、いま部屋には俺一人。

それと特別措置として俺の目の前には水晶が置かれ、リアルタイムでパーティの様子が映し出されていた。

場面変わってパーティ会場。

そこには貴族や騎士、兵士達が立食を楽しんでいた。

もちろん主役の勇者もいる。勇者は4人で固まっていた。貴族や騎士、兵士の中にはまだ盾と鎧の勇者をよく思っていない者達がいるが、それも時間の問題だろう。

なにせ、五勇教が作られるらしい。

「うおっ！これうめえ！超うめえ！」

ナーガとフィーロがむしゃむしゃと己の食欲を爆発させ、食べまくっていた。

「うん！美味しいね！」

「こらこら、フィーロ。口周りが汚れてるぞ。」

ピーターがナプキンでフィーロの口周りを拭く。

「むう…！お兄ちゃん、はい、アーン！」

「ああむ…うん、うまい。」

どうやらピーターはターニャに自分が兄だと言うことを明かしていたらしい。

「エクレール、久しぶりだな。」

「ああ！みんな！」

エクレールは当時の同期生達に声をかけられ、話に花を咲かせている。

「ミコさん！ミコさん！これ美味しいですよ！」

「はいはい、ラフタリア。うん！美味しいわ。」

尚文と来人の仲間達も立食を楽しんでいた。

最初は何故亜人や獣人がここに!?と驚く人もいたが盾と鎧の勇者の仲間とわかると、騒がれなくなった。中には興味本位で話しかける者たちもいた。

だが空気が読めないものもいるようだ。

騎士団長と兵士長が絡んできたのだ。

「おやおや、この辺りは妙に獣臭いですな！」

「おっしやる通り、魔物が混じっておりますな！この神聖な城に！」

いつもならその言葉に他の騎士や兵士たちも乗ってくるが、ほぼと言っているほど乗ってこない。かろうじて腰巾着が同意していたが、当人達は、自分達が和を乱して事に気付いていない。

「こちらもミコが一瞬睨んだだけで、無視する事にした。

だが騎士団長と兵士長は、それが面白くなかったのか、更に絡んできた。

「おい！無視してんじゃねえぞ！バケモンがよ！」

「お？この女かなりべっぴんじゃねえか！特に、このラクーン種！」

「おう、お前はそっちか。俺は、この羽根生やした女の子がいいね。目がそそる！」

二人はラフタリアとフィーロに迫っていくが、すっかり保護者と化してしまったミコとピーターに阻まれる。

「おい！邪魔だ！」

「そうだ！そうだあ！俺たちを・誰だと思ってる！！」

「ただの酔っ払いですか？」

「ピーターの言う通りだ。お前らは帰れ、そして不能になって朽ち果てろ。」

「なんだと!!!」

「貴様ら・悪魔の使徒を殺せ!!!」

騎士団長と兵士長、そして腰巾着の5人が一斉に武器を抜いて、襲いかかる。

「もう我慢ならん! 迎え討て!!!」

ピーターの号令により、尚文、来人の仲間達の連合軍が迎え討つ。

「くらえ! うさぎやろう!」

騎士団長が自らの長剣でピーターに斬りかかるが、それを容易に盾で受け止める。

「な!?!」

まさか受け止められると思っていなかったのか、騎士団長は目を丸くする。

同様にミコに斬りかかった兵士長もだ。

「甘いわ!!!」

ピーターの飛び膝蹴り、ミコのサマーソルトキックが炸裂して意識を刈り取った。

ナーガが槍を持った兵士と対峙する。

「へへっ! 死ねっ! トカゲ!」

男は勇者にでもなったつもりなのか、ナーガを突き刺そうと襲いかかる。

だがナーガはそれを棍で槍を叩き伏せ、次に背中に棍を当て、地面に倒すと背中を突いた。

エクレールは剣の腹で殴りつけ、ターニャは武器を奪って無力化させ、ラフタリアは同じく剣の腹で叩き伏せ、フイーロは飛び蹴りを叩き込む。

見事に酔っ払った騎士団長や兵士長がボコボコにされていく。

「何をしているのです!」

女王が側に顔を隠した影を連れて歩いてくる。

それにより貴族達は邪魔をしないように自然に道が作られていく。

「女王様!この者たちは蛮族です!私たちは何もしていかないのに、いきなり攻撃を仕掛けてきたのです!」

「……嘘ですね。」

「そ、そんな!」

「貴族などの参列者の中に私の影を混ぜ込んでいます。例えば……あなた来なさい。」

「は!」

ベールのようなもので顔を隠した女性がツカツカと歩いてくる。

「あなたが一番近くにいましたね?真相を。」

「はい、この者たちの言うことは真つ赤な嘘にございます。この者たちは、獣臭い、亜人

が、ここにいていいのかなどと口走り、更に盾と鎧の勇者様のお仲間は場を乱すことなかれ。と無視を決め込まれたのに対して腹を立て、挙句にセクハラ。そして抜刀を致しました。」

「…と、私の影は言っていますが、いかがですか?」

「…女王陛下は、私達よりも影を信用なさるのですか?」

「ええ。言いたいことはそれだけですか? 連れて行きなさい。」

それを合図に影達が騎士団長や兵士長、それに加担した者達を連行していった。

「申し訳ございません。ご迷惑をおかけしたようです。」

「いえ、大丈夫です。」

「ありがとうございます。それで…ライト様の容体は? 確か目を覚まされたとか?」

「ええ、そうですよ。今はパーティーに参加できないことで機嫌を悪くしながら、運ばれてくる料理をベッドの上で頬張つてると思いますよ。」

「そうですか。それと今からピーターさんとターニャさんのお二人にお話があります。来ていただけますか?」

「え? はい。分かりました。ターニャ。行くぞ。」

「うん、お兄ちゃん。」

「うん、お兄ちゃん。」

「うん、お兄ちゃん。」

ピーターとターニャが女王に連れられて一室に入る。

そこには女性が一人立っている。

その人物が振り返って驚いた。その女性は女王と顔が瓜二つだったからだ。

「陛下は双子だったのですか？」

「いえ、実は……」

「お姉ちゃん？」

女王が話そうとしたのを遮ってターニヤが女性に詰め寄る。お姉ちゃんと言いながら。

「お姉ちゃん？何を言ってるでおじやるか？私は……」

「今は演じなくても結構ですよ、アナスタシア。」

「アナスタシア：やつぱり……」

「よく分かったわね。ターニヤ。」

アナスタシアと呼ばれた女性の姿が変わり、

「お姉ちゃん！」

ターニヤは嬉し涙を流しながら生き別れていた姉のアナスタシアに抱きつく。

「実は心配だったの。あの日、任務で国を離れていた私に、父と母の死亡の知らせが届いて、あなたとセバスが行方不明だって聞いて：私もね？暗殺されそうになったの。でも女王陛下が助けてくださり、私は陛下の影になったの。」

「それでセバスは元気かしら？」

「うん！元気だよ！」

「ふふ、それは良かったわ。でも私はあなたが生きてる事が一番の驚きよ。グリー
シャ。」

「ああ、アナスタシア。俺もだ。」

「良かったですね。アナスタシア。」

「はい！ありがとうございます！」

第20話

それから、ようやくベットから離れることができた俺は、女王に呼び出されていた。通された部屋は6人掛けになっており、先に4人は座っていた。

そして空いてる席っていうのが：

「……か。」

「嫌ですか?」

「嫌ではないです。」

俺は女王と対面する形で座った。

「それでは、ようやく全員揃ったということ、お話させていただきます。」

「まず、三勇教会についてです。」

女王がそう切り出したことで、全員が真面目な顔になる。

三勇教会。奴らは俺たちを国ごと葬ろうとして暗躍し、更に一時的にとはいえ俺たちを敵対させた最低最悪なカルト教団だった。

「ご存知かと思いますが、ライト様が倒れたあと、私はすぐに国民たちに王命を出しました。此度の鎧の勇者の乱は元々三勇教会が鎧の勇者様が不在の間に村を襲い、壊滅状態

にしたことが発端だと。世界を守る勇者様の拠点を攻撃するのは国に対して宣戦布告をするのと同じことです。そのため三勇教を信仰するものは邪教徒扱いとすると。」

「更に三勇教会は国家転覆まで企てたと触れておきました。まあ、ここまでいえば自ずと国民達は鎧の勇者様が反乱を起こしたのも無理はない。悪いのは全て三勇教だ！と思うということですよ。」

「……策士ですね。」

弓の勇者がポツリと漏らすとハッ！と我に返り、縮こまった。

女王は相変わらずニコニコしてるが。

「まあ、それは置いといて。皆さまカルミラ島をご存知ですか？」

俺と尚文は首を横に振るが、あとの3人はうなづいた。

「近々カルミラ島が活性化するという情報が入りました。ですので勇者様がたには是非参加をお願いしたいと思っております。」

「なんですか、それ？」

俺が女王に聞く。

すぐそばに座る尚文も同じようになづく。

「ナオフミ様とライト様はご存じないようなので説明しますね。活性化というのは10年に1度、その地域で手に入る経験値が増加する現象です。」

とりあえず女王の話を要約すると、その島の魔物達が勢いを増し、それに比例するようになり、もらえる経験値も上がるからガツポガツポです。という事だ。

「そこで、5人にはある事をやって欲しいのです。」

「あることですか？」

「ええ、一度勇者様方のパーティメンバーをシャツフルしてはいかがですか？」

「「「「シャツフル!!!」」」」

シャツフルだと…

「ええ、島にいる期間、勇者様のパーティメンバーがローテーションですれていつてもらいます。初日はレン様でいうと、ライト様のパーティメンバーと行動を共にすることになります。」

つまり、ピーター達がか。アイツらうまくやれっかな。

「それなんか意味あるのか？」

お！錬が食いついた。

「あれ？俺のパーティメンバーじゃ不満か？」

「そういうことじゃない。経験値を大量に獲得できる時に、何故あえて慣れないメンバーと組ませるんだ？いつものメンバーで戦った方が効率がいいだろう。効率が。」

なるほどな。錬のいうことも分かる。確かに、その日に出会ったメンバーで組んでも

グダグダになるだろうってわけだな。

「ちやんと考えがあつてのことです。勇者様方はお手持ちの武器のせいで互いの戦術などをご存知ないと思います。そこで他の勇者様と行動を共にしている仲間と組めば、自分の戦術の幅が広がりますし、なんならそのパーティでしか共有していないことも教えてもらえるかもしれませんよ?」

「それでは、前乗り致しましょう。」

「待つて欲しい。俺と尚文はまだクラスアップしてねえんだ。」

「え?していないのですか?」

「ああ、実は尚文は、王が教会に命令したせいで、クラスアップができなかつたんだ。俺はその理不尽に腹が立ったからあえてしなかつただけですが。」

「・・・それは聞き捨てなりませんね。事実確認をしておきます。ライト様の言葉が本当だった場合・・・まあ、100%真実でしょうけど。何か制裁はありますか?」

「そうだな。尚文はなんかあるか?」

「氷漬けで頼む。」

「天才かよ。異議なし。」

「では、それで行きます。教会の方へ行けば問題なくクラスアップできますので、是非お立ち寄りください。不都合がありましたら私の方までよろしく願います。」

「ああ、それと。明日の朝、出発いたしますので城のほうまでお越しく下さい。それでは。」

話し合いはお開きになったため、俺と尚文はこの前よりグレードが上がった待機室にいる仲間達を連れてすぐに教会へ向かう。

「なあ、もしまだ俺たちを非難する奴がいたらどうする?」

「心配すんな、尚文。もしまだそんな輩がいるんなら俺がもう一回吸い込んでやるよ。」

「ライト。シャレになりません。今度こそテロリスト扱いです。」

「あ! そうだ! 先にやることがあるんだ! すまん! 先に教会へ行つててくれ。」

俺達は尚文と別れて歩いた。

「ライト。どこへ?」

「ああ、俺がお前と初めて会った場所だ。」

こうして奴隷商のテントにたどり着き、中に入っていく。

「おお! これはこれは! ようこそ、いらっしやいました。」

「今日来たのは他でもない。こいつらの奴隷紋を解除したい。」

「「ライト!」」

「へ? 売却ですか?」

「違う違う。ほら、そこ3人も俺を睨まない。ミコ、その目は傷つくから特にやめろ。最

後まで話を聞いてほしい。」

「俺は決めてたんだ。この戦いが終わったらこいつらの奴隷紋を解除して本当の家族になるって。」

「ほう、少し私とは違いますが、やはりあなたは面白い方です。いいでしょう。先払いでお願いします。」

「ああ。」

俺が金を渡すと、奴隷商が部下を連れてきた。

「できましたよ。」

3人が俺のもとに歩いてくる。

「よかつたな、これで俺達は主人と奴隷の関係じゃなくなったぜ。」

「「はい!!」」

俺達が教会に入ると、この前のシスターではなく、別のシスターが出てきて俺たちを迎えた。

「ようこそ、いらつしやいました。鎧の勇者様。今日はどのような御用でしょうか?」
「すごく腰が低いシスターだな。」

「なあ、知らないならいいけど、前ここで受付してたシスターは?」

「え? はい。確かあの方なら辞めて故郷に帰りましたよ。」

「辞めたんだ。」

「はい、逃げるように辞めていきましたよ。なにか：うわごと言いながら。」

「うわごと？」

「はい、（空から黒い穴が現れて全てを吸い込んでいく：破滅だ：世界の終わりだ：）とおかしな話ですよね。」

「はは！そうだな。（ぜってえ、俺のブラックホールだ。）」

「それはどうでもいい話です。どのような御用でしょうか？」

「ああ、俺たちのクラスアップを頼む。」

「クラスアップですね。かしこまりました。女王陛下より、盾と鎧の勇者様への今までの非礼を詫びるということでお布施は先にもらっております。まだ盾の：」

女王さん、やるじゃん。

先に尚文達が出てきた。

ちようど尚文達がクラスアップを終え、出てきたため、今度は俺たちが入る。

「よし、みんな。自分のクラスアップだ。何を伸ばしたいかは各自で決めるように。」

「あ、私もうやってたわ。」

ミコが手を挙げて答える。

「え？お前やってたの？」

「ええ、グラディエーター時代にね。ほら、私って体壊す前はスター選手だったから。」

「そうか、スター選手なのは初耳だな。じゃあ、分からねえ奴はミコに聞いてくれ。」

「こうして俺たちはクラスアップを終え、外に出る。」

「ライト様。」

「うん？ああ、そこか。」

「：そう簡単に潜伏を見抜かれては、自信を無くすでござやる。」

「仕方ないよ。影さん。」

「その通りだ。ライトはやばいからな。」

「そうなのだ。昔みんなで訓練の一環でかくれんぼした時に、俺すぐに全員見つけたもんな。」

「それでどうした？」

「女王陛下が呼んでるでござやる。」

「ああ、行くよ。」

俺達は影に連れられて玉座に連れていかれた。

「ライト様。よくお越しくださいました。」

俺が来たことに気づいた女王が椅子から立ち上がり、こちらに歩いてくる。

あの、部屋の片隅で凍っている氷像がクズに見えるんだが、気のせいかな？

「あれは気にしないでください。今日だけは、ただの氷像です。」

「え、ええ。女王陛下が言うならば。」

「今日お越しいただいたのは他でもありません。村の復興はどうなっていますか？」

「まあ、なんとかやっていますが、いかにせん人員が足りないんですよ。」

「ですよ。そこで国から人員を送らせて頂きたいのですが、どうですか？」

「国から？」

「おいおい、国だって俺が戦ったせいで復興中だろう？どこから人員を確保するつもりだ？

「人員の確保ならお任せください。困いという言葉を知っていますか？」

「困い？」

「ええ、貴方はクズの独裁政治において反対意見が貴族や兵士達から一つも出ないのをおかしいと思いませんか？彼は自分にとって都合がいい人物、イエスマン以外を次々と左遷していったのです。」

「しかし、私が手を回したことで次々と戻ってきてくれます。彼らに鎧の勇者様の手助けを依頼をしました。すると皆、快く引き受けてくださいました。」

「信用できるんですよ？」

「もちろんです。しかし、貴方の疑念を拭いきれないのも分かっています。そこで。」
パチン！

女王が指を鳴らすと、この前までいた大臣とは違う大臣が羊皮紙を持ってくる。

「ええ、この方は先程言っていた不当に左遷されていた内の一人です。それよりもこちらを。」

女王は俺に契約内容の書かれた羊皮紙を見せる。

「どうぞ、お読みください。」

「ああ。」

契約内容を読む。

① 盾と鎧の勇者に被害が及ぶような事態が発生した場合は国は全力で阻止する。

② 国は盾と鎧の勇者に協力し、波に対しての準備を整える。

③ 盾と鎧の勇者に対して様々な優遇を行う。

④ 波で戦う以外で盾と鎧の勇者に代価を要求しない。

最後に、この契約破棄時、責任を負うのは国のみである。

要約するとこんな感じの契約内容が記載されている。

随分と俺や尚文に有利な内容だ。

あぶり出しや、言葉遊び、嘘などが無いのを注意深く何度も確認した。

さすがにやりすぎだとも思うが斜め読みや縦読み、反対読みなども調べたが、特に異常は無い。

「問題はないですね。」

「では血判をお願いします。見ていただければ分かると思いますが、盾の勇者様にも承諾していただいております。」

確かに尚文のものと思われる判が押されている。

俺はナイフで軽く、自分の指を刺し、名前を書いて血を滲ませて羊皮紙に押し付ける。

女王も同じように押し、契約の羊皮紙が魔方陣の上で輝きだした。

そして光が消え去り、女王の腕に既に巻かれている金色の腕輪に更に印が刻まれた。

「違約時には私に罰を与える物です。どうかご理解を。」

「分かった。これで正式に援助を受けられるという事か。」

「はい。」

「では、お願いします。」

「ええ、ライト様の村の1日でも早い復興をお祈りしております。」

そして次の日、俺たちはカルミラ島へ進む船に揺られていた。

良い波だ。まるであれだ。○縄県とか、○南島みたいだ。後者は行ったことないけ

ど。

「おえ……」

「おお……」

「ぐえつ……」

なんでお前ら吐いてんだよ。

「な、なんで尚文と来人は酔ってないんだよ……」

「俺は生まれてこの方、乗り物で酔ったことがない。」

「俺は……元々乗り物酔いはしにくい体質だし、吐き気よりもテンションが優ってるからだ。」

「キャツホー……!!!」

「あ!待って!フイーロちゃん!」

「ターニャ!フイーロ!遠くまで行くのはやめなさい!」

フイーロが水鳥のようにスイスイ泳ぐのをターニャが水走りで追いかけ、更にその後ろをピーターが追いかけている。

あ!奴らの後ろに魚影が!

「おい!お前ら後ろ!」

「えい!」

「アッー」

ターニヤが海から飛び出した大きな鮫みたいな魔物の脳天に的確にかかと落としを食らわせ、脳震盪を起こさせるとフイーロが高く蹴り上げる。

「二人ともナイスです！はあっ！」

ドガッ！

最後にピーターがオーバーヘッドキックで蹴り飛ばすと鮫は甲板に頭から突っ込む。

鮫もタフなのか、まだ動こうとしたため、空中でピーターが投げた剣が眉間に突き刺さり、トドメを刺された。

「我らを捕食しようとはナメられたものですね。では、ライト。血抜きと解体に行ってください。そしてこれをランチなりディナーに出せないか掛け合つてまいります。」

ピーターは鮫を担いで向こうに歩いていった。

「す、すごいですね。」

樹が俺や尚文に言ってくる。

因みにだが、これは2匹目つてやつだ。

1匹目は他の勇者達で素材を分け合つて武器に吸わせていた。

いいなー 俺あんなのできないし。

試しに吸わせてみるか。

俺は余った背びれを胸当てにくっつけてみる。

——新たなライダーを解放します。——

解放　仮面ライダーアビス、仮面ライダーポセイドン、仮面ライダーギルス
いや、できるのかよ！

第21話

(神! どういうことだ! 素材で解放しないんじゃないのか!)

俺は女神に念話を飛ばす。

(普通はできませんよ。たまたまです。)

(ええ:)

(これからできる奴があるかもしれないので、できる奴は来人さんにだけ光ってるように見えますので、それで判断してください。では!)

女神め。

「あれ大丈夫?」

「ああ、船長さん。大丈夫大丈夫。アイツらただの船酔いだから。」

「海がしけってる。嵐が来る。」

「嵐? 活動休止する5人g: 違う。マジで?」

「うん。」

「沈まねえよな?」

「……大丈夫。勇者様達は船室で休んでて。」
「だそうだ。お前ら戻るぞ！」

俺たちは部屋に戻り、やることもない為眠ることにした。

「な、なあ！この船沈まねえよな！」

「安心しろ。ナーガ。沈まねえよ。」

ガタン！

「ヒイ!!」

途中、嵐で縦横無尽に揺れまくり、何回か上下がひっくり返ったような気がしたが、船は壊れることなくカルミラ島に着いた。

カルミラ島は想像よりも大きい火山島だ。

例えるなら：ハワイ：？かな。

ちなみにカルミラ島、というのは愛称でカルミラ諸島というのが正式名称だそうだ。その為、近くに様々な島がある。

メルロマルクから行く船の旅みたいな大荒れの船旅ではなく、諸島内の波は穏やかで、干潮時には歩いて渡れる島も多いらしい。

俺一人なら変身すれば泳いでいけるか？と思えるほどに点々と島がある。

「さて、島に着いたのはいいいけどお前ら流石に弱すぎだつて。船上で魔物が出たらどう

するつもりだったんだよ。」

「…知らねえよ。」

「…うるせえ…」

「……うぷっ…」

「とりあえず宿行こうぜ。女王の紹介を受けた場所だし、それに島の管理をしている貴族への挨拶をしなくちゃ行けなかつたんだろ？」

同じようにケロツとしている尚文の発言で俺たちは歩き出す。

鍊と元康は、武器を器用に杖代わりにして付いてくる。樹は流石に弓を杖にするのは無理だったのか、仲間に肩を借りてやがる。

貴族か。辺境とはいえ、人が頻繁に訪れる土地だから程々に地位のある人物だろうな。

あと貴族にはいい思い出がないが、女王が紹介したんだ。悪いやつではないだろう。「勇者御一行様！お待ちしておりました！」

バスガイドさんのような旗を持ったメルロマルクの軍服を着た初老の男性が迎えに来てくれた。

「ワシの名はハーベンプルグ。爵位は伯爵です。」

「あ、ああ。」

「よろしくお願ひします。」

勇者の中でも無事な俺と尚文が応対する。

「この島にいらしたことですし、せつかくですから勇者様方にはこのカルミラ諸島の始
まりから知っていただく事からはじめましょうか。」

この人、マジで案内員なのかよ。せつかくなら綺麗な女性がよかつたな。

「別に俺達は観光で来たわけじゃないんだが……」

活性化していて経験値が美味しいらしいから来たが：まあ、いつか。聞こう。

苦しくなったら聞き流せばいいし。

「まず古くは伝承の四聖勇者がここで身体を鍛えたというのが始まりでして——」

当たり前だが、俺はいるわけないわな。

広場みたいな島の市場を案内しつつ、伯爵は説明していく。

その途中で俺は変なオブジェを見つけた。

サンタが被っている、いわゆるサンタ帽と呼ばれるやつを被ったペンギンと、ウサギ
と、リスと：恐らく犬がトーマスポールみたいに四匹折り重なっている銅像が飾られて
いる。

ペンギンが釣竿、ウサギがクワ、リスがノコギリ、犬がロープを持って構えている。

どういうことだ？まるで世〇不思〇発見のクイズで出されそうなレベルに意味が分

からないが。

横で尚文も同じように眺めている。

「お？盾と鎧の勇者様はお目が高い。あれはこの島を開拓した伝説の先住民であるペックル、ウサウニー、リスーカ、イヌルトです。」

先住民なのか。つまり亜人なり獣人が開拓したというわけか。

「ちなみに名前の由来は四聖の勇者様が付けたという伝承があります。」

当時の四聖の勇者のセンスよ、何があつたんだ。もうちよつとこう：あつただろ。

あ、伯爵がまだ話を続けている。

「仲良くなつた魔物だつたそうなのですが、勇者様の世界基準で一番近い動物の名前を聞いて自ら名づけたそうです。」

勇者ごめん。魔物側のセンスか。

「じゃあこの島に、あんなのがいるのか？」

「いえ、開拓を終え。新たな地へ旅立つたそうです。その後、姿を見たものはいません。」

……要するに絶滅したんだろ、きつと。

実在も怪しまれるな。そもそも開拓する魔物って……。

「へー……なんか美味しそうだね」

横でフイーロがよだれを垂らしている。

そうか、フィロリアルのように馬車を引くのが至高の生物もいるんだ。開拓なり物作りが好きなやつがいても不思議じゃないのか。

「うん？なんだ、これ。」

尚文が何かに気づく。

俺もそれを見ると石碑に何か文字が刻まれていた。

「ああ、それは四聖勇者が遺した碑文ですね。新たな勇者が現れた時に備えて記すという伝承がありますね。」

「だが、日本語じゃないな。」

なんだ、この奇妙な文字は。

「おい！これ魔法文字じゃねえか。」

尚文が気づいたように言う。

「魔法文字？なにそれ。」

「魔法文字というのは適正があるものが読めば、意味を理解することができます。しかし、適正がない者が読めば理解ができず、無理やり訳してもおかしな文面となる文字のことです。」

「自分は読めますよ。一通り習いましたから。」

俺がピーターから説明を受けている間に尚文が解読を始めていた。

『力の根源たる……盾の勇者が命ずる。伝承を今一度読み解き、彼の者の全てを支えよ』
「ツヴァイト・オーラ……」

尚文が唱えるとおぼんやりとフィードロが透明な魔法の膜に包まれ始めた。
バフカ。なるほど。

「オーラ……伝説の勇者が使用する全能力値上昇魔法の系譜です。」

ピーターの解説が入る。

「すげえ！俺たちも覚えようぜ！」

ピーターの発言を聞いた他の3人が魔法を覚えようと碑文の前に集まる。

だが……

「よ、読めない……」

「尚文さん：魔法文字を解読できる盾はどこで手に入れたんですか？」

「ねえよ!!自力だ！馬鹿野郎！」

尚文が樹達に怒っている横で俺はピーターに聞く。

「あれ、なんて書いてんの？」

「ええと……ちよつと待っててくださいね。」

ピーターはサラサラと紙に文字を書いていく。

「はい、一応書きましたけど……ライトは魔法適正がないじゃないですか。だからそもそも

も読み手によって意味が変わる魔法文字をどう訳せばいいか……」

「ああ、なるほどな。」

「一応、全属性で訳してみました。一応受け取ってください。」

「ありがとな。」

「次に行くか、他に何かがあるんだ？」

「では宿に行くまでのカルミラ諸島での注意事項についてと移動手段を——」

伯爵の話搔い摘んで説明する。

カルミラ島の魔物の生息地は今、活発化していて、魔物の生活サイクルが加速しているそうさ。

つまり鼠算式に魔物が増殖を繰り返している為、冒険者や勇者に討伐してもらわなければ非常に困るという状況だ。

それは良かった。生態系的なものを気にしなくていいんだな。

で俺達はその状況に便乗してLvを上げるのが今回の目的だそうさ。

だから、できれば魔物を見たら全てを倒してくる方がありがたい。

他の冒険者に道を譲るような謙虚な真似はしなくても良いが、他の冒険者が戦っている所に乱入するといらぬ騒ぎが起ころるので控えて欲しいとの事。

……つまり横取りは禁止。どれだけレアモンスターが出てても他を当たれと。

移動手段は島内の場合は小型の小船が常にあり、運んでもらえるらしい。最悪、泳いでも渡れるそうだ。

泳げない事はないが：他の奴が困るな。

女王の用意した宿は今でも最上級クラスの建物だった。

俺が今まで寝泊まりした宿や俺の家よりも遥かに：デケエし、すげえ。あれだ。リゾートホテルってやつだ。行つた事ないけど。

元は城か何かなのだろうか？

とにかく豪華な作りに清潔な雰囲気。壁は大理石のような石材で作られていて、光沢がある。

何かの石像が噴水の役目を果たしていて、どうにも異世界にいるという感覚を薄まさせる。

え？ここ異世界だよな？

「では、今からの予定を詳しく発表するでござやる。」

メルティが歩いてくる。

「メル：いや、違うだろ。なにやってんだ。アナ。」

「：そつちでは呼ばないでほしいでござやる。仕事中は。」

あ、迂闊だったな。

「メルティかと思つた。」

おい！尚文気づいてねえのかよ！

「拙者は盾と鎧の勇者様の専属の影に任命されたでござやる。」

「そうか、だがなんでメルティなんだ。」

尚文が聞く。

「ああ、それは親しみを持って・」

「：いらん。」

「残念でござやる。」

メルティの姿から忍装束っぽい姿に戻る。

「因みに口癖だけで判断しようと思わない事でござやる。いざという時に中身が偽物だった時に死ぬでござやるよ。」

「そうだな。俺たちなら感覚で分かる。なあ、ターニヤ。」

「うん、お兄ちゃん。」

そつか、こいつらは一緒に育つてんだ。そりや分かるわな。それに影としての修行もしてるし。

「それとローテーションが変わつたでござやる。女王陛下からのサプライズというやつでござやる。」

「サブライズで：」

「いらぬよ、そんなサブライズ。」

尚文と来人が文句を言う。

「そんな事言われてもどうしようもないでござる。明日はナオフミ様がモトヤス様の仲間と、ライト様がイツキ様とでござる。」

「へえ、樹のか。なるほど。あそこも俺のことと同じ6人パーティだからな。やりやすいかもしれん。」

「それより、尚文。いくらビッチがいるからつて嫌そうな顔すんなよ。」

「当たり前だろ？アイツは断罪された今でも俺を嫌ってるんだぞ？どうすんだ。後ろから攻撃してきたらー！」

「そういうときは拙者が守るでござる。大丈夫でござる。マルティ如きに遅れは取らないでござる。」

「よく考えてみるよ、尚文。到着してから半日は経ってんだぞ？ たったの2日の間だけだ。つまり時間は短いんだ。すぐ終わるさ。」

「なら：いいんだけどよ。」

「じゃあ、行ってくるから。お前ら元康に気をつけるよ。」

「俺も行ってくる。樹は：もしかしたら自分の正義を押し付けてくるかもしれん。：我慢してくれ。」

こうして俺たちは行動を共にする新たな仲間たちのもとへ向かった。

「こちらがイツキ様の仲間が待つ部屋でござやる。」

「ここがか。」

コンコン

「はい。」

俺が扉を開けると樹の仲間たちが各々くつろいで俺を待っていた。

「ようこそ、いらつしやいました！鎧の勇者さん！」

「ああ、今日から2日間、一緒に行動するライトだ。鎧の勇者様なんて呼ばれ方は、やだな。気軽にライトでいい。」

ええと：メンバーは5人：か？なんか違和感があるんだよな。

俺が部屋を見渡すと目立つ鎧を着た男が腕を組んで俺を見ている。

「ええ、よろしくお願ひします。我ら！イツキ様親衛隊の戦いをライトさんは見ていてください！」

親衛隊！

すげえ言葉が出てきた。

なにこれ？笑っていいやつ？まあ、仲間全員に目と鼻だけ隠れる仮面を渡してる俺が言えた義理じゃないかもしれないけど。

どうにか笑みを噛み殺すでしょう。

「そう、我ら！イツキ様親衛5人——」

「すいません！遅れました！」

俺の後ろの扉が開いて誰かが駆け込んで来た。

振り返るとそこには女の子が一人、道具袋を担いでいた。

「え、あ——もう鎧の勇者様が来てしまっていました？」

年齢は……どれくらいだろう。14歳前後か？ちよつと幼い感じだ。

育ちの良さそうな整った顔付きをしている。元康だったらナンパしているだろうな。

それにしても小柄だ。戦闘に適している様には見えない。どつちかという村娘っぽい。……魔法とかで戦うのか？前衛職ではない事は見りや分かるが。

そうか、これが違和感の正体か。もう一人いたような気がしたんだよな。あれ？パー

ティって6人までだよな？

それより多くなったら必然的に獲得経験値が減つてくと思うんだが。

樹は縛りプレイでもやってんのか？だが奴らははつきり、5人、って言ったよな？

「遅いぞリーシア！ ほら、自己紹介に加われ。」

「は、はい！」

「我ら！イツキ様親衛6人衆！」

なんか、もう帰りたい。

「じゃ、じゃあ、とりあえず出かけるか」

「そうですね。ライトさんに戦いのご教授を頂かねばなりませんからね。」

「あ、ああ……」

必要な道具はさっきの女の子が買出しをしてくれたおかげで問題は無い。

不安は残るがパーティーを組み、出発した。

「リーシア、お前もうちよつと端に寄れ。」

「でも、これ以上寄ったら……」

今俺たちは船に乗ってるわけだが：7人だから狭い。てか鎧やろう！あ、俺も鎧か。お前が場所取ってんだよ。脱げよ。

ドボン！

え、うそ：

「やっぱり！」

俺はすぐに手を差し伸べ、船の上に引っ張りあげた。

「ゴホッ！ゴホッ！」

「コラー！リーシア！早速ライトさんに迷惑をかけるとは何事だ！」

「お前が場所取ってんのが悪いんだろうが！てか、それ脱げよ！そのせいで一人半は確実にスペース取ってんだよ。」

「とりあえず、ほれ。タオルだ。」

俺はリーシアにタオルを渡す。

「ありがとうございます。」

「風邪引くなよ？」

「はい！」

船から降りて、島に到着した。

そのまま狩場の方へとゾロゾロと向かう。

7人ともなると多く感じる。

「じゃあ、とりあえず質問だが、樹は普段どんな戦い方をしているんだ？」

「それよりもライトさん。イツキ様の呼び方をどうにかなりませんか？」

一番態度のデカイ、派手な鎧が俺に進言する。

またコイツか。

「はっ？」

「せめて、さんとか様とかを付けて呼んでください。」

コイツ何言つてんだ？俺がアイツのことをどう呼ぼうがいいだろうが。そもそも勇者には上下関係なんかねえし。

「……一応理由を聞いておこうか。」

「ライトさんはイツキ様と比べたら活躍の面では格下もいいところです。したがってライトさんはイツキ様に対して本来は敬語を使うべきなのです！」

「へえ、そう。じゃあ更に質問だ。お前らの中でイツキは勇者の中で何番目に偉いんだ？」

「「「「一番です!!!」」」」

即答かよ。

「で？お前から基準だと、どの程度の活躍なら樹以上なんだ？」

「そうですね。罪なき者の救済：ですね。」

「……大雑把すぎるな。もう少し細かく頼む。」

「奴隷解放やレジスタンスに加わるなどですかね。」

「ふくん。じゃあ、例えばクーデターを阻止したとかは？」

「イツキ様ほどとは認めませんが、2位くらいには認めましょう。」

「ああ、なら俺と尚文は三勇教のクーデターを阻止したぜ？」

そう言った瞬間、そいつを筆頭にリーシア以外が鼻で笑った。
やべえ、キレそう。

「あなたの方が？冗談はよしてください。それにあなたに至ってはその後、逆にクーデターを起こしてるじゃないですか！」

「ああ、あれは知ってると思うが、三勇教は俺の村を壊滅させやがったからな。弔い合戦つてやつだ。」

「・まあ、イツキ様からはライトさんは強いと聞いてますから、それなりに戦えるんですよね？」

「ああ。」

「では、その強さに免じて2日間だけは呼び捨てを黙認しましょう。それでは行きましょう。」

派手な鎧：派手鎧だな。そいつが他の仲間を率いてズンズン歩いて行った。

だが一人取り残されている。リーシアだ。

「あの：すいませんん：」

「どした？」

「言い方は悪かったです、確かにイツキ様は素晴らしいお方です。」

「そうか？」

「ええ、あの方は奴隷解放やレジスタンスに混ざって悪徳領主や悪政を敷く国王を倒したりしてるんです。それに私だって：」

「そうか。まあ、そこは認めてるよ。」

：：嘘だがな。これはアナスタシアに調べてもらった事だが、奴が取る行動自体は褒められたものだが、その後がマズかった。

奴隷解放なら、あの後、奴は国王：クズだな。クズが、言葉巧みに預かるとか、なんとか言ったのを鵜呑みにしていた。

結果、その奴隷達は、また奴隷に逆戻り。

レジスタンスだって、あの後、逆にクーデター返しが起きて、国はほぼ壊滅。クーデター返しが起きなくても、その後の準備をしなかったせいでもたしても崩壊。

ひどい話だ。

第22話

俺は歩きながら、また問う。

「なあ、いつも樹はどうやって戦ってるんだ？ 合わせられるなら合わせるから。」

「イツキ様は後方にいらっしやいます。我々が攻撃を抑えて、そして我々へのダメージが大きくなると助けてくださいます。」

「だろうな。だって弓だもん。弓持ちが進んで前線に出るのって普通はありえないし。イツキ様は我々よりも遙かにお強いのです。我々が出来ることはイツキ様を守りつつ、サポートをすることに他なりません。」

派手鎧の奴から変わって戦士の男が言う。

それにしても弓か。ゲームやっているときはほとんど選ばなかった気がするな。

「だが、回復とかの補助は？ 誰がやってんの？」

「それは私が！」

「私も！」

「そうか、わかった。じゃあ俺も弓で戦うとするよ。それと俺は前線にも出るから。」

「前線に？ 耐えれんのか？」

派手鎧が俺を挑発するように見る。

：いちいち突つかかってくるな、この野郎。

なんだ？なんか俺に恨みでもあんのか？

もしかしてあれか？俺が鉄の胸当てくらいしかまともな防具をつけていないからか？

甘いやつだ。

「ああ、出来るさ。」

俺が、その挑発に乗らずにサラツと言い返した事に腹を立てたのか、睨みつけてきた。俺はベルトを巻きプログライズキーを取り出して、スイッチを押した。

ポイズン！

「変身。」

プログライズキーをベルトに入れる事で、ベルトからサソリが飛び出してきた。

フォースライズ！

ステイングスコーピオン！

ブレイクダウン！

「カッコイイ！」

ギロツ

「…いや、別に…」

無意識に言葉を発した戦士の男が、派手鎧に睨まれていた。

はあ：なんか嫌なパーティだな。こりや、平和には終わらねえな。

今のところ、俺に突つかかってくるのは派手鎧だけだ。

だが、他の奴らも言つてこないだけで俺に不満を抱えてるだろうな。

俺が考えているのを邪魔するように俺たちの前に魔物が躍り出てきた。

「さあ！行くぞー！」

派手鎧が声をかけ、戦闘が始まった。

奴らが俺に対して何にも指示してこないため、俺は時折アタッシュアローで魔物を射っていく。

時折、前衛の奴らが撃ち漏らした魔物が俺に向かってくる。

少しならわかる。だが明らかに多くねえか？

そしてその理由が分かった。

派手鎧の野郎：ワザと討ち漏らしてやがるな？

そして、俺が思ってた通り、平和的にはいかなかった。

「貴様ら!!!我々が倒す魔物をよくも!!!正義の名のm…」

「待て、お前ら！」

派手鎧に前蹴りをし、因縁をつけられた冒険者連中を逃す。

なんと、コイツらは人が狩ろうとしていた魔物を横取りしようとしたのだ。

それは完全にルール違反だ。最初にこの島に来た時に聞いてなかったのか？

「何故邪魔する！俺たちはあの不屈き者を！」

派手鎧が俺に突つかかかってきたため、俺は地面に向けてアタツシユアローを射る。

「お前らよ？何考えてんだ！さっきのは明らかに他の奴らが先に戦ってただろうが！」

「我々はイツキ様の為にも強くならなければならないという使命がある。なら、我々に

こそ譲るべきだ！」

「甘ったれたこと言っつてんじゃねえぞ！このやろう！」

俺が始めて怒鳴ったことで皆が黙る。

「何が使命だ。あ？島に入った時に聞いてなかったのか？横取りは、なしだと。そんなことも守れねえ奴らが勇者の仲間なんて知れてみる。お前らが信奉する樹がどう思うんだ！」

「正義の名の下に行動する為には少しの違反は仕方ないのです！」

だめだ、コイツら。

しかも真剣な顔で言っつてやがる。

その日はそれで終わり、次の日。

さて、今日でコイツらとはおさらばだ。

俺はゲネシスドライバーを巻き、ロックシードを起動する。

レモンエナジー！

ソーダア：！

レモンエナジーアームズ！ファイトパワー！ファイトパワー！ファイファイファイ
ファイ！ファイファイファイファイファイ！

俺は仮面ライダーデュークに変身して奴らについていった。

昨日注意したのにもかかわらず、また相変わらず無茶苦茶な奴らだ。

人の獲物を盗るわ、わざと俺の方に魔物を送り込むわで無茶苦茶だ！なんなんだ！コイツら！

挙げ句の果てには、序列があるらしく昼食時は1番の派手鎧が骨付き肉と大きな肉の
挟まったサンドイッチ、2番の戦士がサンドイッチと焼き魚、3番、4番とグレードが
下がっている、最下位らしいロシアは果物だった。

しかもランクは樹への貢献度とかだって？なんじゃ、それ。宗教かよ。

あと後ろから見てて気がついたが、コイツら自体はそんなに強くねえ。恐らく、樹が

結局倒してしまう為、コイツらが倒せなくてもいいってわけだ。壁役にさえなれたら。

1日半行ったが、ダメだな。全然レベルが上がりやしない。

挙げ句の果てには俺がうるさいからってリーシアを残して全員帰りやがった。

リーシア。彼女は：正直言おうと戦っている最中に気付いたのだが、どっちつかずの戦い方をしている。

普通、パーティーは一人一人役職が決まってるものだ。

うちで言おうと、ナーガとミコとエクレールが前衛、ピーターとターニャが中衛、俺が色々動き回るって言う戦い方だ。

だがリーシアは剣で敵を突いたかと思うと、離れて魔法を唱えるを繰り返し、誰かが怪我をすると回復魔法を唱える。のだけど、どれも出遅れている。

なんか自分の役割を掴みきれていない感じだ。注意する事は出来るのだが……。

もう全員にボロカスに言われてしまっている為、俺は何も言えなかった。

「なあ、リーシア。」

「ひゃ、ひゃい！」

「緊張しなくていい。それよりお前は どうして樹のパーティーにいるんだ？ 扱いもひどいぞ。」

「それは：私がイツキ様のパーティーに入ったばかりだからです。それにイツキ様は私を

「救ってくださいましたんです。」

リーシアが言うには、彼女は没落貴族の娘で、細々と生活していた所にとりしの領地の悪徳貴族が妨害を働いた。

そして妨害をやめて欲しければ娘を差し出せと要求して有無を言わずに連れ去ったらしい。

そこを樹が助けたと。

そしてその恩に報いる為に家族に見送られて仲間になったと。

「なるほどな、大変だな。」

「はい、でも私はイツキ様の力になりたいのです。」

「そうか、ところでお前はよく前衛にいるんだがどうしてだ？初日から見てきたが、どう見ても回復支援とかの後衛向きだ。」

「それは・私は昔から器用貧乏でドジで、才能がなかったんです。ライトさんが言う通り私は魔法の方が得意なのですが、イツキ様からは近接もできた方がいいと、言われクラスアツプ時に近接の素質をあげたんです。」

バカか、樹は。

魔法が出来るんなら、そつちを伸ばさせてやれよ。

確かに、コイツらの戦い方なら壁になる前衛役が一人でも多い方がいいのは分かる

が、樹の横でバフかけるなりする役がいてもいいだろう。

「まあ、頑張つてな？ 器用貧乏じゃなくて、万能つて言われるようにさ。」

「はいー！」

それから戦っていたが、時間になり、俺たちは船に乗った。

意外なのは、もう帰ったと思っていた派手鎧達と同じ船に乗ってたことだ。

帰ったんじゃないのか。

そして島に着き、ピーター達と合流しようと探すと、すぐ見つけた。

「どうして本気出さねえんだよー！」

あらら、キレてる。

「おいおい、どうしたんだ。お前ら。」

俺がそちらに近づくと、樹が助けを求めてきた。

「ライトさん！ 助けてください！ あなたの仲間達が言いがかりを！」

「言いがかりだと！」

「貴様！ イツキ様になんて口の利き方が！ 亜人のくせに！」

「あ？ 亜人だからなんだよ！ 人間より下だつてののか？ 面白え！ ぶち殺してくれる！」

ナーガが棍を回しながら派手鎧に詰め寄る。

「落ち着け、ナーガ。」

「あなたもやめなさい。この方は簡単に勝てる相手ではありません。」

まあ、見てて分かるが、俺のパーティの誰と戦っても負けるだろ。

「なあ？マジで何があつたんだ？」

未だに興奮しているナーガは落ち着かせてピーター達の言い分を聞いた。

まずピーター達の樹への第一印象は礼儀正しい奴だったそうだ。

そして船の上では樹はピーターと戦力：何が出来て、何が出来ないかなどの確認をしてから、やはり壁を作って樹が後ろから射るといった戦法をとつたらしい。

そこまではまだ良かった。

「あー！魔物ですー！引き寄せますのでお願いしますー！」

そう言うと、放たれた矢はまっすぐ魔物に向かい刺さった。

もちろん魔物はこちらに向かってきた。

だが、ピーター以下、全員は気がついていた。

その魔物は他の冒険者と向かい合っていた魔物だ。

「なあ．．」

「どうしたのですか？ファーストアタックはこちらですよ？」

いや、間違つてはない。まだ、あの冒険者は戦つてなかつたのだから。でも：とピーター達は思いながら戦い始めた。

弱い魔物だったため、苦勞せずに倒してしまつた。

だが、ピーターとミコとエクレールは気がついていた。

樹の矢に威力が乗つていないことを。

自分達が被つてゐるからだと無理やり思うようにしたが、やはり引つかかる。

そこでエクレールが樹に話しかけた。

「イツキ殿。ちよつといいかな？」

「なんでしよう？」

「さつき倒した魔物だが、あれは他の冒険者から掠め取る形になつたと思うのだが？」

「何を言つてゐるんですか？僕達が先に攻撃したから、あれは僕達の魔物です。それより

も次の魔物です！」

皆、船上での会議で樹のレベルは75だと聞いている。

だが、それにしても弱すぎる。

そして、それは確信に変わる出来事があつた。

カルマースクイレルファミリアという魔物が出現した。

黒いリスのような小さな魔物で群れで襲い掛かつてきた。

群での攻撃、しかもすばしっこく戦いづらい。ピーター達は固まらずに散らばって戦っていたが、この魔物は仲間を呼ぶ習性があるらしい。

倒しても倒しても、その場で増援が来てしまう。

しかも、同族だけではなく、ここまで来るとかなり強力な高レベルのマゼンタフロツグとかも連れて来る。

「イツキさん！早く！範囲攻撃を！我々は頑張つて避けます！」

「分かっています！ちよつと待っていてください！アローシャワー！」

樹は弓を天高く引いて矢を射る。

矢は雨のように分かれて降り注ぐ…のだが、カルマースクイレルファミアを倒すには及ばなかった。

樹の攻撃では倒せない。ならば！とナーガとターニヤが合体スキルを使って戦い始める。

「ドラゴニック！ブレイザー！」

「火遁！火龍炎！」

ナーガとターニヤが放つ龍の炎を受け、魔物を燃やしていくが、いかんせん数が多い。火から逃れた魔物がターニヤに迫った。

「マズイ！」

ナーガは身を挺してターニヤを庇おうとした時だった。

「フアルコン・ストライク！」

樹が放った矢が火の鳥に変わり、ナーガに迫る敵を燃やす。

「ファイアアロースコール！」

辺りに火の矢が刺さり魔物は一掃された。

「皆さん！大丈夫ですか！」

樹は安全を確認するように声をかけた。

だが、全員確信に変わっていた。

返事のかわりにナーガが樹の胸ぐらを掴む。

「おい、てめえ。今まで本気じゃなかったら？」

「え？」

「え？じゃないだろ。お前さつきまでリス一匹倒せないほどの威力しかない矢だったのに、いきなり一掃か。説明してもらおうか。」

ナーガに続き、ピーターも睨みつける。

「ちよつ・ちよつと待っててくださいよ。誤解です！」

「誤解？どういう誤解だよ。」

「あの一撃で倒したり、一掃した技はSPとかクールタイムがあつて……」

樹が冷や汗を流しながら反論するが、それをエクレールが止める。

「ならば、何故最初から準備をしない。戦う者の基本だろう。」

「あと、アンタ。ターニヤがピンチになるまで、弓引かなかったでしょ？狼の視力なら余裕で見えるよ。あと、ターニヤがピンチに陥った瞬間、一瞬だけ嬉しそうな顔したよね？」

「なんだと……妹のピンチを喜んだのか！」

「ひっ！」

ピーターは愛する妹のピンチに笑みを浮かべた樹をより一層睨みつける。

「つまりだ。」

怒りを抑えながらピーターがまとめる。

「あなたは手加減をしている。しかも仲間が普通に戦ってる時は、威力のない攻撃しかせず、ピンチに陥った瞬間、ここぞとばかりに威力の高い攻撃をし、仲間のピンチを自分が救ったと酔いしれる……つまりアンタはそういうやつだ。違うか？」

「くっ……」

凶星である。

「……ち、違う！僕は断じて！」

「なら、次の魔物の時には、さっきみたいに強力な攻撃を最初からやってもらいましょうか。そうしていただいた方が戦闘が楽になりますので。」

「だが、SPの消費とクールタイムが…」

「なら、その時はこの中の3、4人があなたを守ります。SPの回復もしますよ。もちろん知識としてSPの回復はできますし、回復速度は早いということも知ってますよ?」

「それと、一応聞いておきます。一度でどれだけのSPを消費して、どれだけのクールタイムが必要ですか?」

「えっと……1度撃つとSPの半分以上が削れて、15分は撃てません。」

その後、実験でカルマースクイレルファミリアと一人で戦わせた。

結果は苦戦したものの倒してしまった。

「どうですか?」

「どうやら嘘だったようですね。」

ピーターは言い切った。

「クールタイムを数えましたが、誤差とは言い訳出来ないほど早いです。」

「よってあなたは信用出来ません。本来ならあなたを捨てて帰還するつもりですが、それをやるとライトに怒られかねないのでやめときます。」

だそうだ。

つまり纏めると…ピーター達も最悪の日だったようだ。

第23話

あれから樹のパーティーとは一悶着あった。

「お前らが悪い！」

「いやーそっちが悪い！」

と、お互いが言い合い、ピーター率いる仲間達VS派手鎧率いるイツキ親衛隊の乱闘に発展してしまった。

「おい！よせ！やめろ！」

「こらーやめなさい！」

俺たちの制止も振り切り、やりあってしまった。

そして騒ぎを聞きつけた島の衛兵達が駆けつけてきてようやく乱闘は収まった。

結果は：ピーター達の圧勝だった。

そういう派手鎧の奴、一番弱そうに見えたターニヤに襲いかかるも延髄斬りからのチヨークスリーパー、そして、ターニヤが襲われた事でぶちギレたピーターにボッコボッコにされてたな。

今日一笑わせてもらいました。ありがとうございますw

そして次の日、

「今日は元康のところか。」

ヤダなあ。『アイツ』がいんじやん。

コンコン

うむ、返事がない。

俺がドアを開けると不機嫌な顔のビッチが他の女子2人と談笑していた。

俺に目もくれずに。

「知ってると思うが2日間、行動を共にする鎧の勇者ことライトだ。よろしく頼む。」

「でねー?」

「ほんとにー?」

無視である。

・今すぐ帰ったらダメかな? 男だったらコイツら殴ってるくらい腹立つんだが。

「おい、聞いてるか? 名前くらい教えてくれ。」

「嫌だ。」

「やー」

「チツ!」

なんとも非協力的だ。ビッチに至っては舌打ちじゃねえか。

「とつとと魔物退治に行くぞ。」

「は？ ゆっくりさせろし。」

「めんどくさい。」

ウゼエ。

「あ、そう。だったら・・」

俺が帰ろうとした時、後ろからガシツと腰を掴まれた。

「ダメでござやる。」

「：国の指示だからな。これを逆らったら流石に元康の立場が悪くなるかもよ？」

そう言われては仕方ないのか、しぶしぶ腰を上げ始めた。

そして彼女らが欲しいものが市場にあるというため、寄る事にしたのだが：

コイツら、真っ先にアクセサリーショップに直行しやがった。

しかも、プレゼントしろだと？

てかよ、高くね？

コイツら、これを買えば加護が：っていう謳い文句に釣られて買おうとしてるが、どう見ても粗悪品なんだよな。

「おい、これ。」

「どうしました？」

「まあ、いい。買うよ。」

「へい、毎度。」

俺は金を手渡そうとした商人の腕を掴み、引き寄せる。

「おい、これ高すぎんだろ。」

「いえいえ、この品質ゆえですよ。」

「：ナメンな。品質隠蔽しやがって。」

「お気づきでしたか」

「お前、尚文の入れ知恵だろ？」

「：ええ。」

「あ、そう。俺は何も言わねえ。だが気をつけろよ。」

「お待ち下さい。貴方はお連れ様みたいな物を見る目を持っている。7割引きに致しまししょう。」

「ほれ。」

俺は3人にアクセサリーを渡した。

「遅い。」

「値切ってたでしょ？」

「やっぱクスだわ。」

礼も言えねえのか、コイツら。

そして船に乗るが、やっぱり俺をハブリやがる。

目的地に着き、マゼンタフログが飛びかかってきた。

俺はそれを躲し、ロックシードを開く。

「変身ー！」

バナナ！

空にジッパーがつき、開くとバナナが落ちてくる。

俺は戦極ドライバーに取り付け、ロックする。

ロック！オン！

Come on！バナナアームズ！ナイト・オブ・スピアー！

俺は仮面ライダーバロンに変身し、バナスピアーでマゼンタフログを貫いた。

「おい、手伝えよ！」

「はいはい。ファイアスラッシュー！」

剣を持った女が降った剣の先から炎の斬撃が飛び、更に来ていたマゼンタフログを

燃やし斬る。

「俺が言わなくても戦うくらいいしてくれよ。な？」

「はーい。」

やる気ねえし。

「てか、何その鎧着る時の音wダサっ！」

「安直すぎるわよねえw」

「黙ってる。それよりもだ。俺は出来る範囲で元康の戦い方に合わせるつもりだ。元康とお前らの普段の戦い方は？」

俺の問いにロッドを持った女が答える。

「私たちはいざという時以外はモトヤス様の応援よ！」

「…応援？」

応援って、あの応援か？ エール送ったりするやつ。

遅くなったが、元康の仲間はビッチと女1と女2だ。

女1は剣を持った気の強そうなやつだ。見た感じ運動神経が良さそうで茶髪のセミロング。

女2はロッドを持ってウルセエやつ。

そしてビッチに至ってはずっと俺を無視してやがる。

そんなに俺が嫌いか？

「じゃあ、お前らは戦わねえのか？」

「乱戦の時は戦うわよ。でもあととは応援だったり、アバズレ様のいう通りに戦うだけよ。」

「だって、モトヤス様が私達に危害が及ばないように守ってくださるんですもの。」

うわっ・俺の仲間だったら怒ってるかもしれない。

「それで元康は何も言わねえのか？」

「言わないわ。逆にいつも言ってるわ。」可愛い君達に血生臭くて汚いLv上げの戦いは似合わない、って。」

まじかよ、元康。一回くたばればいいのに。

「モトヤス様も少しは私達に頼って欲しいと思うわよね。」

「そうね。でも私達の力が無くても強いのがカッコいい所なのよ。」

「だが、そういうわけにはいかないな。元康と俺は違う人間だ。お前らにも戦ってもらうからな？」

「サイツター！」

「あんた、合わせるって言ったじゃない！」

「出来るだけ、だ！」

だがよ。

それから女1と女2は俺の指示通り最低限だが戦つてくれた。だがビッチのやつは魔法を唱えるが中断してんな。

つか、度々、紋様が浮かぶんだが、アレ俺に危害を加えようとしてるってことだよな？

魔物ごと俺を葬り去るつもりか？

しばらく経つた時だった。

『力の根源たる次期女王が命ずる。森羅万象を今一度読み解き、彼の者達に——』

『力の根源たる私が命ずる。理を今一度読み解き——』

甘い！

俺はわざとすつぽ抜けたようにして槍を奴等の足元に投げて突き刺した。

「きゃっ！何すんのよー！」

「お前ら、殺気がダダ漏れた。確かお前の禁則事項は尚文や俺への攻撃だろう？だが、そんなもの如何様にも抜け道がある。例えば、代理で撃たせるとか、範囲攻撃に巻き込むとかだな。」

「証拠があつて言ってるの？」

ほほう、踏ん反りかえつてやがる。

「今認めてくれたら無かつた事にしてやるつもりだったが、仕方ない。おい、影。」

「いいでござる。」

いつのまにかビッチ達の後ろに現れる。

「謝るでござる。」

「嫌よ！私はただ鎧の勇者の手助けを！」

「もう分かったでござる。」

そう言う人と人差し指でステータス魔法を起動する。

すると、それに合わせてビッチの体に紋様が現れる。

「な、なんで!？」

「女王から直々に委託されてるでござる。」

「ギイヤーアアアアアアアア!!!!」

ピッチが痛みに耐えきれず、地面を転がり回る。

それを見て、女1と2が引いてる。

「なあ、影。一度ピッチの禁則事項全部外してくれねえか？」

「いいでござるが、何をするか分かったものじゃないでござる。」

「構わない。それに俺一人で抑えられないほど俺が弱いと思ってるのか？」

「分かったでござる。」

影が禁則事項を外したのを確認する。

「おい、立てよ。お前もさ？俺に対してイライラしてんのは分かるよ。俺を殺したいほど憎いのもわかってる。だから一発だ。一発だけ本気で撃ってこい。受け止めてやる。」

「もちろんビッチだからだな。」

『力の根源たる次期女王が命ずる。森羅万象を今一度読み解き、彼の者を地獄の業火で焼き払え！』

お！早速魔法か。さて、何が来るかな。

「ドライファ・ヘルファイア!!!」

超特大の火の玉が俺に迫ってきた。

ほう、本気で殺す気か。面白い。

俺はカッティングブレードを1回倒す。

スカッシュ！

スパアービクトリー！

バナナのオーラを剣先に纏わせ突き出し、火の玉をかき消す。

「え!?!なんで!?!」

俺は無言で3回カッティングブレードを倒す。

スパークリング!

スパークトリートリ（スパークリング）!

俺は地面にバナナスピアを突き刺し、地面からバナナ型のオーラを突き出した。

ビッチの足元に。

「ギャアアアアア!!!」

オーラが突き刺さってら。オーラだから別に血は出ないけど痛てえだろうなあ。

「ビッチ様! 鎧! あんたズルいわよ! ビッチ様には一発って言ったのに!」

「知らねえよ。一発で俺を仕留められないのが悪いんだろ?」

「そして、罰の執行でござやる。」

いつのまにか禁則事項を元に戻していた影がステータス魔法を発動し、ビッチは二重の苦しみで苦しむ。

「いくらなんでもやりすぎよ!」

「問題ないでござやる。それと、この事は女王に伝え、槍の勇者への罰則に加算するでござやる。」

「もう、やってらんないわ!」

女2がビッチを背負って帰ってしまった。

あらら、帰っちゃった。

「で？お前は帰らねえのか？」

俺は一人残っている女の方を見る。

「帰れるわけないでしょ？どうせ帰ったらモトヤス様に罰が下されるでしょ？」

「全員帰ったらそうするつもりでござる。」

「なら残るわ。それにあの子達に合わせるの大変なんだから波風立てないで欲しいんだけど。」

「こいつ、意外と責任感があるんだな。昨日の派手鎧達と言い、今日のビッチ達と言い、無責任な奴ばかりだと思ってたが。」

「鎧の勇者は好きでも嫌いでもないわ。モトヤス様より強いのは認めるけど。」

「私は確かに戦いなんか嫌いよ。出来れば何もせずに贅沢をしたい。本当なら勇者の間として……とか世界の命運が……とかどうだっていいの。」

「モトヤス様のところに行けば守ってくれるし、贅沢ができる。それだけよ。」

「まあ、いいや。なら行こうぜ。」

俺と女は話しながら歩き出す。

「あと、私の父は武勲で名を馳せた貴族で、母は商売で財を成した商人の娘。今勇者の間を辞めたら確実に家をつがされるか、政略結婚よ。」

「ふーん、大変だねえ。」

「それに盾の勇者が決闘でビッチ様の妨害でモトヤス様に負けた時、あんた。モトヤス様に完勝したでしょ？それも帰らない理由よ。」

「なんだ、お前はビッチの妨害だと思ってるのか。」

「当たり前じゃない。誰だっけ見りゃ分かるわよ。」

一緒に戦って分かったが、女一は魔法も近接も出来る魔法戦士って奴だ。

ビッチ達がいけないからかもしれないが、結構戦ってくれる。

「あなた本当に強いわね。こうやって肩を並べて戦うつても久しぶりだわ。」

女一が襲いかかってきた最後の魔物の肩間に剣を突き立てながら言う。

「てか、あんたは鎧に魔物を吸わせないのね。」

「ああ、吸わせねえな。ほぼレベルアップだな。」

「あと、気になってた事があるんだが？」

「なによ？」

「お前、最初から元康のパーティーにいたか？」

「いないわよ。私はパーティーにいた男と入れ替わるような形で入ったもの。」

「やっぱりな。」

「今いないから言うけど、ビッチ様が気に入らないメンバーはイビリ倒してやめさせたのよっ。」

ひでえ話だ。

それから次の日。

俺と女1は昨日の島に来ていた。

ビッチは俺にやられた傷が治ってないとか言っ
て来なかった。女2は看病とか言っ
てたが絶対サボりだ。

「で？今日はどうすんの？」

「ああ、少し奥までいくつもりだ。」

「ちよつと待つて。変身するから。」

俺はポセイドンドライバーを腰に巻く。

「変！身！」

サメ！クジラ！オオカミウオ！

俺は仮面ライダーポセイドンに変身した。

「お待たせ。」

「今日のは、まあまあね。」

「けつ、言ってる。」

こうして二人で魔物を狩っていく。

俺がオオカミウオを模したディーペストハーブ
ーンで魔物を斬り裂けば、女1：エレ

ナ（今日知った。）が炎の剣で俺に集まる魔物達を斬る。

俺が槍を振るうことで放たれるエネルギー刃で一掃すれば、運良く逃れた魔物達を倒していく。

俺、こいつと昨日初めて話したんだよな？つてくらいスムーズに事が進む。

もし、こいつが元康の所をやめたら誘ってみたらいいな。

「お前も大変だな。」

「何が？」

「いやな？ビッチのご機嫌取りなんてき。正直しんどいだろ？」

「そうね。話合わせないといけないから。私は楽できたら良いんだけど、そろそろそれも危ういかもしれないわ。」

「なんでだ？」

「ビッチ様には借金があるでしょ？それをモトヤス様は何を思ったのか肩代わりする！なんて見栄はっちゃって。お陰でグレードが下がったわ。私がかここでなんとか鎧の勇者の強さの秘密を探って帰らないと最悪解散よ。まあ、その前に私は見切りをつけてやめるけどね。」

「そうか、確かお前の家は…」

「ええ、御察しの通り商売やってるわよ。」

「なあ、もしさう？良ければ俺の村と商売やらねえか？」

「……考えとくわ。」

こうして話をしながら俺達は魔物を狩れるだけ狩って本島に戻ってきた。

そして帰ってくると：またかよ。

今度は元康がピーターとミコに吊るし上げられていた。

物理的に。

全員が怒っており、特にピーターとミコがキレてるって感じた。

「おいおい、何があつたんだよ。」

「ライト。聞いてくれ。こいつはダメだ。」

「そうよ。潰す必要があるわ。」

「落ち着けて。な？」

女一が唾然としているため、とりあえず元康を降ろさせて話を聞いた。

「今日は槍か。」

「私心配よ。私は無いと思うけどターニヤちゃんがね。」

「ああ、私もターニヤが心配だ。」

「おいおい、お前らは、もうちよい自分の容姿を自覚しろ。」

ピーター達が談笑していると、ノックもなしに元康が現れた。

「お待たせ。待ったかい？」

3つ花束を持参で現れ、ミコとエクレールとターニヤに手渡した。

「……」 チャキ！

「ピーター、落ち着け。」

剣を抜こうとしたピーターの手をナーガが止める。

「さて！ 諸君！ 僕の名は元康！ 槍の勇者さ！ さて共に行こうじゃないか！」

そうして市場に移動したものの、あちらこちらでナンパを始める。

ワザとらしく槍を見せつけ、手当たり次第に女性を物色していく。

情報収集でもするのかと思いきや、ただの世間話とかしかしていない。

そのせいで、すっかり日が暮れ、夕日がさし始めた。

そこで、ようやく船に乗り、元康はデツキの一番綺麗に夕日が見える辺りにターニヤを連れ出した。

「夕日が綺麗だな。」

「……そうだね。」

そう言った瞬間、元康がターニヤの手の上に自分の手を重ねた。

「何をしている。」

ピーターが背後から元康の首を掴んで力を入れる。

「痛い痛い痛い!!!」

「その手で大切な妹に触れるな。貴様を逆さ吊りにして、その髪でデツキを掃除してやろうか。」

「ちよつ！ちよつと兄さん！」

「え：兄さん？て、事は：」

「おれはターニヤの兄だ。」

そうしてる間に島に辿り着くが、また元康は船に乗ろうとする。

「何をしている？夜間戦闘じゃないのか？」

エクレールが聞くが、元康の口からは信じられない言葉が飛び出した。

「だって夜は危険さ。特にレディにはね？」

「軟弱者め！」

「帰りたければ、君だけ帰れ。私達は戦う。」

エクレールがそう言うのと、皆エクレールのもとに集まり、奥へ進んでいった。

結局その日はピーター達だけで戦ったという。

次の日は元康も反省したのか、すぐに船に乗り島へ向かった。

だが、ピーター達は驚く。

「さあ！レディ達は僕の後ろに隠れて見てて！男達は戦うぞー！」

なんとミコ、エクレル、ターニヤを戦わせずに応援だけしてると言ったのだ。

更にピーター達が戦つてるところに割り込み、倒すとその度にミコ達に流し目をした
り、いちいち見てくる。

「どうだい？僕の強さは？」

「いい加減にしろ。」

「は？」

とうとうミコがキレた。

実はミコはコロシウムで戦つてた事もあり、自分よりも格下に舐めた態度を取られる
のが嫌いなのである。

因みに格下というのは何も強さだけではない。性格とか、人間性とかのような内に秘
めるものも関係するらしい。

元康に、戦わずに後ろで見ててくれと言われた事と、一人の戦士であり、みんなの妹
であるターニヤに対しての振る舞いに、かなりキテたらしく爆発してしまった。

「貴様は一回死なないと分からねえようだな？ええ！人の戦い方に口を出すつもりはな
かったが、酷すぎるだろ！」

ミコがキレた事で、元康はまさに狼に睨まれる羊のように縮こまってしまった。

ミコが一步近づくと飛び上がるように後ずさった。

ドカッ！

「きやつ！」

しかし、それがダメだった。

後ろを見ずに下がったため、気づかずにターニヤを押し倒してしまったのだ。

「おのれ!!!」

ピーターが一瞬で距離を詰め、元康の顔を掴むと地面に叩きつけた。

その一撃で元康は完全に伸び、そのあとはまた、ピーター達だけで狩りを行い、帰ってきて、ようやく目を覚ました元康を吊るし上げていたという事だ。

「事故だったじゃないか！」

「知るか！ボケエ！本来なら叩つ斬ってる所を気絶で許してやったんだぞ！」

「何をまだ甘い事言ってるのかしら？昨日ラフタリアちゃんから聞いたわよ？貴方の悪業三昧」

「次やったら、再起不能にしてやる。覚悟しておけ。」

第24話

今日は剣か。

もう嫌なんだけど、そろそろ。なんで、そんな悪い意味で一癖も二癖もある奴らと一緒にいなきやいけないんだよ。

「そんな事言わないで欲しいでござやる。それに自分の独断で中止はできないでござやる。」

「しれつと俺の考えを読むんじゃねえよ。たくつ・」

スー・ハー・

よし。

コンコン

「はい。」

「失礼する。」

ドアを開けてみたら今までの奴らがヤバかったからか、普通な4人が座っていた。

「おはようございます、勇者様。」

「え？あ、ああ・・・おはよう。」

アレ？普通？嘘？

「知ってるとは思うけど、俺の名はライト。鎧の勇者だ。2日間、よろしく。」

「二「よろしくお願いします!!」二」

「それにしても、すいませんでした。あの：仲間決めの日：」

「ああ、あれ？いいって！俺の方こそクーデター起こしてすまなかつたな。」

「いいんです。女王陛下のお触れで全てを知りました。逆にあそこまでされて怒らない方がおかしいんです！」

ヤベエ、いい奴すぎる。

チヨロ口いつて思われるかもしれないが、許してくれ。

「それでは、そろそろ出発しますか？」

「ああ、そうだな。」

だが、次の言葉で、ここもおかしいことに気づいた。

「我々は、どこでレベル上げをしていればよろしいでしょうか？」

「は？」

「え？」

いやいや、待て待て。

「なんで一緒に行かないの？」

「いいんですか？」

「いいんですか？…てお前。普通一緒に行かないか？」

「いえ、レン様とはいつも別行動です。レン様が指定した場所で我々はレベル上げをしています。」

なにそれ。本当に仲間だよな？ 錬が利用してるとかじゃなくて。

「じゃあさ、連携とかどうやってんの？」

「そこは、なんとか…あと！ 攻撃を受けないように避ける！ って言われます。」

頭おかしいのか？ 錬。

「ま、まあいいや。この2日間は一緒に行く。決定事項だ。」

こうして俺たちは船に乗る。

聞いた感じだと、前衛2人に後衛2人とバランスがとれた編成のようだ。

そこは、ちゃんとしてるな。

「それより、ライト様の…変身が見たいです！」

前衛の男二人が目をキラキラさせて言ってるな。

なら…あれやるか。

俺はベルトを巻き、プログライズキーを起動する。

ドードー！

俺はプログライズキーをベルトに挿す。

フオースライズ！

ライトの体から変身パーツが伸び、それが全てくつつくと稲妻と共にライトは仮面ライダー雷に変身していた。

「カッコいい！」

「すごい！」

「だろ？ いいだろ？ 仮面ライダーって言つてよ？ 俺がいた世界で子供から大人まで皆んなに愛されるヒーローなんだぜ？」

「カメンライダー……いいなあ」

そして男達で盛り上がり、島に着く。

さて、戦うとするか。

10分後。

ヤバい、すごく戦いやすい。

そりや一番はアイツらだ。それは譲れねえ。

だが、こいつら戦いやすい。

俺と後2人で前衛で戦い、後衛2人が魔法などで回復してくれる。

これすごくいい。

そして日没まで戦い、その日は終わりとなった。

そして次の日、俺が迎えに行く前に錬の仲間達が部屋に現れ、俺たちはまた島に向かった。

「ライトさん！また変身してください！」

「出来れば昨日と違うやつを！」

おうおう、すっかり仮面ライダーに魅せられたな？

俺はベルトを巻き、ガシヤットを取り出す。

タドルレガシー！

「術式レベル100！変身！」

ガツシヤット！

俺はゲームドライブバーにガシヤットを挿し、レバーを開いた。

ガツチャーン！レベルアップ！

迎る歴史！目覚める騎士！タドルレガシー！

俺は純白の聖騎士のような鎧に身を包んだ仮面ライダーブレイブ レガシーゲ

マーレベル100に変身した。

「これも…いいー！」

「いい人生だった…」

おい、そこ死ぬな。

それからも順調に進み、レベルは10も上がった。

10レベル目のところでなんか変な音声が流れたんだよな。

ーオリジナルの組み合わせを解放します。ー

なんだ、それ。まあ、いつか。

実に有意義な2日間だった。

俺たちは船に乗り、帰っていた。

そして…またかよ。

今度は錬とエクレールが喧嘩をしていた。

「私達は、君の奴隷ではない！少しは連携とか仲間のことを考えろ！」

「うるさい！これは仲間を思ってこそだ！知りもしないくせに偉そうな口を利くな！」

もう6日間連続となると流石に見飽きたぞ。

「おい、どうした？」

俺が現れたことに二人が気づき、錬が先に俺のもとへ来る。

「お前の仲間達はどうなってるんだ？俺の言うことを聞きやしない。」

「黙れ！君の言動的に君は我々を仲間扱いしていない。駒だ！駒にされてる気分だった！」

憤慨するエクレールの言い分を聞く。

まともな勇者はいないのか。

全員そう思っていた。

だが希望は捨ててなかった。ローテの最終回は尚文だからと。

コンコン

「失礼する。」

「俺は剣の勇者こと錬だ。早速だがお前らの名前と武器と役職を教えてください。」

「自分はピーター。武器は片手剣と盾。役職は剣士だ。あとバフ・デバフは一応でき

る。」

「俺はナーガだ。武器は新しく新調したこの槍と薙刀が飛び出す仕込み棍だ。役職は武

闘家。火を吹きクラスアップ時に翼が生えて空が飛べる。」

「私はミコ。武器はこの爪で役職は戦士よ。狼だから目と鼻と耳は利くわ。」

「私はエクレール・セーアエット。武器は長剣。役職は騎士。多少は光の魔法が使え

る。」

「あたしはターニャ。武器は、この双剣。役職は盗賊。手先は器用だよ。」

「そうか、なら行くぞ。付いて来い。」

なんて上から目線なんだ。年上に対する敬意はないのか？

エクレールはそう思っていた。

「それとだ。市場で買えるものは買っておけ。あまり待たないぞ。」

この男はあれだ。何かにつけて一言多いのだ。

回復薬とかは先に買ってあるので市場は素通りしていった。

そして船に乗ると、また錬は聞いてきたという。

「そういえばお前らレベルは？」

「45だ。」

「44。」

「77。」

「48。」

「43。」

ピーター達が答えると錬は考え込む。

「なるほど・・その狼女はいけるとして・・あとは無理そうか？」

「何がだ？」

ナーガが聞くが、錬は気にするなとそれ以上言わなかった。

島に着き、鍊はずんずんと進んでいき、それにピーター達は付いて行くといった感じになった。

「さて、このあたりだろう。お前らがどれだけ戦えるか見せてもらおうか。ほら、やれ。」
鍊は腕を組んでピーター達を見守り始めた。いや、あれは見守りなんかじゃない。ただの品定めだ。

「行くぞ!!」

「!!おお!!!」

武器を構えて敵に突っ込んでいく。

クラスアップをしたから当たり前だが、鍊が妥当だと思つてあてがった敵が弱すぎる。

ほぼ一撃で沈んでいく。

「なるほど、40代にしては、まあまあ強いんだな。よし、狼女。お前だけ俺に着いてきてくれ。あとは別行動でレベル上げと素材を集めておいてくれ。以上だ。」

鍊はそう言うのとパーティ登録を解除して歩いて行つた。

皆、啞然とし、ミコに至つては拒否しようとしたが渋々着いていった。

残されたピーター達は、皆不満を抱えたものの、それを口に出すことなく敵を倒し続けた。

経験値が良かった事が救いだっただという。

違和感を感じていたターニヤが帰りの船で鍊に話しかけていた。

「ねえ、なんで一緒に行かないの？仲間と一緒にの方がよくない？」

「戦うにはレベルが足りないだろう？足りない奴は努力して追いつく。これが常識つてものだ。」

常識ねえ。俺だったら多少弱くてもカバーしつつ戦うんだが。

弱いと言われたメンバーは皆苛立ちを覚えていたと言う。

そして、その日は日が沈むくらいでやめ、そして次の日。

上陸しー歩いて行く途中で鍊が聞いてきた。

「お前ら、昨日で何レべになった？」

「全員48になった。」

「そうか…なら…大丈夫だろう。今日は全員来い。」

昨日より奥、ミコが行った所よりも奥に進んでいくと、カルマードッグファミアと
いう大きな魔物が1匹、現れた。

耳の長い、大きな黒い犬のような魔物だったらしい。

ミコは同じ犬系の魔物に親近感を覚えていたという。

「よし、お前ら。今から俺の指示通りに動いてくれ。」

「敵の攻撃を引きつけてかわして、あとは各々の必殺を叩き込め。」
雑!? 雑かよ。もうちよつとこう・あるだろ。

言われたとおりにピーターは変わり身の術で攻撃を躲し、頭上から剣を振り下ろす。だが、そこに鍊がおり急いで飛び蹴りに切り替え敵の首を蹴り折った。

「おい! 何をしている!」

鍊が連携をちゃんとしろと怒る。

結局、普通なら半分の時間で終わるのにカルマードツグファミアを倒すのに時間がかかってしまった。

それからも:

「竜巻・」

「流星剣!」

ナーガがスキルを放とうとしたところで鍊がスキルを撃ち、

「ナイフブーメラン!」

「うおっ! 危ないだろ!」

ターニヤがナイフをブーメランのように投げるが、突然その軌道上に鍊が現れ当たりそうになったり。

もう散々だったらしい。

「どうしてお前らは俺の望み通りに動かないんだ！連携をちゃんとしろ！」

できるわけないだろ。バカなのか。

敵を倒し終えたあと、鍊はキレながら怒鳴った。

「まったく！もう少し周りを見て戦え！お前らは注意を引き付けていけば良いんだ！」

「ふざけるな！」

それに対抗するようにエクレールが怒鳴る。

「周りを見ろだど？それはお前だ！」

カルマードッグファミアリアは戦った感じだと、弱い。

だが、時間がかかる。原因ははつきりしている。鍊だ。鍊がいきなり攻撃の軌道上に現れることで邪魔をしているのだ。

「私たちは君の作戦通りに動いているつもりだ。だが、どうだ？君が邪魔をしてくるの
だろう！」

「黙れ！俺の作戦は完璧だ！」

「完璧じゃないから、こうなってるんだ！」

「お前らは敵の注意をひいてるだけで良かったんだよ！」

「だったら最初からそう言えればいいだろう！」

「黙れ！王国騎士なら、それくらい察して仲間に伝えるくらいしろ！」

「なら君も察しろ。はつきり言う。君は弱い。見ている。」

更にカルマードッグファミリアが2匹飛び出してきてターニヤが対峙すると、鍊がいた時の半分以上の時間を短縮して全滅させた。

「そういうことだ。失礼する。」

エクレールはパーティを解消して更に奥へ歩いて行く。

「おい！勝手なことをするな！」

エクレールについてくようにピーター達も歩いて行く。

「つまり、悪いのお前だろ？」

「なんでそうなるんだ！お前はあんな勝手が許されると思ってたのか！」

「あのさ？許されるのか？って言うけど、それは誰基準だ？」

「そりゃ仲間がお前らに悪いことしたなら、俺が怒る。だが、話を聞いた感じでは仲間が悪くないと思っている。」

「そうだ、レン殿。君はパーティ内では隊長だ。隊の人員に対して大雑把な命令であとは、察しろ。では命がいくつあっても足りないだろう。はつきり言う。」

「いつか仲間が死ぬ。それだけだ。」

そう言うと、エクレールは怒りながら歩いて行った。

鍊は俺とエクレールを睨むと歩き出す。

「あの女に言っとけ。お前みたいな勝手な奴はいずれ死ぬとな。」
鍊は捨て台詞を吐いて去って行った。

第25話

今日は尚文のところか。

ラフタリアとフィーロだな。アイツらとは楽しみだな。まともだし。

二人も他の勇者達にうんざりしたらしいから俺だけはちゃんとしないとな。

コンコン

「はい。」

「失礼します。」

中に入るとラフタリアが腕立て、フィーロが寝ていた。

「あーライトさん。おはようございます！」

「おう、おはよう。今日も元気そうだな。」

ラフタリアは最初からニコニコしている。昔から知ってる俺だから警戒心もないんだらうな。守りたいこの笑顔だな。

「じゃあ、行くか？」

「ええ、そうですね。ほらフィーロ。行きますよ。」

「ふえ？ああ、ライトさん。」

俺たちは船に乗って島を目指す。

「そうだ。一応いつもどうやって戦ってるか聞いていい？」

「はい、いつもはナオフミ様が盾で守りつつ敵を引きつけて私たちが倒すといった形ですぬ。」

「よかった。変わってなかった。じゃあ、それに出来るだけ合わすから。」

さて変身しとくか。

俺はメガウルオウダーを左手首につけ、ゴーストアイコンを起動した。

ステンバーイ！

そのままゴーストアイコンをメガウルオウダーに入れ、展開してボタンを押す。

イエッサー！

ローディング！

メガウルオウダーからネクロムの霊体のようなものが飛び出してライトの周りを飛び回る。

「変身。」

テンガン！ネクロム！メガウルオウド！クラッシュ ザ インベーター！

俺は仮面ライダーネクロムに変身した。

「おおーライトさん！カッコいいー！」

「だろ？」

島に到着し、俺たちは歩き出す。

だいぶ奥まで来たところでカルマードッグファミアが3匹躍り出てきた。

「行くぞ！ラフタリア！フィーロ！」

「はい！」

「うん！」

まず

俺がガンガンキャッチャーを構えて前に出て、注意を引くために3匹に撃ち込んでタゲを取る。

来た1匹を殴り、2匹目を蹴り、3匹目に狙いを定める。

「くらえ！」

ガンガンキャッチャーにネクロムアイコンを入れ、ゼロ距離で脳天を撃ち抜いた。

「幻影剣！」

「はいくいつく！」

後ろを振り返るとラフタリア達も同じように敵を倒していた。

「大丈夫か？」

「ええ。」

「うん！」

「なあ、俺もうちよつとタゲ取った方がいいか？」

「いえいえ、大丈夫ですよ。十分です。」

「じゃあ、これとかやってみるか。」

俺はグリム魂をメガウルオウダーに入れる。

イエツサー！

テンガン！グリム！メガウルオウド！ファイティングペン！

そこからはグリム魂、サンゾウ魂と使い分けつつ戦い、そして夜になった。

「ほら、帰るぞ。また明日にしよう。」

次の日、俺たちは更に奥まで来ていた。

今日は仮面ライダーキルバスに変身していた。

ドリルクラッシャーを武器にし、戦っていく。

「フィーロ！後ろだ！」

俺はフィーロに襲いかかろうとした敵を蜘蛛の糸で捕らえると、フィーロは回し蹴り

で側頭部を打ち抜いた。

「やっぱりライトさんは戦いやすいですね。マトモですから。」

「そりゃ、ラフタリア達とは行動してたからね。そういうもんさ。」

こうして順調にレベルを上げ、10も上げることができた。

こうして俺たちが帰つてくると、尚文がピーターとエクレーールと話していた。

「よう、尚文。」

「ああ、来人か。お前の仲間はすごいな。俺の言うこともちゃんと理解してくれるし、すごく戦いやすかつたぞ。」

「それは、俺も同じだ。俺が指示したのだから初日くらいなもんだ。あとは各々が何をすればいいのか、考えて動いてくれるから戦いやすかつたぞ。」

「だが……」

「だが……」

「一番は俺の仲間達だ。」

見事に俺は尚文と言いたい事が被った。

「こればかりは譲れん。たとえお前でも。」

「その通りだ。」

俺と尚文はガシツと握手をして互いに踵を返して歩いて行った。

「ライト。」

「ライト殿。」

「どうした？ピーター、エクレーール。」

「宿は逆方向だ。」

「……………え？」

俺は思わず足を止める。

「カツコつけたところ言えなかったが、正しくはナオフミ殿が歩いて行った方向だ。」

「……………すまねえ。」

俺たちは、方向転換をして歩き出した。

明日は、やつとみんなと合流できる。だから…休みにすつか。

第26話

「ぬおおお」

「やっぱり観光地なだけありますね。」

「染み渡るうううう」

「お前の所のリザードマン：というかり〇ードン。えらくおっさんに見えるんだが。」

俺達が風呂にゆつくり浸かりながら体を伸ばしていると、尚文が笑いながら言う。

「あ？俺は、まだおっさんじゃねえ。ドラゴンはお湯に浸かる文化はあんまり無いんだ。大概池とか湖なんだよ。」

「そうなのか？勉強になるな。」

尚文が顔にタオルをかけて頭を湯船のへりに預けた。

「これ、いつになったら外れんだよ・・・」

「ああ、元康。よっぽど気に入ってんだな、それ。」

「来人。頼む。これは尚文のものだつて認めるから呪いを解いてくれ。」

「いやにあつさりだな。」

「・・・認めるさ。マ：ピッチがお前らにやったことを考えてみたら・・・これが盗品だつて

事も納得がいく。すまん。」

「…ふう。いいぜ。」

俺はパチン！と指を鳴らす。

「ほら、脱いでみなよ。」

「お！脱げた！ありがとうな、来人。」

「俺に言うな。尚文に言え。」

「…あ！ああ、そうだな。ごめんな、尚文。」

「…ああ。」

そのやりとりしていると鍊と樹が自身の仲間達を連れて入ってきた。

「ごしゅじんさまー！」

ピューン！

垣根を越えてフィードロが男湯に入ってきた。

「な！？フィードロ！！君はなんてことを！早く帰りなさい！」

「やー！」

ピーターが立ち上がり、そして瞬時に下半身を隠しながら怒り、女風呂の方に言う。

「おい！ターニヤ！早くフイーロをそっちに連れ帰ってくれ！」

「何言ってるのよ、兄さん。私がそっちに行ける訳ないでしょ？大丈夫よ。ほら、お風呂にプカプカ浮かぶアヒルのおもちやだと思つたら？」

「それは無理だ。」

「でへへ、フイーロちゃんと混浴……」

あ、元康の野郎。

「ねえ、フイーロちゃん。できれば天使の姿に……」

「やー！」

「そっか、残念だな。ところで諸君。」

「仲間交換をしたが、どこの誰が可愛かったとかあるか？」

「は？」

おいおい、こいつは何を言ってるんだ？もつと見るところがあるだろう。

「俺の好みは……やつぱはビッチとラフタリアちゃんとフイーロちゃんとリーシアちゃんとターニヤちゃんかなあ。」

チャキ！

「武器を下ろせ、ピーター。てか、持ち込むな。」

「まあ、確かに……奴は悪くはねえが……」

「そうですね、顔は整ってますよね。」

「おいおい、鍊も樹もアレがいいのか、アレが。」

「俺と尚文は特に奴の何がいいのかが分からない。」

「これからもきつと。」

「それにしてもラフタリアちゃんは性格がキツイな。」

「ええ、そうですね。せつかく顔は良いのに、残念です。」

「全くだな。」

「フイーロ、そろそろお姉ちゃん達の所に戻るね。」

「ああ、さっさと行け。」

「尚文がそう言うのと、ピユーと飛んで行った。」

「さて、出るか。」

「俺もそうするか。」

「俺と尚文、ピーター、ナーガが立ち上がると、元康がこう言ってきた。」

「なあ、尚文。お前はラフタリアちゃんとかどこまでいったんだ？来人もだ。お前のチームも女性が3人いるんだから一人くらいそんな関係の奴がいるだろう？」

「無いな。」

「俺もだ。」

「嘘だ！ 来人の所は知らねえから言えないが、ラフタリアちゃんはあつただろ！ なんかこう・・迫ってきたとか。」

言われてみれば・・確かにラフタリアは尚文に好意を抱いている。それは分かる。何かしらのアプローチはしているはずだ。

「覚えてない。」

「だったら・服だ！ 服をお前の前で脱いだとかだ！ それはなかつたか？」

「ああ、それだったら・・」

尚文が言うには・・昔尚文が薬を調合している時に先に湯を浴びてきたラフタリアがタオルを外して見せてきたらしい。

しかし、尚文には違いが分からず、だが何か言わないといけないと思い、こう言っらしい。

「まあ、大分良くなつたんじゃないか？ 出会った頃とは雲泥の違いだな。」

それだけ言っらしい。

鈍感か！

「この鈍感野郎!!!」

それは元康も同じだったようで尚文に拳を振るう。

パシッと尚文は受け止め、言い返す。

「なんのつもりだ。」

「それは露骨なアピールだろうが！ 据え膳を食わないとは不屈き者が！」

「何を言っているんだ。さつきから言っているだろ？ ラフタリアは子供だ。しかもクソ真面目のな。そんな事を考えているはず無いだろ。」

こいつ、やべえ。ガチだ。俺は元の世界ではあんまりモテなかったが、そんな俺でも分かる。それは完全なアプローチだ。ラフタリアだって襲われるくらいの覚悟はあつたはずだ。

「悪いな、尚文。今回ばかりは擁護できん。元康が正しいかもしれん。だが手を出さずとも、もつとあつただろう。」

「はあ？」

俺の、手を出さずとも、の部分が引つかかったのか、元康が驚愕する。

「いやいや、考えてみるよ。尚文の所は少数精鋭だぞ。ここで関係をもつて大事な戦闘の時に妊娠して動けません！なんてなってみろ。終わりだぞ。」

「そりゃ、そうだけだよお。」

元康は、ため息をつきながら空を見上げる。だが、ふと我に返り男湯と女湯を隔てる垣根の方へ歩いていく。

「おい、何をしている。」

「黙ってる。男のロマンだ。」

「おい、ロマンは認めるが、やめろ。ほら樹も止めてくれ。」

「全くです。けしからんですねえ。」

そう言いながら樹も垣根の方へ歩いていく。

お前もかよ。

「ふん、くだらん。」

そう言う鍊も湯船から出ず、横目でチラチラと垣根の方を見る。

良かったな、女王。勇者の結束は固まったぞ。

「彼らには悪いですが、覗きに関してはアナスタシアとターニヤに報告します。まあ、しなくてもターニヤにはバレるでしょうけど。」

ピーターは冷静に念話で二人に報告し始める。

俺たちが着替えて、脱衣所から出るとアナスタシアが立っていた。

「報告感謝するぞ、グリーシャ。」

それだけ言うと消えた。

俺たちがジュースを買って涼んでいるとラフタリアがドタドタと走ってきた。

「尚文様！」

「どうした、ラフタリア。覗きが見つかったか？」

「え？はい、勇者様達が正座させられてミコさんとエクレールさんとアナスタシアさんに尋問されてます。」

「会議に出られるくらいにはしといてくれよって伝えといてくれ。」

「分かりました！」

そう言つて出ようとした時、ラフタリアがボソツと言つたのが聞こえた。

それは、こうだ。

「尚文様なら見られてもいいのに……」

うん、ガチだな。

それから予定が遅れて1時間後、勇者会議となつた。

俺が中に入るとみんな着席していた。

だから俺は空いてる席に座り、影が喋り出すのを待つた。

「よう、お前ら。覗きはどうだった？収穫はあつたか？」

「これがあつたように見えますか？」

「俺は見えない。ただ長風呂してただけなのだがな。それよりも元康だ。」

元康の方を見ると頬に大きく平手の跡が付いていた。

「いやあ……はは！……これも醍醐味だね！」

「チツ・」（死ねば良かったのに。）

おうおう、アナスタシアから殺気がwww

「私もピーターになら・・ぶつぶつ・・」

お前もかよ。

「さて、これから五聖勇者による情報交換会議を行うでござやる。司会、進行は私。影が務めるでござやる。」

「議題はもちろん。明日から本格的に始まるカルミナ島の活性化についてでござやる。」

その発言に対して驚愕したように元康と樹が立ち上がる。

「おい、どういふことだよー！」

「まだ活性化は始まってなかったってことですか？」

「何を言っておるでござやる。私は今、本格的なと言ったでござやる。本格的なのは明日から数日でござやる。」

「そこで！勇者達の情報交換の場を設けたでござやる。」

なるほどな。俺たち全員この武器について知り尽くしている訳じゃない。自分が気づいてなくても相手は気づいていること、そしてその逆もあるかもという訳か。

だが、コイツら正直に話すか？

コイツらはどうも未だにゲーム感覚っていう感じが抜けないんだよな。

てかさ、アレ：

俺は鍊達の武器に括り付けられているストラップに注目していた。見ると尚文も同じように見ている。

「なあ、お前らそれなんだ？」

「知らないのですか？」

「ああ。」

うそ、知ってる。

「これを付けていれば獲得経験値が上がるんだ。」

「これで俺たちは強くなれるぜ！」

「来人さんも買った方がいいですよ。」

まさかと思ひ、尚文の方を見ると尚文は首を横に振る。

なるほど、粗悪品か。あの商人、勇者だといって鼻屑はするつもりはないようだ。てかあの中に高品質なんてなかったと思うし。

「では、最初に一時的に交換した仲間について話し合おうでござやる。」

その言葉を待ってたとばかりに鍊と樹が口を開いた。

「尚文に來人。お前ら仲間の教育くらいちゃんとしろよ。」

「そうですよ。よくあんなので今まで死ななかつたなつて思いますよ。」

早速かよ。

俺が口を開こうとしたところで尚文が口を開いた。

「すまん。うちのラフタリアはちよつと理想が高いんだ。勇者らしくない行動を見たら怒るんだ。」

「俺たちがしていないとでも?」

「ああ、鍊は連携不足、樹に至っては：嘘ついたろ?」

「なら! 来人は!」

「話を振ってくれたようだから俺も言わせてもらおう。俺も尚文と全く同じ意見だ。アイツらはラフタリアほど理想は高くないが元々それなりに戦える奴ばかりだ。動きがおかしいと思えば言ってくるのは当たり前だ。実際に俺も何回か言われたぞ。特にピーターとエクレールから。」

「でさ? お前らがそこまで言うなら俺も言うぞ? お前らの仲間の変な所言うぞ?」
「どうぞ。」

樹が何か問題でも? と言いたげな顔で言う。

「お前、仲間内に序列作ってんだろ。しかも自分たちこそが正義で、それ故に何をしても許される、正義を執行するのに犠牲はつきものだって言ってたぞ。しかもずっとお前の偉業ばっかり話してたぞ。ウザすぎて途中から聞かなかったぞ。」

「俺も大変だったぞ。しかも中にはまだ俺を犯罪者みたいに扱う奴らがいたぞ。」

「それは俺も感じた。仲間にも慕われてるのはいいかもしれないが、あれは異常だ。」

「礼儀は正しいけど、あれは宗教だ。しかも序列のせいでリーシアちゃんが不憫だったぞ。」

俺に続いて、尚文と鍊と元康が苦言を言う。

ほう、やっぱり鍊と元康も異常さが分かったか。

「正義を執行する上では仕方がないことです。それに序列ですか？そんなものありませんよ？」

苦しい言い訳だ。話にならん。

「まあ、せいぜい変な宗教だけは作るなよ？三勇教みたいなやつとか。」

「作る訳ないでしょ！」

「次に鍊だ。どうした、お前の仲間。異常に距離感を感じたぞ。」

「確かに。」私たちはどこで戦えばいいですか？つて言われたぞ。」

「俺、最初それ聞いて言葉が出なかつたぞ。」

「ええ、僕も同意見です。話を聞いていて思いましたがあれは仲間というよりは部下です。」

「つまり言いたいことをまとめると…」

尚文が言いたいことをまとめようとする。

「正直あれ一個がパーティと言った方がいいかもしれない。お前いなくてもいいけるぞ?」
「何を言っている?俺がいなくても戦えればいいだろ?」

一理ある。錬が戦闘不能になる可能性もあるからな。だが、お前のは、それとは違う。
「確かにそうかもしれないがお前のはやり過ぎだ。あんなんじゃいざという時に連携なんか出来る訳がねえ。」

「で、元康のところだが。」

今のところ、影に聞いた話だがピツチのやつ、俺と尚文のところ以外では猫被って大
人しかったらしいからな。

「応援してますって言われましたが、なんですか?あれ?」

「俺がここで戦っていてくれて指指定したのに宿にいたぞ。アイツら。」

アイツら・俺以外のところでもやったのか・

「何か変か?俺たち勇者は誰よりも前に出て戦うのが普通だろ?特に俺は槍だ。前線職
だ。」

「そうですけど、あれは度を越してますよ?本来、弓という後衛の僕が一番前だったんで
すよ?」

「な、なあ！尚文と来人はどうなんだよ！」

焦る元康が喋らない俺たちに話を振ってくる。

「いいのか？喧嘩になる未来しか見えないぞ？」

「第一、ビツチが俺たち二人をどれだけ憎んでるか知らないだろ？アイツらが何やったかは察してくれ。」

「では、仲間交換の話は以上でござやる。各々、指摘されたところは改善できるようにするでござやる。」

「納得いかないけどな。」

「ああ。」

「……善処します。」

「分かった。」

「いいぜ。」

第27話

「次に各々、仲間から他の勇者のことを聞いてるはずでござやる。それを言うでござやる。なお、尚文殿と来人殿からはもう聞いてるはずでござやる。なので二人は除外するでござやる。」

「では元康殿から。」

「ああ、俺のところは鍊は冷たい、樹は論外、尚文は論外、来人は：死ねってさ。」

「冷たい：」

「じ：地味：」

「論外か。」

「影、少しトイレに行ってくる。」

「来人殿。ビッチ様の部屋に行つて制裁を加えようとしても無駄でござやる。流石にそれは阻止させてもらうでござやる。」

「チッ！」

死ねってなんだよ、死ねって。

「お前、死ねって何したんだよ。」

「特に何もしてねえよ。アイツが特大魔法撃つてきやがったから、それをかき消して反撃しただけだ。」

「危害を加えてるじゃないですか！」

「別に俺攻撃しないとは一言も言っていないし。」

「次は錬殿でござやる。」

「ええと・まず元康は何がしたいのか分からないって言ってたぞ。ほとんどナンパばかりだって言ってたぞ。後は樹は地味、尚文は問題なし、来人も問題なしで、あの変身がまた見たいいつてさ。」

「なんで尚文さんと来人さんは問題なしなんですか！」

「俺にいうな。アイツらが判断したんだ。それを俺がここで代弁しただけだ。」

「ぐっ・・・」

樹はそれ以上何も言えないのか黙り込んでしまった。

てか、地味のリーチ。

「僕も言いますよ。錬さん。あなたはここで戦つてろと言つて立ち去つたそうですね？」

元康さん、あなたは・ナンパばかりで・尚文さんと来人さんはワガママすぎる

と言つてましたよ。」

「ワガママだと?」

「自分達が正義としか思っていない連中だったからな。狩場のマナーも最悪だ。もちろん影も調査済みだろ?」

「そうでござるな。樹殿の仲間達はかなり自己主張が激しかったでござる。他冒険者に対しての恐喝、強引に魔物を占有など問題行動が多かった事を記憶しているでござる。」

「そういえば、お前はネット用語で釣りや引き寄せをしていたんだったな。やめたほうがいいぞ?」

鍊が便乗して注意する。

そっちでもやったのか、アイツら。

「釣り? 引き寄せ? なんです? それ。」

「誰かが戦おうとしている魔物を横取りする行為、ネットゲームじゃ大体: いやふつうにマナー違反だ。」

元康も説明する。

「お前さ? 伯爵も、それはダメだと言ってたろ? そりゃ誰も注意しないさ。相手が勇者のパーティーだからな。」

「: 分かりましたよ:」

鍊、元康、尚文と注意を受け、流石の樹も引き下がった。

「恐らくお前の行動を見て、アイツらにとつてそれが普通になったんだろうな。」

「で、それを注意した尚文と来人をワガママ扱いか。子供か。」

「だったら！元康さんにも話があります！僕、鍊さんと話を聞いて全部ナンパってなんですか！何を考えてるんですか！」

「そうだ、元はといえばお前が覗きをしようとしなかったら、俺たちは正座しなくても良かったんだぞ！見てない俺まで巻き込みやがって。」

「あははは：男は女を追ってこそ男：だろ？」

「お前やっぱヤバイな。多分この世界でも、同じ死に方するぜ？」

「多分これは治りませんから諦めましょう。」

「それでは本題である勇者の意見交換を行うでござやる。」

影がそう言った途端、全員が黙り込む。

「来人さん、あなたからどうぞ。」

「俺？いやあ：俺の聞いても絶対参考にならねえぞ？」

「そうとも言えないだろう。お前のあの爆発的な力は何か秘密があるはずだ。」

「お前の仲間たちの強さもだ。何したらああなるんだよ。」

「そうです。それに聞きましたよ？あなたがクーデターを起こした日、あなたは僕ら全員と連戦して勝ったそうじゃないですか。あれはなんなのですか。」

それが目的だな。俺は武器の強化方法はないし、ただレベルが上がるだけでレパートリーが増えてくから相手にされないと思っただが、そこか。

待てよ、そう考えたらコイツら：カースシリーズを知らないな？てことは真カースシリーズも。

それに仲間に至っても、ピーターとターニャは元々影になるための訓練を受けてたし、ミコは怪我する前はコロシアムのスター選手らしいし、エクレールは元王国騎士だし、ナーガは：あれ？アイツなんだ？

そう考えたら俺って恵まれてたんだな。

「話してもいいが、タダでは無理だな。お前らはその対価が払えるか？」

「だったら、一個だ。お前がどうやって決闘で元康を破り、その後のクーデターで俺たちに連勝できたか教えてくれ。明らかにいつものお前とはオーラが違ったぞ？」

鋭いな、錬。それがカースシリーズだ。

「悪いな、教えたいたいのには山々だがその力を手に入れるのは今のお前らでは無理だ。」

だって絶望だよ？普通は無理よ？

「もったいぶりがあって。」

「もう良いじゃねえか？な？お前らが本当の事を言うなら俺が最後に言う。それでいいだろ？」

「なんでお前が最後なんだ？」

お、次は尚文か。

「お前も俺みたいにあまり鼻肩はされなかったが、俺よりはマシだろ？だから俺が最後だ。」

「はあ：分かったよ。そこは譲ってやる。」

「まずは：嘘を吐かれないように樹。お前から言えよ。」

「嘘なんかつきませんよ！」

「だが、お前は前科があるだろ？だからお前からだ。」

「何を言っても無駄なようです。じゃあ一度しか言いませんからね？」

「まず、僕らの武器はスキルツリーのようなもので解放されていきます。」

それ知らない。

「それで僕のやってたゲームとは似ていますが、違うところもあります。」

「全部おんなじじゃねえのか？」

「違いますよ、元康さん。正確にいうと知ってるのかもしれませんが、知らないのがありますね。」

「じゃあ、俺は樹の続きから話そうか。みんなも知ってると思うが、俺たちの武器は魔物とかの部位を吸わせて強化し、一度変化させても過去に変化させた武器は消えない。だが俺のゲームとは違う点もある。」

「装備ボーナスだ。スキルの習得はスキルポイントと熟練度だった。装備しておくことで何時でも使える様になる訳じゃない。」

「じゃあ、次は俺か。武器は同じ系統：俺なら槍だな。別の槍を持てばウエポンコピーが発動するよな？」

「ええ。」

「そうだな。」

「おい、待て。それ知らねえぞ?」

「尚文、お前知らねえのか?」

「知らねえ。」

そこからは、レシピを手に入れたら武器が作ってくれるとか、色々知らない話を聞いた。

「では、それ以外で武器を強くする方法を言いましょうか。」

樹が言う。

「それはレア度です。武器はレア度です、付与効果は二の次です。」

「嘘だな。」

「樹さあ。嘘はダメだぜ？」

「はあ!?! 本当ですよ！」

コイツ・嘘か。

「やつぱりお前は嘘つきじゃないか。」

「違います!・じゃあ試してみてくださいいよ!・」

待てよ・樹の怒り方が違う。見破られた焦りからくるやつじゃない。

なら・本当なのか?・だが他二人が違うと言ってる。とりあえず様子見といこうか。

「そうだ。俺さ?・リーシアからこの石貰ったんだよ。これ何に使うんだ?・」

みると尚文も同じ石をもらっているようだ。

「リーシアからもらったんですね。それを使って武器を最大まで強化するんです。」

「嘘は良くないぞ。武器を強くするためにそんな石は使わない。」

「だから!・嘘じゃないですって!・」

ラチがあかねえ。

「じゃあ、錬は?・錬はどうやってるんだ?・」

「俺か?・もちろんレベルだ。レベルさえあげたら、どうとでもなる。」

「お前も嘘つきか。」

「鍊さんこそ嘘は良くないですよ。」

「な!？」

「話は最後まで聞け。武器には熟練度つてもものがあつてな? 同じ武器を使い付けたら溜まっていく。だが伸びにくくなった時にそれをエネルギーに変換して武器に付与する。すると更に強くなる。」

「偉そうな事言つてお前も嘘じゃねえか。」

「聞いて損しました。」

「ふざけんな! 俺はそうやって武器を強くしてんだぞ!」

「だったら元康はどうなんだよ!」

「武器の強化精錬の高さこそ全てなんだ。レベルよりも性能を最大限引き出せる特化したステータスがあれば問題ない。最悪、初期の武器だつてちゃんと精錬すれば強い!

俺は装備ボーナスは全て攻撃力に特化させている」

「大嘘だ!」

「ええ、尚文さん、来人さん! 騙されなくてください!」

「こうしようぜ! これから二人に俺たちの強化の仕方を試して貰おうぜ! そうしたら誰が本当か分かるつてもんさ!」

「おい、待ってくれ。なんで俺たちが実験台にならなきゃなんねえんだよー」
「それにだ。俺のはお前らのと違うんだ。」

そこから尚文が実際に3人が言う強化方法を試すが、何も起こらなかった。

何故だ？誰か一人、もしくは二人が嘘をついたとしても全員が全員嘘をつくとは考えにくい。

もしかして：武器によって強化方法が違う？それなら、まだありうる。

あと、もう一つの可能性は、全員が本当の事を言っている。だ。

だが、そうなれば何故尚文に何も起きない。

「なあ、こうは考えられないか？武器ごとに強化方法が違うとか。」

「『あ!!!』」

「まあ、そう言うことにしておきますか。」

「ああ、それが一番筋が通っている。」

「めんどくせえからそれでいい。」

「俺の鎧の強化方法だな。まず俺の鎧はレベルアップだな。だが、あとでお前らが言った方法を一通り試そうと思っている。それと俺の仲間は俺が強くなったわけじゃねえ。限られた資源の中でどれだけやるかかってのが大きいな。」

「あと突然俺たちが強くなったやつだろ？」

そう言つて俺は尚文の方を見る。

俺の意図が分かつたのか、うなづいた。

「教えよう。俺と尚文の力は同じだ。あれはカースシリーズと言つてな？とある感情の昂りにより発現するんだ。だが、そう簡単じゃねえ。俺の例だと：1回目は堂々と不正をしたのに、圧力で周りを黙らせて尚文を陥れたクズとビッチに対して、2回目は俺の村を襲撃した三勇教会と、どこかで驕り高ぶつていた俺自身にだ。」

「1回目は理解できないだろうが、2回目は分かるだろ？つまり、あれくらいの感情の昂りで初めて発現する。言っちゃ悪いが今のお前らでは到底無理な話かもしれないな。」

俺は最後に少々トゲがある言い方で締めたが、3人とも反論できずに黙り込む。

「カースシリーズについては来人が言つてくれたから、別の事を答えようか。何故ラフタリアやファイロが強いのかだ。」

それを聞いて反論できずに俯いていた3人が顔を上げる。

「あれは奴隷使いの盾と魔物使いの盾によるものだ。特別に出所も教えておく。奴隷使いの盾は、奴隷紋を結ぶ時のインク、魔物使いの盾はファイロが産まれた卵のカラだ。」

「なるほど、出所が分かつてるなら俺たちもなんとかできそうだな。」

元康が納得していると、樹が急に手を挙げた。

「どうした？」

「あのう、カースシリーズっていう項目がないんですけど。」

「確かにな。俺のところもないな。」

樹の言葉を聞いて確認した鍊も同じだ。

「それは変だな。俺達がこれを解放した時：少なくとも俺にはシステム音みたいなのが聞こえてきて解放されたぞ。」

「俺も似た感じだ。俺の時はサァー：と目の前が真っ赤になったな。」

「なるほど：二人がそう言うなら：信じる価値はあるんじゃないですか？もしかしたら、解放されて初めてブックに現れるとか。」

「だが、俺は忘れてねえぞ。お前らが嘔吐きだつてことはな！」

「元康！お前まだそんな事を言うのか！」

そこからは罵詈雑言のひっどいものだった。

売り言葉に買い言葉。俺たちは参加しなかったが、諫めようと声をあげる影を不憚に思い、仲裁に入ったが3人による尚文をまだ悪人だと思ってる発言を受け、結局俺達も参戦。

最終的に樹、鍊、元康の順にキレイながら出て行ってしまった。

第28話

「なんか：変な事になっちゃったな？」

「ああ。」

影も帰り、俺と尚文は二人で話す。

「ぶっちゃけ、尚文的にはどれだけ信じてる？」

「強化方法か？ほとんど信じてないな。」

「そうか。俺は：とりあえず全部信じてみようと思う。」

それを聞いた尚文は俺を信じられないような顔で見てる。

「マジか!?!お前。あいつらが信じられるってのか？あんな：」

「未だにゲーム知識が抜けねえ甘ちゃんって言いたいのか？」

俺がそう言うとき尚文は座る。

「まあな、確かにアイツらは甘ちゃんだ。正直俺と尚文がいなかったらとつくに死んでただろう。だが俺には奴らが嘘吐いてるようには見えなかった。だから：実験する価値くらいはあると思ってる。」

「思い出してみろ、樹が言った強化方法を。お前も貰っただろ？リーシアから。」

「ああ。」

「俺はあの子が嘘ついてるとは思えねえ。まあ、思いたくねえつてのが8割だがな。」

「まあ、やるかやらないかはお前次第だ。」

そう言う尚文は渋々と操作をしだした。

さてと：やってみるか。

俺は鎧の項目を出し、スキルツリーを出す。そこには今まで俺が解放したライダーの名前がズラリと並び出す。

リーシアから貰った石は：あつたあつた。

これを：どうすんだ？

「なあ、まさかとは思うが。」

尚文が不意に話しかけてきた。

「信じる心つてやつが必要なんじゃねえか？」

「信じる心？」

確かにな。今まで嘘を吐いていた樹があんなにムキになりながら言ったんだ。信じてやる。

すると鎧の項目が光り、強化項目が現れ出した。

そして、試しにまだ解放されていない項目に使ってみる。

――新たにライダーを解放します。 解放：仮面ライダーバルキリー

「出来た…」

俺は今までレベルアップだけだと思ってたが石でも出来たのか：

ならば！

俺は錬が言っていた強化方法を試す。

俺は序盤でかなりお世話になったブラッドスタークを表示させる。

ブラッドスターク 0/30 C

能力解放済み：装備ボーナス：ブラッドスタークを参照

専用効果：コブラの毒、ステイングヴァイパー、変装

熟練度100

どうやらこれが上限のようだ。

確か、これを。

俺は操作する。すると。

熟練度をリセットしますか？

これか。俺は迷わず「はい」を選ぶ。

すると、能力が少し下がる。

熟練度を1000取得。

そしてそれをそのままブラッドスタークに付与する。

すると効果に変化が見られた。

ブラッドスターク(覚醒) 0/30 C

能力解放済み：装備ボーナス：ブラッドスタークを参照+投げナイフ、高速移動

専用効果：コブラの毒、ステイングヴァイパー、変装、全フルボトル使用可能、直接
ナイトローグへ変身可能

熟練度0

——新たに解放しました。 解放 エンジンブロス、リモコンブロス、ヘルブロス

——

更に増えただと。

こりや、すげえ。

なら：元康もやろうか。

そして終わった頃には：

ブラッドスターク(覚醒) 0/30 R

能力解放済み：装備ボーナス：ブラッドスタークを参照+投げナイフ投擲精度(最

大)、高速移動(大)

専用効果：コブラの毒、ステイングヴァイパー、変装、全フルボトル使用可能、直接ナイトローグへ変身可能、直接エボルへと変身可能（デメリット無し）、スマツシユ（偽）・魔物（偽）具現化

熟練度0

マゼンタフロッグ（偽）付与：毒耐性（大）

ヤベエ：ブラッドスタークって本来ここまで強くねえぞwww

だが、これで分かった。奴らは誰一人として嘘吐いてねえ。

「影、他の奴らに伝えてくれ。お前らの言った事は全部本当だった。誰一人嘘を言っていない。相手を本当に信じないと出来ないってな。」

尚文がわざわざ伝えるように言っていた。

「へえ、優しいじゃん。」

「よせよ。俺もそこまで鬼畜じゃない。」

俺たちは部屋を出る。そこで俺は前々からやってみたかった事を言う。

「薬品調合を教えてくれ。」

「お前にか？そんなのしなくても困らないだろ？」

「確かに・・そうだ。だが、いつ金が無くなるかわからん。スラれるかもしれないし、落とすかもしれない。」

「分かった。ついて来い。」

俺は尚文に連れられ、馬車のところまでやってくる。

「入れよ。」

「邪魔する。」

そういや、馬車の中に入るのは初めてだ。

「ごしゅじんさまと、らいとさん？なにやってるのー？」

ファイロが顔をのぞかせる。

今は馬小屋にいるため、ファイロリアル姿である。

「ああ、今尚文に薬品調合を見せてもらってたんだ。」

「ほほう、そうやるのか：良いものを見せてもらった。言わなくとも、お前らの商売の邪魔はしねえよ。まあ、うちの村で売るかもしれないがな。」

「そのくらいなら構わん。」

俺は尚文と別れて部屋に戻ってきた。

「おかえりなさい、ライト。何か収穫は？」

ピーターはエクレールとしていたチェスの手を止めて出迎えてくれた。ミコは読書、ナーガとターニャは武器の手入れをしていた。

「ああ、あったよ。強化方法を聞いてきた。それより聞いてくれよ。奴らカースシリーズをチート扱いしてきやがってよ？」

「カースシリーズですか。初めて解放した時が懐かしいですね。」

「ああ、つい最近のように感じるよ。」

「え？何々？何の話？」

ターニヤが興味深々に駆け寄ってきた。

「ライト、それは私も知らないな。教えてくれないか？」

「よし、教えよう！あれは、まだエクレールとターニヤが加入する前の話だ……」

そして次の日、俺は武器屋に来ていた。

ウエポンコピーとかいうやつを試しにきた。

カランカラン！

「いらつしやい！」

店主がタバコを吸いながら迎えてくれる。

「さてと……鎧見て良いかい？」

「ああ、良いぜ。そして良かったら買って行ってくれ。」

「ふむ……」

俺は次々に鎧を手に取っていく。

ブロンズメイル認証：解放。

——新たに仮面ライダーカイザ、イクサを解放しました。——

すごい、確かに解放された！なら！これは！

「おい、それは女性用だぞ！」

「ほえ？」

——新たに仮面ライダーファミ、マリカ、ポップビーを解放しました。——

ま、解放されたし、いつか。

その後は特に解放されなかったため、外に出た。

「よし、みんな。今までの分を取り戻すぞ！」

「「「「おおお!!」「」」」」

俺たちは船に乗りこむ。

「これはこれは鎧の勇者様。」

「なんだ？分かるのか？」

「ええ、分かりますとも。人、亜人、獣人と多種多様な6人組といえは貴方方ですよ！」

「そうか、有名人って：いいいな：」

その後、俺たちは船に揺られて昨日よりも活性化し、その分人が増えた島にたどり着

いた。

「さて俺は…」

試してみるとするか！

トランスチームガンにコブラロストフルボトルを挿す。

コブラ！

「蒸血！」

そして引き金を引いた。

ミスト！マツチ！

コ・コツ・コブラ：！コブラ：！ファイヤー！

俺の周りを花火が舞い、ブラッドスタークへと変身した。

「さてと、新たに進化したこの姿を魔物どもにお披露目するのでしょうか！」

すつかり声を金尾ボイスにし、歩き出す。

「やっぱ・ライトつてあの姿になるとテンションが違うよな？」

「同感だ。」

そこ、聞こえてんぞ。

第29話

「くらえー！」

フルボトル！スチームアタック！

タンクフルボトルを挿し、引き金を引くと戦車の砲弾が飛び出し、魔物を一掃する。

「ガアアアアア!!!」

俺の隙をついたつもりなのか、魔物が俺に喰らい付こうと飛びかかる。

だが、俺は冷静にそちらに左手を向け、ステイングヴァイパーを出し、魔物を貫く。

すると敵はビリビリと痺れたようになり、地面に落下し、俺は頭を撃ち抜いた。

「これまでとは段違いのパワーだ。こりゃあ、いいー！」

俺は魔物が落とした素材を拾い上げ、トランスチームガンに吸わせた。

どうやら普段なら胸当てに吸わせたらいいが、変身してる時は変身機構に吸わせるらしい。

つまりネクロムだとメガウルオウダーについて感じた。

ほう、今のは神経毒か。毒のパワーが上がってるな。

「強くなってませんか？それ。まさか…」

「そうだ、ピーター。これは他の勇者との会談で知った事だ。アイツら、嘘じゃなかった事だ。」

「更に：これもやつとくか。」

俺はコブラボトルを抜き、バットボトルを挿す。

バット！

「蒸血！」

ミスト！マツチ！

バット・バツ・バット：！！　ファイヤー！

俺は直接ナイトローグへと変身をした。

今までなら一度変身を解かなきゃ出来なかったが、これはいい。

「禍々しい…だが、その中に美しさを感じる…」

エクレールが思わずそう呟く。

「なあ、いつカルマードッグってやつが出るんだ？」

「あたしも早くワンちゃん見たい〜」

ナーガとターニヤの口からカルマードッグという名が出た。そうなのだ。

今日はカルマードッグという魔物を討伐しにきたのだ。

だが、中々姿を現さない。

「こりゃ、多分だけど奥にいるね。私の中の狼の勘がそう叫んでる。」

ミコが空気中の匂いを嗅ぐために鼻をスンスン鳴らしながら答える。

ガサツ！

だが、その瞬間向こうから目の前に現れた。数は5匹！

犬種はゴールデンレトリバーっぽいな。

「ガウツ！」

「展開！」

カルマードッグが牙を剥いて飛び掛かってきた為、俺の声で散らばる。

「ドラゴニック！スマッシュユ！」

ナーガが棍で頭を打ち据える。

「賢狼の一閃！」

ミコがすれ違いざまに爪で切り裂く。

「魔円突！」

エクレールが剣に魔力を宿した突きを繰り出す。

「お兄ちゃん！」

「ああ！」

「シールドバッシュユ！」

「ヒールショット！」

ターニヤを空にあげたピーターが盾の殴打で足止めをし、それと同時に空から降ってきたターニヤがカカト落としを決めた。

「これでどうだ！」

フルボトル！ スチームアタック！

俺はトランスチームガンとスチームブレードを組み合わせてライフルモードにし、ハリネズミのボトルを装填する。

銃口から無数の針を横したエネルギーが飛び出し、カルマードッグを爆発させた。

「お・ド・ロップ品に爪があるぞ！ ミコ！ お前着けてみるよ。」

ミコに手渡すと、早速装着して振ってみる。

「へえ、思ってたよりも使いやすいね。しばらく使ってみるさ。」

俺はカルマードッグの素材をトランスチームガンに吸わせると変化があった。

ポイントを獲得したようだ。

これでまた後で何かに振り分けるか。

「ライト。鉱石ってこれ？」

ターニヤが手に持つ石を確認する。

「ああ、それぞれ。ありがとうな。」

ターニヤから受け取り、トランスチームガンに吸わせた。

次の日は狩場を変えてカルマー اسکイレルを狩った。

この日は仮面ライダーエボルの姿になっている。

最初、この姿に変身した時は驚かれたものだ。

デメリットは奇跡的に無くなっていた。まあ、真カースシリーズで使った方が火力は高いけど。

だが、この姿に変身した事で周りの冒険者に鎧の勇者だとバレてしまった。

俺がクーデターを起こしたことはどうやらかなり有名らしく、俺のこの姿は好奇心と恐怖が入り混じった目で見られていた。

「なあ、ピーター。途中で手に入ったカルマーラビットソードはどうだ？」

「そうですね、振った感じは軽いですよ。しかし、癖が凄いですね。剣はそれ込みで愛してあげる必要がありますけど。」

この前知ったことだが、ピーターは刀剣のマニアだった。以前レジスタンスにいた頃は倒した敵から鹵獲してコレクションを作っていたとか。

更に次の日のことだった。

カルマーペンダーを倒した時に思わず二度見してしまうようなドロップ品があった。

ペングー着ぐるみ？なにこれ？

木に立てかけると、驚く。マジの着ぐるみじゃん。

ネタ装備が過ぎるだろ。どうしろと。

「なあ、これどうする？見た感じは性能はいいぞ？」

「こんなふざけた見た目なのか？」

ナーガが棍で突きながら笑う。

「じゃあ、じゃんけんで負けた奴が着ろよ？せえの！じゃんけん…！」

「ピーターwwww」

「いや…ライトwwww笑ったら可哀想…ブフツ！」

「お似合いよ？ピーターwwww」

「ふむ…これを着こなすとは…」

「可愛い！お兄ちゃん！」

「お前ら…ターニャ以外は覚えてろよ。」

結果、ピーターが負けてしまった。

そこから帰るまではピーターが鬼の如く、パワーとスピードで敵を狩り尽くして行っ

た事は忘れないだろう。

第30話

「有意義な戦いだっただな。」

「ですね。」

俺たちは帰りの船に乗っていた。

俺たちのレベルは平均で75になっていた。

だが、残念だった事を挙げるとすれば途中でレベルの伸びが悪くなった事と、敵が弱くなった事だった。

あのカルマー系がワンパンでやれるくらいになっていた。

「ファイロちゃん！」

ペンダー着ぐるみを着たターニヤが同じく着ぐるみを着たファイロと遊んでいた。

「元気だな、お前のところのファイロ。」

「ターニヤもな。」

それを見ながら尚文と笑っていると尚文が何かを見つけた。

「どした？ああ、あれか。」

甲板の隅を見ると、元康とリーシアが何かを話していた。

ナンパか？　そういや、元康が気になってる女の子リストにリーシアも入ってたな。懲りねえな。アイツ。

俺たちは元康の方へ歩いて行つた。

「よう！元康！お前も懲りn・」

「よう！尚文、来人！後は任せた！」

そう言うとうと無理矢理リーシアを俺たちに押し付けて走って行ってしまった。なんだ？アイツ？

「どうしたんだ？リーシア？」

俺が顔を覗き込むと目が腫れていた。まるで泣きはらしたようだった。

「：なにがあつた？」

「い、いえ：何も：」

そう言うてリーシアは座り込み、顔を伏せてしまった。

「元康に何かされたのか？」

「違います！モトヤス様は私を元気づけようと：私は大丈夫ですから：」

そう言うとうとフラフラと歩いて行ってしまった。

「尚文、お前アレをどうみる？」

「わからん。今はそつとしておこう。」

俺は心の中に違和感を残しながら船室に戻ることにした。

次の日、やはり昨日のことが気になり、俺は外に出た。

「こういうのは、当事者に聞くのが一番だなあ……と……やはりお前もか。」

「そういう来人もか。」

尚文が元康の部屋の前にいた。

部屋をノックすると、「はいい！」と女1がドアを開けた。満面の笑みで。

「こいつ、こんな顔できたのか。」

「：なんだ、アンタ達か。」

「なんだとはなんだ。」

俺が言い返していると尚文が中に向かって呼びかけた。

「お前に用はない。元康！いるんだろ！」

「どうした？お前らが来ると、この子達が怯えるだろ？」

元康がビッチと女2に挟まれる形で座っていた。

「お前に昨日のことで話がある。」

「アレか：チツ！わかった。外で話そう。」

元康が女達に留守番してるように言っ出てきた。

「説明してくれ。じゃないと俺たちは動けない。」

「ああ、わかった。話す。だが、その後は今度こそお前らに任せるからな?」

そう言うと元康は話し始めた。

それを聞いた俺たちは、怒りが湧き上がり、気がついたら樹の部屋のドアを蹴破つていた。

「樹!!!出てこい、この野郎!!!」

俺がドアを壊さんとする勢いで蹴破ると樹が中で飛び上がった。

「な!?!なんなんですか!?!貴方達は!?!」

「なんなんですか?じゃねえぞ!この野郎!」

「貴様ら!イツキ様になんて口の利き方だ!」

派手鎧が掴みかかってくるが、俺は地面に引き倒し、トランスチームガンを向けた。

「:邪魔すんなよ?俗物が。」

俺は派手鎧を解放し、樹を睨みつける。

「俺たちはお前が掲げる正義とやらに失望したぞ。」

尚文も俺に負けないくらい怒りを露わにしながら言う。

「だから！僕が何をしたって言うんですか！」

樹がテーブルを叩いて立ち上がった。

すると俺たちの怒りが分かったのか、妙に落ち着いた感じで言った。

「ああ、今分かりましたよ。リーシアのことですね？アレは彼女が悪いのですよ？」

「黙れ！」

俺たちが元康から聞いたことだ。

リーシアは樹に冤罪をかけられていた。

罪状は樹の腕輪を破壊したことだった。

部屋に帰ってきたリーシアはいきなりそう告げられたらしい。

もちろん違ふとリーシアは反論したが、ほかの仲間達がリーシアが壊して、それを隠したのを見たと言言。

それでもやってないものはやってないとリーシアが反論すると樹は思いもよらない判決を下した。

解雇だった。それを樹が告げた瞬間、派手鎧達が、ほくそ笑んだのをリーシアは見た。だが、それどころではないリーシアは縄り付くように樹に撤回を求めた。

樹は一瞬、目を泳がせながら撤回しようかと悩んだらしい。だが仲間達がこぞつて、
「ここで許したらつけあがる！」だとか、
「正義の名の下に断罪すべきだ！」とか言ったらし

い。

結局、その言葉に流される形でリーシアはパーティを追放されてしまったと言う。

「やれやれ、貴女にはがっかりです。反省していれば僕がみんなを丸め込んで復帰させようと思いましたが：告げ口ですか。言葉ありませんよ。」

樹の言葉に振り返るとリーシアが立っていた。いつからいたのかは知らないが。

「リーシアからは何も聞いてねえよ。元康が無理矢理聞き出したんだよ。」

「だとしても話した事には変わりありませんよ？ここまで反省の色が見られないのもおかしい話です。」

「お前：少しは考えなかったのか？コイツらが嘔吐してるつて。」

「仲間を疑えつて言うんですか？貴方も薄情ですな。それにリーシアさんはまだ加入して日が浅いんですよ？なら、どっちを信じるかは明白でしょ？」

コイツ：本気で言ってるのか？

ここまで腐つてるとは思わなかったよ。まだ初期の元康の方がマシだったよ。

アナスタシアに探らせておいて正解だったよ。

結論から言つて真犯人は派手鎧共だ。

「いい事教えてやるよ。本当に腕輪を壊したのはお前の後ろにいる奴らだ。これは影から聞いた事だ。影がバツチリ一部始終を見たつてよ？そもそも何故その派手鎧共は

壊してる一部始終を見てたんだ？普通仲間なら殴つても止めるだろ？」

「そこまで知ってるんですね？そりや簡単な話ですよ。彼らはリーシアの口から言わせる事を選んだんですよ。それに僕も知ってますよ？今回来ている影は貴方のお仲間の親類だそうじゃないですか。つまり貴方が有利になるような証言じゃないんですか？」

「まあ、百歩譲つて仲間達がリーシアさんが腕輪を壊すのを何も言わずに見ていたのはおかしいとしましょう。しかし、彼らは敢えて自分たちが悪者になつてまでリーシアさんを戦いから遠ざけようとしたのですよ？」

「は？」

「この際です。はつきりしときます。リーシアさんは戦いに不向きです。彼女が私のために戦いたいと言つてくれたから仲間になりましたが。人間には向き不向きがあります。これはリーシアさんがいない時に決めました。」

「話をすり替えてんじやねえぞ、お前ら。あ？要するにリーシアが邪魔だったんだろ？でも辞めさせる方法がない。だから冤罪をかけて辞めさせる口実を作った。違うか？」

「貴方は何を聞いてたんですか？僕らのこれは優しさですよ？」

「どこが優しさだ？この野郎。ただのエゴだろうが！クス共が！」

「頭が固い人ですねえ。分かりました。更にはつきり言います。リーシアさん。貴方は弱すぎるんです。正直足手まといです。」

「とうとう本性現しやがったな。この外道が。」

コイツらは正義なんかじゃねえ。悪だ。それにドス黒い悪だ。

「っ！」

最後の言葉が決め手になったのか、リーシアは走って行ってしまった。

「おい！待て！」

俺の制止虚しくリーシアは走って行ってしまった。

「デメエらがここまでクズとは思わなかったよ。」

そう言う尚文はリーシアの後を追いかけて行った。

「ふん！泣けば良いと思ったら大間違いですよ！」

「尚文の言う通りだ。お前がここまでクズだとは思わなかったよ。お前にはとことん失

望した。俺はお前を勇者だとは認めない。ただのカルト教団だ。」

「言いたいことはそれだけですか？なら出てってください。邪魔です。」

「ああ、こつちこそお前と関わる気はない。せいぜいイエスマン共に囲まれて仲良しこ

よししてろ。」

「出てってください!!!」

樹が弓を引こうとするのを無視してリーシアを探すために甲板へ走った。

早く見つかった。

ずぶ濡れのフィードとターニヤと尚文が立っており、リーシアは同じくずぶ濡れでフィードに唾えられていた。

誰が見ても分かる。

身投げだ。

「来たか。来人。」

「ああ、説明しなくて良い。何をしようとしたのかは分かる。」

「ゲホッ！ゲホッ！」

飛び込んだ際に水を飲んでいたのでリーシアは咳き込む。

「さて、リーシア。今死ぬつもりで飛び込んだお前は一度死んだ。これからどうする気だ？」

尚文が腕を組みながらリーシアに聞く。

「……死なせてください。イツキ様に捨てられた私に価値なんかありません。」

「そこまでして死にたいのか？」

「はい。」

「そうかそうか。確かにそれは自由だが：俺が許さん。」

その言葉にリーシアは顔を上げる。

「お前は悔しくないのか？ いわれもない冤罪をかけられたんだぞ？」

「ですが：私が弱いのは事実です・」

「誰が決めたよ？ そんなこと。」

「イツキ様に・」

尚文はため息をつく、こう言った。

「それがどうした？ 確かにお前の中で樹が全てだろうよ。だけどお前が弱いなんて誰が決めた？ 確かに俺から見たらお前は器用貧乏だ。戦ってる最中も、やれ攻撃だ、やれ回復だと指示されて動いてたよ。だけどお前の魅力をつかてない。」

「私の魅力？」

「ああ、お前は間違った方に成長してる。お前は剣士向きじゃない。お前は魔法支援型だ。」

「そう・なのですか？」

「ああ、断言してやる。」

「私も強くなれますか？」

「なる。絶対なる。だから死ぬな。俺のところ来い。お前を必ず強くしてやる。」

そう言われたリーシアは一瞬戸惑った顔を見せたが、しっかりと尚文の顔を見た。

「：私の心はイツキ様のものですよ？」

「構わん。」

太刀の勇者は立ち直れないコラボ①

俺たちはカルミナ島から帰還し、久しぶりに自身の村に戻ってきた。

俺達がカルミナ島に行つてた間に女王の援助と、集まってくれた有志の方達のお陰でだいぶ復興が進んでいた。

そして帰つてから数日後の今日は正式にエクレールがこの村の村長になる式典があつた。当初エクレールは断つた。

私になるべきなのか？ここはライトの方がいいのではないかと。

だが、エクレールは領主の娘だし、この地は俺が権利など諸々引き取つたとはいえ元々セーアエツト領だ。なら：俺のじゃない。

「エクレール・セーアエツト殿。貴君をこの村の村長に任命することをここに記す。メルロマルク国女王 ミレリアⅡQⅡメルロマルク」

女王は多忙で来られなかつた為、影が持つ水晶越しに女王は祝辞を述べ、名代として継承権一位のメルティが証明書を渡すこととなつた。

式典には尚文、ラフタリア、フイーロも参加している。

そして俺は副村長に就任した。

そして俺とエクレールがいない間はセバスが臨時の村長となる事が決定した。

そして俺たちがカルミナ島に行つてた間、色々と変化があつたようだ。

まずリファナだ。彼女はもう歩けるようになっており、自分を診てくれた今は亡きポールのようになりたいと医者者を志すようになった。

次に魔物や亜人の数が増えてるつてところだ。どうやらセバスは使えるものは使おうという性格らしく奴隷商から奴隷や卵を購入しており皆、種族の垣根を超えて田畑を耕し、物を作り、生活していた。

驚いたのはあの日から捕虜にしていた影がすっかり毒気が抜けたかのように村の一人になつていたことだ。

そして、どうやら近々元盗賊団の一人が亜人と結婚するらしい。

そしてエクレール村長、ライト副村長就任の記念として宴が行われた。

皆どんちゃん騒ぎだ。

「うへへ！ライトオ！」

「おい、ナーガ。飲みすぎだ。」

「飲み過ぎ？俺は龍だぞ？酒如きに呑まれるかよ！」ボオオオオ!!!

「おい！火を吹くな！」

「ははは、ナーガ殿。火はやめときなさい。」

いつのまにかセバスがワインを片手に現れ、ナーガをなだめている。

「セバスさん。飲んでますか？」

「ああ、ご心配なく。私は訓練によっていくら呑んでも酔わないようにできております。それもそうですが、ナオフミ殿は素晴らしいですね。訓練をせずに酔わないとは。」

「ああ、俺もびつくりだよ。」

これはカルミナ島で知ったんだが、アイツめちやめちや酒強いのな。

アイツ知らずにバクバクとルコルの実を食ったらしいが、あれって大樽いっぱいの水に一粒入れて、やっと飲める位の酒が出来上がるつてのに。

俺もチャレンジしたけど、5個で吐いたぞ。

晩飯のシーフード達が母なる海に還っていったのは悲しかったな。

そうだ、エクレールは？

あ、いた。

仲のいい兵士に囲まれていた。

「すごいじゃないか、エクレール！それにしても村長か〜」

「私も土地欲しいなあ〜」

「だったら武功を立ててないとな〜！」

「ははは：お、ちよつとすまない。」

エクレールは俺が視界に入ったのか輪を抜け俺の方に歩いてきた。

近づいてきて分かったが、呑みでるのか顔がほんのり赤くなっていた。

「よう、エクレール村長。」

「ライト。私は村長になるぞ。そして作るぞ！亡き父上が作ろうとしていた種族の垣根を超えて皆が手を取り合う平和な村を！」

「その意気だ。俺も副村長としてサポートさせてもらおうぞ。」

その時だった。

頭の中に念話が響く。

（ライト君！ライト君！）

「すまない、ちよつと野暮用だ。」

俺はエクレールとの話を切り上げ、女神と話す。

（また緊急ミツションだよ。今から来れる？）

（ああ、いいぞ。）

（ありがとう。じゃあ！）

俺は天界に転移した。

久しぶりの殺風景な部屋だ。

いつも通りの女神と向かい合わせの椅子に座る。だが今日は少し違う。女神の横におっさんが座っている。

「……誰です？」

「ああ、紹介が遅れたね。彼は他の世界を担当している神様。元だけど彼も盾の勇者の成り上がりの世界を担当していたんだよ。」

「よろしくお願ひします。」

「こちらこそ、よろしくお願ひします。それで？俺なんで呼ばれたんです？」

「それは彼が話してくれる。」

「実は私はもう死んだ人を転生させるといふ仕事はしていませんが、私は最後の仕事としてあなたのような男性を送り込みました。その名は龍二、太刀の勇者です。彼はあなたのように盾の勇者を助け、仲間を集めて暮らしていました。しかし、彼は……」

一瞬言葉に詰まるが、また話を続ける。

「神の禁忌を犯しました。元はといえば私がやると使命から解放されると舞い上がり、その辺りを詳しく説明しなかったからです。そのせいで彼は勇者を辞めさせられ、普通の人間としてまたやり直すことになりました。」

「ですが、彼には非情な運命が待っていたのです。転生した先で黜られ、以前自分が助け

た盾の勇者にまで罵られ、かつての仲間を目の前で殺され、絶望の淵に立たされた彼は：魔物になりました。それにふつうの人間故に貴方のような創作上の力が使えず、死にたくても不死の呪いをかけられているため、死ぬことさえ許されません。彼は世界を終わらせるまで、その十字架を背負い続けるのです。」

「そして今、彼は魔王になり、世界に反旗を翻し残虐の限りを尽くしています。彼のせいで数多くの人の命が奪われました。その中には勇者も：こんな事言っちゃいけないのは分かりますが：まだ剣、槍、弓、盾から犠牲者が出てないのが救いです。」

神のおっさんは急に立ち上がると土下座をし始めた。

「無様な姿を晒しているのは分かっています。私のことを何と罵ってくれても構いません！お願いです。龍二君を：龍二君をここに連れ戻してくれませんか？連れてきてくださいれば彼の記憶なりを消して、元の世界に返します。」

その言葉に反応したのは女神だった。

「待つてください！そんなことしたらあなたが：」

女神が反論するが額を床につけたまま、おっさんは返事をする。

「ええ、分かっています。龍二君の判決は神の裁判によるものです。覆すことはできません。そこに私が介入して無事でいられると思っていけません。ですから貴方や女神さんには責任が及ばないようにします。」

「彼がこうなったのは私の責任です。」

「……………」

今、神のおっさんは俺に土下座をして、自分はどうなってもいいから助けてくれと頼み込んでいる。

勇者とはいえ、ただの人間の俺に。

「……………分かりました。」

「では—」

「引き受けます。あと現在のの世界と、勇者だった頃と現在の龍二という男についてももう少し詳しく教えてください。いいですか？」

「はい！是非！」

「なるほど…なら…一人連れて行きたい奴がいます。いいですか？」

「はい、是非。ありがとうございます…ごぎいます…龍二君をよろしくお願いします。」

ボロボロ泣く神のおっさんと、それを慰める女神に見送られ、俺は戻った。

“アイツ”を連れて行こう。アイツなら…

太刀の勇者は立ち直れないコラボ②

次の日、俺は昨日から村に滞在している、”そいつ”に会いに行った。

「よう、今大丈夫か？」

櫛でフィー口の毛づくろいをしていたラフタリアを呼ぶ。

「はい！なんですか？」

「どうした？ラフタリアに用か？」

ラフタリアよりも尚文の方が部屋の入りに近かった為、近づいてきた。

「尚文。ちょうどよかった。」

「ラフタリアを借りたい。」

その言葉に尚文が怪訝そうに聞き返す。

「ラフタリアをだど？なぜだ？」

「すまん、本当は他言無用なんだが：お前ならいいか。異世界の元勇者を助けに行く。」

「異世界の元勇者だと？波の尖兵の話か？」

「いや、違う。なんと説明して良いか：今は信じてほしいとしか言えない。頼む。ラフ

タリアは何があっても必ず無事にお前のもとに返す。」

「……………」

尚文は何も言わずに俺の目を見る。

「……………信じてくれ。」

俺は目を見返す。

「……………分かった。ラフタリアはどうだ？」

「え？ああ、はい。行きます！」

「ありがとう。俺、島でお前に皮袋を渡したろ？それを使う時が来た。開けてみてくれ。」

ラフタリアはそれを恐る恐る開けて驚く。

「これって……！」

「ああ、これは、もうちよい後で使って欲しかったんだが……そうは言ってもらえん。」

こうして話を聞いた仲間たちに俺とラフタリアは見送られる。

「ライト。ご無事で。」

「絶対帰ってこいよ。」

「待ってるわ。」

「ライトがない間はセバス殿がサポートしてくれるが、早く帰ってきてくれ。」

「体に気をつけてね？」

「ライト殿。ご武運を。」

俺がピーター、ナーガ、ミコ、エクレール、ターニヤ、セバスに見送られてる横で、ラフタリアは尚文とフィードロに見送られていた。

「ナオフミ様……」

「頑張れよ、ラフタリア。お前は俺たちの代表だ。」

「がんばってね、ラフタリアおねえちゃん！」

「うん！行ってきます！」

俺はディエンドライバーを手に持ち、オーロラカーテンを発動する、
こうして俺達は龍二がいる異世界に旅立った。

——龍二がいる世界——

突如空間に陽炎が現れ、靄が現れ、俺たちは、異世界に到着した。

「無事、到着したみたいだな。」

「ええ、あと……恐らくここはゼルトブルのコロシウムですね。」

「そうか、まずは龍二を探さねえとな。」

俺たちは街中を散策する。だが人が見つからない。

おかしい……ここはゴーストタウンではないはずだが……

すると、目の前を白衣を着た痩せた男が歩いてきた。

「おや？この街に人が来るとは珍しいですねえ。旅人ですか？」

「……！　　：ああ、そんなところだ。」

「そうですか。悪いことは言わない。理由を聞かずにこの場を立ち去った方がいいでしょう。」

「そうか……わかった、そうするよ。忠告ありがとうな。あんたも気をつけろよ。」

忠告を素直に聞き入れた俺たちは街を出ることにした。

それを後ろから白衣の男が見ていた。

「ふむ、今の男はともかくラクーン種の女からはなにかを感じましたねえ。苗床にすることもよぎりましたし、それと勇者かと思いましたが……まあ、ハイドが騒ぎ出さないの
で違うのでしょうか。ふふふ。」

そう笑うと白衣の男こと、ジキルはアジトに戻っていった。

「手がかりがなさすぎますね……」

「……気づいたか？」

「何がですか？」

「あの街……恐らく何者かの手に落ちてるぞ。」

「え!？」

ラフタリアは気づいていなかったのか、驚き振り返ろうとする。

「振り返らずに聞け。あの白衣の男・只者じやない空気を感じた。とりあえず、なんとか勇者だと悟られないようにしたが……」

「そんなことが……そうだ!メルロマルクに行きませんか?」

「そうか!そこなら!」

俺たちはメルロマルクまでオーロラカーテンで移動した。

中に入ると、俺たちの世界とは変わらない街並みが広がっていた。

「おっと、気をつけるよ。ラフタリア。この世界には、この世界のラフタリアが存在している。とりあえず顔を隠せ。」

ラフタリアにフードを被せると歩き出した。

俺たちが教会に近づいた時だった。

なにやら怪しげな会話が聞こえてきた。

「ふふ、教皇様の計画は順調か?」

「ああ、問題ない。予定通り明日決行される。」

俺たちは物陰に隠れてそれを聞く。

「おい、聞いたか？」

「ええ、はつきりと。」

「今の話からするに：あれはクーデターだ。」

「私もはつきりと覚えています。」

「俺だってあの日のことは未だに忘れない。今でも夢に出る。」

「ライトさん：」

「いいんだ。それより今がいつくらいなのかが分かった。」

「ですが：肝心の龍二さんが：」

「いや、恐らく奴は現れる。」

「分かるんですか？」

「ああ、ここからは宿屋で話そう。」

俺たちは宿屋に移動し、部屋を：節約のためだとラフタリアに言われ一つ取った。

鍵をしっかりとかけ、俺とラフタリアは互いのベットに腰掛けた。

「続きを話そう。奴はゴブリン部隊を増強しようとしている。ゴブリンはどうやって増えるか：？女性のお前に言いたくないが、主に人間とか：それ以外だとラフタリアのよ
うな亜人も対象だな。女性を捕まえて無理やり苗床にする。それを調達できる場所と
いえば：答えは一つだろう。」

「三勇教から…」

「そうだ、お前も見ただろう？あの中に女性がいたのを。俺だったら確実にそこを狙う。それに死力を尽くした戦いだ。お互いに疲弊しているはずだ。そして奴は勇者時代に、そこで戦っている。そのあとどうなるかを知っているなら両方潰すチャンスと考えるだろう。」

「確かに…言われてみれば。」

「明日はそこに行くぞ。」

明日は戦闘だ。だったら、ちようど振り分けてないポイントがあるんだ。振っておこう。

次の日、俺たちはそこを目指した。

だが：

「おい、聞いてねえぞ！どうして、ここに三勇教徒が湧いてんだよ！」

「分かりません！」

俺たちは絶賛戦ってる最中だった。

俺の腰にベルトを出現させ、カードを一枚取り出した。

「変身。」

チエンジ！

カードをラウズし、俺は仮面ライダーカリスに変身した。

俺はすぐに醒弓カリスアローで敵を切り裂く。

「早いところ片付けるぞ！」

俺はカードを3枚カードをラウズする。

フロート！ドリル！トルネード！

スピニングダンス！

「くっえ!!！」

俺は浮遊し、更に竜巻を纏いながら上昇し、きりもみ回転のキックを繰り出し奴らに当てずに地面にぶつけた。

その衝撃と風圧で吹き飛ばし、見事全員気絶させることに成功した。

「急ぐぞ！」

俺たちは、やっと目的地に到着する。

「もう、戦いは終わってますね。」

「ああ、だが・おい、あれ。」

俺が見つけたのは、無数のゴブリンを引き連れた勇者とは違う禍々しいオーラを纏う男だった。

「あれ…ですか？」

「多分な。」

とりあえず様子をみようか。

龍二と思われる男がゴブリンをけしかけたと思えば、他の勇者たちを蹂躪し、女王に襲いかかる。

「ラフタリア…いつでも飛び出せる準備をしておいてくれ。」
「分かりました。」

ラフタリアは剣を抜いておく。

さて：俺は：これだな。

シアン色の銃、ネオディエンドライバーを手に持つ。

あ！フィーロとメルティが魔法を！

「フィーロちゃん・メルさん…」

ラフタリアは飛び出しそうになるのをグツと堪える。

辛いだろうな、だがまだ待ってくれ。

そして、二人も敗れ、この世界のラフタリアが飛びかかった。

ガキッ！ガキッ！

龍二と、ラフタリアが剣を打ち合う。

だが、龍二の方が一枚上手：いや、奴はラフタリアの剣筋を知ってるから有利だ。龍二を袈裟斬りにするラフタリアの剣が龍二に刺さるが、途中で止まってしまおう。そのままラフタリアは尻餅をつき、龍二がラフタリアを殺そうと剣を振り上げた。

マズイ!!!

「ラフタ…」

俺が横を向きながら声をかけた時にはラフタリアは、走り出していた。

「はああああアアアアア!!!」

「あん？」

龍二が気づいた。ならば！

俺はデイエンドライバーの銃撃で剣を弾き飛ばす。

ズバツ！

ラフタリアは龍二を袈裟斬りにすることに成功する。

何が起きたのか理解できていない龍二はすぐに距離を取り、自分を斬った相手を見て驚いた。

「な…どういことだ…」

龍二の目の前には、剣を構えて、こちらを睨みつけているラフタリアがいたからだ。

龍二はラフタリアの幻惑を疑ったが、自分が殺そうとしたラフタリアは本物だ。

「ラフタリアか？」

「え：私が：もう一人：」

「やっど追いついたぞ。龍二。」

来人がデイエンドライバーを携えて歩く。

「何故、俺の名を知っている？ いや？ 待てよ：その銃はデイエンドライバーだな？」

「当たり前だ。」

「なるほど：俺と同じ転生者って訳か。しかも俺と同じ時代の。」

「ああ、その通りだ。ある神様のおっさんから頼まれたのさ。あんたを連れもどせってな。Only Alive：だろうな。」

龍二は手から離れた剣を拾い直すと、声を上げて笑い出す。

「はっはっは!!!! どうか、あのおっさんがアンタにか！ だが：」

龍二はひとしきり笑うと真剣な顔に戻る。

「嫌だと言ったら？」

「なら：強引にでもだ。」

俺はカードを一枚取り出し、装填する。

そしてその横でラフタリアは教えた通りエポルドライバーを巻き、ボトルを二つドライバーに挿した。

カメンライド!

【アライグマ! 幻惑! エボルマツチ!】

俺はゆつくりとデイエンドライバーを上にも構え、ラフタリアはレバーを回す。

【Are you ready?】

【変身!】

【変身!】

デイエンド!

【ミラージュラフタリア!!! フツハツハツハ!!!】

俺は仮面ライダーネオデイエンド、ラフタリアはオリジナルの仮面ライダー:

「仮面ライダー・ミラージュ」

うん、ラフタリアがそう言うならミラージュでいつか。

実は俺がクーデターを起こした日、俺は尚文を絶望させるためだけにラフタリアのハザードレベルを上げ、取り憑いたんじゃない。

ラフタリアは以前こう言った。

”私はナオフミ様の剣になる”と。

ならばと、俺はわざとハザードレベルを上げさせ、取り憑いて、かつエボルトの力による遺伝子操作をし、変身する事で負荷に耐えられることを確認した。だから俺はライ

ダーシテムを与えた。彼女なら使いこなせると見越してな。

「面白い・ならば！やってみろ!!!」

龍二が剣を構えて突撃してきた。

太刀の勇者は立ち直れないコラボ③

「面白い…ならば！やってみろ!!!」

龍二が剣を振り上げてライトに斬りかかる。

だが、それはラフタリアが作った幻で、霧散する。

「な!?!」

「こっちだ!」

アタックライド!ネオブラスト!

俺はカードを一枚装填し、撃つ。

「やんじゃねえかよ…どうやらテメエは並大抵の勇者じゃねえようだな!くたばれ!ド

ライファ・ダークネス!

「甘いです!」

ラフタリアが自身の剣、ミラージュソードで龍二の魔法を叩つ斬った。

「ラフタリア!!!」

魔法を斬られた龍二が叫びながらラフタリアに向けたのを見て、隙をついた俺は飛び

蹴りを龍二の側頭部に当てる。

「死ねやアアアアアアア!!!」

「させるか!!!」

そこから俺と龍二は素手による殴り合いに移行する。互いの拳や脚が炸裂する。当てる度に鈍い音が鳴る。

「こいつ・・・デイエンドの装甲の上からダメージを与えてきやがる。」

「あ・あれは・・・いつたい・・」

「大丈夫?」

ラフタリアは、未だに尻餅をついている、この世界のラフタリアに手を貸して立ち上がらせる。

「あなたはいつたい・・?」

「私? うーん・・ややこしいんだけど・・ライトさんの言葉を借りるなら並行世界の貴女。」

「並行世界の・・?」

「うん! ほら! ここは私達に任せて逃げて!」

「・・・うん! ありがとう! もう一人の私!」

この世界のラフタリアは走り、尚文達に合流すると転移で戦線離脱した。

「チツ! 逃したか! 貴様! 仮面ライダーの力に頼りやがって卑怯だろうが!」

「何が卑怯だ! これが俺が与えられた力だ! それより悪いことは言わねえ! 俺と一緒に

来てくれ！」

「うるせえ!!!これが俺が決めた道だ!!!」

来人は隙を突かれて龍二に蹴り飛ばされる。

「終わりだあ!!!ドライファ・ダークネスヘルファイア!!!」

龍二の手のひらにどす黒い火の玉が現れ、それを来人に向けて投げつける。

「当たらなければどうということはない！」

来人は避けながら、カードを4枚装填する。

カメンライド・ギャレン!

カメンライド・バース!

カメンライド・マツハ!

カメンライド・スペクター!

龍二の周りを召喚された四人のライダー達が取り囲み、一斉に銃を構える。

「チェックメイトだ。アンタは重荷を背負う必要なんてない。俺の手を取れ。そしたら楽になれる。」

「本当か？」

龍二は来人の申し出に振り向く。

「本当だ。なんなら俺が代わりにこの世界を終わらせるし、死んでいった仲間だって元

に戻す。だから…来てくれ。」

「そつか…ふう。ゴブリン共!!!!コイツらを皆殺しにしろお!!!!」

「な!?!」

グオオオオオオ!!!!!!

龍二の声でゴブリン達が武器を振り上げ、襲いかかる。

こつちがいくらライダー6人とはいえ、この数は押し返せないし、ラフタリア以外全員銃系のライダーだ!

そのせいで龍二は包围を突破し、今度は俺たちが包围されてしまった。

そして俺はゴブリンに両腕を掴まれ、地面に膝をつかされ、横では同じようにラフタリアも膝をつかされていた。

「形成逆転だなあ? 異世界の勇者さんよお?」

「おい、ラフタリアだけは解放しろ。殺すなら俺一人だ。」

「ライトさん!?!それはダメです!」

「いや、尚文と約束してたら? お前だけは無事に帰すつてな。」

「…ウルセエな。」

俺たちの会話を聞いていた龍二はポツリとつぶやいた。

「分かった。女から先に殺してやんよ。」チャキ!

「よ、よせっ!!」

「砕けちれや!!!!」

ズバツ!

ラフタリアは頭の前から真つ二つに切り裂かれていた。

「あ・ああ・!!!」

「ハツハツハツ!!!!」

フワツ!

だが、真つ二つに斬り裂かれたラフタリアは霞のように消えてしまった。

「私はここです! たあっ!」

ズシャツ!!

近くにいたゴブリンの姿がノイズのように揺れてラフタリアに変わると、来人を拘束していたゴブリンを斬り裂いた。

「ギャギャー!」

先ほどまで、この手で拘束していたラフタリアが自分達の仲間に変化していたことに驚愕し、ゴブリンは慌てふためく。

「隙ありだ！」

ドガツ！

俺は右腕を掴んでいたゴブリンを殴り飛ばす。

「ライトさん！」

ラフタリアが投げたデイエンドライバーをキャッチし、すぐにカードを装填した。

「ファイナルアタックライド！デイデイデイエンド！」

「私も！」

そう言い、ラフタリアはエボルドライバーのレバーをグルグルと回す。

【Ready go！ エボルティックアタック！】

「たあつ！」

ラフタリアは飛び上がると空中で3人に分身し、そのまま滑空する。

「ゴブリン共！奴を撃ち落とせ！」

龍二はそう叫ぶが、ゴブリン達は弓矢や投擲武器を持っていない。

「くらええええええええええ！！！」

キツクが顔に当たる瞬間ラフタリアがまた一人に戻り、そして俺のデイメンションシールドが龍二に炸裂した。

龍二は特撮物の悪役の如く大爆発し、倒れた。

「やるな：今まで戦った勇者の中で一番骨があるぜ？」

「やっぱり、まだ喋れるのか。しぶといな。」

しかし、龍二は剣を杖代わりにして立ちながら言った。

「ああ、だがこれ以上は無理そうだな。あばよ。」

そう言いながら姿を消す。

「逃すか！」

俺がその手を掴もうとするが、ゴブリン達がそうはさせないと立ち塞がった。

「な!?!上等だ! やったらあ!!!」

カメンライド・ガタツク!

カメンライド・イクサ!

カメンライド・アクセル!

カメンライド・クローズ!

俺は目の前で龍二を取り逃した怒りに身を任せて、今度は剣を使うライダーを召喚しラフタリアと共に残ったゴブリンを撃破し、素材はありがたく回収させてもらった。

太刀の勇者は立ち直れないコラボ④

「逃げられたか…」

「そのようですね…」

俺とラフタリアは変身を解除して誰もいなくなった荒野に座り込む。

龍二は戻る気はない。誤算だったな。承諾してくれると思っただが。

「ライトさん。彼はどんな勇者だったのですか？」

「そういや教えてなかったな。奴は俺と似た世界から、この世界に来た勇者だ。俺と同じようにいわれのない罪を着せられた尚文を助け、正義のために戦った一人の男だ。最初は太刀の勇者、後に鞭の勇者になった。そして平和に暮らしていたんだがな：事件は起きた。」

「事件…」

「神の禁忌を犯した：そのせいで奴は全てを奪われた。過去に自分が助けた尚文に邪険に扱われ、元の仲間を目の前で殺され、挙げ句の果てには自らの手にかかる羽目になった。そりゃダークサイドに堕ちるよな。」

「彼も…完全な悪ではなかったのですね。」

「ああ、当初はただ勇者の仲間として戦うつもりだったんだらうよ。」

俺の話聞いて悲しみから俯いていたラフタリアだったが何か気がなったのか顔を上げた。

「そういえばなんですけど……どうして私なんですか？」

「何が？」

「どうして私を連れてきたんですか？」

「ああ……それね。ライダーシステムを確認したかったってのもあるんだが……実はな、奴が全てを奪われる前の話なんだがな？ 奴はその世界のお前と恋仲で結婚する話もあったらしいんだ。だから、お前が現れたら動揺すると思ったんだが……この世界のラフタリアへの態度を見て分かったよ。そんな甘い話はない。」

「これからどうしますか？」

「決まってるだろ。ゼルトブルへ行く。恐らく奴はそこだ。いなかっただとしても……炙り出せばいい。」

俺達はゼルトブルへと移動する事にした。

「意外と人……いたんですね。」

「ああ、意外とな。」

俺達が街に戻ると人が多くいた。

そうか、来た時はあまり大通りを通らなかつたからか。

「：いましたね。」

「ああ、簡単に見つかったな。」

武器屋の前に龍二と、自分達が会話した白衣の男、そしてもう一人女の子がいた。暢気に買い物か。どっかで見たことあるんだよなあ、あの子。

俺達が武器屋のほうに歩いていくと龍二が気づいた。

「来たか。」

「ああ、まだ諦めきれなくてね。」

「リファアナちゃん!？」

「ラフタリア：ちゃん：。」

「ジキル、リファアナを任せたぞ。」

「はい。リファアナさん、こちらへ。」

「龍二さん！頑張ってください！」

ジキルはリファアナを連れて遠く距離を取るように離れた。

「俺の見間違いやなければリファアナがお前の仲間になつてるように見えたが？」

「見間違えじゃねえぞ？あの子には、ただ真実を教えたただけ。少し色をつけてな。」

「そうか・なるほどな。」

これは、カルミナ島に行く前に聞いたことだ。

ラフタリアは俺が手にかけて悪徳貴族のもとでリファナとキールと共に捕まっていた。そこを女王の手引きでラフタリアだけ助け出された。その後、奴隷商に引き渡され、尚文の仲間になった。

つまり元々仕組まれていた事だ。

それを教えたってことか。

「お前に勝つにはこれをするしかないな。はあ！」ドオウン!!

俺は力を溜めると真カースシリーズを解放し、ベルトを腰に装着する。

「おいおい、カースシリーズ如きで俺に勝てると思ってるのか?」

「思っちゃいねえよ。俺はこの世界にゲームを持ち込む気は無いが、戦闘においてレベルの差は関係してくると思ってる。ただその差を埋められるほどの技術があれば問題ないがな。だが体感でアンタは俺よりレベルが高い。それだけで考えたら勝てる見込みは無しだ。」

「ほお・なら、どうする?尻尾巻いて逃げるか?」

「バカ言え。俺は勇者だ。そんなみつともねえ真似するかよ。それに勝てる方法はあ
る。」

そう言いながら俺はガシヤットを鳴らした。

仮面ライダークロニクル！

「ようは、レベルという概念をぶっ壊せばいい。」

俺の手から離れたガシヤットが宙を舞う。俺はAボタンを押し、手を動かす。

その手の動きに連動するようにガシヤットはバグヴァイザーIIに挿さる。

ガツシヤット！

「変身。」

バグルアツプ！

天を掴めライダー！ 刻めクロニクル！ 今こそ時は極まれり！

俺は仮面ライダークロノスに姿を変える。だが変身の最中に後ろにゲムデウスが浮

かび、そのまま変身した。

「ほう、クロノスと見せかけてゲムデウスクロノスカ。厄介だな。」

「ああ、これでアンタといくらレベルの差があるうが、関係ない。」

「行くぞー！」

俺と龍二は互いに剣を振り上げ突進し剣をぶつけ合う。

ガキン！ガキン！と金属音が鳴り響く。

「くらえー！ドライファ・ダークネスヘルファイア！」

「甘いー！」

龍二の黒い炎と来人の手から撃ち出されるバーニアバグスターのミサイルがぶつかり合い爆発が起きる。

その衝撃により辺りの道は壊れ、店にまで被害が及び出したため野次馬として集まっていた街人達が次々とヤジを飛ばし始めた。

「ふざけんな！他所でやれ！」

「危ねえだろうが！」

「おいおい、天下の勇者様が往来の人達に危害を加えんのかあ？」

「チツ！戦いづれえ。」

来人はバク転をして、龍二から距離を取る。

「わかった・俺は戦わねえ。俺はな？」

そう言つて来人は剣を地面に突き刺した。

するとその剣を媒介に右から、黒や緑、茶色の民族服のような服を着た青年、黒や紫を基調とした飄々とした青年、ピンク髪のアイドルのような服を着た女性の計三体のバグスターが召喚された。

「バグスター：じゃない？ いや：出来れば普通のやつにして欲しかったな。」

「知ってるなら話は早い。さあ！ やってしまえ！」

「培養！」

「マックス大変身！」

「変身！」

infection！ レッツ・ゲーム！ バッド・ゲーム！ デッド・ゲーム！ ワツチャ・ネーム！

ザ・バグスター：！！

ガツチャーン！ マザルアープ！

赤い拳強さ！ 青いパズル連鎖！ 赤と青の交差！ パーフェクトノックアウト！

ドリーミングガール♪ 恋のシミュレーション♪ 乙女はいつときめきクラ

イシス♪

「さあ！ 俺を越えてみろ！」

「心が躍る！」

「さあー！ じっくりよー！」

変身を終えた3人は各々の武器を構えて走り出した。

ポッピーがレベル50相当、パラドクスがレベル99、グラフィイトがゲームデウスの一部を取り込んだ事でレベルを超越している。いい勝負にはなるだろう。

「さて・俺は見物でもするかな。」

その頃、ラフタリアは・

「待ってよー！ リファアナちゃん！」

「……っ！」

「リファアナさん、苦しいかもしれませんが今の貴女では勝ち目はありません。」

「だったら、ジキルが手助け！」

リファアナがそう言いかけたのをジキルは手で制する。

「それはダメでしょう。これは貴女とあのラクーン種の問題ですよ？ わたしが介入するのは野暮つてものですよ。しかし！」

「困りましたね。アジトに戻ろうにも、あのラクーン種め。予想以上にしつこいですねえ。一度龍二さんのもとに戻りましょう。」

される。

ウラワザ！パーフェクト！ノックアウト！クリティカルボンバー！

「くらえ!!!」

ドゴツ！

パラドクスの両足蹴りをくらい、吹き飛ばされる。その先には来人。

「させるかあ!!!」

龍二はこれ以上くらったらマズイと無理やり体勢を立て直すものの、それは意味の無い行動だった。

「無駄だ。」

ポーズ！

来人は自身のバグヴァイザーIIのAとBのボタンを同時に押して時を止めていた。

「審判の刻は厳粛でなくてはならない……」

来人は空中で固定されたままの龍二の所まで歩き、Bボタンを二回押した。

キメワザ！クリティカルクルセイド！

来人の足元に時計が現れ、その針が動くのと同じタイミングで回し蹴りを放った。

終焉の一撃！

リスタート！

ドガーン！

爆発に巻き込まれた龍二はゴロゴロと地面を転がり動かなくなる。

「まだ死んでいないのか。大人しくなってもらうためにも一度死んでもらうぞ。」

呼び出していた三体のバグスターを消し、バグヴァイザーIIをバツクルから取り外し、腕につけながら来人は近づく。

キメワザ！クリティカルサクリファイス！

「次に目覚めるときは・天界だ。」

そう言い、チェーンソーモードにしたバグヴァイザーを振り下ろした。

しかし、そのときだった。

「やめてええ!!」

咄嗟にリファアナが龍二に覆い被さるようにして庇い、リファアナが背中から大きく斬り裂かれてしまった。

「な!?!」

「リファアナちゃん!!!」

違う世界とはいえ、自身の親友が目の前で斬り裂かれたのを見たことで悲痛の叫びをあげていた。

「うおおおお!!!
!!!龍二さんとリファアナから離れる!!!」ドガッ!!!

来人の真横からジキル博士が変身したハイドが力一杯拳で殴りつけ、来人は建物を突き破りながら激しく吹き飛んでいった。

「ライトさん!!」

ラフタリアは筋骨隆々の男が抱えて去っていくリファナに気を取られ、追いかけたい気持ちを押し殺し来人の救出に向かった。

太刀の勇者は立ち直れないコラボ⑤

「ライトさん！いたら返事をしてください！」

ラフタリアが瓦礫を撤去している。

家を何軒も巻き込んで吹っ飛んだのだ。本来なら死んでる。だが彼は勇者故にこのくらいじゃ死なない。

「だあ！チクシヨー！」

「あ！無事だったんですね！」

来人が瓦礫を吹き飛ばしながら立ち上がった。

「逃げたか。」

「ええ。すいません！」

「お前が謝ることじゃないさ。それよりだ。お前はもう帰ったほうがいい。」

「え!? な、なんで：私だって！」

「ダメだ。ここから先は苛烈な戦いが起こる。正直君を守りながら闘う自信がない。」

「それなら大丈夫です。私だって戦えます！」

「違うんだ。ラフタリアがいくら強くても答えは変わらない。俺は尚文と約束したん

だ。必ずラフタリアを連れて帰ると。物事に絶対はない。俺だって死ぬかもしれないわかってくれ。」

「……っ！分かりました……」

ラフタリアは、これ以上言っても無理なのが分かったのか来人の要望を飲んだ。

来人は無言でオーロラカーテンをラフタリアの後ろに開いた。

「これを通れば向こうの世界に帰ることができる。」

ラフタリアは俺に頭を下げると踏み出した。

「……すまない。」

「いいんです。それよりも……必ず帰ってきてくださいね。」

「ああ、任せろ。」

その言葉を最後にラフタリアを通したオーロラカーテンを閉じた。

「それにしてもどうやって追えばいいんだ？手がかりはなしだ。地道に追うしかないな。」

「はあっ！」ズバツ！

「グギャ！」ドサっ！

「地道にレベルを上げていくしかないのか。」

ラフタリアを帰してから5時間経った。

龍二のアジトは未だに掴めていない。

「こりや何かしらの隠蔽が掛かつてるかもな。」

焚き火に小枝を放り込みながら考える。

「奴は力を蓄えてくるはずだ。なら、こちらもそれなりでいかないと…」

「あれでいこうかなあ…」

そして事態は急展開を迎えた。

二日後。

「おいおい、どういうことだ!」

なんと龍二の使いを名乗るゴブリンが俺に書状を渡してきたのだ。

内容はこうだ。

『今日、夜。ゼルトブルのコロシウムにて待つ。俺を連れ戻したければ来い。』と。

今日の夜か。確か今日は新月：何か不気味だな、嫌な予感がプンプンしやがる。

夜、俺は言われた通りコロシウムに赴いた。

道中に刺客の一人でも用意していると思っただが、杞憂だったようだ。

中に入ろうとした時、黒い山を見つけた。

「なんだ・？・：・：うっ！こ、これは・」

死体だ。気づかなかったが周りに無残に積み重ねられている山は全部死体だった。

老若男女関係なく、まるでゴミ捨て場に積み重ねられるゴミのように人を人とも思わないように積み重ねられていた。

野郎：ますます許せねえ。

俺は目を閉じて自身の胸に拳を当てると、中に入った。

フィールドの真ん中に立つ人影がある。龍二だ。

「デメエは人を殺しすぎた。今から俺はお前を連れ戻すことを考えない。お前を倒す事だけを考えて戦う！」

「俺を倒すか・ハツハツハツハツハツハツ!!! 甘いんだよ、クソ雑魚が！俺を殺す気で来ないと首なんかとれねえぞ？」

「そうだったな。訂正するよ。殺す気でやってやる。」

俺の言葉を聞いて龍二は笑い出す。

「そこなくつちやな！久しぶりに骨のある勇者と戦えるんだ。どうもこの世界の勇者共は雑魚すぎてよ？退屈してたんだけだ。」

「それと、お前は仮面ライダーの力を使つて戦うんだろ？俺もマナーは弁えてるつもり

だ。変身する時間くらい待ってやるよ。」
「そりゃ親切にどうも。」

そう言い、俺は金色のベルトを巻く。

サウザンドドライバー！

起動音が鳴ったのを確認して、アウエイキング アルシノゼツメライズキーを展開して挿す。

ゼツメツ！エボリユーション！

更にアメイジングコーカサス プログライズキーを展開する。

ブレイクホーン！

「変身。」

パーフェクトライズ！

プログライズキーを挿す事でサウザンドドライバーの中央の扉が開き、絶滅した哺乳類【アルシノイテリウム】と現存している甲虫【コーカサスオオカブト】が辺りを駆け回り、やがてツノ同士をくっつけあい来人の周りを回ると2体のライダモデルのパーツが来人にくっついた。

When the five horns close, the golden soldier THOUSER is born.

(5本の角が交わる時、金色の戦士サウザーが爆誕する。)

,, Presented by Z A I A ,,

(Z A I A エンタープライズの提供でお送りします。)

「ほお。その姿は見た事なかったな。」

「だろ？ なんとたつて令和ライダーだからな。」

軽口を叩き合つた両者だが何を合図にしたかは分からないが互いに走り出し、剣と剣をぶつけ合い鏝迫り合いを起こした。

微かに力で押し勝つた龍二は来人から距離を取る。

「くらえ！ ドライファ・ダークネス！」

「待つてました！」

俺はドライファ・ダークネスをサウザー専用武器サウザンドジャツカーの剣先で受け止めると同時に柄に付いているレバーを引いた。

するとドライファ・ダークネスは何もなかったかのように吸い込まれ、消えた。

「な?! お前! 何をした!」

「一か八かだったがやってみるものだな。ほら! お返しだ!」

J A C K I N G B L E A K !

引かれたレバーを戻した事で音声が鳴り、刀身に闇のエネルギーがまとわりつき始めた。

「それは！」

「ほらよ！」

俺は剣を振り、ドライブア・ダークネスを纏った斬撃を飛ばした。

「な!?!ぐおっ！」

来人の剣から放たれた斬撃は龍二に直撃したものの、ただ腹を裂いたものでしかなく、すぐさま再生を始めていた。

「この力・俺のドライブア・ダークネスか。どうやったかは知らねえが面白えじゃねえか!そんなお前に俺の新しいスキルを見せてやるよ！」

そう言い、龍二が人差し指を立てた時だった。

急に月が皆既月食を始め辺りが闇に包まれた。

「なんだ?皆既月食を見せるスキルか?しゃれてんな。」

「ほざけ。これを見てまだその口が聞けるか?」

「月食の鎧・」

龍二が呟いた瞬間、闇が龍二の体を包み込み、闇が晴れると体を銀と黒、顔を目が緑のマスクに包まれた戦士が立っていた。

「シヤ：：シヤドームーン：」

「ご名答。」

そう言うや否や龍二は飛び上がりキックをかましてくる。

来人は咄嗟に両腕を交差してガードするが止めきれず少し後ろに下がってしまう。このことから変身したことで龍二の力が増していることが分かる。

「マジかよ：：なんてパワーだ。これなら！」

来人はサウザンドジャッカーから狼、鮫、ゴリラ、マンモス、チーター、蜂、隼、虎、ホッキョクグマ、サソリのライダーモデルを召喚し、ぶつけた。

「それがどうした。」

龍二が剣を一回振るごとに一体ライダーモデルが消え始めた。

「おいおい、これもかよ。」

「どうした、もう終わりか？ふん！」

龍二は一瞬で距離を詰め右フックからの左ストレート、キックと立て続けに来人は無防備に殴られ蹴られ続ける。

「ぐっ！があっ！」

「おらおら!!!どうした!!もう終わりか！」

「拔かせ！」

バースト！プログライズキー！カンフオート！サウザンドライズ！

サウザンドジャッカーにダイナマイティングライオンのプログライズキーを挿しレバーを引く。

サウザンドブレイク！

来人の両脇に巨大なガトリング砲が2門現れ、ドガガガ!!とガトリング砲が唸りを上げる。

「くそっ！」

流石の龍二も後ろに飛び上がり、距離をとった。

来人は変身を解きジクウドライバーを装着する。

「2人目のライダーか。次はもっと楽しませてくれるんだろう？」

「ああ！損はさせねえぜ？」

バールクス！

バールクスライドオッチをジクウドライバーに装着し、右手を天高く掲げた右掌を回転させ、手の甲を外に向けた状態でゆっくりと顔の近くまで腕を持っていく。

「変身！」

ライダータイム！

仮面ライダー！バールクス！

「さて第二ラウンドと行こうぜ！龍二！」

「リボルケイン！」

来人はそう叫ぶとジクウドライバーからリボルケインにもサタンサーベルにも似た長剣を出す。

「そのライダー：見たことはないが、リボルケインで分かるぜ。BLACK系だな。」

「ああ、当たりだ。」

「はあああ!!!」

ドオン!!

お互いに繰り出した拳がぶつかり合い衝撃波が起きる。

互いに殴り合い、顔面を殴られ仰け反った龍二は無茶苦茶の体勢から右手を来人に向ける。

「ドライファ・ダークネス！」

その時、龍二は当たったと確信していた。だが来人の手には新たなウオッチが握られていた。

バイオリイダー！

闇の衝撃が来人に炸裂した瞬間、来人は水玉となり高速移動をすると龍二の背後を取りこめかみに回し蹴りをくらわせた。

ゴキッ!

鈍い音がするが龍二は何事もなかったかのように後ろ蹴りを当ててきた。

「イツテエな・頭蓋骨と首が折れたらどうすんだよ。」

「……へし折る気だったんだがな。」

また殴り合いに戻るが徐々に来人が圧され始めてしまう。

「くそっ!これでもなのか……!」

「当たり前だ。俺は本物の力だが、お前は所詮紛い物だ。まあお前が本当にブラックサンの力を使っていたら立場は逆だったろうがな!」

そう言った龍二はサマーソルトキックを来人の顎に当てる。が効果がない。

まるで金属を思いっきり蹴り飛ばしたような感じだった。

「まだウオッチはあるぜ!」

「悲しみの王子のウオッチがな!」

ロボライダーのウオッチを使い、パワーアップをした来人は今度は互角に殴り合いを続けることができるようになっていた。

「どうだ?最後はライダー同士キックで勝敗をつけようぜ!」

「……臨むところだ!!!」

来人はボールクスライドウオッチのボタンを押し、ジクウドライバーを回転させる。

フィニッシュタイム！バールクスタイムブレイク！

来人と龍二は共に飛び上がりライダーキックを交差させる。

ぶつかったのと同時に月食の鎧の効果は切れており、空は元に戻っていた。

大爆発が起こり衝撃で互いに吹き飛ばされるが龍二が先に立ち上がり魔剣を手にして来人のもとへフラフラと歩く。

「教えてやるよ……これがよお……悪役の運命ってやつだぜ……」

それだけ言うのと後ろ向きに倒れながら爆発を起こした。

来人はゆっくりと立ち上がると変身を解いて倒れた龍二のもとまで歩く。

「もしお前が勝てば……俺は潔くお前を諦めるつもりだったのによ……」

来人は目の前で散った一人の元勇者を見る。そして連れて帰ろうとしやがんだ瞬間、突然龍二の目がカッと開き来人の左肩に深々と魔剣を突き刺した。

「ガハッ……」

「おいおい、言つたら？俺は死なねえ。感傷に浸ってる暇があつたらとつと連れてけばよかったのによ……」

そう言い、左肩に深々と魔剣が刺さったまま仰向けに倒れた来人のもとまで歩き、乱暴に引き抜いた。

ブシャー!!と肩から血が吹き出した来人は震える手でデイエンドライバーを取り出

し姿を消した。

「ヒヤハハハー！勇者を追っ払ってやったぜえ！ヒヤツハー！この地獄門を使ってグラス達の世界を先にぶっ壊しに行くかあ!!」

月明かりに照らされた龍二の姿は翼を広げた悪魔の様な影をしていたのであった。

場面が変わり、龍二のアジト。

ジキルは顕微鏡でリファナから採取したバグスターウイルスに興味を持ったのか観察していた。

「ふむ……これをゴブリン達に投与できれば……より強いゴブリンに……」

「やめときな。適合する前に全滅がオチだ。」

「!?!」

ジキルが驚き、振り向くと元の世界に帰ったはずの来人が立っていた。

「よー!」

「……何をしにきたのですか?」

ジキルは来人を睨みつける。

（おい、ジキル！今すぐ俺に変われ！）

（いえ、まだです。様子を見てからでも遅くない。）

「なあ、アンタ。ジキル博士と怪物ハイドだな？」

「どうしてそれを？」

「俺の世界ではアンタらは有名な話に出てくるんだよ。まさかとは思ったが会えて光栄だよ。それと・」

「二人に言っておきたい。俺はもうアンタらと敵対する気はない。今のところは。」

「・今のところ？」

俺の発言でジキルの目が更に鋭くなる。

「ああ、なんらかの力で俺の世界に侵攻してきた場合のことだ。」

「そうですか、なら信じてもいいでしょう。」

「ありがとう！ところでリファナの調子はどう？」

「リファナさんは一時はどこかの誰かさんのせいで生死の境を彷徨いましたよ。ですが体内に残ったバグスターウィルスと適合して前とは比べものにならないくらい強くなりましたよ。」

「そっか、よかったあ。心配してたんだよね。もし殺してたらって！」

「もし殺したらコロシアムの道中に我々がいたことでしょうね。」

「おお、こわっ！」

来人がおどけたようにすると初めてジキルがクスツと笑った。

「貴方は不思議な人だ。勇者っぽい側面を見せて同時に勇者っぽくない側面も見せる。」
「それ褒めてる？」

「ええ。」

「そうか！? マズいな、龍二の気が近づいてやがる。俺はこれで帰るけどよ。一つだけ言つとくぞ。」

「ええ。」

「死ぬなよ。アンタは最後まで龍二を支えてやってほしい。」

「貴方に言われなくとも。」

「へへっ！ そうだな。じゃあな！」

来人はオーロラカーテンを開いて帰っていった。

番外編 女装杯①

これは、来人が龍二の世界から帰って来たところから始まる。

「……ただいま……」

「おかえ……って!?!どうしたの!?!」

帰ってきた俺を見た女神は驚いていた。俺の口と左肩からは血が流れ顔にアザを作っていたからだ。

「その様子では……」

俺を心配そうに見ながら元神のおっさんが歩いてくる。

「ええ、すみません。失敗しました。しかし僕は彼の中に断固たる決意を見ました。」

「断固たる決意?」

「はい、彼は自分が負った責任を果たそうとしています。そのやり方は間違ってるかもしれませんが。」

「ふむ、ならば……もういいだろう。ありがとう。」

そう言う元神のおっさんは帰っていった。

「ごめんね……こんな辛い目に合わせて。」

女神が申し訳なきように俺を見た。

「いいんだよ。俺も他人事に思えなくてな。あの日、もし俺だけ生き残ってしまつていたら・俺は悪に堕ちていたかもしれないからな。」

「それよりもだ。頼みがある・」

.....

「・・・分かつたよ。そつちは任せて。」

「頼んだぜ。」

こうして俺は元の世界に戻った。

そして3日後。

「女装杯!？」

「ええ、そういうのがあるそうです。」

セバスに言われたことだった。

聞いたところ、出場資格があるのは名前の通り男性。しかも女装をしてだ。

女装と言っても女性モノのアクセサリーを見えるように付けるとか、婦人服を着るとかでいいらしい。

「で?それに出ると。」

「ええ、ダメですか？」

「うーん……女装かぁ。」

俺が悩んでいるとセバスが何故俺にその話を持ってきたのか話し始めた。

「実は・ナオフミ殿がライト殿のように新しく町を作りましてな。ナオフミ殿の町を大きくする為にキールなどを筆頭に何人か送りました。まあ、彼のほうは、まだ村に毛が生えた程ですが。しかしナオフミ殿もライト殿のように奴隷や行き場の無い者を集めてまして。そして、この村は先の襲撃で多くの村人を失いました。」

「だけど、奴隷を買うための金が少ないと？」

「ええ、その通りです。ですのでは是非優勝賞金を。」

「すううう。……分かったよ。出る。」

「おーありがとうございます！それでは早速衣装の手配を。」

そして当日。

俺は発注した衣装に身を包み、会場にいた。

衣装のモデルはあれだ。タイムジャッカーのオーラだ。

「出場者の皆さんは、こちらでチェックを行います。」

係員の呼ぶ声に俺を含めた他の出場者が列に並び出す。

「はい、ライト・ダテ様ですね。」

「それでは性別チェックと衣装チェックを行いますので、あちらでお待ちください。」

そして案内されて入ったテントには、また新たな係員がいた。

「それでは性別をチェック致しますので、脱いでください。」

「は？」

「ですから、脱いでください。」

「：分かったよ。」

俺は大人しく服を脱いで見せる。

「：：：ふむ、確かに。魔法の偽装もありませんね。」

「それでは衣装チェックです。」

促され、俺は衣装を出した。

「これで全部ですか？」

「あと、鎧着るんですが。」

「申し訳ありませんが、鎧の方もお見せいただけますか？」

.....

「はい、バッチリです。」

「それではトーナメント表です。貴方は第一会場ですね。時間を書いていますので始ま

る10分前に集合をお願いします。」

この大会は1〜4まで会場があり、そこでブロック毎に予選を行い1ブロック8人で絞る。

「受付完了したようですね。」

どこからともなくセバスが現れる。この大会はセコンドが1人まで許される。その為にセバスにセコンドになってもらっていた。

「なあ、セバス。この大会って何でできたんだ？」

「起源の話ですか？」

セバスの話はこうだ。今から何10年前、あるAとBの2つの家の貴族令嬢の、つまらないいざこざが決闘にまで発展した。日時も決められたものだったが、両家の親は娘が勝手に取り決めた決闘話にカンカンだった。

何故なら二人は近々嫁入りをする予定があつたからだ。

婚礼前の大事な体に傷はつけられない。ならばとA家はルール違反である影武者を立てたのだった。影武者になったのはその屋敷で庭師をしている男だった。魔法で貴族令嬢と同じ顔と声に変えて決闘に臨むこととなった。

そして決闘当日、両家ともに名乗りをあげ剣を交えることとなった。

互いに互角で決着がつかなかったが、突然両者共に構えを解いた。

「俺たち兄弟は！」

突然A家の偽令嬢（庭師）が叫んだ。

「永久に不滅。俺たち兄弟は！」

B家の令嬢はそれに答え、今度は逆に聞き返した。

「超最高！」

「やっぱり兄貴か。」

B家の令嬢が指をパチンと鳴らすと、姿が変わり、男になった。それはB家の庭師であり、A家の庭師の弟だった。

「ああ、剣筋が俺と一緒にだからな。通りで全部読まれる訳だ。弟よ。」

その後は決闘は流れて、両家ともに異例の和解。AとBの家は末永く繁栄していったという。

「予選を始めますので！第一会場の方はお集まりください！」

いつもは意外と出場者は少ない為、予選は一回ずつで済むのだが今年には出場者が続出したらしい。

セバス曰く俺のせいらしい。

その為、予選は4回行われる。

次々とフィールドに出場選手が集まっていく。

「あれ？ダテ選手。装備は？」

「フィールド内で着ます。」

「分かりました。それではどうぞ。」

係員に促されてフィールド内に入る。

「ルールは簡単です。最後の二人になるまで戦い続けてください！それでは：スタート
!!!」

俺は白いカードデッキを水たまりに構える。するとそこから灰色のベルトが現れ腰に巻き付いた。

「変身ー！」

俺は仮面ライダーファムに変身した。

「おおっと!!!ダテ選手!!どこからともなく現れた鎧に身を包んだぞ!!!これは見たことが
ない魔法だアアア!!!」

仮面ライダーの変身を初めて見たのか実況は大興奮だ。

俺はバックルのカードデッキから一枚カードを抜き羽召剣ブランバイザーを開き装填してから閉じた。

ソードベント！

空からファムが契約した白鳥型のミラーモンスターであるブランウィングの翼の一部を模したウイングスラッシュャーが降ってきて右手に収まった。

「その派手なやろう！テメエからだ！」

女性ものの鎧に身を包んだおっさんがナイフを逆手に持ち突っ込んでくる。

だが来人は動かない。

そしておっさんが跳びかかり振り下ろされるナイフが胸に突き刺さろうとした瞬間、おっさんは吹き飛ばされ地面に頭から突き刺さっていた。

「おおおおお!!!」

「ダテ選手に襲い掛かったオジン選手がいつのまにか頭から突き刺さっているだどっ!!!
いったい何が起きたんだ!!!」

観客も実況席も、この空間にいた人物は自身の目の前で何が起きたのかイマイチ分かっていなかった。

たった一人の男を除いては。

「ふむ、なるほど。」

たった一人、元影のセバスだけは見抜いていた。

あの時、来人はおっさんのナイフを弾き、股下にウイングスラッシャーを差し込み持ち上げることで地面に頭を突き刺していた。

これを残像が起こるほどのスピードでやり遂げていた。

「ライト殿は底知れませんな。あのような芸当は私のような影でなければ見逃してしまふというもの。ですが私が後20年若ければ残像さえも残さずにこなしていたでしょうな。はっはっは!!」

負けず嫌いのセバスの笑いを来人は知らずか、また立ち尽くしていた。

だが飛んで火にいる夏の虫。先程の動きを見てもなお、立ち向かってくる者はいた。

「あのスカした野郎! だったらこれならどうだ!!!」

男の胸までの高さの杖を上に掲げて呪文を唱えるとバランスボール大の火の玉が杖から現れた。

「おおっ! メ〇ゾーマみたいだな!」

「そんなダサイ名前と一緒にすんな!!」

「待った!」

男が撃ち出そうとした時にふいに待ったがかかる。

みると同じように杖やステッキを持った男達ではないか。

「俺たちも加勢してやるぜ！」

「あの若造に分らせてやろうぜ！」

「うほっ！いい男！」

「我が腕の中で生き絶えるがよい。」

男達が杖をその火の玉に向けると男達の魔力を吸い上げて更に大きな火の玉と化した。

「おいおい、後半のやべえ2人のせいで余計に負けられねえぞ！」

「「「「くらえ!!!」」」」

そうこうしている間に特大の火の玉が撃ち出され俺に迫る。

「受け止められる規模じゃねえ！とって避けようにもアイツら！それを見越して自分が被害を受けないギリギリの至近距離で撃ちやがった！」

そして火の玉が着弾し、それはそれは大きな火柱が上がった。

「これは！すごい火柱だ!!!ここからでも十分熱気を感じます!!!流石のダテ選手もお終いか!!!」

火柱が晴れると来人の姿は消えていた。

「おおっと!!!これはダテ選手!!!蒸発してしまったのでしょうか!!!!!!このフィールドは選手

が死亡しないように特殊な結界を張っていますが、それを超えてきたか!!!」

アドベント!

しかし、いきなりブランウイングが現れ、魔力切れでフラフラになった5人の男に体当たりを決めていた。

「なんと!!!ダテ選手!!!生きていた!!!いつのまにか彼らの背後に回っていたようです!!!」

「ふう、危ない危ない。さて、もう終わらすとしようかな。」

ファイナルベント!

来人がカードを入れるとブランウイングが、また現れ翼で嵐のような突風を巻き起こし始めた。

その威力に足をしっかりと地につけて踏ん張ることもままならず、選手達は次々と吹き飛ばされていく。

その吹き飛ばされてきた選手を待っていたとばかりに手に持つウイングスラッシュャーで次々と斬り裂いていく。

そして最後の1人を斬り裂いた事で立っているものは来人1人だった。

「決まりました!!!第一会場第一予選はライト・ダテ選手の一人勝ちによりシー：いや!待ってください!!!1人残っています!あれは：ラック・フォレスト選手だ!!!なんと、う

ずくまっていた事で奇跡的に突風を回避!!!これによりAブロック第一試合はライト・ダ
テ選手VSラック・フォレスト選手に決定しました!!!」

番外編 女装杯②

「まずは予選突破ですな、ライト殿。」

「ああ、そうだな。」

「まあ、まだ本戦には時間がありますが、どうしますかな？」

「観戦しようかな。自分と同じブロックの奴は見ておきたいし。」

「そう言い、俺たちは空いてる席に移動し、観戦を始めた。」

「あのおう、横いいですか？」

「え？ああ、どうぞ。」

「次：貴方と戦うんですよね。」

「は？」

何を言ってるんだ？この人。

「ライト殿。彼ですよ。貴方と共に予選に残ったラック・フォレスト選手ですよ。」

「え？……ああ！そっか。」

「すみません：覚えてませんよね：僕みたいなまぐれなんて：」

「いやいや、そんな自分を卑下すんなって！な？」

「いえ：いいんです。僕は一族の落ちこぼれなんです。」

「ふむ：君はクロノ族だね？」

「クロノ族？」

「なんだ？聞いたことねえ。」

「……よく分かりましたね。」

「分かるとも。君の両目の下に黒い逆三角が描かれています。この両目の下に何かしらの模様を入れるのはクロノ族の特徴。そしてクロノ族最大の特徴は……」

「性別が二つあることですよ。」

セバスの言葉に続けるようにラックは言った。

「2つ!?え!?君今2つって言った!?!」

2つて……あれかよ。メタモ○星人かよ!

「そこまで驚くことではないですぞ、ライト殿。ええ、もちろんベースとなる性別はあります。そして彼らは年齢と心。その両方が成人を迎えた時に2人に分裂するのですよ。」

「でも僕は……成人となる年齢を迎えたにも関わらず……まだ分裂しないのです。もう一人の僕……いや私の方かな。そっちは好戦的なんです……僕は争いが嫌いで……」

「今回も……里のみんなからネロ……僕の女性人格の力を借りずに戦ってこいって言われて

「内緒で入れ替われるか試しましたがけどネロは応答してくれないんです。」

「それに僕には：好きな人がいるんです。でも：僕が男らしくならないと：自分の男人格と結婚するって言われて。」

「で？今日その子は来るの？」

「はい、予選は通るだろうからって本戦から来ます。」

「だったら見せてやろうぜ！お前がどれだけやれるかって事をよ！」

「無理ですよ！僕は予選の時は逃げ回ってました。そして倒れた選手に運良くつまづいて転んでたおかげでダテ選手の風に巻き込まれずに済んだんですから。」

マジかよ。それで俺のファイナルベント避けたのかよ。

「まあ。でもさ？運も実力のうちって言うし？やれるだけやってみようぜ？な？」

「はい。ダテ選手がそういうn。」

「ラック！ここに居たのね。探したんだから。」

そこには紫色のショートヘアに眼鏡をかけた女性が立っていた。

「ルカ！来たんだね。」

「ええ、当たり前じゃない。私は貴方に期待しているのよ？貴方は強いはずよ、ルークよりも。」

「そう…なのかな…」

「確かに貴方は落ちこぼれと言われているわ。それが何？父上は、優勝してこいつつてうるさく言ってるわ。でも私は優勝しなくてもいいと思ってる。貴方の強さを見せつけなければいいのよ！頑張つて！」

そう言うトルカと名乗る女性は去っていった。

「ふむ…ライト殿。少しラック君の手助けをしても？」

「いいよ。」

「ふふ、ではやりましょうか。」

こうして広場に到着した。

「まずは私に打ち込んできなさい。遠慮せずに。」

「えっ…でもお爺さん…大丈夫ですか？いくら落ちこぼれとはいえ僕はクロノ族ですけど…」

「心配はいりませんよ。私は68歳ですが、まだまだ若いものには負ける気はありませんぞ。」

「そ、そういうなら…いきます。…オラツ！」

ラックは鋭いパンチを繰り返すが、セバスはそれを取り出した扇子で受け止める。

「まだまだだっ！」

次々とパンチを繰り出すもののその全てをセバスに受け止められ続ける。

そして彼が渾身の一撃を放った瞬間、セバスは姿を消しラックの後ろに現れた。

「ふむ、よく分かりました。」

「貴方には闘気が足りません。」

「うっ……これだけの手合わせで見抜けるんですね。その通りです。」

闘気？なにそれ？

「闘気が何か分かっていないライト殿の為に説明いたします。クロノ族には魔法を使う文化がありません。それもそのはず彼らの体内には魔力ではなく闘気が流れているからです。闘気とは魔力と同じようなものと考えていいです。クロノ族はその闘気を拳に纏わせ攻撃力を上げる、足に纏わせ瞬発力を上げる、攻撃が当たる部位を瞬時に見抜きその部位に纏わせる事で防御し、跳ね返す……と。その為彼らは闘気を全身に纏わせ鎧とするのです。」

「しかしラック君は闘気を上手くコントロール出来ていないように思えます。それに体を包む闘気が少ないですな。」

「……そうなんです。そのせいで落ちこぼれで……」

「ふむ……それではラック君は私と共に秘密の特訓を行いましょう。ですのでライト殿とは別行動ですな。ラック君がどれだけ変わったかは戦ってみてのお楽しみと言う事

で。」

「分かった。楽しみにしてる」

こうして俺はラックとセバスと別れて試合時間までブラブラすることにした。

そして試合時間。俺はレッドゲートに集合していた。

ラックが待っているのはブルーゲートというらしく、これは昔のスポンサーが名付けたらしい。十中八九、勇者か他の転生者だろうな。

「レッドゲート！ライト・ダテ選手！入場！」

実況の声が上がリ俺はフィールドに姿を表す。

「ブルーゲート！ラック・フォレスト選手！入場！」

相対するようにラックも歩いてくる。

さっきまでの奴とは顔つきが違うな。セバスとどんな特訓をしたのか気になるところだ。

「それでは始め！」

「行くぞ！」

俺はライダーガシャットを取り出し鳴らした。

ときめき！クライシス！

軽快な音楽と共に俺はその場でターンを決める。

そしてガシヤットを挿そうとした瞬間、奴の姿が消えてガシヤットに手を伸ばそうとしてきた。

「反則だろうが！」

俺は無理矢理の体勢で避け、ガシヤットを挿した。

ガツシヤット！バグルアツプ！

ドリーミングガール！恋のシミュレーション！乙女はいつも！ときめきクライシス！

俺は仮面ライダーポッピーに変身してバツクルからガシヤコンバグヴァイザーIIを外し、右腕に装着した。

「さあ！来い！」

「いきますよー！」

ラツクはそう叫ぶと一瞬で姿が消えた。

「な!? もう一回消えた!？」

突如ラツクの姿が消えたのだ。今度はもつと精密に。奴の闘気ではここまでの出力は！セバス：アンタはどんなマジックをしたんだ。

そう考えていた瞬間、目の前から強い殺気を感じ本能的に腕を交差する。

その1秒後に下から斜めに蹴り上げてきたラックがいた。
「危ねえ!!」

なんとかダメージは少なくしたものの腕が痺れてやがる。

「どうです? 僕だって!」

ラックは思い出していた。セバスとの特訓を。

ラック side

「ものは考えようです。全身に纏わせるから量が少なくなるのですよ。一部にだけ纏わせればいいのですよ。」

このおじいさんは何を言っているのだろうか? 一部だけ? 確かにそれなら僕にだって出来るが:

「例えば移動するときは足にだけ、殴るときは手にだけ、蹴るときは足にだけ、防ぐときは腕だけに闘気を注ぐのです。」

「でも僕は・闘気が少ないんですよ! 一度使った闘気は消費されるっていうのに。」

「はて? そうなのですか? 若い頃に共に仕事をしたクロノ族の者は一部にだけ流す程度なら7割くらいは消費されずに戻ってくると聞いたのですが?」

「……え? そ、そうなのですか!」

知らなかった：てか、誰も教えてくれなかったし：

「ええ、彼も貴方も同じクロノ族。ならば！出来ることでしょう！」

「ええ！頑張ります！」

この人は只者じゃない。僕のおじいちゃんくらいなのにとてつもなく強い。

だが、この方法ならやれるかもしれない。

ラツク side end

こいつ！一発一発が早い！高速で接近し、俺に攻撃するとすぐに距離を取る。

さつきからその繰り返しだ。ギリギリ奴の動きを捉えられてるってだけだ。スピードならピーターを超えてるかもな。

だったら！俺もやってやる！

俺は走りだし、エナジーアイテムを獲得していく。

高速化！高速化！

お！だいぶ見え始めたな。よしよし。

あとキョロキョロしてやがる。俺の事を見失い始めたか。それでいい。

すると、ラツクの姿が徐々に見え始める。闘気を目に集中し始めたな？狙い通りだ。

だが、こいつの動きを止めねえと。アイツは初めて見るはずのガシャットを奪いにき

た。

セバスから作戦を吹き込まれてやがる。

動きを止め：ある！あれだ！

俺は後ろから迫りくるラックを振り返らずに目当てのエネルギーアイテムに向かって走る。

取った！

発光！

発光のエネルギーアイテムが発動し、俺を中心に光が放たれる。

光が止むとラックは目を押さえてうずくまっていた。

「今だー！」

キメワザ！

クリティカルクルセイド！

「ピッ！プッ！ペッ！ポッ！パワー！」

俺は両手を交互に出しながら音符が乗った五線譜の形をしたビームを放った。

さつきまでうずくまっていたラックにそれを防ぐ術はなく直撃し爆発した。

爆風が晴れると、そこには大の字に倒れたラックがいた。

「試合終了！勝者！レッドゲート！ライト・ダテ選手！」

番外編 女装杯③

来人は大の字で倒れているラックのもとへと歩み寄った。

しかしラックは、そんな来人の姿に気づかずブツブツと呟いていた。

「はあ・はあ・負けた。」

来人は腕を掴み立ち上がらせる。

「ライトさん、僕：今まで負けて悔しいなんて思わなかった：自分が落ちこぼれだからって：どこかで諦めてた。セバスさんと特訓して初めて自分に自信がついて：勝てる！勝ちたいって初めて思えた。」

「負けることって：こんなにも：悔しいんですね！」

そう叫ぶとラックはポロポロと泣き出し始めた。

「ああ。そうだな。」

「僕強くなります。強くなって！いつか！倒しに行きます！」

「ああ、待ってるぜ！」

こうして俺の本戦一回戦は終わった。

「二人ともお疲れさまです。」

「おう、セバス。」

「セバスさん。」

「おい、セバス。お前ラックに俺への勝ち方を吹き込むのは分かるけど、まさか変身アイテムを奪いにくるとは思わなかったぞ！」

「ええ、奪ってしまえば隙ができますので。」

セバスは悪びれることなく、笑いながら言つてのけた。

「たくつ：で？次の試合は？」

「予定では1時間後ですな。それと・失礼。」

そう言うとセバスは念話をしはじめた。

「はい・はい・そうですか。わかりました。」

電話を切つたセバスは何やら考え込むような素振りを見せ始めた。

「どうしたんだ？」

「いえ、何でもありませんよ。それでは私は少し外します。」

そう言ううと風のように姿を消してしまった。

「なんだったんだらうか？」

「さあ?とにかく試合見に行きましょっか。」

そう言つて来人とラックは歩いて会場に入つていった。

そして、二人の姿が見えなくなった頃、セバスがまたその場に現れた。

「やれやれ、ライト殿が知つたら大会をほっぽり出して着いてきそうですからな。それにしても・私達が若い頃に壊滅させたはずなのですが・いつたいなぜ今頃復活したのでしょうか。」

【黒風め・】

「お前どうすんだ?これから。」

「何がですか?」

セバスと別れた二人は仲良く並んで試合を見ていた。

「だつてお前のとこの族長とかいう人がさ?優勝してこいつて言つたんだろ?でも負けたじゃん。ルカ取られるくね?」

「うっ・そ、そうですけど・」

「そこは大丈夫よ?」

「は?・うおっ!?!いつの間に!?!」

急に声がして振り返るといつからいたのかルカが立っていた。

「今日の貴方は良かったわ。勝敗は関係ない。貴方は強さを見せた。お父様がダメって言つたって構わないわ。なんならアンタと駆け落ちしてやるわ!」

「ええ!?それはダメだよ!ルカ!」

「何よ!アンタは全てを捨ててでも私と一緒にになる気はないの?」

「え・う・そ、それは・」

ラックが口籠った時だった。ルカの目から一筋の涙が流れた。

「……もう知らない。ラックのいくじなし!!!」

そう言うところかへ走り去ってしまった。

「あ!待って!ルカ!」

「行くな!ラック!」

走り出そうとしたラックの腕を俺は掴んで引き止める。

「ちよつ!?!邪魔しないでください!」

「今は混乱してる。そつとしてやれ。じきにまた落ち着いて話せるようになってんだろ。」

「そういうものですかねえ。」

「2回戦の受付を行います。出場者は指定のゲートへお越してください！」

「もうそんな時間か。じゃあ行ってくるよ。」

「僕の分まで頑張ってください！」

今回は青いゲートのようだ。

それを通り抜けフィールドに立つと反対側のゲートも開き対戦者が現れる。

奴か。

見た感じは弓を武器にしているタイプだな。

「それでは！始め！」

「変身！」

ピーチエナジー！

ロック！オン！ソーダ！

ピーチエナジーアームズ！

アラビアン感あふれる曲とともに俺は仮面ライダーマリアカへと変身した。

「行きます！」

相手が魔力を込めた矢を放ってくる。

「魔導弓か。なるほど。」

俺は前転で避けながら弓を引く。

「ほっ！」

だが向こうも避ける。

流石2回戦のやつだ。普通にやられてくれねえよな。

これならどうだ！

俺は矢を頭上に放つ。すると放たれた矢が桃の形になり、更にそこから放射状に矢が放たれそれが全て敵に向かっていく。

「な!? ぐああっつっ!!!」

矢を2本避けたまでは良かったが、それ以外の矢に次々と当たっていく。

そして体勢を整えたときには：

「はあっ！」ズバッ!

俺のソニックアローに斬られているって訳だ。

「とどめだ。」

俺はピーチエナジーロックシードをベルトから外してソニックアローに装着する。

ロック! オン!

エナジーロックシードの力を貯め始めたソニックアローの弦を引き絞り、照準を合わせる。

ピーチエナジー!

「終わりだー！」

ソニックアローから撃ちだされた矢が相手に炸裂し、大爆発を起こした。煙が晴れると相手は倒れており俺の2回戦突破を告げるアナウンスが鳴った。

2回戦の試合が始まった頃：

「グスツ・ラック・なんでよお。」

ルカは物陰に隠れて泣いていた。

「はあ・ラックのところこう・」

立ち上がった時だった。

「お困りのようですね。」

「誰?!」

「これはこれは驚かせてしまいましたね。」

ローブを着て杖を持った男がフードを外しながら笑顔でルカの前に現れた。

「貴方は何かお困りのご様子。悩みは溜め込まず吐き出すのが一番。その捌け口くらいにはなりませう。」

「貴方・見ず知らずの私に・」

「ええ、それが私です。」

「こちらのアロマでも嗅いでください。気が楽になりますよ？」
「え、ええ。ありがとう。」

スッ！

「うつ・」ボタン

ルカは急な眠気に負けて倒れ込んでしまった。

「ふっ、見ず知らずの人をいきなり信用するなんて…バカですね。だが上物だ。おい。」

「へい。」

「連れてけ。」

「へい。」

謎の男に呼ばれた大男は大きな布袋にルカを詰め込むと走り去って行った。

「ふふ、さて私は自身の仕事でもしましうかね。」

謎の男はそう喋ると静かに歩いて去って行った。

番外編 女装杯④

「お疲れ様です。ライトさん。」

「おう！ラック！」

「僕、決心がつかしました。僕は全てを捨ててもルカと一緒にになりたいです。」

「そうか、だったらルカに伝えて来いよ。な？」

「はい！僕行つてきます！」

そう言うくとラックはルカを探しに走って行った。

「若いとは良いものですな。」

「うおっ!?セバスお前いつのまに!?!」

「ふふっ、私は元とはいえ影ですよ？このくらい造作もないですよ。」

「そっか、あ！俺ラックに言い忘れてた。」

「なんですか？」

「駆け落ちは最後の手段にしろって！そんな時は家くらいなら用意してやるって！」

「ほほう、我が町に迎え入れるのですね？賑やかになるでしょうな。」

「間もなくブロック準決勝の受付を行います！出場者は速やかに集合してください。」
「じゃあ、行ってくるよ。」

「ええ、お気をつけて。」

そうして俺は受付を済ませると受付所を出て、またセバスと合流していた。

「ラック遅くねえか？」

俺たちはベンチに座って話していた。

「ええ。あ、お飲み物をどうぞ。そうですね：若い2人ですから：燃え上がってなければ良いのですが。」

「ブフォツ!!! はあ!?!アンタ何言ってるんだよ!?!」

コイツ：いきなり何言ってるんだよ・

「まあ、まだ恋人のいないライト殿には難しい話かもしれないな。」

「な！お前：！じゃあ、お前はどうかんだよ！」

「ほっほっほ！私ですか？私は若い頃は諜報の一環でハニートラップの一つや二つくらいしたことがありますよ？それに私にも妻がおりました。」

「え？セバス奥さんいたの？初耳だな。」

「ええ、話してませんので。彼女の名はソフィアです。私が仕えていた屋敷のメイド長

でした。」

そこからの話を纏めると：

①セバスの一目惚れで、そのソフィアと名乗るメイド長も漏れなく影で、結婚の条件が自分より強い相手と言われて毎日挑むものの、とてつもなく強く毎日土をつけられていた。

②しかし、ある日偶然にも勝つことができ結婚、しかし屋敷の襲撃の日に亡くす。

「そっか、悲しいな。」

「ええ、彼女は死の間際、最後まで主人のために戦うことができ本望だと言っていました。が今ならあれは強がりだったのではないかと思っております。」

「…会えるならもう一度会いたいかな？なんならあの日に…」

「…結構ですよ。過去はふりかえらない。そうでしょ？」

そう言い切ったセバスは穏やかな顔をしていた。

「ごめん、野暮・だったな。じゃあ俺そろそろ時間だから行ってくるよ。」

「ええ、お気をつけて。」

言葉を交わした俺は走って行った。

「それではブロック準決勝戦を行います！」

「レッドゲート！ライト・ダテ選手！！」

俺はフィールドに立ち、こう呼びかけた。

「キバーラ！」

その声に応えるように俺の後ろから小さな白いコウモリが飛んできた。

「うふふっ！いくわよおー！」

俺はそれを手で掴み、腕を伸ばして胸の前で構えた。

「変身。」

俺の額に模様が刻まれ足先から鎧に包まれていく。

「仮面ライダー……キバーラ！」

対する相手も同様に剣を構える。

「それでは……スタート！！！」

「先手必勝だ!!!」

俺はキバーラサーベルを構えて特攻する。

「甘いわ！」

だがその一撃をガン！と剣で受け止められ罅迫り合いに持ち込まれる。

やっぱりブロックの決勝に勝ち進むだけあるな。中々やるな。

「だがっ！俺は負けられねえんだよ！」

俺は剣の向きを少し変えて相手の力を逃す。

そしてサーベルの柄を首の右側に当て押し込んだ。

「ブワッハッハッハッハッハ！！！」

「どうだ！」

「ブハッ！や、やめてくりい！」

どうだ！キバーラというか、元の変身者である光夏海の秘儀！笑いのツボ！

これをやられたものは窒息しかねないほど笑う。そりやもう笑う。

「すぎあり！」

俺は足払いをかけて転ばせるとバク転で二回後ろに下がり、サーベルを逆手に構えた。

すると俺の背中に紫の翼が生え、宙に浮き始める。

「ソニックスタブ！」

そしてそのまますれ違いざまに斬り裂いた。

通り過ぎた時には対戦相手は地面に倒れ伏し、俺は勝っていた。

「勝者！ライト・ダテ選手！」

俺がセバスのもとに戻ったのと同時にラックが血相変えて走ってきた。

「ライトさん！セバスさん！大変です！ルカがいません！」

「何？ルカが？」

「本当ですか？ラック君。」

「ええ、ルカが行きそうな場所を手当たり次第に探してたらこれが！」

そう言ってハンカチを出してきた。

「これは僕が小さい頃にルカにあげたハンカチです！僕：どうしたら！」

そう言いながらラックの目には涙がたまり出した。

「落ち着きなさい！ラック君。そのハンカチが落ちていたところまで我々を案内してく

ださい！」

「はい！こつちです！」

そう言ってラックが走り出したため来人とセバスは後を追いかけた。

「ここです。」

「ふむ：っ！」

「2人とも離れて。」

そう言うとは何やら鼻を少し動かして辺りの匂いを嗅いだ。

「やはり：これは睡眠香（すいみんこう）！私の恐れていた事が起きたようすな。」

「おい、なんなんだよ！何があつたんだ！」

「このお香を使う組織は一つだけ。黒風です。彼らが復活した。十中八九、ルカさんは彼らに拐かされた・ようですな。」

「ライト殿。ここから先は私は貴方のセコンドにつくことはできません。黒風の仕業だとすればルカさんが危ない。助け出してまいります。」

「僕もいきます!!!」

突然ずつと黙っていたラックが声を上げた。

「ラック・」

「危険ですよ。私が仲間達と潰しに行つた際も全員無事では帰ることはできませんでした。精鋭部隊ですよ。」

「それでも！僕はルカをこの世で一番愛してるから！それだけじゃダメですか！」

ラックは拳を握りながらセバスを睨み付ける。

セバスは同様にラックの顔を覗き込んでいたが、やがて折れたのか同行を許すことに決めた。

「・わかりました。ラック君、いやラック。共に戦ってもらいますよ。そしてライト殿。これから私は、若かりし頃に組んでいたチームであるアイギスを再招集して向かいます。」

「ああ、本来なら俺も行きたい所だが……すまない。武運を祈ってる。」
「私もお祈りいたします。それでは！」

セバスはラックを連れて走り去っていった。

しかし、それを何者かが見ており、通信を入れていた。

「ボス……仰っていた通りの白髪で腰に剣を刺した老人が動き出しました。どうやら鎧の勇者は着いて行かないようですが、クロノ族の少年が1人着いて行きました。如何致しませうか？」

「そうか……あの男が……分かった。お前は決勝で鎧の勇者と当たるだろう。蹴散らしてやれ。」

「御意。」

番外編 女装杯⑤

俺は受付を済ませてゲートにいた。

そしてふと気になった事があつた為、係員に聞いてみることにした。

「すいません。ちよつと聞いていいですか？」

「はい、どうぞされましたか？」

「いやな？例えば登録していた鎧が壊れちまった場合はどうするんだ？そのまま失格か？」

「いえ、5分以内に新しい装備を用意できるのならば失格にはなりません。」

「そうですか、ありがとうございます。」

「ブルーゲート！ライト・ダテ選手!!!」

俺はフィールドに立ち、拳を握った右手を突き上げた。

するとそれに応えるように歓声が上がっていく。

「レッドゲート！シリウス選手！」

赤いゲートから女性ものの黒いバトルドレスに身を包み、口周りにスカーフを巻いた

男が歩いてきた。

得物は双剣か。

俺はジクウドライバーを腰に装着し、ウオッチを鳴らした。

ツクヨミ！

俺はそれをドライバーに挿し、待機音を鳴らす。すると俺の背後に天文時計が現れた。

「それでは始めー！」

「変身ー！」

俺はジクウドライバーを回す。

仮面ライダーツクヨミ！

ツ・ク・ヨ・ミ！

相手は武器を取る前に俺に右手を向け、グツと手を握ると双剣を抜いた。

「たあっ！」

相手の回転斬りがくるが、俺は両手から光刃ルミナスフラクターを出し、受け止める。

シリウスは防がれたのを見てすぐにサマーソルトキックで飛び上がると双剣を斜めにクロスさせて構える。

「ウインドエッジー！」

双剣から放たれた二つの真空の刃が俺に迫る。

悪いがすぐに終わらせる。

俺は目をカッと開いて時を止める。

「な!?なんだと!?!」

俺はバックステップで真空の刃を避けた。

時が止まらないだと…!

何故だ! ツクヨミは時が止められる。それは変身していても同様だ。

なのに! どうして!

「オラオラー! 立ち止まってる暇はねえぞ!」

シリウスは足に風を纏わせたまま、俺に次々と真空の刃を飛ばしてくる。

対する俺も両手のルミナスフラクターで受け流す。

「おおっと! あの快進撃を続けていたライト選手が防戦一方だ! これは! 決まってしまうのか!」

「じゃあかしい!!」

俺は地面を蹴って跳び上がり、シリウスに斬りかかる。

俺はもう一度時を止めようとするが、止まらず逆にゼロ距離で真空の刃を受けてし

まった。

「グアアアア!!!」

俺は落下し、地面に叩きつけられてしまった。

「どうした!そんなものですか?雑魚ですね。」

「……いや、カラクリは分かった。」

相手に聞こえないように俺は立ち上がり、もう一度シリウスの連続のウィンドエッジを掻い潜って跳び上がった。

「同じことだ!!!」

シリウスはまたゼロ距離で真空の刃を浴びせようと双剣をクロスして構える。

それを俺は待っていた!

俺は右手の刃でシリウスの手首を攻撃し、時を止めた。

「……へへっ!今回は成功だ。」

カラクリはこうだ。奴がしていた腕輪が妨害装置になっていて、俺の時止めを妨害していたらしい。どうりで俺が時止めを発動しようとした瞬間に腕輪についてる宝石が光ってたんだ。

「はあっ!」

俺はもう一度跳び上がり、両手を握って大きな拳の形にすると頭を思いつきり殴りつけた。

そして俺は解除した。

「ガアアアア!!!」

シリウスは地面に顔から落下していた。

「腕輪を見破るとは。流石ですね。」

「ああ、悪いな。もう終わらせてもらおう。」

俺はウオッチとドライバーのボタンを順番に押した。

フィニッシュタイム!

「はあっ!」

俺が飛び上がると辺りが月夜になり、突き出した光る右足をシリウスに向けてライダークキックの体勢に入った。

「面白い!はあっ!」

シリウスは双剣を構えるとその場で高速回転を始めた。

そのまま、俺のキックにぶつかるように斜めに上昇し始めた。

タイムジャック!

「風刃！風車!!!」

俺のタイムジャックとシリウスの風車がぶつかりあい、大爆発を起こした。
煙が晴れ、シリウスが不敵な顔で笑う。

「……楽しかったですよ……」バタッ！

「勝者！ライト・ダテ選手！」

番外編 女装杯⑥

「アイツ：あれ反則じゃねえのか？」

俺は1人ベンチに腰掛けて考え込んでいた。

「……考えるのやーめた！ どうせ倒したし。」

いよいよ、決勝か。ここまで勝ち進んだんだ。どうせなら勝たなきゃ。

（ライト殿。こちらセバス。）

（セバス。こつちは勝った。残すところは決勝だ。そつちは？）

（ええ、こちらも黒風のアジトを突き止めました。これから偵察をして潜入します。それでは。）

と、念話をきった。

「1人かあ。こういうパターンってありがちなのは、ボスがアジトに居なくて、俺の近くにいるんだよなあ。」

暇すぎたのか、ついつい俺はゲームやフィクションでよくあることを考えてしまう。

ダメだな、鍊達にゲーム感覚で物を考えるな！ って言ってる俺がこんなんじゃ。

そして時間が経ち決勝が始まったのだった。

「来場の皆様！本大会最後の試合となりました。片時も目を離すことができない素晴らしい対決となることでしょう！それでは！」

「ブルーゲートよりライト・ダテ選手入場！」

「レッドゲートよりテイラー・ガーディアン選手入場！」

実況の声と観客の声援に後押しされ俺が入り、続け様に対戦相手が入ってきた。

しかし、対戦者テイラーは立ち止まらずに俺の方へと歩いてきた。

そして握手をしようと手を出してきた。

「よろしく」

「お、おう。」

「鎧の勇者様VS稀代の若き魔術師の世紀の一戦！果たして稀代の魔術師に勇者の実力を見せつけて勝つか！それとも稀代の魔術師が勇者を食らうか！」

「試合！開始！」

すぐさま俺はエイムズショットライザーをバックルに装着する。

そしてクルクルと顔の前でプログライズキーを回して止め、ボタンを押す。

ダッシュ！

そしてエイムズショットライザーに入れる。

あれ？

俺はプログライズキーを取り出してもう一度ボタンを押してショットライザーに入れる。

：：：なんで認証されないんだ？

「どうしたのですか？」

テイラーも戸惑っているのか、俺の事を奇妙な目で見てくる。

：：：壊れたか。仕方ない。

俺はショットライザーを仕舞い、新たにレイドライザーを巻いた。

レイドライザー！

そして、先程とは違うプログライズキーを出し、ボタンを押した。

ハント！

「実装」

レイドライズ！

ファイティング！ジャツカル！

”Deciding the fate of a battle like a

Valkyrie.”

(バルキリーののように戦いの運命を決める。)

俺はファイティングジャッカルレイダーに変身していた。

そしてテイラーは杖、俺は大鎌テリトリサイズを構えて睨み合う。

先に動いたのはテイラーだった。

「行きますよ！シャドーハンド！デザードハンド！」

杖をクルクルと器用に回し俺に杖を向けると空中から黒い手が2つ、地面から茶色い手が2つ現れた。

「やれー！」

空中と地面の計4本の手が俺に一斉に襲いかかってきた。

それを俺はジャッカルレイダーの能力による高速移動で避けていく。

迫りくる手を躲し、とうとうテイラーの目の前に辿り着く。

そして飛び上がり、大きくテリトリサイズを振り下ろした。

だが！

ガキンツ!!

テイラーに届くことはなかった。

まるで透明な膜に弾かれたかのようにだった。

「防御結界……」

「ご名答。しかし貴方の敵は私だけではない事をお忘れですか?」

その時だった。

背後から迫りくる2本の手に反応できずに掴まれてしまった。

「な!?!しまった!?!」ガシッ!

シャドーハンドに掴まれた俺は持ち上げられた俺は斜め下に投げつけられる。

そこを待ち構えていたデザードハンドがキャッチし、もう一度上へと投げられる。

そしてまたシャドーハンドに捕まり、今度は俺を握り潰そうと手を握る力を強め始めた。

「グオオアアアアアアアア!!!」

「ふむ、いつもなら聞こえる骨が折れる音がしませんね。シャドーハンド!地面に叩きつけなさい。」

ティラーの聲が聞こえたのか、シャドーハンドが俺を地面へと投げ飛ばす。

このまま直撃はマズイ!いくら俺が勇者補正があつたとしても死ぬ!

持つてくれよ!俺とテリトリーサイズ!

俺は地面へと接近する中、テリトリーサイズにエネルギーを貯め始める。

いよいよ地面!

「どリアアアアアア!!!」

俺は地面にぶつかると同時に、テリトリーサイズを頭の上で振り被り思いっきり地面に叩きつけた。

ドゴオオオオオオオオオン!!!!

大地を砕くように思いっきり叩きつけたお陰で足が少し痺れた程度か。

「うん? うおつ?」

俺が顔を上げるとまさに眼前に大きな砂の拳が迫ってきていた為、俺は拳に合わせるようにサイズを振るった。

ドツバアーン!

砂の拳は斬り裂かれた所から飛び散る。

「くつくつく。相手は砂ですよ?」

テイラーが笑うとフィールドに飛び散った砂が徐々に集まり出し形を形成すると、また手の形に戻ってしまった。

「キリねえな。」

(ライト殿!)

セバスからの念話か。なんだ、こんな時に。

(黒風のボスの正体が分かりました。巡回していた者を締め上げた所、名前を吐きまし

た。)

(どうやら名前と顔を変えていますね。だから今まで網にかからなかったようです。)

(それでそいつの名は！今どこに。)

(驚かないでください。奴の名はテイラー・ガーディアンです。)

「テ、テイラー：」

(むっ！今、五感共有で確認しましたが、なんと！)

「おや？何か懐かしい気配がしましたが、貴方でしたか。セバスチャン。貴方：見てい

ますね？」

な!?コイツ：そんなのも気づけるのか。

(そして見た所、あやつの左腕についているのは封じの腕輪。効果を発動する事で相手の能力を封じ込める力を持つもの。)

「ご名答。そこまで分かった貴方にヒントをあげましょう。私の腕輪を壊せば貴方の変身能力は戻りますよ?」

「わざわざ答えを言ってくれるなんて、随分余裕なんだな。」

「ええ、分かったところで私は4つの手と防御結界に守られていますからね。そうそう、クロノ族の女性を今日捕獲しましてね。彼女はいいですね。あの反抗的な態度：！ましますそそりますねえ！」

クロノ族：やはりコイツらがルカを！

「さて、私の魔力が尽きるのが先か、貴方がやられるのが先か。果たしてどちらでしょうねえ？」

その頃、セバス達は：

クロノside

「皆のもの。今私はライト殿の目を借りて奴の腕輪を見た。封じの腕輪の他にもう一つ右腕にも腕輪をしていた。」

「右の腕輪？私らが討伐しに行った時についてたやつかい？」

「ええ、アルマ。そのようですね。」

アルマ。と呼ばれた黒いフードをかぶった女性の魔術師が杖を握り直しながらセバスに聞く。

「一応見せておくれ。どんな腕輪か。」

「ええ、これです。」

そう言うとしゃがんだセバスの頭にアルマが手を乗せて目を閉じた。

「…これは…間違いない。魔力受信機能付きの腕輪だねえ。」

「って、ことはなにかい？アルマ。あの建物の中に魔力送信機があるってことかい？」

「そうだね、ヘイゾ。間違いないよ。」

ヘイゾと呼ばれた白髪のリボサ髪ボサ髪の侍が顎をさすっていた。

「このステラ。いついかなる召集にも遅れを取らぬよう日々精進していました。今日こそ黒風を終わらせますよ。」

「うへえ・ステラはこの年になっても変わんねえな。まだ精進してんのかよ。」

「ええ、買って兜の緒を締めよ！つとヘイゾさんの生まれ故郷の言い伝えにあるではありませんか。」

「けっ！んなも興味ねえよ！ところでよ！」

なんなんだ、この人達は。

まず僕のノワールおじいちゃんが元影だつてことが意外だよ。あんないつも縁側で陽に当たりながらお茶をすすつてのほほんとしてるのに。

「どうしたんじや、ラックや。戸惑つておるのう。まあ、仕方ないじやろうな。こやつらは昔からこうなのじやから。」

「セバスさんから聞いたんだけどおじいちゃんって僕と同じって本当？」

「うん？ああ、本当じや。ワシは生まれつき闘気が少ない。その為、ワシは独自で闘気の無駄のない使用法を編み出したんじやよ。」

「さて、そろそろセバスが行くと言うじやろう。」

「では、行こうか。」

セバスの声で全員が気合を入れ直し、アジトへと侵入したのであった。

番外編 女装杯⑦

ラツク side

「侵入者だ!」

「ぶち殺せ!」

現在、テイラーの配下達とやり合ってる真つ最中だった。

「なんで潜入してたのに戦う羽目になってるの!」

「黙ってる! アルマ! くっちゃべってる暇があったら倒せ!」

ぼやくアルマに対してヘイゾが苦言を言う。しかしそのヘイゾの発言を許せない男がいた。

「おい、ヘイゾ。元はといえば誰のせいであんなにか分かってるのか?」

「だから! さつきから言ってるんじゃねえか、ノワール! それは悪かったって!」

なぜ、こうなっているのか: それはこの中で唯一魔法も闘気も使えないヘイゾがダミーの魔力送信機を破壊してしまったからだ。

それは警報になっており、ヘイゾの刀で斜めに一刀両断した瞬間に鳴り始めた。

一行が戦いながら走っていると牢屋が集中しました。

と云うことはルカもこの中に!

「ルカア!どこだ!」

「セバス。ここは鎮圧組と救出組に分かれて戦うというのはどうだ!」

「乗りましたよ、ノワール。鎮圧組は私とヘイズとステラ、後は救出にまわってください!」

「「「了解!!!」」」

各自、役割に分かれて行動を始めた。

「たりやあ!」

ラツクは正拳突きで牢屋の鍵を壊し、中に入る。

「ル…いないのか。助けに来ました。早くここから出ましょう!」

そう言つて手を取つて立ち上がらせようとするが、捕まっている女性は力が入らないのか立ち上がれない。

「おじいちゃん!」

「ラツクもか!こつちもじゃ!」

その時、ノワールは捕まっている女性がつけている首輪が一瞬光つたのを見逃さなかつた。

「アルマ!来てくれ!」

「どうしたの？ノワール。」

「これを見てほしい。この首輪何やら怪しくないか？」

「ふうむ、確かに。これは何かの魔道具だね。解析するよ。」

そう言うところアルスは新しく取り出したタクト型の杖を首輪に当て、目を閉じた。

ラツク side end

ライト side

「ふっふっふ！さあ！降参しろ！」

俺は今なお奴が繰り出す4つの手の猛攻に対して避け続けることしかできていなかった。

何か！何かないのか！

「貴様は俺の魔力が切れるのを狙っているようだが、その考えは甘いぞ！俺は今まで生きてきて魔力切れで負けたことなど一度も無い！俺の魔力は無限なのダア！」

そう叫ぶと更に4つの手の攻撃が激しくなる。

いつのまにか口調まで変わりやがって：

その時だった。

（やあ、君がライト君かい？）

急に知らない人から念話があった・

(ちよつと！なんで無視するのさ！私だ。セバスのチームのアルマだ。セバスがいつも君に使ってる通信くらいチョチョイのチョイでハック可能さ。もちろんこの念話もテイラーには探知できない。)

(もしかしたら奴の無限の魔力のカラクリが分かったかもよ?)

(いい？今から3秒数える。0を数えた瞬間、奴の右手首に渾身の一撃を叩き込むんだ。いいね？説明してる暇はない。)

(行くよ?333)

なんだか分かんねえけど乗るしかねえだろ。

俺はレイドライザーを操作して音を鳴らす。

フアイティング！ボライド！

(2！)

「何をする気かは知らんが、ひねりつぶせ！」

テイラーが命じると4つの手が俺を叩き潰そうと迫ってくる。

「ふっ！はっ！」

俺はそれを残像を残しながら避け、テイラーの前に現れ、飛び上がる。

(1！)

「忘れたか！俺には最強の防御が！」

(0！)

「はあつ！」ズガン！

振り下ろされたテリトリサイサイズは防御結界に阻まれ……ることなく貫通し、右手首の封じの腕輪に突き刺さった。

「な!?!何故俺の防御結界を！」

「分かんねえだろ？俺も分からねえ。だが、これで封じの腕輪は使えなくなつたぜ。」

「は!?!しまった！」

俺は言うや否や変身解除したと同時にシヨットライザーをバックルに装着する。

「なあ、教えてくれよ。どうしてアンタはこんなことをする。アンタほどの実力があればこんな小細工しなくたって、こんな悪逆非道な事をしなくたって成功しただろ？」

「…簡単な事だ。俺は弱い奴が嫌いだ。弱いからこそ！傷つく！弱いからこそ！虐げられる！それが、この世界の道理つてもんさ！まさにこの世は弱肉強食。だから俺は女道具扱いするんだ！俺の夢は！裏社会のドンになり、やがては！この世界を牛耳る帝王となることだ！それよりもだ！認めてやろう。貴様の力は計り知れん。どうだ？うちに来ないか？お前なら良い席を用意してやるぞ？」

「……俺は最初この世界に来た時、ただ漠然と魔物を倒す事を考えていた。だが、この力

を使つていくうちに俺たち勇者のおかげで助かつてる人達に出会つた。そして俺がクーデターを起こした日、改めてこの力を使うことへの責任を知つた。だから！俺はこの力を人々の笑顔を守るために使う！」

「そうか、やはりお前は俺が一番嫌いなタイプだ。」

「・お前は！自らの私利私欲、そして娯楽の為に弱い立場の人達の人生を弄んだ！俺は・お前を絶対に許さない！」

ダツシユ！

オーソライズ！

仮面：ライダー！仮面：ライダー！

「変身！」

シヨットライズ！

ラツシング！チーター！

” Try to outrun this demon to get left
in the dust.”

(この悪魔的速度、煙にまけるものならやってみな)

俺は新たに仮面ライダーバルキリーへと変身した。

「さて：第二ラウンドと行こうぜ？」

「はあっ！」 ダアアン！

そう言い、俺は砂の手を撃ち抜く。

また弾け飛ぶが、今度は再生することはなかった。

「な：再生しない：!?!」

そして俺はチーターの走力でテイラーを翻弄しながら次々に手を撃ち抜いて破壊していく。

今まで壊されることのなかった手達が次々と目の前で破壊されていつているのを目の前で見たテイラーは今まで当たり前に起きていたことが急に起きなくなったことで取り乱しだす。

「な：何故だ！何故再生しないんだ！俺の魔力制御は完璧なはず！」

「教えてやる。お前の膨大な魔力の出処は左腕の魔力受信機能を搭載している腕輪からアジトにいる大勢の女性達の首に取り付けられた首輪型の魔力送信機で吸い上げていく魔力だ。だが今頃、セバス達が首輪を解除していつてる頃だぜ？こうして喋ってる間にも。」

「くっ・・・」

魔力が枯渇し始めたのか、テイラーは肩で息をし始める。
「だから……これで終わらせる。」

サンダー！

俺は新たにプログライズキーを出して装填する。

オーソライズ！

シヨットライズ！

ライトニングホーネット！

” Piercing needle with incredible force.”

(貫く針には驚異の力。)

「姿が変わったから、なんだ!!!蜂如き叩き潰してくれるわ!!!」

そう言いながらテイラーが残り少ない魔力で魔力の手を2本作り出し、襲いかかってくる。

俺は背中に翅“ホーネットエール”を出し空を飛んで逃れる。

「これでもくらえ！」

俺は手の1本にヘクスベスパと呼ばれる小型の蜂ミサイルを撃ち出す。

セバス達はだいぶ首輪を破壊していつてるのだろう、それだけで手の破壊に成功し

た。

「なら！残り一本はこれだ！」

ショットライザーに装填しているキーのボタンを押し、トリガーを引いた。

サンダー！ライトニングブラスト！

銃口から飛び出した5つの蜂の針を模したエネルギー弾が魔法の手を破壊する。

「終わりだ！」

俺はショットライザーをバツクルに戻してキーのボタンを押し、引き金を引く。

サンダー！

右足に大きな蜂の針を宿しそのままライダーキックの体勢となり滑空する。

「させるか！」

テイラーはそれを防ごうと最後の力を振り絞り防御結界を張る。

俺のキックが防御結界とぶつかり火花が起こり始める。

こいつ！まだそんな力を！

「ハッハッハッ！貴様の必殺技らしいが、俺の最後の結界の前では無力なのを思い知れ

！」

「……良いこと教えてやるよ。」

「何!？」

俺は足をキープしながらショットライザーをバツクルから外し、結界に向ける。「人の思いの前では…」

そう言いながら狙いを定める。

「どんな力を持つてしても無力らしいぞ。」

ドン！

俺のショットライザーの一発が結界を破壊し、キックがテイラーに炸裂した。

サブラス トフ イー バ ー

グ ン ニ ト イ ラ I ダ ン

大爆発を起こしてテイラーは吹き飛び、壁に叩きつけられていた。

「勝者！ライト・ダテ選手！よって優勝者はライト・ダテ選手に決定です！」

こうして俺の優勝が決まり、表彰式が執り行われた。

それが終わり外に出るとセバス達が待っていた。

「セバス！」

「ライト殿。お疲れ様です。」

「ライト！」

「ラック！無事だったか！……で？横の女性は？」

ラックの横には見慣れない女性が立っており、どことなくラックに似ている：

「ああ、彼女が僕のもう一人の人格のネロだよ。」

「ネロよ。ラックを導いてくれた貴方とセバスさんには感謝してるわ。」

テイラーと、その一味は逮捕されキツイ罰が下るだろう。セバス曰く極刑は免れない

と。

そして1週間後にはラックとルカの結婚式が執り行われ俺達の街に住むことになっ

た。

そして俺達の街にも移住者が増えていったのであった。

第31話

大会から3日後、俺は城に呼び出されていた。

内容は：改めてマルティ：ではなくアバズレの断罪についてだ。内容は奴がカルミナ島で俺に対して行った蛮行についてらしいが、どうやら尚文にも同様のことをしていたらしい。つくづく頭の悪い奴だ。まだ勝てると思ってるのか。

そして今日の女王はカンカンである。

「ビッチよ、貴方は何てことをしているのですか。全く反省の色が見られませんね。」

「何で私が反省しなきゃいけないのよ！悪いのは全部盾と鎧の勇者よ！」

「そうですか。ではカルミナ島の事はとりあえず置いておくとして：貴方がイワタ二様とダテ様に着せた冤罪について話しましょうか。」

「貴女の証言では、まず2人が酔っ払って部屋に入つて来て乱暴をしたと：そうですね？」

「ええ！そうよ！」

その言葉を聞いた女王はうなづくと影に命じて上に布を被せた皿を持って来させた。

「実は影からの報告でイワタ二様とダテ様はお酒が、かなり強いと聞いております。」

「そして、それを証明するのがコチラです。」

そう言いながら布を退けると果実が山盛りになった皿が出て来た。

「ほほお・・・」

俺の付き添いで来てもらったセバスが少し引きつった笑顔を浮かべる。

「ええと：確か：それは・・・」

「ええ、ルコルの実です。お二人共どうぞ？」

「ええ、いただきます。」

「いただきます。」

俺と尚文はせーの！と息を合わせて同時にかぶりついた。

「うわっ・・・」

「ヤベエよ、アイツら・・・」

周りから口々に声が聞こえる。

ふむ：食べるのはカルミナ島以来だが、やっぱりアルコールは感じるけど度数は少し弱いな。

「よろしければ、まだお召し上がりには？」

俺と尚文が一個丸々食べきると更に女王は勧めて来た。

「ええ、もちろん。」

「いただきましょう。」

俺達は2個目に手を伸ばして食べ始める。

美味しいっっちゃ美味しいけど：流石に：もういいかなあ。りんごとかの方が美味しい。あ！この実を絞って果物と混ぜたら果実酒が作れるな。今度我が街の偉大なるシエフ軍団に提案してみるかな。

「お身体に異常はありますか？」

いつのまにか来ていたセバスが話しかけてくる。

「うん？ああ・特にないけど、俺は2個でいいかな？味に飽きたし。」

俺がそう言った瞬間、周りがザワツとうるさくなつた。

「よほど丈夫なのですね。」

「なんだ？なんかあんの？この実。」

「コホツ！コホツ！」

女王が咳払いをした。

「セバス殿がそれを説明する前に、ビッチ。貴方も食べなさい。」

「なんでよ！：分かつた！あれよ！アイツらが食べたのは偽物よ！」

ビッチが尚文を指差しながら怒鳴る。

「ならば・イワタニ様。今お持ちのそれを半分に分けて影にお渡してください。」

「え?はい。」

尚文がパカッと半分に分けて影に手渡した。

「どうぞ。」

影がビツチに実を差し出す。

「いやよ!どうして私が!」

「仕方ありませんね。無理矢理にでも食べさせなさい。」

「御意。」

そう言うのと女王のすぐそばに控えていたアナスタシアも入った。

「チエスト!」

無理矢理開かれたビツチの口に実が押し込まれた。

するとビツチの顔が真っ赤になったと思うと急に青くなって倒れた。

「あれ?死んだ?」

「いえ、大丈夫です。治療院へ運んでおきます。」

「さて、その実なのですがルコルの実と言いまして：ダテ様はご存知ないようですね。しかし話されている感じでは食べたことはあるとか：」

「ええ、少し前に私の街の食堂にありまして。お腹が空いた私はつまみ食いをしまして

：まあ2つ食べたなら飽きたんですけどね。」

「実はルコルの実は、実が一つで樽一つ分のお酒になるほどの高濃度のアルコールが含まれております。つまりそれを2つ以上食べることが出来るイワタニ様とダテ様は：言い方が悪いのですが異常ということなのです。」

異常かあ：知ってるけど。

「そしてビッチはイワタニ様とダテ様の部屋に忍びこんだのを店主は見ていますが、無理矢理権力で黙らせたのでしよう。次にキタムラ様の鎖帷子の件ですが：」

「それは認めます。これは尚文のです。」

そう言つて元康は鎖帷子を床に置いた。

「そうですね。実はその鎖帷子を売った男性が証明書を発行して提出してくださいましたのですが、ご自分で認めるのであれば、まあいいでしょう。更にビッチは国庫の横領をしています。」

「つきましては、その損害賠償や迷惑料をキタムラ様に支払っていただくことになりません。なお、これから先ビッチが悪行を重ねる事で加算されていきますのでキタムラ様にはビッチをパーテイから解雇する事をオススメします。」

「嫌です！アイツは俺の仲間です！」

それだけ言つてビッチが心配なのか玉座から出て行つた。

おいおい、今気づいたけど女1ことエレナと女2笑つてたぞ。

「さて、ビッチの話はこのくらいにして、イワタニ様にはお返しするものがあります。」
「そう言い直接包みを渡す。」

中には尚文が着ていた服が出て来た。

「そちらはビッチが回収後、小遣い稼ぎのために商人に売り飛ばしていたようです。まあ、この世界では見かけない珍しい物でしたので、すぐに特定することができ、買い戻させていただきました。」

「そしてコチラは今までお支払いできていなかったお金でございます。お納めください。あとは波が近いのでまとめしてお支払いいたします。それでは今後ともよろしくお願いいたします。」

「はあ．．」

それで話が終わり、鍊と樹が出て行つてから俺たちも出ようとした時、女王が小さくため息をついた。

「どうしました？相談くらいならば乗らせていただきますが。」

「ええ．．私の夫についてです。」

「ああ、あの裸で街歩いてたやつか。」

「え？なにそれ知らない。」

俺はここまでトランスチームガンで来たから知らない。

まあ、どんななんだったかは後で尚文に聞くか。

「あの人はああ見えて昔は英知の賢王と呼ばれるほどの人だったのですが：」

「へえ、信じられないですね。」

「では：失礼いたします。」

そう言つて俺はセバスと共に玉座を出た。

「波が近いですな。では近隣諸国にでも出向きますかな。」

「うん？なんかあるの？」

「おや？ご存知ないのですか？他国の龍刻の砂時計にて武器を共鳴させるとその国の波に参加できるのですよ？」

知らないんだけど。え？そんなんできるの？

「まあ、ライト殿はクス殿とビツチに嫌われておりましたからな。知らないのも無理はないでしょう。と、言う事は七星勇者の事もご存知ないのでは？」

「知らないな。」

「ではご説明させていただきましょう。七星勇者とは七つの武器に愛された者のことです。五聖勇者と違う点を挙げますと：誰でもなれてしまうということです。」

「誰でもっ？」

「誰でもというのは語弊がありましたな。五聖勇者は召喚された者しかなることができ

ませんが、七星勇者は武器に愛されさえすればこの世界の者でもなることができます。」
「て、事はセバスも?」

「まあ、そうですね。残念ながら未だに選ばれておりませぬが。」

「でも見た事ないな。そんな人。」

「ふむ。実はライト殿は1人会っているのですよ。」

え?七星勇者に?そんなん会ってたら忘れないけどな。そんな魔法の使い手みたいな人いたか?

「まあ、ライト殿なら教えても良いでしょう。オルトクレイ:今の名はクズ殿ですな。」

「はあ!?!あの!?!」

嘘だろ:あのクズが!?!いやいや、何かの間違いだろ。それか杖がよっぽどみる目がな
いかだろ。

「女王様が仰ったようにあの方は英知の賢王と呼ばれるほどの魔法の使い手で、彼がメ
ルロマルクにいるだけで抑止力となりました。」

「まあ、お話はここまでとしましょう。ではそろそろ近隣諸国にでも出向きますかな?」

「いや、どうしても寄りたいところがある。そこに寄ったらだな。」

第32話

「やあ！エルハルト！」

「お？鎧のあんちゃん！ひつきさしぶりだな！今だから言うがお前がクーデター起こした日は肝が冷えたぞ。俺は三勇教徒じゃないが生きた心地がしなかったぜ。」

「すまん。だが安心してくれ。流石にアンタは襲わない。」

「だが、これで罪は完全に消え去ったろ？」

「ああ、尚文のために頑張ってくれたんだろ？恩に着るよ。」

「いいってことよ。そうだ！珍しいものを見せてやる。」

そう言うと奥へと引つ込んでいった。

さて、この武器屋ではできるのか？

俺は色々な鎧を触っていくが、俺の鎧はうんともすんとも反応しない。

やっぱ、ダメか。

「持って来たぜ。」

奥からエルハルトが台車に乗せて何かを運んできた。

「ひっくり返るなよ？せーの！」バサッ！

布を取るとそこには立派な鎧があった。

無骨な中にも言葉にできない何かが秘められている……それが第一印象だ。

「なんとこれはな？隕鉄の鎧ってんだ！」

「ほう、隕鉄ですか。」

セバスが顎をさすりながら色々な角度から鎧を観察しだす。

「確か、これはある日空から降って来た珍しい鉱石を用いて作られたゼルトブルの展示品。このように珍しい物をなぜ貴方が？」

「じいさん、そこは……まあ、あれだ。昔、ちよつとな？」

「ほほう、まあいいでしょう。誰しも人に言えない事が一つ二つあるもの。追求はやめにしましょう。」

おん？俺の鎧が反応してやがる。つまりこれは……

俺は試しに触る。

——新たなライダーを解放します。——

解放 仮面ライダーメテオ、仮面ライダーダークカブト、仮面ライダーブラッド、仮面ライダーギンガ

おお！スゲエ！

「どうやら新しい力を解放したようだな。」

「ああ、これでもつと戦闘の幅が広がったぜ。」

エルハルトと別れた俺とセバスは各国の砂時計に登録をして廻り、各々波に向けて修練を始めた。

ピーターとターニャはセバスのもとで、ナーガとミコとエクレールは兵士に混ざっていた。

そして波が起ころるまで後3日と迫り、偶然尚文と出会った俺は城内で女王を見つけたので声をかけた。

「少し構いませんか?」

「ええ、どうしたのですか?」

俺たちは話しながら歩く。この道順は玉座か。

「質問があるのですが、他の勇者達は他国の波の対処に行ってると思うのですが、私達はよろしいのでしょうか?」

「ええ、問題はありませんよ。これはイワタニ様も同様なのですがお二人は国専属の勇者という形を取っておりますので。大きな問題が起きない限りは問題はないかと。」

「できればその大きな問題ってやつが起きないで欲しいんだが……」

その時だった。

突如ガラスが割れる音がして、まるで頭を揺らすかのような衝撃が俺たちに襲いかかった。

この感覚に一番近いのは波だ！だが辺りを見渡しても転送された感じはしない。

だが：

「今・何かが起こった。」

「はい？」

「尚文もそう思うか？」

「ああ、正確にこれとは言えないが何か起きたのは確かだ。」

尚文の言葉に俺は赤い砂時計のアイコンを呼び出す。

「嘘だろ!? カウンントが止まってる…」

「おい、来人。新たに砂時計が増えてるぞ。」

確認すると新たに青い砂時計が表示されており、そこには7という数字が刻まれていた。

7：なんなんだ、この数字は。

「お二人の様子からして冗談のようには見えません。念のために各国に情報を募りませう。」

そう言うと女王は念和を飛ばす。

すると玉座にボロボロになった飛竜と他国の兵士が現れ、こう言った。

「た、大変です！ 封印された伝説の魔獣、霊亀の封印が破られました！」

第33話

「靈亀…なんて事…」

城中にいた俺達の仲間達も集められて伝令の話を聞いていた。

靈亀？なんだそれ？

「尚文、お前知ってる？」

俺はヒソヒソと尋ねる。

どうやら尚文は知っていたらしく俺に説明してくれた。

四聖、四神が青竜、朱雀、白虎、玄武だとすると四霊は麒麟、鳳凰、靈亀、竜。そして靈亀は蓬萊山を背負った巨大な亀らしい。

「そんな…まさか…」

早速俺達の出番じゃねえかよ。

「はるか昔に突如現れ、暴れまわってたそうですが、その時代の勇者の尽力でかろうじて封印され、それ以降封印は保たれていたはずですが…」

女王は信じたくないのか、口にする。

「ええ、そして絶対に封印が解かれないようにと解き方は一切誰にも教えなかったと書

物には残っています。」

しかし、伝令は真実だということを告げた。

「なあ、波が原因ってことはないのか？」

「それはまだ分かりませんが、おそらく。」

すると黙っていた尚文が口を開いた。

「それだと7という数字について説明がつかない。なぜ7なんだ？」

「ちよつと待ってくれ。」

黙っていたピーターが口を挟んできた。

「なあ、アンタ。どうしてライトとナオフミさんをチラチラと見てるんだ？その顔は何か隠してる顔だろう。」

「い、いや…それは…その…」

伝令はピーターに痛いところを突かれたのか、とても言いづらそうにして言い淀む。

「ピーター殿の言う通りです。何か隠しているのならば、はっきりと仰ってください。」

「…：分かりました。申し上げます。」

伝令は深呼吸をすると一気に信じられないような事を言った。

「五聖勇者の剣、槍、弓の勇者様が封印を解かれたとのことです。」

「な!?!」

「アイツら!!! やりやがったな!!!」

「イツキ様ー!」

リーシアがどこか知れない事件現場へと走り出す。

「フイーロ、リーシアを連れ戻してこい。」

「ライト、落ち着け。今お前が怒鳴ってもどうにもならん。」

フイーロがリーシアを、エクレールが俺を落ち着かせて話の続きを聞く。

「それは確かなのですか?」

「はい。封印されていると言われる町に勇者様方が来訪し、それぞれおかしな儀式を始めたかと思うと町の各所に鎮座してあった像を破壊し始めました。その直後に霊亀の封印が解かれ、霊亀へと向かっていく姿が多数目撃されています。」

女王の顔がみるみる青ざめていく。

「イツキ様ー! 離してください! 私はイツキ様を助けるんです!」

前言撤回。リーシアは落ち着いてなかった。あれだけの事をされてなお、想い続けるのか。並のことじゃねえな。

「しかし、どうやって誰も知らないはずの封印を。」

「そうか！アイツらはこの世界が自分達がやってたゲームに似てるって言うってた！なら封印の解き方を知っててもおかしくない！」

「でも討伐されたんですよね？」

ラフタリアが伝令に聞く。

「いえ、勇者様方は封印が解かれた後の混乱で行方不明に。そして現在、霊亀は人が多く集まる場所へと移動中です。」

「まじかよ。」

そして2日後。

俺達は女王が手配した騎士団と共に対霊亀戦の為に近隣の国と連合軍を組むこととなった。

前線には俺と尚文。

今回は俺達が関与してないとはいえ、同じ五聖勇者がやったことだ。俺にも尚文にも異論はなかった。

そしてその道中で霊亀による被害が逐一俺達の耳に入る。

どうやら都市が5つ、砦が3つ、城が2つ落とされているそうだ。いずれも被害は甚

大であり、更に靈亀だけでなく、靈亀が使役していると思われる使い魔も被害を生んでいるらしい。

ますます許せねえ。

鍊、元康、樹。テメエらはそれだけのことをしたんだ。

「それで今回は七星勇者は来るんですか？」

「一応要請はしました。しかし我々が先に着きますね。」

正直言つて七星勇者が強いのかも分からん。いないよりはマシンなのは確かだが。

「見えてきました！あれです！」

山だ。それが俺が見た靈亀の感想だ。まるで大きなとてつもなく大きな山が移動している。

「女王。伝説では昔の勇者はどうやって封印したのですか？」

「背負っている山脈の中から体内に侵入し、心臓を攻撃して封印したそうです。て、ことは足を止めさせる必要があるな。こつちも無事じゃあ済まないな。」

俺達はファイロ口がひく馬車に乗り込み靈亀の側まで近づく。

「やるか。」

俺は真カースシリーズを解放してオーズドライブを腰に巻く。

そして体内から飛び出した3枚のメダルを掴んでベルトに入れ、スキヤナーを通し

た。

キン！キン！キン！

「変身！」

プテラ！トリケラ！ティラノ！

プットティラーノザウルス！

真カースシリーズ（強欲）：オーズ プトティラコンボ

絶大なパワーを手にするが、グリード化の片鱗を見せる為、変身してから24時間は味覚の消失が起こる。

「とりあえず足を止めてみる。出来そうなら侵入してくれ。」

俺は右手を振るって手始めに霊亀の両の前足を凍らせる。

ガクン！と霊亀はバランスを崩しかけるが持ち堪え何があつたのかと周りを見渡す。

そして俺達に気がついたのか、使い魔達をけしかけてくる。

「来たぞ！」

俺達は各々の武器を構えて応戦し始める。

「くらえ！ヒートスラッシュ！」

「業火滅却！」

「ライトニングクルセイド！」

ピーターが炎の件で燃やし斬り、ナーガが空から来る魔物を口からの炎で燃やし、エクレールが振るう剣から飛ぶ十字架を発射する。

「ハウリングスタンプ！」

ミコの遠吠えで一時的にスタンさせられた魔物達が落ちてくる。

「今よ！ターニャ！」

「オツケー！火遁！炎狼撃！」

印を結び、口から出した火の玉達が次々と狼の形になり落ちてくる魔物を喰らい、喰らいきれなかった魔物は傷口から炎上させながら空を駆け回る。

これならいける！

「……………!!!」

霊亀が急に叫んだかと思うと足を凍らせたまま前蹴りを放つ。

狙いは俺か！

俺はすぐに横っ飛びで回避し、霊亀を見る。

霊亀は狙いを外したことに気がついたのか、足を振り上げる。

だが突如霊亀と使い魔達の上空に雷雲が広がり無数の雷が落ちた。

女王達だな。ありがてえ。

霊亀の首が少し下がったことでフイーロがキツク、ラフタリアが斬りつける。だが少し血を流させただけですぐに傷が塞がった。

そして霊亀の目の前に魔法陣が展開される。

「ライト……！」

ピーター達が地面に貼り付けられたかのようにうつ伏せになる。

「重力だ！ライト！これは恐らく重力の魔法だ！」

俺同様に重力の重みを受けていないターニヤが叫ぶ。

分かったはいいが、どうする。とりあえず俺は近くにいたミコとエクレールの手を掴み重力を無効化する。

「来人！大丈夫か！」

尚文が俺のもとへ移動してくる。なんとか体の重さは無くなった。

「俺の結界の中にいたら大丈夫だ！このまま奴らを回収するぞ！」

ラフタリア達を盾の結界の中に入れる。

だが霊亀にとっては面白くないのか、その結界にストーンピングを仕掛ける。

「させるか！シールドプリズン！」

結界の上から檻が現れる。足が当たったことで檻が壊れ、そのまま結界にぶつかると。

その結界もミシミシと音を立てる。

「やばいか？」

「ああ。」

「移動するぞ！」

俺達は境界から出ないように走る。俺たちがいなくなった場所を霊亀は踏みつけ、辺りに砂煙が立つ。

「なんとかなったな。」

「ああ、それにアイツ。俺達を踏み殺したと思ってるぞ。」

「なら、仕掛けるなら今だ。」

すぐ横でラフタリアがフィーロに乗って尚文の合図を待つ。

「今だ！」

「八極陣・天命剣！」

「すばいらる・すとらいく！」

ラフタリアとフィーロは一筋の光となり霊亀の首を貫いた。

首は血を吹き出しながら胴体から離れて地面に落ちる。

そして首が無くなった霊亀の胴体は音を立てて地面に倒れていた。

やったのか？だが大抵の生物は首を落とされたら死ぬだろう。

死なないのはアンデットくらいなものだ。

「ふへえ、疲れた。」

フィーロが地面にペチャつと座り込む。

「よくやったな、お前達。」

尚文が仲間達を労いながら本陣へ戻ろうとする。

いや、待てよ：なんなんだ、この違和感は。分からない。奴は俺達の目の前で首を落とされた。つまり勝ったんだ。

なのに：何故心の底から勝利を喜べない。

まさか！

俺はガツと後ろを振り向いた。

「チッ！やはりな！」

霊亀の首が再生を始めていた。

「お前ら！まだ倒せてない！」

俺がそう叫んだ瞬間、胴体から光が現れ、喉へと集まっていく。

マズイ！

「尚文！」

「分かってる！お前ら！伏せろ！」

尚文は俺の横に立ち流星盾を展開し、更にその上からシールドプリズンを展開する。俺はメダガブリューをバズーカモードにして構える。

プツツテイラーノヒツサーツ!

メダガブリューの銃口にセルメダルのエネルギーが溜まり始める。

正直これで防ぎ切れるとは思ってねえ。被害を最小にできれば上出来だ!

そして霊亀の口から高濃度の雷が撃ち出された。

規模的にはあれだ。と○るのレー○ガンを彷彿とす：いや、あれ以上だ。

「ストレインドウム!!!」

メダガブリューから強力な破壊光線が撃ち出され、霊亀の雷と俺のストレインドウムの力比べになった。

第34話

「危なかった。アレはマジで死んだと思った。」

「ああ、全くだ。俺達くらい頑丈じゃなかったら死んでたな。」

「同感だ。」

俺達は作戦本部へと戻ってきていた。

あの後、俺達は霊亀の破壊光線に押し負け回復してもらい、すぐに撤退してきていたのだ。

「お願います！盾の勇者様！鎧の勇者様！」

「我らをお救いください！」

「奴のせいで我々の国は！」

見事な掌返しである。俺や尚文が罪人扱いされていた頃は考えられない状況だ。

しかし、ここで逃げるわけには行かない。俺達はバカやった同じ三勇者の尻拭いをしてやらないといけない。例えば勝てずとも殿を務めなければならぬ。

「後方から拝見しておりましたが、まさかあのような再生能力を擁していたとは……」

女王が悔しそうな顔をする。

俺たちだって同じだ。普通の生物は首を落としたら死ぬ。確かにゴキブリとか鶏でも死なずに生き続けた個体がいるらしいが、普通は誰だって死ぬと思う、俺だってそう思う。

「近隣の国への避難誘導はできてますか？」

「順に行つてますが、まだですね。もし仮に霊亀がスピードを上げたらひとたまりもありません。」

「これは・伝承通りに倒す必要がありそうだな。」

「勿論だ、尚文。もうそれしか道は残つてないだろう。まあ、それより飛竜がたくさんいるな。侵入できそうですか？」

「いえ、使い魔に阻まれているそうです。」

「ですよねえ。霊亀だつてせっかく封印が解けて自由になれたからそう簡単に死にたくないでしょうし。」

そこで俺は何かに気がつく。

「質問です。仮にですが僕と尚文が霊亀の足を皆さんが内部に侵入するまで止めると言つた場合、皆さんは侵入できますか？」

「何を言つてるんだ、君は。後ろから見てたが、そう言つてできてなかつただろ。」

「そうだそうだ。そう言つて他の勇者達みたいに出来もしないことを言うんだろうが！」

もう騙されねえぞ！」

会議に集まっている各国の隊長達が怒鳴る。

俺はその罵詈雑言に一瞬拳を振り上げそうになるが収める。

そうだ、この人たちは霊亀が復活した地域に近いところの国出身なんだ。て、ことは

：

だよな、信じろって言う方が無理だよな：勇者によつて裏切られてるんだから。

「分かった。」

そう言う俺は立ち上がり、膝をつくと頭を地面につけた。

「な!？」

所謂、土下座の態勢である。

「信じてくれなんて、大層な事は言えない。でもやるしかないんだ。今一度みんなに聞

きたい。勇者ってなんだ？」

「それは・・・」

「おい、分かるか？」

俺達を非難していた各国の隊長達がボソボソと相談し合う。

「勇者とは強い力を正しい事に使う、勇気ある者の事です」

女王がこちらの考えを汲み取ったのか即答した。

「そうです。大いなる力には大いなる責任が伴う。これは私がこの世界に来て身をもつて味わった教訓です。」

「そして俺はこんな奴の為に、誰かの涙は見たくないんです。みんなに笑顔でいて欲しいんです。それじゃダメですか？」

俺の言葉に皆黙ってしまふ。

「……分かりました。作戦を詳しく話してください。」

そう喋つたのは俺を非難していた隊長の一人だった。

「俺もだ！」

「目が覚めたよ！確証はないがアンタの言葉を聞いてたらやれそうな気がしてくる！」

「すまねえ、勇者様。我が魂、アンタに預けるぞ！」

俺の言葉でバラバラだった会議が一つになる。

こうして俺達は意見をあげ、今度こそ成功させる為に各自持ち場についた。

現在俺とフィーロに騎乗した尚文の3人は霊亀の足下にたどり着く為に移動していた。

「なあ、それ乗らせてくれねえの？」

「すまん、フィーロの機動力を活かすなら一人乗りが一番なんだ。」

「けっ！お前はスネ○か！」

「誰がスネ○だ！てか、お前のネタで初めて分かったぞ！」

作戦はこうだ。俺と尚文とフィーロで霊亀を足止めする。それによって使い魔が俺達に向かつてくる為、上の守りが手薄になる。

その間にそれ以外の侵入組が残りの使い魔を蹴散らしながら侵入し、完了した後に侵入組が照明弾を撃つため頃合いを見計らって俺達も侵入するって寸法だ。

聞いた話だと、心臓の封印は俺たちではなく、もつと高位の魔導師達じゃないとできないらしい。

「行くぞー！」

俺達は高速で脚目掛けて移動し始める。

「流星盾！ツヴァイトオーラー！」

「もう一度凍っちまえー！」

バカ正直に走るからフィーロに追いつけないんだ、飛べばいい。

尚文が霊亀の脚を掴んでいる間に両方の後脚を凍らせて地面にくつつける。

思った通りだ。霊亀は片方の前脚を尚文に掴まれ、両方の後脚を氷漬けにされている為、身動き取れない。

そして更に使い魔が尚文に殺到する。

上空に魔法陣が展開して無数の魔法が降り注ぐ。

女王達の後衛の魔法だ。そしてすぐ下で俺とフィーロで倒しきれなかった使い魔を倒していく。

その時、霊亀の口が光りだす。

「尚文！破壊光線が来るぞ！」

「俺の後ろに入れ！」

俺達を自身の脚ごと消し飛ばそうと破壊光線が迫る。しかし尚文のラースシールドが耐え切る。

「尚文！よく耐え切った！安心しろ、お前が暴走しても俺がぶん殴って止めてやるからな。」

「やめろ、シャレになんねえ！」

そしてまた破壊光線を吐こうとしてくる。

「おいおい、早すぎんだろ！」

「か八かやってやんよ！！」

俺は氷を操作して地面から氷の槍を生やすように思い浮かべ、それを実行する。

地面から氷の槍が生えて霊亀の喉に突き刺さると破壊光線を防ぐことに成功した。

「やったぜ！」

あとは奴の再生能力を封じる、もしくは遅らせれば：あれだ！

「尚文！ラースシールドだ！」

「……！分かった！そういうことか！」

俺の言おうとしている事を理解したのか、尚文はフィーロに指示を飛ばす。

「フィーロ！俺はこの抑えてる脚を離す。そこで奴が踏みつけ攻撃をしてきたときに離れる。いいな？」

「うん！」

「せーの!!!」

パツと手を離れた尚文はすぐにフィーロにまたがり足下から逃げる。

そして脚が尚文に当たった瞬間、ラースシールドを発動させる。

ラースシールドが放つダークカースバーニングの効果は治療遅延だ。ならば奴の再生に影響を及ぼすはず！

そんなふうを考えていた時期が俺にもあった：

霊亀は治療遅延というデバフを物ともせず脚を再生させ始めていたのだ。

「すまん。」

「気にすんな。それよりフィーロ。女王に戦況を聞いてきてくれ。」

「でも……」

「大丈夫だ。お前のご主人様には、この鎧の勇者が付いてんだ。ぜってえ殺させねえか

「らよ。」

「…うん！わかった！はいくいつく！」

そう言うのとファイロは高速で駆けていった。

「さて、持ちこたえるぞ！」

「おう！」

「尚文！少し滑るかもしれないねえが、地面を凍らせてやる！これで地割れとかが気になんねえだろ！」

「サンキュー！」

そして、しばらくして…

『力の根源たるファイロが命ずる。ことわりを今一度読み解き、かの者を激しき真空の竜巻で吹き飛ばせ』

「ツヴァイト・トルネイド！」

竜巻で使い魔達を吹き飛ばしながらファイロが戻ってくる。

「ただいま。」

「どうだった？」

「ラフタリアお姉ちゃんやピーターお兄ちゃん達が頑張ってるから、もう少しだつて！」

「そうか！」

「流石だぜ！」

「それと、これを。スタミナを回復させる薬だつて！」

そう言つて差し出された物を見て笑いそうになる。

ルコルの実か。

「尚文！俺は今食べねえから俺のも食べえ！」

「わかつた！」

「それと尚文！脚はお前に任せる。そのかわり群がつてくる使い魔は引き受ける！構わないか！」

「ああ！やれ！」

「オツケー！」

俺は変身を解除し、ザイアスラツシユライザーを腰につける。

プログライズキーを鳴らす。

インフェルノウイング！

バーンライズ！

仮面ライダー！仮面ライダー！

「変身！」

俺はスラツシユライザーのトリガーを弾く。

スラッシュライズ!

バーニングファルコン!

” The strongest wings bearing the fire
of hell.”

(地獄の焰から生まれし最強の翼)

「燃えろ!」

俺は炎を出し、迫りくる使い魔達を燃やしていく。

「えいや!」

そして燃やし尽くせなかった奴はファイロが蹴り飛ばす。

「破壊光線が来るぞ!」

尚文が叫ぶ。

「止めてみせる!」

インフェルノウイング!

バーニンググレイン!

俺はスラッシュライザーを手に持ちプログライズキーを鳴らし、トリガーを弾く。

俺はスラッシュライザーから炎の刃を放ち、霊亀の首を燃やし斬った。

「どうだ!」

そのとき、やつと照明弾が上がり、侵入に成功したことが分かった。

「首を再生させてる今がチャンスだ！俺に捕まれ！」

この形態で使える主翼、バーニングスクランブラーを展開して尚文とフィードを回収して飛び上がる。

空を飛んでる最中に飛べるタイプの使い魔が俺を叩き落とそうと迫ってくる。

ならばと俺は火の鳥のように炎に身を包みながら飛ぶ事で俺にぶつかってくる使い魔を燃やす。

そしてそのまま侵入口に突っ込もうしたが、何かが目に入り俺は寺院跡地と思われる場所に降り立つ。

「どうした？」

「いや・何か第六感みたいなのがある。」

「ねえねえ、これなーに？よめなあーい！」

フィードが何か見つけたようだ。

俺たちはそれを見て驚いた。

日本語なのだ。

もしも日本から召喚された・がこの文字を読んでいるのなら、覚え・い・欲しい。

こ・化け物はどれだけ厳・な封印をしても終・の時に七・目・破・るだろう。

調べた結果、目的は……であり、世界の……だ。
願わく、意的に封印を破らない事を祈る。

犠牲者を出すのはもしかしたら世界の為ともなりえる。

その代価に見合う見返りがあるのだから。

だけど……傲慢・しない。終末……にこの文字を・む者がいるのなら、世・より・人の為に出来る限り・く倒し・くれ。

・の化・物を倒す方法は……。

・の八・勇・桂一より。

なんだ、これは。掠れてて読めないな。

つなぎ合わせて無理やり解読するに……霊亀はあのバカどもが解かなくてもいずれ解けていた事。あと八？とりあえず桂一と名乗る何かしらの勇者が書いたもののようにだ。

十中八九コイツは霊亀封印に関わってるな。まあ、恐らくコイツが封印した張本人だ。

「まあ、他に目ぼしいものは無さそうだな。ほら来人。頼んだぞ。」

俺はまた尚文とフイーロを抱えると侵入口を探す。

うん？あれは！

ピーターか！ピーターとラフタリアが先頭となり道を切り開いている。

それを挟むようにミコやナーガか。

「合流するぞ！」

そう言いながら俺は地面へと滑空し、器用に使い魔だけを焼き払った。

「ライト！」

「ナオフミ様！ファイロちゃん！」

「ピーター、侵入口は見つかったか？」

「いえ、霊亀が動いているせいで中々場所が掴めないようです。」

「分かった！俺が空から探す！」

俺は再び空へと飛び上がり頭部のBFスコープで探す。

……見つけた。

俺はすぐにピーターのもとに飛び、知らせる。

「おい！見つけたぞ！俺が先導する。」

「頼みました！」

俺が火を纏いながら飛び使い魔を狩りながら進み、予想よりも少ない犠牲者で侵入することに成功した。

第35話

靈亀の心臓へと繋がる入り口から入り、暗い道をラフタリアが照らしながら進んでいく。

やはり道中にも敵は現れたがなんてことはない。楽に進める。

「しっかしコイツ普通じゃねえな。なんで中身がダンジョンみたいになって壁が土や石なんだ？何食ったらこうなるんだよ。」

「道は分かりますか？」

「ええ、前にこの中に調査で入ったものが記したものがここにありますので。」

「なら良かったです。」

俺たちが進んでいくと開けた場所、所謂広場にたどり着いた。がなんか真ん中にいる。

あれは：雪男か？背中に甲羅がついた：

なんで甲羅ついてんの？靈亀の使い魔だから？

「さて、ここは俺たちでやろうか。ピーター、ナーガ！頼めるか？」

「ええ。」

「任せろ！」

2人は得物を構えると4mを超える雪男に走っていく。

「グオオオオオ!!!」

雪男は雄叫びをあげながら迎撃の構えをとる。

「ブレイズピアース！」

ナーガが走りながら棍の先に自身が吐いた火をつけ、貫く。

火を纏った棍が雪男の体の中から燃やし苦しめる。

「ナイスだ！ナーガ！」

ピーターが跳び上がり片手剣を逆手に持ち雪男の首を一闪、斬り落とした。

「おお！流石勇者様のパーティ！」

「コホン。」

「ん？」

「さて探索は我々盾の勇者のパーティに任せてもらおうか。ほら行くぞ、みんな。」

そう言うスタスタと歩いて行ってしまった。

「終わったぞ。残念だが心臓部へと繋がる道は見つからなかった。」

「見つからなかった？マジで？」

「マジだ。」

「壁でも壊すか?」

俺はまだバーニングファルコンに変身したままの為、手から炎を出しながら言う。

「いや、石壁だろ? 燃えるのか?」

「分からねえ。」

「えい! えい!」

「おい、何をしている。」

フィーロが床を蹴っていたのだ。

「何か面白いのー」

「まさか・ラフタリア。コイツをかけてみてくれ。」

尚文が盾から小瓶を取り出してラフタリアに渡す。

確かあれは強酸水だっけか? 溶かすのか?

ラフタリアが瓶を逆さにして強酸水が飛び散らないように注意しながら指定された床かけると床が蠢き始めた。

「魔物か!」

「ああ、どうやら擬態していたようだな!」

芋虫型の魔物を倒した後に俺たちは話し合う。

「なあ、これよお。調べ直しじゃねえか?」

「その通りだが時間がない。とりあえず開いた穴に行くぞ。」

俺達はその穴に飛び込んで辺りを確認する。

先ほどの石壁とは違い、肉感がある壁や床に変わった。

「どうやら、やっと奴の体内に入れたらしいな。」

その声を合図にしたのかは分からないが、血小板や白血球のような、とうとう甲羅を背負っていない魔物が襲いかかってきた。

さっきの芋虫みたいな魔物が強酸を吐きながら向かってくる。

こりや、連合軍は前の部屋に残してといて正解だったな。

「燃えろ！」

「影！俺達はこのまま進めるだけ進んでみる。俺達がいっ戻ってきてもいいようにここを死守しておいてくれ。」

「分かったでござる。」

こうして俺達は向かってくる魔物達を蹴散らしながら進んでいく。

尚文が途中で道を見つけラフタリアが切り開き進んでいき、とうとう心臓へと辿り着いた。

「これが…心臓…」

「ああ、そのようだな。」

その時、心臓からの光線が尚文の流星盾にぶつかって反射した。

「攻撃されてるぞー！」

「そろそろ新しい奴いくか！」

俺は変身を解除し、ビルドドライバーを巻き、グリスブリザードナツクルとノースブリザードフルボトルを出す。

俺はボトルを振ってナツクルに入れる。

ボトル！キーン！

ドライバーに挿した。

グリスブリザード！

俺はドライバーの側面のレバーを回し、それと同時に足下が凍っていく。

Are you ready?

「変身ー！」

激凍心火！グリスブリザード！ガキガキガキガキキーン！

俺は仮面ライダーグリスブリザードへと変身した。

「心火を燃やして……ぶっ潰す。」

「いくぞー！」

俺は左腕のアームことGBZデモリッションワンを振り上げ突っ込んできた魔物を

掴む。

俺のアームから逃れようとジタバタと暴れるが、冷却粒子を吹き掛けて凍らせるとそのまま握り潰した。

更につ突っ込んでくる魔物を氷の刃で斬り伏せる。

すると心臓が黒い玉を発射し、尚文が流星盾で受け止めるが、破壊される。

そこを狙ったのか、心臓がもう一度黒い玉を発射する。

「だと思つたぜ！」

俺はGBZアイスパックスホルダーを展開し、大きな盾を形成して耐え忍ぶ事に成功した。

「かかってこいやー！この野郎！」

「っ!? 戻れ！来人！」

俺は急ブレーキをかけ、慌てて尚文の結界内に飛び込んだ。

その時、白い魂のようなものが心臓を中心に飛び散った。

なんなんだ、今のは。尚文の結界のおかげで何も無かつたんだろうけど、気になるな。

「大体分かつた！撤退するぞ！」

俺達は尚文の号令で連合軍を連れてくるために撤退した。

36話

「おお！勇者様達がお戻りになったぞ！」

「どうでしたか！」

リーシアが心配そうに駆け寄ってきた。

「心臓部を見つけた。」

「おお！」

尚文がそう伝えると連合軍から歓声があがる。

「みんな聞いてくれ。今から俺達は心臓部へと向かう。だが残念なお知らせがある。」

俺がそう言うのと皆が黙った。

「実は見つけたのはいいが、心臓部の部屋を開けたまま俺達は戻ってきてしまった。だから見つけられた心臓部を守るために道中と心臓を守っていた使い魔の両方が俺達に向かってくるかもしれない。それによって、ここから先は上よりも犠牲者が出るかもしれない。酷な話かもしれないが分かってくれ。」

「構いません！」

「俺達はアンタらに命を預けたんだ！」

「平和の礎として死ねるなら！」

頼もしい奴らだ。

「では！行くぞ！」

陣形はこうだ。

尚文とラフタリアが先頭、その次に連合軍、そしてその周りを俺達、鎧のパーティとフイーロとリーシアで囲む。

これで出来るだけ多くの人間が心臓部へと辿り着くことを目指す。

こうして戦いながら走り抜ける事で思っていたよりも人員を減らさずに心臓部へとたどり着くことができた。

「な…なんと！」

「これが…心臓部か！デカイ！デカすぎる！」

「よし！ここからは俺と来人達で儀式を守る！」

「と、言うわけだ！出来るだけ早く頼むぞ！」

「はい！総員！始めるぞ！」

「おおおお！！！」

掛け声と共に詠唱が始まり、魔法陣が現れる。

「ラフタリアとフィーロは心臓を弱らせてくれ！」

「だったらこっちはピーター！ミコ！ターニヤだ！」

「それ以外は儀式を死守するぞ!!」

それを合図に心臓部が俺達を見つけて覚えているのか雄叫びをあげる。

そうして使い魔達が一斉に俺達に襲いかかる。

なるほど、頭がいいな。

儀式を行なっている奴らに襲いかかったところで俺達が妨害してくる：ならば最初

から俺達を潰しに来たか！

だが！誤算があるぜ、その作戦！

それは：

「俺達がお前ら如きにはやられねえことだ!!」

俺は向かってくる使い魔達に左手から放たれる冷気を浴びせかける。

片っ端から凍らされた使い魔達はゴトゴトと落下し、衝撃で砕け散っていく。

だが倒しても倒してもどこからともなく湧いてくる。

「ライト！キリがねえ！」

「ライト！このままではイタチごっこだ！」

その時、俺の第六感に何かが反応し出す。

なんだ：？なにがくるんだ？

「来人！！こつちだ！」

尚文が盾を構えて連合軍の前に立つ。

俺も真似して肩の盾を展開して構える。が延長線上に何人が立っているのが見える。

俺は背中中のフローターユニットで急いで目の前に入り、もう一度盾を展開した。

「しゃがめ！お前ら！」

そう言った直後に高威力の熱戦が放たれ、俺は吹き飛ばされる。

だが威力をある程度殺し、そして少し軌道をずらせたおかげでしゃがんでいた奴らに当たらず尚文の盾で防ぎ、更に尚文も気合で軌道をずらしたお陰で起動は完全にそれて天井を焼いた。

ポタツと天井から血が滴り落ちてくるが、それほご自慢の再生能力で塞がるだろう。てか、あんなの撃ってくるのかよ。俺の盾じゃ防げないぞ。

「術式は完成したか！」

尚文は叫ぶ。

「あと少しです！」

「なら！ラフタリア！フィーロ！大技で奴を弱らせろ！」

「こつちもやるぞー！」

「陰陽劍！」

「ぶちくいつくー！」

「飛翔斬！」

「クロスワイドクロー！」

「雷遁・雷犬撃！」

ラフタリアとフィーロの技に加えてピーターの片手劍を逆手に持つて放つ飛ぶ斬撃と、ミコの爪から放つ回転しながら飛ぶ十字の斬撃と、ターニャの手から放たれる2匹の雷犬が心臓に直撃する。

「よし！心臓の動きが悪くなったぞー！」

「できましたー！」

連合軍側からやつと完成したとあり、俺達は横に避ける。

『『力の根源たる我等が命ずる。真理を今一度読み解き、厄災の四霊、靈亀を停める楔を

今（ア）ン（ク）ー！』』

心臓が苦しんでる！

だが心臓は最後の足掻きとして白い塊が霊亀の心臓を循環して連合軍内の魔法集団に襲いかかる。

「させるか！」

俺は冷気を放ち、何とか撃ち落とすが数の暴力故にいくつか後ろに送ってしまう。

被害が多い！

「勇者様方！申し訳ありません！失敗です！」

「まだまだ！俺達はまだやれるはずだ！もう一度詠唱を頼む！」

「分かりました！」

「お前らは大丈夫か！」

隙についてピーターがターニヤを背負い、ミコと共に戻ってくるが、前線に行っていた3人は皆青い顔をしておりターニヤに至ってはグツタリしていた。

「おい！ターニヤ！」

「ライト。ターニヤは魔力枯渇しているだけだ。咄嗟に私とミコの魔力を流したから命に別状はない。」

「なぜターニヤだけやられたんだ？」

ターニャはそれなりに強いと俺は思っている。なぜだ？

「我ら一族の遁術は魔力をuses。私も遁術は使いますがターニャほどではないです。それに魔力だけでいえば我々のパーティが一番です。そこを狙われたのかと。」

「リーシア！」

「は、はい！」

「ターニャを連れて後ろへ下がってくれ。」

「リーシア。ターニャを守ってくれ。」

「はい！」

「ナーガ。ターニャの代わりに頼めるか？」

「もちろんだぜ！」

「よし！もっかいいくぞ！」

「来人！フィーロが何かするつもりだ！」

「なに!？」

「だから何人かフィーロを守るために貸してほしい！」

「分かった！ピーター！ミコ！」

「了解！」

フィーロを守るようにラフタリア、ピーター、ミコがトライアングルフォーメーション

ンを組み、フィーロを守護する。

するとフィーロが大きく口を開け、辺りにフヨフヨと漂う白い塊を吸い込み始める。そしてケプつと腹を大きくしたフィーロがお返しとばかりに白い塊を吐き出した。

心臓も防御するために結界を張る。

それが心臓の結界に炸裂すると力が拮抗しているのか、押し合う。

「今だ！」

「封印はお任せください！」

『『力の根源たる我等が命ずる。真理を今一度読み解き、厄災の四霊、霊亀を停める楔を今ここに！』』』

心臓の野郎、フィーロの攻撃を押し返すのに夢中になりすぎて封印の魔法に気づかなかったな！

「高等集団魔法『封』！」

心臓を取り囲むように魔法陣が形成され、心臓が縛られる。

やがて鼓動が遅くなり完全に止まった。

「やったぞ！」

俺の声を皮切りに歓声があがり始める。

終わった！

俺はその場にドサッと座り込む。

「やりましたね！ライト！」

「ああ、お前ら最高だよ。」

俺達が勝利を称え合ってる時だった。

「よしゆじんさま！」

フィーロが叫ぶ。

俺はまさかと思いい後ろを振り返る。

なんと、また心臓が動き出していたのだ。

「何故だ！封印は成功しただろ！」

「術式は成功したはずですよ！しかし、自力で解かれたようです！」

マジかよ！コイツ！

「しかたねえ！撤退だ！今すぐ逃げろ！」

「殿は俺達が務める！逃げろ！」

俺と尚文が叫ぶことでようやくヤバいと分かったのか、連合軍は撤退を始める。

野郎：頭は再生するし、心臓は封印できねえ。どうする：

待てよ：一か八かアレやるか？だが：あれはオリジナルの変身者が規格外だからできたんだ。

「ピーター！ ナーガ：いやお前ら全員撤退する連合軍の援護に回れ！」
「ライトはどうするんです？」

「死んでいった奴らの為に一矢報いてから逃げる。」

「尚文。お前らもいけ。」

「バカか！ お前一人：じゃ！」

尚文は俺に詰め寄るが尚文を抑える。

「俺は死なん！ 俺はお前を信じてる。だからお前を信じる俺を信じろ！ 尚文！」

「：分かった。いくぞ！」

尚文達は去っていき、心臓部には俺だけが残された。

「凍れ！」

俺はビルドドライバーのレバーを二回回して構える。

シングルアイス！ ツインアイス！

Ready go！

グレイシャルフィニッシュ！

バキバキバキバキバキーン！

俺のライダーキックが炸裂し、心臓は凍りつき動きが鈍くなる。

さて今のうちに逃げねえとな。

俺はすぐに変身を解き、バーニングファルコンに変身し直すと自身の体を燃やしなが
ら飛び霊亀の体内から脱出を果たした。

37話

「とおう！」

俺は勢いよく侵入口から飛び出して尚文に合流した。

「無事だったか。」

「言つたろ？俺は死なないって。」

俺は変身を解きながら答えた。

「しかし、なんでこつちから逃げてんだ？逃げづらいだろ。」

「そうじゃないんだよ、これが。」

どうやら尚文が言うには山の方が斜面が傾いて居て、霊亀の動きで振動する所為で足が取られる。

瓦礫が邪魔ではあるが、それなら町を抜けて脱出した方が安全だろう。

と、言うことらしい。

「お一方！報告でござやる！」

影が近づいてくる。

そして走っている最中に新たな遺跡にたどり着いた。

「ここは…いったい…」

「どうやら霊亀の洞窟とつながる関連寺院のようでござる。」

「寺院はまだあったのか。だったら手掛かりがあるかもしれない。」

俺が言うが、すかさず影が冷静に言った。

「あることにはあるでござるが、勇者が遺した石板は見ての通り粉々でござる。」

「まだあるのか！実は見たんだ、他に。」

「その石板は恐らく当時の者が参考にしたものでござるよ。名物としての評価はあちらが上でござるな。他にもあるそうでござるが、存在した町は全て霊亀によって壊しているでござる。」

ヤバいな。まだ残ってたらそれと照らし合わせて解読したんだがな。

「なら集めてくれないか？」

「しかし…今はそれどころじゃ…」

「あの文字は俺と来人なら読める字なんだ！頼む！」

「なんと!?それはそれは。集めてみるでござる。」

そこから俺達と連合軍の総出で拾い集める。

ようやく集まったもののカケラ状態でしか集まらず読みようがない。くそっ！勇者桂一は霊亀の倒し方を記してあったはずだ。なのに！

「まだありました！」

「あつたよーライト！」

リーシアとターニヤが新たに石版のカケラを集めてくる。持つてきたカケラを入れたことでようやく読むことができる部分が現れた。

目的は波による世界・・・の阻止

他に頭、心臓、同という文字が辛うじて読み取れた。

考えろ：勇者桂一の石版には倒し方が書いてあつたはずだ。つまりその時代には既に倒し方が載っていたはずだ。

だが結果的に奴は封印を選び、その倒し方は石版にも残していなかった。俺達、勇者が読めるかもしれない日本語で書くこともしなかった。

何故だ？何故倒し方を書かなかつた？

考えられるのは今の俺たちみたいに勇者が一致団結していなかつたつてことか？

いや、こうは考えられないか？

封印を選んだんじゃないやなくて、封印しか選択肢がなかつたとは。倒す方法が複雑だとか難易度が高いとか。

そしてキーワードは頭、心臓、同：まさか！ははっ！そういうことか！

「尚文。」

「お前も気づいたようだな。」

「確信は持てねえが、これにかけるしかねえ。」

「みんな！聞いてくれ。」

尚文が全員を集める。

「みんなには酷かもしれないが、もう一度霊亀を叩く。その為に心臓部にもう一度行ってもらいたい。とりあえずラフタリアとフィーロと影、そして来人以外のメンバーが行くことは決定した。」

「連合軍の戦えるものだけは俺達について来てほしい。」

「倒せるんだったらなんだっていい！」

「やってしましましょう！勇者さま！」

連合軍から歓声が上がリ、今度こそ倒せるとではないかと士気が上がり始める。

「ツヴァイト・オーラ！」

尚文が俺とリーシアにかける。

すると体が軽くなったような感じがする。

俺はエボルトリガーをエボルドライバーに挿し、コブラエボルボトルとライダーエボルボトルを挿す。

コブラ！ライダーシステム！レボリユーション！

Are you ready?

「変身。」

ブラックホール！ブラックホール！ブラックホール！レボリューション！

フハハハハハハハハ………！

「その姿はやつぱりまだ違和感があるな。」

「そうかあ？安心しろよ。今度はお前の味方だからよ。」

「その声なんとかならないのか？」

「うん？無理だな。」

尚文は分かっちゃいねえな。この金尾さんボイスが最高なのに。

「来るぞ！使い魔だ！」

「俺に任せろ！」

俺はEVOアナイアレイシヨルダーから霊亀の使い魔にだけ作用する有害物質を放出し、使い魔共の意識を刈り取り、その使い魔達をリーシアや連合軍の兵士たちが刈り取っていく。

今度俺の死角から使い魔が躍り出るが関係ない。俺は全方向に放出している為、どこから来ようが意味はない。

「甲羅の淵に着いたぞ！?!あの街は!?!」

尚文が驚く為、俺も見にいくとそれはメルロマルクだった。

「嘘だろー！」

是が非でも止めないとじゃん！

「このままじゃあ、城門に差し掛かるぞー！」

やらせねえぞー！

俺は霊亀の甲羅から飛び降りながらエボルドライバーのレバーを回す。

Ready go！

エボルティックフィニッシュ！

俺は霊亀の足下にブラックホールを出現させ両脚を吸い込ませる。

コイツ……！ 抜け出そうとしてやがる！

「だあああ!!!ピーター達はまだかー！」

その時、ガクンと霊亀の目から生気が失われて頭が下がる。

心臓が止まった！

「やれー！尚文ー！」

「プルートオブファアー！」

巨大なトラバサミが現れ、霊亀の頭にガジガジと食らいつく。

何度か咀嚼を続けたのち、霊亀の頭は崩れ落ち霊亀は地響きを立てて地面に倒れた。

頼む：これで復活されたら：

俺は必死に祈る。

「霊亀の活動が完全に停止しました！我々の勝利です！」

よかった：勝てた：

俺は気が抜けたのか地面に膝をつく。

なんとかボトルとエポルトリガーを引き抜くと俺は意識を失った。

38話

「う・ううん・」

俺は目を覚まし痛む体に鞭を打ちながら起き上がる。

俺の傍には椅子に座ったエクレールが俺にもたれかかるように眠っていた。

うん？ どういう状況？

ええと：俺はブラックホールで霊亀の足を止め続けて：力を行使し続けて気絶か。またか。

「あ！ 気がついたのですか。」

ちょうどピーターが入って来た。

「そのエクレールさんのことですか？ 彼女なら私がライトの世話をするんだ！ つて張り切つて看病されてましたよ？ 起きたらお礼の一つでもおっしゃってください。」

「あれからどれくらい経った？」

「1日ですよ。」

1日か。早かったな。てつきり1週間経つたと思つたが。

「霊亀はどうした？ もつかい動き出したとかねえよな？」

だとしたらシャレにならんぞ。

「ええ、今は解体作業中です。」

「被害はどれだけ出た？」

「ええと：城門が破壊されただけです。」

「そうか、それだけで済んでよかった。」

「さてと・・・」

俺は寝ているエクレールの頬をペシペシと叩いて起こす。

「ふぁー！ピーター。もう交代か？」

「おはよう、エクレール。」

「ほえ？・・・うわわあああああああ！！！！」

自分が寝ていたことに驚愕したのか恥ずかしいのか絶叫し出した。

「わ、わた、私はなんてことを！違うのだ！ライト！」

「落ち着け。俺は気にしないから。」

「ピーター、俺は街を見に行く。それとエクレール。お前はいつまでそうしてるつもりだ。」

「そうやって俺はベッドから降りて部屋を出た。」

すると曲がり角で女王に出会った。

「お身体の方はどうですか？」

「ええ、まだ少しダルいですが大丈夫です。」

「そうですか、無事でよかったですよ。しかし：あのよう無茶はもうしないでいただきたいです。」

「だがあれをしていなかったら：」

「ええ、城下に被害が及んでいたでしょう。しかし鎧の勇者さまのお身体のこともありますので。」

「解体作業は順調ですか？」

「順調と言いたいところですが：なにぶん大きいので：自然に処理されるのを待つてるところです。」

「自然処理というのと腐らせるってことですか？」

「ええ、ご安心を。素材は分けておりますので。」

「後は玉座の方でお話を。」

「わかりました。尚文が目覚めたらぜひ。」

俺はピーターとエクレールに付き添われて霊亀を見に行く。

「鎧の勇者さま！ありがとうございます！」

「助かりました！」

街の人々が次々と俺に声をかけていく。

気持ちの良いものだ。召喚された当時の俺に見せてやりたい。人つてここまで変わるぞ！つて。

「お！ライト！」

「ライト！もう体はいいのね？」

「ライト！無事で何よりだよ！」

解体現場にいくとナーガとミコとターニヤがいた。

ナーガとターニヤは解体作業に、ミコは炊き出しのほうにいた。

「ライト！これが霊亀から取れた素材だ！どれか良さそうなのあるか？」

「そうだなあ。とりあえずこれと…これと…これと…」

仲間達の武器の素材にする為に素材を見繕つていく。

「よし！素材はこのくらいでいいかな。」

「勇者殿。」

後ろから影の格好をしていないアナスタシアが声をかけて来た。

「女王様がお呼びです。」

「ああ、行くよ。」

俺達は玉座へと移動する。

そこにはもう尚文がおり、俺が来るのを待っていたようだ。

「それでは揃いましたので。この度は盾の勇者様、鎧の勇者様、靈亀の討伐に尽力を尽くして頂き、真にありがとうございます。」

「……前置きはいいから現在の状況を教えてほしい。波についてだ。」

おおう、急ぐねえ。お前らしいよ。

「……分かりました。現在、世界中の砂時計が停止しております。」

「世界中ですか？」

「ええ、世界中です。」

「その中に青い砂時計はあったか？」

「ナオフミ様、その青い砂時計は靈亀を倒した後、消えてしまいました。跡形もなく。」

そうか。俺も確認するがやはり砂時計は変わっていない。まだ3ヶ月以上ある。

「そうだ、俺から聞きたいことがあります。残りの3勇者は見つかりましたか？」

「いえ、依然消息を絶っています。」

どこ行ったんだ？あいつら。

「そして実は封印を解いたのが勇者だということは隠しています。」

「まあ、そりゃあ：そうですね。」

そんなこと公表してみろ。世界が大混乱に陥るし、メルロマルクに被害が出る。

「それに首謀者として公表したとしても、捕まえるには同等の力が必要ですので。」

奴らを捕まえるには同じくらい力のいるもんな。

「生ぬるい！奴らは即刻捕え波とだけ戦わせる！それだけの事を奴らはしたのだ！」

当然騒ぎ出す奴らが出てくる。

「それができるのはその盾と鎧の勇者様と、七星勇者だけということが分かって言っているのですか？」

女王がピシヤリと言うことでそいつらは黙った。

仕方ない。

俺はピツと手をあげる。

「鎧の勇者様？どうなさいましたか？」

「その3勇者の確保だが・俺に任せてくれませんか？」

その俺の提案に周りがざわついた。

「できるのですか？」

「ええ、やります。ここは本来ならメルロマルクが確保するための人員を回して確保に向かうのが筋なのでしょうが、国の建て直しとかに人を使うでしょう。俺だって勇者です。ならば俺がやります。」

「分かりました。」

「それと確保した際の処遇は俺に一任してくださいませんか？」

「ええ、鎧の勇者様には何か案があるのでしよう。分かりました。お任せいたします。」

39話

「しかし、やると言いましたがどうするのですか？手がかりはゼロですよ？」

「探しゃいるだろう。あ！アイツとか！」

俺は女王に話を聞きに行つた。

「あら？早かつたですね。」

「いえ、1人もしかしたら分かるかもしれないと思ひまして。」

「どなたですか？」

「元康のパーティーのエレナという女性です。」

「エレナ？何故その方なのですか？」

「彼女は前から元康に対して見切りをつけていました。ならば今のこの状況だと彼女は実家に戻つた可能性があります。」

「分かりました。それでしたら…ええと…」

女王が執務室の机の引き出しを開けると書類を引つ張り出して来た。

「気になりますか？ここには5人の勇者様のパーティーメンバーと、影に調べさせて分かつたそのメンバーの経歴などが書いてあります。」

こわっ！

「しかし、ターニヤさんでしたか？彼女だけいくら探しても掴めなかつたらしいんですよ。」

「多分それは……」

十中八九、セバスだろうな。

元影だし。

「分かりました。ここの商会に行ってください。」

「よし、作戦を立てるぞ。一度街へ戻って。」

……

準備を済ませた俺達は商会へ歩く。

すると見慣れた男が商会でエレナと話していた。

「頼む、もう一度俺と来てくれ。」

「いやよ、もう貴方には魅力を感じないのよ。モトヤス様。」

元康。お前が現れるのは予想外だったぞ。

(急遽悪いが作戦開始だ。)

「俺のような勇者と共に世界を救いたいと思わないのか！」

「少なくとも貴方以外とね。そうねえ、今だったら盾か鎧ね。」

「そ、そんな…」

さて、そろそろ行くか。

「なあ、その辺にしとけよ、元康。」

「な：来人：」

「お前が何やったかは大体聞いてるよ。来てもらおうか。」

「嫌だ。」

「そつか。まあ断られるのは分かってたさ。」

「お前に俺をどうこうする権限があるわけないだろ！」

「それがあるんだなあ、ここに。」

俺はポケットから紙を出して広げる。

内容は3人の勇者の処遇を鎧の勇者であるライト・ダテに一任するとあり、しかも女王の印付きの書類を見せつけた。

「どうだ？信用したか？」

「偽物だろ。」

「はあ：お前は本当に：どうしようもねえな。」

呆れるよ、こんな奴。なんで選ばれたんだ、こんな奴が勇者に。

「まあ、問答無用で連れていくぞ。」

「いいのか、暴れるぞ?」

「お前が店に迷惑かける前に取り押さえるから安心しろ。」

その時だった。元康がガクンと糸が切れた操り人形のように前のめりに倒れ伏した。

「ナイスだ、セバス。」

俺がそう言うのと元康が立っていたところの少し後ろの空間が歪みセバスが現れた。

作戦はこうだ。本来は俺がエレナと接触して元康を呼び出してもらおう。そして俺が話している間にセバスが透明になり元康の後ろから忍び寄って気絶させる。って感じだ。

本当だったら近隣の店に頼み込んで元盗賊軍団を働かせようと思ってたが。

まあ、エレナに接触する前に元康が現れてくれたから、少し作戦を変更したけどな。

「やあ、エレナ。」

「ああ、鎧か。それにしてもとんだ目に遭ったわ。私の目もまだまだね。あの時にアンタか盾のパーティに入るときやよかった。」

「お前：いい性格してるよ。」

「褒め言葉として受け取っておくわ。」

「それで? お前は霊亀復活の際にその場にいたんだろ? 何があった?」

「そうねえ、まあいいわ。話す。」

エレナが語る話では、こうだ。

元康が意気揚々と霊亀が封印されている遺跡に自分たちを連れて行つたらしい。

そこでその警備に止められたらしいけどビッチが無理矢理権力で黙らせて、元康が遺跡に書かれている文面を次々に解読して行つて像を壊したらしい。

すると霊亀が復活して元康が自分達にいいところを見せようと攻撃したがまるでダメージが入つておらず、そればかりか元康を無視して進み始めたらしい。

そこでエレナは見切りをつけて一目散に逃げてそこからは元康達と逸れて自分は実家に帰つたと。

なるほどな。

「で、他の3人の事は本当に分からないのか？」

「私に隠すメリットなんかはないわよ。」

「そっか、ありがとう。」

そう言う俺は元康を連れて我が街に戻つた。

元康を縛り付けて動けないようにしたところで桶の水を思いつきりぶっかけて起こした。

「ブヘッ！ペッペッ！」

「よう、元康。元氣か？」

「どういうつもりだ！」

「詳しい話は後だ。鍊もしくは樹だ。どちらでもいい。居場所を知ってるか？」
「しらねえ。知ってても言うわけないだろ？」

「はあ：口硬いな。よし、分かった。言ったら終わりにしてやる。」
「本当か！」

チヨロい奴め。

「ああ、終わりにしてやる。で？どこ？」

「鍊のほうしか知らない。」

「そっか、どこ？」

「それは……」

俺は言われた街にたどり着いた。そいつはフードを被って酒を飲んでいた。

「俺が接触してくる。お前らはこの酒場の出入り口の全てを見張っていてくれ。」

「了解。」

俺はフードを被りカランカランと扉を開けてフード男の横に座る。

そいつはビクツとなったがすぐにまた酒を飲み始めた。

「マスター、フルーツカクテルくれないか？」

「かしこまりました。」

マスターがカシヤカシヤとカクテルを作り出す。

「お待たせいたしました。」

俺は出されたフルーツカクテルをグイッと喉に流し込んだ。

「さてと・久しぶりだな、錬。」

「お前は・来人。」

そう言うとう席を立とうとする。

「待ってくれ。俺は女王の手先ではない。ただ同じ勇者としてお前が心配で来ただけだ。」

本当である。別にこれは自分の意思だし、一応心配もしている。

「みんな俺が勇者だつて分かつたら掌返しだ。ギルドもお断りだ。断らなかつたギルドの依頼を受けてもピンハネ。仕方なく細々と魔物の素材を売って暮らしてる。こんな世界を守らないといけないって考えたら嫌になる。」

「そうか、大変だな。」

「だが、俺はまだマシかも知れんが尚文はお前以上の事を受けて来たんだぞ?」

「そ、そうか・」

「単刀直入に聞いわ、お前は霊亀に関わってるのか?」

「いや：それは：」

「隠さない方がいいぞ。俺は3勇者の中で一番お前を信用してる。お前が本当のことを言うなら協力するつもりだ。」

「分かった：話を聞いてくれ。」

錬が語るには、霊亀はゲーム内では疫病を広め、人々を洗脳して操る黒幕な存在らしい。

そしてそこからは仲間の反対を押し切って遺跡に入り、警備兵の制止を振り切って像を破壊。現れた霊亀に全く歯が立たず、気がついた時には仲間の死体が転がっていたらしい。判別ができないほどだったらしい。

その後は絶望して脇目も降らず逃げて逃げ切った時に力が抜けたのか気絶していた。そして起きた時には霊亀は倒されていた。

俺や尚文、そして2人のパーティメンバー、連合軍が倒したと知るまで元康か樹が倒したと思ってたらしい。

「俺が負けたのはアイツらが弱かったからだ。弱かったから死んだんだ。あれほど強くなれって言ってたのに。」

変わらないな、コイツも。性根が腐ってやがる。

「お前それ本気で言ってるの？」

「なんだと?」

「それいっらはお前を慕って今までついて来てくれたんだろ? それなのにそんな言い方しかできねえのか? お前は勇者の前に人間としてダメだ。」

「…うるさい。」

「この世界はゲームじゃない。だからその証拠に死んだ仲間は戻ってこないだろ。いい加減ゲーム感覚を捨てろよ!」

「黙れ…!」

「黙れだど? 何度でも言ってるよ。この世界はお前が信じてるゲームなんかじゃない。現実だ。仲間が弱かったから死んだんじゃない。お前が無謀だから死んだんだ。」

「黙れ! その口を閉じろ!」

鍊は勢いよく立ち上がると剣を抜き斬りかかって来た。

俺はその剣を白刃取ると鍊の眉間に裏拳を叩き込む。

すると鍊はクタクツと倒れた。

セバスが月に何回か開いてる誰でもできる簡単護身術と一緒に習っててよかった。

「すまなかつたな。これくらいで足りるか?」

俺は財布から金貨を5枚出してカウンターに置いた。

「多すぎるならここで働いてるマスターと給仕の人達で山分けにでも。もし足りなかつ

たら俺の街に手紙を送ってください。払いますので。」
そう言うと俺は鍊を担いで外で待機していたみんなと街に戻った。

第40話

「お帰りなさいませ、ライト殿。遅かったですね。」

「まあ、少し話し込んでしまったな。で、セバスが帰ってるってことは。」

「ええ、確保できましたよ。」

俺が入るとグツタリした元康と樹がいた。

実は俺が鍊を確保しに行ってる間にセバス率いる別働隊が樹を確保しに向かっていたのだ。

さて、次の日が楽しみだな。

次の日

俺は朝、広場に向かうと鍊、元康、樹が立っていた。

「おい！テメエ！来人！鍊の事を喋ったら解放してくれるんじゃないのか！」

「お前・俺を捕まえる気はないと言ったはずだろ？」

「僕は急にここまで拉致されて何なのですか！いったい！何の嫌がらせですか！」

3人が口々に喋るため、俺は手に持ったトランスチームガンを空に撃って黙らせる。

「うるせえ、1人ずつ答えてやる。まずは鍊。」

「俺は確か、女王の手先ではない、」 〃 同じ勇者としてお前が心配で来たただけだ、つて言っただんだ。」

「嘘じゃないか！」

「嘘じゃねえ。今回のこの行動は女王に俺が許可を頂いてやつてる事だ。あとお前が心配なのは本当だ。」

「次に元康。お前も勘違いしてる。解放するとは言つてねえ。ただ、（尋問）を終わりにしてやる、つて言っただんだ。」

「最後に樹。確かに指示したのは俺だ。だがお前を拉致したのは他の奴らだ。俺に言うな。」

「さて、ここからなぜ俺がお前達をここに連れてきたか教えよう。まず知つてると思うがお前らはお尋ね者だ。ただそれは世間には公表されていない。何故だか分かるか？」

誰も答えない。そのかわり全員俺を睨んでいる。

「分かんねえか。教えてやるよ。お前らが腐つても勇者つていう身分だからだ。普通ならお前らにどういう理由があれ、やったことは犯罪だ、テロだよ。お前らが封印を解いたせいで一体どれだけの村や街が壊滅したと思う？お前ら責任取れるか？因みに尚文

は今聞いた話だと行商してるぞ。」

「で、俺と尚文、女王と連合軍の上層部で話し合いをした。もちろんお前らについて話題に上ったよ。中にはお前らをほぼ波と戦うだけの奴隷扱いにしろって言うてくる方もいたよ。それは何とか女王が抑えてくれたよ。」

「そこで俺は言つたよ。3人の処遇は俺に任せてほしいと。それで許可を得て俺はお前らを連れてきた。」

「別に俺はお前らを殺そうとは思っていない。これから先の波、俺と尚文だけで正直やっついていけると思つてねえ。だから！俺はお前らを鍛える。」

「いいな！3ヶ月後に波が迫っている。その間に俺がお前らを強くしてやる。」

「着いていけない、逃げ出したいって奴は大いに結構。どこへでも行け。ただし、次は俺は容赦なくお前らをとつ捕まえて、そうだなあ：被害に遭つた村や街に首だけ地面に埋めて放置する。死ぬ寸前までな。その後は回復させて、また次の場所と回るつもりだ。なんせ女王は俺にお前らの処遇を一任するつて言つたからな。」

「だが極力これは選びたくない。お前らは波と戦う大事な戦力だ。」

「戦う覚悟がある者だけ前に出ろ。」

「やっつてやる。」

「やりやいいんだろ？」

「やりますよ。」

「その意気だ。じゃあまずお前らがどれだけ戦えるか見てやる。」

コブラ！

「蒸血！」

ミストマツチ！

コブラ！コブラ！ファイヤー！

「さて、このブラッドスタークが相手だ。3人同時でいいぞ。それと俺に勝てた奴は：よし！帰っていいぞ。」

「俺より強いってことは十分な戦力だ。いくぞ！」

結果だけ言うとは惨敗だった。3人が。

まず樹は良いところを見せようと2人が苦戦するまで攻撃してこないと踏んだ為速攻でトランスチームガンで肩を撃ち抜いて倒した。

次に錬は他2人と連携する気など更々なくて元康が攻撃動作に入ったときに前に出て攻撃してくる為敢えて元康の攻撃をぶつけさせた。

最後に元康は意外にも一番善戦したがそれでも弱い。突きをスチームブレードで打

ち上げてガラ空きになった腹にスチームガンを撃ち込んでやった。

「お前ら弱すぎだろ。お前らを鍛えることが決定したからな。各自明日から担当教官をつけて修行に励むように。あと寝床に戻る前に治療を受けるように。解散。」

まだ倒れている奴らを尻目に俺が広場から離れるとエクレールがタオルと水を持って立っていた。

「ライト。お疲れ。」

「ああ、ありがとう。」

俺はタオルで顔を拭いて水を含む。

「どうだった？ 彼らは。」

「はつきり言つて弱い。弱すぎる。」

「まあ、ライト基準だとなあ。」

エクレールがアハハと頬を掻く。

「いやいや、そういうことじゃないんだよ。もしかしたら俺のパーティーの誰がやつても3対1で勝てるかもしれないぞ。」

「そんなにか。教官は決まってるのか？」

「まあな。楽しみにしておいてくれよ？」

「は、はあ……」

次の日

俺が広場で待っていると錬達が現れる。

「よし！全員揃ったな。これからの午前と午後によってもらうメニューを発表する。」

「まず錬。お前の欠点は仲間と連携をしないからだ。仲間に対して一方的に命令して何かあると責任転換だ。と、いうわけで午前はエクレールのもとで剣術、午後はセバスのもとで連携について学んでもらう。」

「次に元康。お前の欠点は女性陣に良いところを見せようとして、せつかくの仲間をただの応援に回して戦ってるだけだ。ただの応援には何のバフもない。と、いうわけで午前はナーガのもとで槍術、午後はまたナーガのもとで元盗賊軍団に混じって演習だ。」

「最後に樹。お前の欠点は仲間が良いところを見せようとしたいが為に、わざと仲間がピンチに陥るまで待つて強い攻撃を繰り返す事だ。そんな後方支援聞いたことがない。と、いうわけで午前はミコの狩猟部隊で弓術、午後はピーターとターニャと組んで魔物を狩ってこい。」

「それから1週間後、一回俺にその段階での成果を見せてくれ。いいな？」

「・・」

「・・」

「・・」

返事はない。みな不服そうな、何で俺が……って顔をしている。分かつてたき。お前らがそんなんだって。

「分かった。だつたらこうしてやる。1週間後、俺が良かったと思つた奴には報酬として俺の武器を一個やる。鍊なら劍、元康なら槍、樹なら弓だ。悪くねえだろ？」

そう言うのと、3人は「まあ、それなら……」っていつた感じで渋々了承したようだ。

「はい！解散！」

「さて、俺は……のんびりするかなあ！」

ガシツ

俺は後ろから肩を掴まれた為、後ろを振り返る。

そこには笑顔のセバスがいた。

「ライト殿？どこへ向かうつもりですか？」

「え……？いやあ……あははは」

「午前は書類整理があります。この前までは忙しかつたので頼みませんでした。が本来は副町長である貴方の仕事ですからね？行きますよ？」

「ちよつ！離して！お前つ！力強い！」

「ほっほっほ！鍛えておりますので。」

こうして俺はずるずると引きづられながら連行されセバス監視のもと、午前はみっちり書類整理をさせられてしまった。

第41話

「さて、お前ら1ヶ月経ったぞ。成果を見せてみる。」

俺は改めて3人を見る。

ふむ、少しだけだが顔つきが変わっているな。面白い。

「最初に言っておく。別に俺に勝てとは言わない。ただどこまでやれるかを見せて欲しい。」

「さて、誰からだ？」

「僕です。」

樹が前に出てきた。

「よし、俺は……これだな。」

ポイズン！

俺はプログライズキーを出して構える。

「変身。」

フオースライズ！

ステイングスコープオン！

B l e a k d o w n : : !

「来い。」

「行きますすー！」

樹が横撃ちを放つ。ほう、あの射り方はフィロ上撃ちか。馬の上から矢を放つ馬上撃ちがあるが、生憎うちの村にいるのは馬ではなく、フィロリアルだ。

コイツらは奴隷商ことベローカス曰く尚文が連れてくる喋るフィロリアルことフィロロが気になり、同じ勇者ならば……と俺に無料で提供してくれた個体だ。

だからミコが率いる狩猟部隊の足はフィロリアルだ。因みにフィロ上撃ちって名はミコが名付けた。

大人しく一射くらいなら射られてやるかと思つたが戦場においてそんなやつはいない。第一それが爆発矢だったり毒矢だったりどうする。

俺はすぐにアタツシユアローの刃で斬り落とし、飛んできた方から構える。

だがそこにはいない。

「(っ)ですー！」

樹はいつのまにか俺の真後ろにいて矢を放つ。

「むっ！だがっ！」

俺は振り向きざまに位置を予測して斬り落とし、ステイングスコープオン プログラ

イズキーをアタツシユアローに装填する。

プログラミングイズキー！カンフォームド！レディ トウ ユーティライズ！

ステイング！カバンシユート！

アタツシユアローから放たれた矢に当てようと樹が矢を放つ。

だが俺が放った矢は分裂し、一本が樹の矢を撃ち落とし、後は樹に突き刺さり爆発を起こした。

「そ、そんな…」ドサツ

「まあ、前よりは良くなったんじゃないか？次だ。」

「俺がやる。」

鍊が壇上にかかる。

「ならばこれだ。」

俺はデンオウベルトを装着し、ライダーパスを構える。

「変身。」

ネガフォーム！

俺は仮面ライダーネガ電王に変身した。

デンガツシャーをソードモードに変えて肩に担ぐ。

「どっからでもいいぞ。」

「くらえ！ハンドレッドソード！」

鍊の剣から無数の刃が飛んでくる。

「当たるか！」

俺は高速で移動しながら避け続ける。

「避けるだけでは無意味だぞ！来人！」

「うつせえ！このやろう！」

俺は前転しながらデンガツシャをガンモードに切り替えて避けながら撃ち落とし
ていく。

「しとめてやるよ！」

俺はデンガツシャを再びソードモードに切り替えてライダーパスをベルトにかざ
す。

フルチャージ！

「ネガエクストリームスラッシュ！」

デンガツシャから刃が外れ、俺の振るう剣の動きと同じ軌道で鍊に斬りかかる。

「うおっ！」ガキン！

受け止めたか。だが！

俺の2回目の振りに対応できずに剣を弾かれ、3回目の振りに斬り裂かれて爆発し

た。

「なるほど。最後だ。」

「行くぞ！ 来人！ 俺はこれが終わったなら新しく手に入れた武器をフィロリアルちゃん達に見せて自慢するんだ！」

フィロ：は？

まあ、いい。

「ならば勝ち取れ、さすれば与えられん」

俺はビヨンドライバーを巻き、ミライドウオッチを押した。

ビヨンドライバー！

ウオズ！

俺はドライバーにミライドウオッチを装着し開いた。

アクション！

軽快な音楽が流れ出し、俺はニヤツと笑う。

「変身。」

投影！ フューチャータイム！

スゴイ！ ジダイ！ ミライ！ 仮面ライダーウオズ！ ウオズ！

俺はジカンドレスピアを構える。

「さて改めて言うがこの勝負は俺が良かったと思つた奴にだけ俺が使つてる武器を渡すんだ。いいな？」

「ああ、わかつてる。」

「行くぞ！イナズマスピアー！」

雷に包まれた槍が投擲され、俺に迫る。

「当たるか！」

俺は横つ飛びで躲すとジカランダスピアを槍モードにして走る。

「ふん！それは分かかつてるんだよ！」

「くらえ！無我の境地！」

元康が槍をクルクルと回し始める。

その槍の動きで竜巻が起き始め、元康が竜巻に包まれる。

「どうだ！攻撃は不可能だぞ！」

「そうだな、ならこれならどうだ？」

俺はウオズミライドウオツチを外し、新たなミライドウオツチを起動する。

クイズ！

アクシヨン！

元康、今はよせ。

「まあ、雄ですけれど。そこからまずはフィロリアルに騎乗するところから始まって、フィロリアル版の流鏑馬をして合格したため狩りに出ました。そこからは驚きましたけど、まさかの全員弓か魔法なんですね。」

「ああ、狩猟だからな。」

「なので僕も必然的に自分から前に出て矢を射る機会がありましたね。出し惜しみをしたらミコさんに何回も怒られましたよ。午後からはピーターさんとターニヤさんと狩りに行きました。ピーターさんが前衛、ターニヤさんと僕が後衛で。でも…してやられました。」

「してやられた?」

「ええ、彼らは僕にデコイの術をかけたんですよね。そのせいでピーターさんとターニヤさんが魔物と戦いますけど僕にも同じくらい魔物が向かってきて…」

「そうか、ミコ。言った通り厳しくしてくれたんだな。」

「そうか、なるほど。次に鍊。教えてくれ。」

「午前はエクレールと剣術だった。まず彼女は強い。本気で立ち向かったが負けた。そこからだ。彼女には王国騎士の剣術を叩き込まれた。午後はセバスさんのもとで戦術指導だった。」

「これは色々な陣形をまずは頭に叩き込むように言われ、2時間後だ。セバスさんは赤5個、青5個の魔法で動く兵士人形を出してきた。そこからはひたすらセバスさんが出してくる事例をもとに連携を組みセバスさんの人形と戦わせるので終わった。このままレベルアップできたら次は実際の人間を用いた訓練になるようだ。」

「よしよし、いいぞ。最後に元康だ。」

「俺はまずひたすらナーガのもとで筋トレと走り込みと槍術だ。筋トレと走り込みなんて学生時代の部活以来だ。ナーガは強いな。俺がどれだけ打ち込んでも全部防がれる。そして午後からは元盗賊団達と訓練だったんだが……」

「気づいたよ、応援は無力だ。いやな？まず応援付きで1人对5人をやったんだがボコボコにされたよ。大楯を持った奴にタックルされたと思うと引き倒されて後は5人全員からストンピングの雨だ。」

ああ：確か大楯の奴はあんまりモテないんだよな。顔はいいのに：そいつが組んでるチームは全員そんな奴だし：そりゃあ、自分以外のパーティが全員女性だった勇者を合法的に叩きのめせる機会があったら間違いなく叩きのめすよな。

「なるほどな。よく分かった。今回は全員に武器を送ろう。」

「「え!?!」」

3人ともが驚いた顔で俺を見る。

「どうした？」

「いや：一番良かった一人じゃないのかと思ってな。」

「鍊。俺はあの時、こう言った。、俺が良かったと思つた奴には報酬として俺の武器を一個やる。、とな。今回は全員良かった。」

こうして俺は全員にアタッシュアロー、デンガツシャ、ディーペストハーブーンをコピーさせてやりその日は終わった。

だが夜、鍊と元康と樹が俺の寝所を訪ねてきた。

「なんかあつたか？」

「俺達は頼みがあつてきた。」

代表で鍊が話し、3人同時に頭を下げた。こう言った。

「頼む。俺達にカースシリーズについて教えてくれ！」

4 2 話

「なんだと？カーズシリーズだと？」

「ああ、お前言ったよな？感情の昂りだって。俺達は強くなりたい。その為なら耐えてみせる。」

鍊がそう言って横で元康と樹もうなづく。

「……なるほど。お前らはあの時俺達が味わったものを耐えられるというのか。面白い。」

「なら、明日お前らに味わせてやる。成功すればカーズシリーズが解放される。だが耐え切れなければ精神が崩壊するだろうな。」

「話は以上か？おやすみ。」

俺は鍊達の返事を待たずに扉を閉めて眠りについた。

次の日、午前の訓練は担当教官達に説明して無しにしてもらった。

「さて、お前ら。俺が今から行うのは手っ取り早く、もしかしたら！カーズシリーズが発現するかもしれないことだ。正直試したことはないからどのくらい危険なのかは知らない。最後に聞いてやる。」

「引き返すなら今のうちだ。」

俺は3人に脅しをかける。しかし：

「やる。」

「やってやるよ！」

「やりますよ。」

3人とも自信満々にうなづく。

「いいな？お前らが、やめてくれ、って言ってもカースシリーズが発現するまで止めないからな？」

「発現したらどうやって分かる？」

元康が聞く。

「耳には音声、目の前には文字で、カースシリーズを解放します、って出るから。それが出たら：：そうだな。手を挙げる。そしたら止める。」

俺は腰にアークドライバーゼロを巻く。

「変身。」

アークライズ！

俺がドライバーのボタンを押すと俺の周りにドス黒い何か、まるで苦しんでいるような何かが発現して俺にまわりつく。

オール：ゼロ。

俺は仮面ライダーアークゼロへと変身を遂げた。

「いくぞう。」

俺が3人に手をかざすと3人は黒いオーラにのまれて苦しみ出した。

「うっ…くう…」

「うっ…」

「っ…い」

俺はそれを黙って見続けた。

奴らは今、人間の悪意に襲われている。理論上ではこれでカースシリーズが発現するはずだが。

1時間後：

シュバツ！

錬の手が上がった。

俺が解除した後にも俺や尚文から湧き出ていたどす黒いオーラが溢れ出していた。

それから元康と樹も音を上げずにクリアし、カースシリーズの事を教えることにした。

錬は暴食と強欲、元康は嫉妬と色欲、樹は傲慢を解放したようだった。

「さてカースシリーズは強大な力だ。だが勿論強大な力をノーリスクで使わせてくれな
いのは分かるはずだ。」

俺の言葉に3人ともが素直にうなづく。

「まず俺のデメリットは戦闘中に発現するもの、戦闘後に発現するものの二種類だ。尚
文の憤怒は：アイツに許可取ってねえからデメリットの内容は言えない。知りたきや
アイツ自身から聞いてくれ。」

「なお、デメリットは使って初めて分かる。だから一人で使うな。周りに誰かがいる時
に使え。いいな？解散！」

午前はこれで終わり、俺はまた書類整理へと戻った。

そして最終日を迎えた。

43話

俺は改めて3人を横一列に並べた。

「さてみんな。今までよく耐えた。これでお前らは汚名を返上出来るほどの働きができるようになったと思う。そして今日は勇者として第二の旅立ちの日だ。勇者の旅立ちといえばアレだろう。」

俺がパンパンと手を叩くと後ろのテントから11人の男女が出てきた。

「俺が昨日募集をかけて集まってもらったこの街の戦士だ。今のお前らならばコイツらのかげがえのない命を託せる。」

そう言つて今度は11人に向かって言う。

「よし、みんな。昨日決めた勇者のところへ並んでくれ。」

俺がそう言つたと皆続々と並び始めた。

まず錬の所にはプリーストのミント、弓手のリン、精霊使いのライアン、神官戦士のグラハム

元康のところにはウイザードのペニー、プリーストのエリー、クルセイダーのアリーシャ、盗賊兼弓手のジン

樹のところは魔法使いのマール、剣士のエビオ、騎士のルスタ

「来人さん。何故僕の所だけ僕を入れて4人なんですか？」

「よくぞ聞いてくれた！実は俺が別のある所から頼み込んで連れてきてもらったんだ。もうそろそろだと思いが！」

するとドドドド!!!とフィロリアルが走ってきて急ブレーキをかける。

「どうどう。よく来たな。さあ！樹！この子が新たな君の仲間だ！」

フィロリアルから降りてきた人物を見て樹は驚いていた。

「り、リーシアさん…？」

「イツキ様。この日が来る事を待っていました。」

樹は何故自分の目の前にリーシアが現れたのかが分からず俺を見た。

「説明するよ。お前言ったろ？」目が覚めた。自分は何て馬鹿な事をしたんだ。叶うならリーシアさんに謝りたい。って。だから連れてきた。だが今ここでお前の仲間に入るってのも変だ。お前は一度リーシアを追いついた。これは紛れもない事実だ。」

俺の言葉に樹が俯く。

「でも！私は！」

「リーシア。分かっている。お前は今でも慕っているんだろ？」

「はい。」

そう言いリーシアは來人の前を通り樹のもとへと歩く。

「イツキ様：わた：」

「すみませんでした！リーシアさん！」ガバツ！

なんと樹から先に謝つたのだ。それはそれは見事な90度だった。

「待つてください！イツキ様は：」

「違います。あの時、僕が貴女を身勝手な理由で追い出したんです。來人さんのもとで修行して目が覚めました。僕は貴女に酷いことをしました：それでもなお：貴女は僕を信じてついて来てくれるのですか？」

「はい！私は：ナオフミさんのもとにいましたが、いずれはイツキ様のもとへ：と想つて来ました：私は：イツキ様の力になりたい！この力をイツキ様の為に！」

その時だった。

樹が持つ弓から光の玉が一つ飛び、リーシアの体に入った。

その瞬間、リーシアの体が光り始め、その光が右手に集まると治まった。

「い、今のは：いったい：」

リーシアが右手を確認するとそこには一本のナイフがあった。柄の部分には宝石。まるで俺達の武器のようだった。

だが：半透明である。

「まさか：リーシアさん！その武器に手を！」

樹が言ったようにリーシアが手を半透明のナイフにかざす。

手を退けたとき、そのナイフはクナイに変わっていた。

ナイフ：クナイ：

どういうことだ？共通点は：？

そしてリーシアがそのクナイを握ると次はブーメランに変わった。

なるほど：ナイフ、クナイ、ブーメラン。はつきりした。

「なるほどな。 投擲具だ！」

「そしてその武器にはめられた宝石：間違いない！リーシア！」

俺は興奮しながらガシツとリーシアの両肩を掴んだ。

「ふえっ……！」

「お前！勇者になつたんだよ！」

「ふええええええええええ
!!!!!!!」

44話

次の日、俺達は城で尚文と合流して城内の鳳凰について書かれた資料を読みあさっていた。

鳳凰。靈亀のように当時は甚大な被害が出たらしい。それで同じように頼みの綱の勇者が封印したって話だ。

「なあ、お前らの知識では鳳凰が出る場所とか、あとどういった感じで封印が解けるんだ？」

「それなら、この山だ。」

鍊が地図に描かれた山を指差す。

「そして、封印は石碑から解ける。」

「なるほどな、大体靈亀と同じってわけか。」

俺が納得するとまた鍊はペラペラと本をめくり出す

元康は：アイツ：いつの間にフィロリアルを囲ってやがんだ？3匹いるし。

大方うちの牧場から連れて来たんだな。見た感じ懐いてっからお咎めはなしにするが。

それにしても今回はまだいい。情報解析を壊れた壁画からしか出来なかったのを、こうして資料を読みながら行うことができる。

「これなんてどうです！」

樹が一冊のボロボロの本を掲げて机の上に置く。

「学者さん曰く古い写本のようにです。」

広げられたページを見ると鳳凰の事が書かれていた。だが：所々穴だらけだ。またか。

鳳凰の目的は……を糧に……の阻止だ。

終末の波の時は封印出来ない。

そして倒す場合は二羽同時に……しないと……。

攻撃パターンを残——

かろうじて読めたのはここまで。

これだって他の勇者共と話し合ってやっとの事読めた内容でしかない。

攻撃パターンから先が読めないって舐めてんのか？

誰だよ。こんな大事な物の保管を怠った奴は。

いや、キレても仕方ない。ないよりはマシだ。

「すいません、壁画とかがありません？」

「壁画ですか？それなら……過去の勇者様が遺した壁画があります。そちらをご覧ください。」

「ぜひ頼みたい。」

次の日、俺達は目的地の山まで勇者パーティ、連合軍で移動し、その後は女王同伴で、更に新たに勇者になったリーシアを連れて壁画がある寺院へと足を運んだ。

だが、その横で長蛇の列を見かけた。しかも物売りまでいる。

「アレなんですか？」

「アレは……後で説明ではダメですか？」

学者が答えた。

「ええ、構いませんよ。」

俺達が寺院へと入ると袈裟ではなく神父のような服を着たお坊さんが出迎えてくれた。

和洋折衷？独特だな。

俺達は各自蠟燭を手に薄暗い寺院を進む。石造りなのだろうか、歩くたびにコツコツと足音になる。

「少々暗いですね。ファストグロウファイア！」

女王が辺りを照らす事で壁画が現れた。

そこには一面に大きく描かれた大きな鳥が二羽描かれていた。

二羽だと？

とりあえず後で聞くとして攻撃手段はツメと：刃り一面を火の海に変えてる所から
火炎放射か。

あとは尾羽が魚：みたいで、それとほぼ反対の配色でもう1羽は描かれている。

「尚文。お前はコイツらの攻撃手段をどう見る？」

「そうだな。まず一羽が高高度から魔法や羽ばたきで空爆を行う。そしてもう一羽が低高度で爪や炎を吐いたり羽ばたきで仕留める戦法を基軸に攻撃してくると思うな。もちろん物語仕立てで、なんとなく察した程度の内容だけだな。」

「なるほど、タツグか。いやらしい攻撃だぜ。」

「お前らの知ってるやつは、この絵と一緒か？」

「いや、少し違うな。俺が知ってるやつはプレスはしてこない。」

「僕の方でも見たことのない攻撃がありますね。この羽ばたきで人を吹き飛ばしたり竜巻を召喚したりとか。」

「俺もだ。使い魔召喚はしてこなかった。」

三人三様、差があるってわけか。

更に気になる絵を見つけた。

それは一羽が倒れる絵と共に、もう一羽が膨れ上がる絵だ。その後、膨れ上がった一羽が破裂し、巨大な爆発で辺りが焦土となる絵に続いている。

一度この攻撃を受けて勇者は撤退したみたいだ。

そんな下りが描かれている。

「まさか・自爆か？」

だが、まだこの絵には続きがある。

自爆したの同時に鳳凰が分裂して二羽になっていたのだ。つまり一体を倒すともう一体が自爆して2体に分裂するって訳だ。

「そんなことできんのかよ。」

「厄介だな」

「しかも、もう一体は上にいるんだろ？どうしても下にいる奴ばかりに攻撃が集中するんじゃないか。」

「ええ、もしそうなれば大きな爆弾が降ってくるようになりますね。」

「それなら：樹と俺が上を、尚文と錬が下をやるか？」

「それがいいですね。ではリーシアさんは僕らのと共に上のやつを。来人さんは：下をお願いしますか？」

「はい！」

「わかった。」

「連合軍はどうする?」

鍊が聞いて来た。

「それなら・遠距離攻撃・例えば弓とかが使える奴は上、それ以外は下でどうだ? ちゃんとした編成とかは・女王様、お任せしてもよろしいですか?」

「分かりました。やりましょう。」

「それでは城に戻りますか?」

「ああ、それもいいけど。そろそろ行列について教えてくれよ。」

「あれは所有者が決まっていけない、**小手**があるのですよ。」

小手か。小手ってことは完全に徒手空拳ってことだよな。

「うちのメンバーにも挑戦させてみようかな。」

「それがよろしいかと。しかし・難しいかもしれませんか?」

「なんで?」

「開放されている日中は、ほぼずっと挑戦者がいて途切れることはありませんので。」

「ならさ! 無理を承知で言うけど夜でできないか?」

「夜ですか? わかりました。交渉してみます。」

「よろしく頼むぜ。」

4 5 話

その後、俺達は尚文が連れてきたガエリオンとフィーロのタッグに鳳凰を演じてもらい模擬戦を始めた。

ガエリオンが高高度からの攻撃、フィーロは低高度からの攻撃だ。

まあ、フィーロは終始ぶうたれていたな。

「なんでガエリオンと連携しないといけないのー」

ものすごく嫌そうに愚痴を言っていたが、尚文に説得されて渋々と言った感じで演じていた。

その点、ガエリオンはフィーロの事など気にせずに攻撃をしてきたな。

どうやら尚文からの頼みが嬉しかったらしい。

「やはり上空からの攻撃への対処が厳しいですね。」

訓練終了時に樹が元康とリーシアを連れて言った言葉だ。

確かに樹の弓はよく当たる。だが残りの2人だ。

元康は遠距離系の技を繰り出すのが、樹ほどの命中率は期待できず、リーシアは善戦し

てはいるものの、まだ慣れていないのか厳しそうだ。

そして連合軍だ。

高高度という事で下からの魔法や飛竜に乗っての攻撃だが、ガエリオンの攻撃を回避するのには精一杯のようだ。

連合軍の方は尚文がフィーロに乗って盾の支援をする事でなんとかなるだろうという事となった。

そして夜になり小手に選ばれるためのイベントが始まった。

「ふんぬううううううう!!!」

連合軍の1人が引つ張るが全然抜けない。

抜けなかった事でガツカリして列から離れていく。

尚文はラフタリアとフィーロを送り出していた。だったら俺もだ。

「よし、お前らも行つてこい。」

ピーター達を送り出した。

俺の仲間の中で現時点で一番可能性がありそうなのは・ミコだな。何となくツメと小手って似てるだろ？

「しかし女王様。」

「はい?」

「何故、小手の勇者の召喚をしないのですか?」

いつの間にか横にいた尚文もうなづいている。どうやら奴も気になってたようだ。

「していることにはしているのです。しかし…結果が芳しくなくて…」

そうか…だからこんな引っこ抜かせるような事やってんのか。

「ところで小手が七星武器なのは知ってるが、他には何があるんだ?」

尚文が聞いた。

「お答えします。まず杖。」

ああ、それはクズの武器だな。

「次に槌、投擲具、爪、斧、鞭、最後に小手です。」

なるほど、剣や槍みたいにザ・武器って感じはしないな。

「ところで他の七星勇者は今回は来るんですか?」

「一応来るとは聞いていますが…」

その時だった。

小手を囲んでいる辺りからドツ!と歓声があがった。

なんだ!なんだ!

その時ラフタリアが俺たちのもとに走ってきた。

「朗報です！小手の勇者が誕生しました！」

俺たちがその話を聞いて走って行き、群集をかき分け中に入るといた。

そいつは自身の手にくっついた小手を見ていた。

そして俺と尚文の視線に気がついたのか、ゆっくりと顔を上げた。

「ライト・どうやら私が小手に選ばれちゃったようだな。」

ミコだった。

ミコの手には小手がしつかりとついていた。

「おめでとう。これでお前も勇者の仲間入りだ。」

よかった。変な奴が仲間になるよりかは俺達の中の誰かから出てくれてよかった。

「だが、大丈夫か？ツメから小手に切り替わったけど。」

「それなら心配しないでよ。」

そう言うくと小手を他の形に変える。

それはまさしく俺が買い与えたツメだった。

「なんでだ？小手以外は弾かれるはずじゃ・」

「ああ、それなら。多分だけどツメを作った時に小手みたいな形状で作ったろ？それで小手の延長として認識されたんだと思うんだ。」

小手の延長なら小手として認識されるか：ならば、アサシ○ブレードとかいけそうだ

な。今度エルハルトに頼んで作ってもらおうか。

「とりあえず後で俺の武器をやるよ。」

こうして小手の選定イベントは幕を下ろし、次の日となった。

視界の隅の青い砂時計が00:12と数字を出した。

残り12分。そろそろだな。

やっぱ慣れないな。心臓の鼓動が早くなりやがる。

女王からの話で既に近隣の住民は避難が完了しているらしい。

流石今回は突然発生じゃないからいいな。

つまり最悪の事態が起きても民間人に被害は出ないって訳だ。

00:01

「アル・リベレイション・オーラー」

尚文が全体にバフをかけ始める。

そして時間は00:00となった。

バキン、という以前と同じガラスを叩き割る音が耳に響く。

前にも受けた、大きな衝撃が視界に走った。

そして山の中腹から火柱が上がり、巨大な二羽の鳥が姿を現す。

その姿は壁面に描かれていた、鳳凰の形そのままであった。

4 6 話

俺が高台に辿り着くと、いた。

バンドナを頭に巻いて仮面をつけて服を隠すかのようにマントを羽織った。男？がいた。

男？になったのは体つきで判断したからだ。

「よう、アンタ何してんだ？もしかして前回の霊亀戦をサボった七星勇者かい？」

俺が少し恨みを込めて言うとな奴はこちらを見た。

「ああ、俺は勇者だ。鳳凰を倒しにきたんだ。」

「そっか！なら話は早い。協力してくれ。」

来人が協力を申し込んだが帰ってきた答えは予想外のものだった。

「何故だい？」

「は？」

今、コイツなんつった？何故だい？だと？

「何故って事ないだろう。鳳凰は倒さなきゃいけない。封印だといずれまた復活する。その代の勇者が酷い目に遭うんだぞ。」

「君は勘違いしているようだから言っておくよ。俺だつて奴は倒すつもりだ。だがあの高いところにいる奴からだ。」

「待て！知らないようだから言っておくが、アイツらは同時に倒さないと片方が自爆してまた2体に戻るんだぞ！」

「知つてるさ。だからだ。君達勇者を殺すためだ。」

「血迷つたか！同じ勇者同士で殺し合つてなんになるつて言うんだ！」

その時だつた。

バシン！

何かが俺の顔に迫り、寸前で、それを避ける。俺に当たらなかつた何かがしなるような音を立て奴の手に戻る。

奴の手に握られているのは・

「なるほど。鞭か。」

「ご名答。それよりもよく避けたな。この不意打ちを避けられた奴は今までいないんだけどな。」

「なら俺はその第一号つて訳だ。悪いが鳳凰討伐の邪魔はさせない。俺はお前を止める。」

俺が腰にギャレンバックルを巻くと自然に待機音が流れ始める。

「変身ー！」

俺がポーズを取りながらバツクルを反転させた。

Turn up!

俺の目の前にダイヤのカテゴリAであるスタッグビートルが映し出されたオリハルコンエレメントが現れる。

そのエレメントを潜るように走りだし突き抜けた時、俺の姿が変わり、仮面ライダーギヤレンに変身した。

「へえ、お前の能力面白いな。ギヤレンか。」

「まあ、今ここで鳳凰に攻撃しても致命傷になるか分からないからな。相手してやるよ。」

俺は醒銃ギヤレンラウザーを構え：

「はっー！」

走りながら撃った。

「甘い！ バインドウィップ！」

1発は鞭を躲して奴の仮面に当たったが後は鞭で弾かれ今度は俺を捕らえようと鞭が飛んでくる。

俺はそれを避けようと前転したが、避ける場所を見抜かれていたのか俺の右手に鞭が

結びついた。

「最初から銃を持つてる方の腕を狙ってたんだよ！馬鹿め！」

俺はお構いなしに照準を合わせるがググツと奴が鞭を引つ張る事で照準を合わせられなくなる。

どうする…そうだ！

俺は引つ張りに耐えるフリをして足に力を込める。

そして奴の方に飛びかかる。そして飛ばされながらラウザーにカードを2枚スキヤンした。

「終わりだ!!!…何?！」

「お前こそ甘いんだよ!!！」

アツパー！ファイヤー！ファイアアツパー！

俺は飛んできたスピードを燃える拳に乗せて奴の顔面にアツパーを叩き込んだ。

「ガアッ！」

俺に顔面を殴り飛ばされて地面を転がる。

「いてえな。このやろう…」

奴はまた立ち上がる。みると仮面の一部が黒く焦げており炭化している。

そしてどちらともなく走りだし、ノーガードでの殴り合いが始まった。

だが俺の攻撃が効いていたのか奴の動きが遅くなり俺が押し始める。そして俺のレバーブローが刺さり奴の体がくの字に曲がる。そこに顔面に膝蹴りを叩き込む。

仮面の口部分が割れて血を流しながら後ろへ下がる。

「決めるぞ。」

俺は新たにカードを3枚スキャンする。

ドロップ！ファイア！ジェミニ！バーニングデイバイト！

奴がまだ膝をついているのを確認し、俺は走りだし跳び上がる。そして空中で宙返りを行いながら2人に分身し、燃える両足を叩き込んだ。

奴はその場で爆発し、前のめりに倒れる。

そして俺はそいつの方へと歩きながら言う。

「諦めろ。お前は俺には勝てない。」

その時だった。

「キュイイイイイイイイイイイ!!!」

高高度の鳳凰が雄叫びを上げた。

みると尚文達が鳳凰を追い詰めていた。よし！このまま同時撃破が出来たら終わりだ。

「よそ見をするなんて随分余裕だな！」

俺は突然殴り飛ばされ地面を転がる。

転がりながら体勢を直し、奴を睨み付ける。だが俺は見てしまった。いつのまにか奴の目の前に兵士が整列していたのだ。

「ありがとよ！お前らの仲間は優秀なようだな。俺の為に膳立てまでしてくれるとはな！」

「な!?よせっ!」

俺は奴を止める為に走り出す。

「そうはさせないぞ！」

「お前を止めろと言われているんだ！」

29人の兵士が俺に向かって走ってきた。

「お前ら！そのバカを抑えてろ！それとお前。お前は俺に肩を貸すという名誉を与えてやる。これは命令だ！」

「「「「御意!!」」」」

29人の兵士達は武器を抜いて俺に襲いかかる。

「邪魔だ！退け！」

俺は振り払おうとするも、兵士達はしがみついたり組みついたりして俺を阻む。

「よし！いける！あばよ！クズども！」

「ヴァーンズインクロー！」

奴の手から放たれた閃光が真っ直ぐに鳳凰へと向かう。

「おらっ！」

俺はやつと兵士たちを振り払い奴のもとへ走る。

だがその頃には待機させていた飛竜に乗って空に飛び上がった。

「また会おうぜ！生きてたら…の話だな！ハッハッハッハッ！！！」

俺は下から狙い撃つが奴が操る飛竜にスイスイと避けられ逃げられてしまった。

俺は鳳凰の方を見る。

マズイ！どンドン膨らんでやがる！

だが、それでも尚文たちは爆発される前に倒そうと一斉攻撃を加えている。

だったら俺も！

俺はラウズアブソーバーにクイーンのカードを入れ、ジャツクのカードをスキャンした。

アブソーブクイーン！フュージョン！ジャツク！

俺の体は金色に変わり、胸にはクイーンのカードであるピーコックアンデッドの紋章が。

そして背中にクジャクの羽を思わせるマント状のオリハルコンウィングが現れ、俺はジャックフォームへと変身した。

バレット！ラピッド！ファイア！ バーニングショット！

俺は鳳凰よりも高く飛び上がりジャックフォームにより進化したギャレンラウザーを構える。

「くらえ！」

俺は鳳凰に照準を合わせ、火炎弾を連射した。

だが、鳳凰の動きは止められず、ついに大爆発が起きてしまった。

47話

マズイ！行かなきや！

俺は空を飛び、連合軍の後ろから迫る炎に向かつていく。

「尚文！」

「来人！」

「すまん！止められなかった！」

「今はそんな事いい！」

俺は尚文の後ろに降り立ち、カードを2枚スキャンする。

ジエミニ！ロツク！

俺の姿が2人に分身し、目の前に2つ石の壁を斜めに作り出した。

これで直線に飛んでくる炎をいくらかは空へ放出できる。

だが：石の壁がどれだけでもつか：

「来人！」

苦しそうな声で俺を呼ぶ尚文の方を見て驚く。奴の四肢の炭化が始まったのだ。

「尚文！無理をするな！」

「無理しなきや……出来ねえんだよ！後は頼ん……」

「大丈夫です。みんなを……尚文様の願いを叶えて見せます。」

その声と共に俺達の前に目の前にひとつの影が飛び出した。

「アトラー！」

アトラが手を前に出して俺達の前に立っていたのだ。

俺と尚文、そしてその兄のフォウルが言葉を失う。

「よせーアトラー！」

俺達は手を伸ばすが届かず、アトラは変幻無双流の技の一つ、「集」を用いて炎の流れを変え始めた。

しかし素手で炎に触れることでその手は焼け焦げだす。

そして耳をつんざく程の爆発音と目を覆わなければならない程の閃光が起きた。

目を開けて後ろを振り向くと仲間達がぐったりしている。

一応、石の壁で炎の一部は逸らしたが完全ではない。

連合軍のどれくらいかは分からないが、逸らしきれなかった炎をくらい死屍累々と
いった状態だった。

そうだ！アトラは！

すると上から何かが降ってきていた。

「まさか!」

「任せろ!」

俺は空を飛び受け止めるとそのまま確認する。

アトラだ。だが状態は酷く片腕は吹き飛び両足は完全に炭化していた。

「尚文! フォウル! アトラはこのまま治療所に連れていく! お前らも後で来い!」

俺は空を飛び治療所に降り立つ。

状況を説明していると尚文とフォウルがラフタリアとフィーロに連れてこられていた。

改めてみるが、足だけかと思いきやヘソ辺りまで炭化しており生きているのが不思議な状態だった。

「アトラ! しっかりしろ!」

フォウルが残った方の手を握りしめ問いかける。

傷だ。傷の手当てを!

俺はすぐにパラドクスに変身して回復を10個与える。だが炭化した部位が元に戻らない。

「リベレイション・ヒール!」

尚文が横で回復呪文を唱えるが効き目がない。
その後、尚文がイグドラシル薬剤を与えるが、変わりがない。

「治せる土壤を超えてるのよ。」

「ラト……」

ラトの腕には小さなミー君の核がいた。

「この子も……かなり無茶したのよ……」

「何とかならねえのか……ラト……」

「ごめんなさい。無理よ。腕や足だけなら何とかできるけど臓器までは無理。」

「尚文……様」

その声に俺達はアトララの方を向く。

「みんなを、守れましたか？」

「ああ、そんな事よりお前の方が——」

「お兄様……尚文様を私の近くへ……」

「……ああ」

フオウルが尚文をアトララの前に出した。

「分かっております。残り時間がもう、無い事は…」

「何を言っているんだ。まだ時間なんて腐るほどあるに決まってるだろ。」

尚文：

その後も尚文は尽力するがアトラは治らない。

「まだだ！まだできる…」

「よせ！尚文！」

俺が肩を掴んで止めるが、逆に尚文に肩を掴まれた。

「邪魔すんじゃないぞええ!!」

「目を覚ませ！」

俺は尚文を殴りつける。

「もう助からないんだ…最期くらいアトラの言葉に耳を傾けろ。」

「……っ！」

尚文の目から涙が溢れる。

アトラは手を伸ばして尚文の涙を拭いながら言った。

「尚文様、私は貴方の事をこの世界の誰よりも好いています。そして前に言いましたよね。私は貴方の盾になりたい。」

「……ああ」

「私の願いを聞いてください。」

「分かった！なんでも聞いてやる！だから！死ぬな！」

「……私は、尚文様の盾になると願いました。それは今でも変わりません……そして……私は、血も肉も、魂さえもこの大地に還りたくないのです。」

「え？」

その手は盾に触れていた。

まさか……！

「私はあなたの一番になれない。ならば……せめて体だけでもあなたと共にありたい。」

48話

その後、ブレスシリーズとかいうものに覚醒した尚文の尽力で鳳凰は討伐された。しかし、また尊い犠牲を出してしまった。

そのせいで俺達は鳳凰を倒したものの素直に喜ぶことはできず心に影が残った。

アトラの葬儀が終わり俺は用意された部屋の中でセバスと話していた。

「アトラが死んじまった。」

「ええ、話は聞いております。その方はナオフミ殿の盾に入つたと聞きます。彼やフェウル君の前では口が裂けても言えませんが彼女の魂は盾の中で生き続ける事でしょう。」

「そうだな。ところで仮面だが…」

「ええ、調べております。」

そうなのだ。あの日俺は奴の仮面の一部分を砕いていたのだ。大爆発の炎で焼けたと思っていたが奇跡的に現場に破片が残っていたようだ。それがいったいどの物なのかをセバスに調べてもらっていた。

「それでは、私はこの辺で。」

そう言うのと窓から飛び降りる。そしてそのまま前転で衝撃を緩和すると走り出していった。

セバスも高齢なのによくやるよ。

俺が尚文を探して城内をプラプラしていると女王と話しているのを見つけた。

「ああ、なら次はフォーブレイだな。」

「はい、その通りです。」

「どうした。尚文。」

「来るか。ちようどよかった。次の四霊は麒麟だ。そいつがフォーブレイに出る。」

「なるほど。わかった。それと今回の鳳凰戦を邪魔した奴の目星が立っています。」

「本当か!!」

「本当なのですか！ライト様！」

「ええ、この目で確認しました。しかしあくまでも可能性ですので、そのところ分かった上でお聞きください。」

俺の言葉に2人は唾を飲み込みながらうなづく。

「それは・七星勇者ではないかと。」

「七星勇者が!?それは真ですか！」

「ええ、奴は言いました。自分は勇者だと。そして奴の武器は鞭。奴の持つ鞭に我々の武器と同じ宝石を見つけました。」

「まさか…」

「そこまで分かってんだろ？ どうして可能性なんだ？」

「ああ、奴は鳳凰に攻撃を放つ前にこう言った。『ヴァーンズインクロウ』と。」

「クロー？ ツメか？」

「そう言うことですか。普通勇者武器は1人に1つ。更に一度手にすると他の武器を持つことさえできない。だから鞭とツメの両方を使っていたその人物は本当に勇者なのか怪しいと。」

「その通りです。ですので教えてください。鞭とツメの勇者の所在を。」

「鞭の勇者様はフォーブレイに、ツメの勇者様はシルトヴェルトにいらっしやいます。しかしツメの勇者様はそこから足取りが掴めておりません。」

「ならば先にフォーブレイの鞭の勇者に会います。コンタクトは取れますか？」

「お任せください。」

「そう言い女王は走っていった。」

「俺はすぐに準備をして出立する。待つてるぞ。」

俺はブラッドスタークに変身して村に戻りピーター達を集めて待ち合わせ場所まで

飛んだ。今回は急がなくてはならない為、全員フィロリアルに騎乗している。

その後、尚文と合流してフォーブレイまでの道を進み始めた。

「なあ、錬。今回は麒麟に関する情報はないのか？」

「すまない。今回ばかりはゲーム知識に頼るべきではないと思っている。」

確かにな。霊亀、鳳凰と錬が知ってるゲームと特徴が違ったんだ。錬もここでまた違ったものを教えたくはないだろう。

尚文が女王に聞いているが、そちらも分からないらしい。前情報は無しか。仕方ない。

そしてフィーロが爆走し始めた為、こちらもフィロリアルに爆走させていた頃だった。

俺の目の前に砂時計が現れ、'9'の数字を出した。

そこまではよかった。

だが1時間後、その砂時計がパタリと消えてしまったのだ。

そのかわりに赤い砂時計が現れ、1週間を示していた。

消えた？まさか倒されたか？

「女王様。フォーブレイに割いている七星勇者の人数を教えてください。」

「リーシアさんとクズとミコさんを除いて4人です。勿論、他の国も周っていたらいい

いますか。」

なるほど。残りをフォーブレイにか。

てか、アイツを七星勇者が1人、鞭の勇者だとすれば何故あの時俺達を殺そうとした？勇者を殺すことにメリットなんかあるのか？

いやデメリットではない。他の四霊を五聖と七星を合わせて12人。その内の俺達8人：いや奴がリーシアやミコの存在を知らなかったとして6人。

それだけあの場で殺したら残り6人で鳳凰と麒麟と応竜を相手にしなくてはならず、その分犠牲が増える。

なら、何故勇者の命を狙う。奴は人数が減るデメリットが気にならなくなるほどのメリットを得ているのか？

そして現在ツメの勇者は消息不明。まさか：ツメの勇者は既に殺されている：？分かん。

「麒麟がどうなったか分かりました。七星勇者の手で討伐されたようです。そして損害も限りなくゼロ。しかし気になる点が。」

「今回の討伐に参加した勇者は1人だったそうです。」

「1人!？」

1人：残りはサボったか。何故そこまでして戦わない？女王様の話では残りは

フォーブレイにいるはずだろ？1人に討伐を任せて残りは避難誘導してた訳はないだろ？

と：……待てよ？こうは考えられないか？参加しなかったのではなく、参加できなかった

そう考えると出来なかつた理由の一つ。その討伐に参加した勇者に捕らえられたか、殺されたか。

捕らえられてるなら、まだいいが問題は殺されてた場合だ。

「今回は写本もねえのか。」

「文句言うものじゃないぞ、ナーガ。無理なものは無理だ。」

ナーガとエクレールが後ろで話していた。写本ねえ：うん？

まさか：奴のメリットが分かつたかも知れん。もし、この考えが本当なら奴が俺達を殺そうとした理由もうなづける。

だが、その場合だと俺が恐れてる最悪の出来事が起きてるってことだ。

それは：フォーブレイにいる七星勇者が1人を残して全員死んでるってことだ。

49話

俺達は明日フオーブレイへと行くことにして隣国の宿で休むことにした。

仲間達も思い思いに行動したために1人になってしまった俺は尚文の部屋を訪れた。すると尚文の部屋から顔を真っ赤にしたフオウルが飛び出していった。

なんだ？

「あら？ライトちゃんじゃない。」

「サディナか。」

サディナ。シヤチ系の亜人で本人曰くサカマタ種。尚文が買った奴隷の一人だ。

手には酒瓶。

「多分それだけじゃ尚文は酔わねえぞ？」

「あら、それもそうね。」

2人で部屋に入った。

「辛そうな顔してるわね。なんならお姉さんと楽しいことでもする？」

楽しいことて・何する気だよ、お前。

「なあ、サディナ。お前俺のこと好きか？」

「あらやだ。お姉さんにちよつと恥ずかしい事を聞いてくるのね。そうね。ナオフミちゃんの事は好きよーキヤ！」

「そうか……じゃあ人型になってふんどしを脱いでそこで横になれ」

お前も何言ってるんだ！尚文！

「……ナオフミちゃん？」

ほら、困惑してんじやん！

そして尚文がズボンを下ろし、サディナのふんどしを下ろそうとしたところでサディナに突き飛ばされていた。

そこからサディナの説教を聞いて分かったがアイツはアトラの遺言を素直に遂行しようとしていたのだ。

『好意を寄せる者に応えろ』と。

そういうことじゃねえんだよなあ。

「尚文。はつきり言ってる。お前のやってる事は間違ってる。アトラはそんな事は望まないはずだ。」

「そう……なのか……」

「当たり前だ。お前の行動に愛はあるのか？今晚一人で考える。行こう、サディナ。」

俺達は部屋を出て、歩いた。

「ナオフミちゃんも今回はかなり参ってるようね。」

「そうだな。どん底にいたときのアイツを見てきたが：今回は今までとは違った酷さだ。まあ、明日には治ってるだろ。」

「そうね。このお酒・無駄になりそうだから一緒に飲まない？」

「いいぞ。レディからの直々のご指名だ。喜んで。」

次の日、俺達はようやくフォーブレイにたどり着いた。

その街は今まで見た街とは違った雰囲気を感じる。

どこからどう見てもスチームパンクなのだ。今までの街並みにありがちの中世ヨーロッパを想像していたがスチームパンクかよ。

その時、面白そうなものを見つけた。的当てだ。だがあれ：銃だよな？間違いない。

「女王様、あれは：」

「銃ですよ。ライト様の世界にもありましたか？」

「ええ、勿論。しかしこの世界に来て初めて銃を見ました。何故、実戦投入されないんですか？」

「銃のように飛び道具系の武器はステータスに左右されず。魔法による暴発もありま
すし、弾速も変わってくるのです。」

「飛び道具って事は・樹。お前の弓の解放に役立つってくれるんじゃないやねえか？」
「そうですね、ではいつてきます。」

樹が馬車を降りて的当ての横の武器屋へと歩いて行くのに俺もついて行くことにした。

樹が銃を手にとって弓にコピーさせたのを見て俺も鎧にコピーさせる。

解放

G 4、ゾルダ、デルタ、龍玄、バルカン

一気に6つか。

そしてまた馬車を走らせて行くとメルロマルクの城よりも大きな城が俺達を出迎えた。

「亜人差別がないのは本当のようだな。」

「ああ。」

尚文と話しながら街を見る。

人間と亜人の子どもが仲良く遊んでいる、そしてそれをベンチに座った人間と亜人の母親が談笑しながら見ている。

そうだ、これだ。俺はこれを求めている。

だがメルロマルクだって最近では亜人差別撤廃へと動いている。だが大半は商人や冒

険者ばかりで今俺が見ているような永住してそんな奴らはほぼ見ない。

そうして俺達は入城を果たした。

俺達に乗ってきたフィロリアルはトランスチームガンで俺の村に帰して女王の後に続いた。

「メルロマルクの女王と勇者様方ですね。話は伺っております……どうぞぞ！」

前もって来る事は伝えてあるし、門番は快く門を開けてくれた。

だが、今の含みのある言い方はなんだ？

気になる。

そうしてしばらく歩いているうちに謁見の間にとどり着いた。

「メルロマルクの女王と四聖勇者様御一行のご入場おおお！」

扉が開かれ、玉座に座る者を見た。話に聞いていた豚男ではなく、好青年だった。

目が青で髪は金、服装はジャケットにジーンズ、頭にはバンダナを巻いてその上に王冠を被っている、

異世界において浮きに浮きまくっている出で立ちだ。

だが：！俺はそれよりも気になる物がある。あのバンダナだ。

あの日、俺が戦った仮面の男が巻いていたバンダナに瓜二つだ：コイツか？アトラをやったのは。

俺はしれつと女王に隠れるように移動して腰にベルトを巻き、ガシヤットを構える。奴のことだ。俺達を殺す気だ。

「タクト殿。国王はとうなされたのですか？」

「アイツ？ ああ、殺したよ。」

「聞き間違いでしょうか？」

「いや？ アンタの耳は正常さ。アイツはウザいから殺したよ。」

「初耳ですが？」

「そりゃあねえ、俺がこの城の兵士達に口止めしたからね。そしてメルロマルクの女狐。お前も目障りなんだよ！」

そこまで言ったところでタクトの手が怪しく光り出す。

「マズイ！ あれは！」

俺はすぐにガシヤットをドライバーに挿して展開した。

「マイティジャンプ！ マイティキック！ マーイティーアクション！ X！」

俺より早く尚文が盾を構えて女王の前に立つのを見て俺は更にその前に立つ。

「ヴァーンズインクロー！」

俺は腕を交差して攻撃を防ぐ：が、その攻撃は俺を貫通し、尚文の盾を貫通し、女王に当たってしまった。

ゲーム……オーバー……!

俺の変身は解除され膝をつく俺の体はそのまま粒子となって消えた。

「ハッハッハッハッハッ!!!勇者の一人をぶっ殺してやったぜエー!」

俺が消された事でラフタリアやフオウル、ピーター達が走りだす。

それに遅れて他の奴らが走り出した。

フオウルが攻撃しようとする目の前に東洋の青い龍のような亜人と狐耳の亜人が立ち塞がった。

「おっと、タクト様に何をしようというんだ?」

「そうじゃ、わらわ達のタクトに何用じゃ?」

「ハクコのカギ!黒トカゲ!」

「アオタツ種!どけ!」

「テメエこそどけ!青トカゲ!」

「ラクーンのブス!犬っころ!」

「邪魔です!」

「うざったいからどきな!狐ババア!」

「世界の為に戦ってきた者達になんという仕打ち……卑劣過ぎる……いくぞ、ミコ!ラフタリア!あの様な邪悪を許す訳にはいかん!」

フオウルとナーガがアオタツ種の女、ラフタリアとミコとエクレールが狐耳と戦い始める。

「!? そこです!」

リーシアが手裏剣のようなものを投げてカーテンを斬り裂く。

「ハッハッハッハッ!!!」

それを高みの見物をするかのように眺めてタクトが高笑いをする。しかしその斜め後ろに紫色の土管が現れる。

「トウっ!」

そこから来人が飛び出して未だ気が付いていないタクトの後頭部に一撃を入れた。

50話

「ハツハツハツハツ・は？グアっ！」

俺に蹴り飛ばされたタクトは前のめりに倒れた。

「ヴェツアハツハツハツハツ!!!時間差コンティニューだ！」

俺のすぐ横の数字が99から98に変わり消えた。

その時だった。俺の変身が強制解除されたのだ。

「は？」

「なんだ、失敗したと思ったが成功だ。お前の全部は無理だったが一部だけは奪ってやったぜ。」

一部だと：つまり仮面ライダーか。

だが、やりようはある！

コブラ！

「蒸血・」

俺はブラッドスタークに変身して応戦する。

そして俺は高速移動でタクトの背後に移動し、殴りつける。

ガイン!

だがその拳は突如現れた盾によって阻まれた。

盾だと・!?

「盾みたいな攻撃できない武器を奪ったところで意味がないと思っただけど使いようはあ
るようだな。」

「奪つただと・やはり貴様か! 貴様・他の七星勇者を殺しただろ?」

「当たり前だ。まずは気に食わなかつたツメ、そのあとは俺の崇高な考えに賛同しなかつた勇者達だ。」

「お前らも例外ではない。礼を言うぜ? わざわざ俺に奪われる為に武器を持ってきてくれたんだからな!」

「抜かせ! アトラの仇だ!」

俺がトランスチームガンを構えた瞬間、殺気を感じてバックステップを取る。その先
ほどまで俺がいた場所を弾丸が通り過ぎて行く。

銃弾?! だがそれはステータスに依存するはず!

みると斬り裂かれたカーテンの裏に女性が立っており、皆銃を構えていた。

「驚いてるだろ? Lv250の弾丸の味はどうだい?」

「チッ!」

「来人！ここは退くべきだ！」

ピーターが俺のもとまで走ってきて言った。

俺が後ろを振り向くと女王がクスに抱えられて元康のフィロリアル達が治療しており、尚文も立っているのがやつとな状態だ。

仕方ない。

「撤退だ！お前らは先に行け！俺が殿を務める！」

「しかし！」

「俺を信じろ！行け！」

「撤退だ！」

ピーターが皆を引き連れて謁見の間から出て行った。

一気に相手がいなくなったタクトとアオタツ種と狐耳と銃を構えた女性が俺の方をみる。

「私たち相手に一人残るなんて・とんだバカね。」

「そうじゃな。愚かとしか言えんな。」

「そうよそうよ！さあ！タクト様！指示を！」

コイツらが追手に来るのはマズいな。ライダーの力が使えない今、俺の手札はブラッ

ドスタークを入れて6枚。その内カースシリーズは2枚。勝てない相手ではない。「疲れた。」

「は？」

タクトが急にそう言つてポフン！と椅子に座つたのだ。

「どう言う事だ？」

「そのままの意味だよ。ほら力は返してあげるから帰んな。」

そう言うのとタクトの体から光の玉が飛んでいき俺に入る。

俺のステータスに変化が起きて俺が今まで解放したライダーが戻つてきた。

「なんだか分かんねえが……そっちがその気なら俺は帰るぜ。」

俺はバーニングファルコンに変身して元来た道を飛んで戻つた。

飛んでいる最中に窓から出ようとしたが、知つてる気を感じた為、廊下を進む。

すると尚文がババアと読んでいた老婆が一人で大立ち回りをしていた。だが老体には酷でどんどん圧され始める。

そして老婆がバランスを崩したところに兵士の剣が迫つたところで俺はそこに降り立ち、老婆を抱えて飛び上がった。

俺が発つた地点にいた兵士達が追いかけてやうとするものの行く手を炎に阻まれているのを横目で見つつ急いでフォーブレイを後にする。

「なんじゃ！鎧の勇者殿！邪魔をするでない！」

「バカやろう！死に急ぐんじゃねえ！」

俺は空を飛び追手が来ていない事を確認してメルロマルクの城の庭に降り立った。

「鎧の勇者様！鎧の勇者様が帰ってきたぞ！」

そこから俺も治療院に運ばれて簡単な治療を受けたあと、会議室へと移動した。

女王は一命は取り留めたもののいつ目覚めるか分からない状態、尚文は女王よりかは状態は良かったが未だ目を覚まさないらしい。

老婆は老体ながら直撃する事なく急所は外していた為、少し治療院にいたらなんとかなるといったところだ。

良かった。だが：気になる。何故タクトは俺の能力の一部を返した。一度取られるとわかったら警戒されるのに。

それとも余裕ってやつか？

馬鹿にしやがって：

51話

あれから城の伝令によりフォーブレイがメルロマルクに侵攻することがわかり、城内での騒ぎがやがて城下に伝わりメルロマルクは慌ただしい雰囲気にも包まれた。

そして尚文が目覚めた。

「ナオフミ様！」

ラフタリアが目覚めた尚文の手を握る。

「よう、尚文。」

「来るか。」

「女王とババアは？」

「女王は一命は取り留めたが目を覚まさねえ、老婆は…無事だ。まだベッドから離れられねえがな。」

「お前は一部奪われたらしいな、盾を。」

「ああ、お前は？」

「戻ってきた。いや違うな。奴が返した。」

「返しただと?」

尚文は驚きながら聞き返してきた。

「ああ、返してきた。そのあと確認したが全部使えるようになっていた。それよりもだ。まだこつちには一人七星勇者がいんだろ?」

「なるほど。そいつの目を覚まさせるんだな。」

俺とラフタリアで尚文に肩を貸しながら女王が眠る病室に入る。

そこにはクズとメルティが椅子に座って女王を見ていた。

「ナオフミさん、ライトさん。」

「悪いが俺達とクズだけにしてくれないか。話がある。」

「う、うん…」

「行こう、メルちゃん。」

ラフタリアがメルティを連れて部屋から出ていったのを確認して俺はクズを見た。

俺達が召喚された日、玉座で踏ん反り返っていた男とは分からないほどに沈んでいた。

抜け殻のようなそんな感じだ。

「アンタ…女王から言われたことがあるらしいな。」

「……………笑いたければ笑え。愛する者を守れない愚かな私を。」

俺の問いに答えないのか分からないが言葉を絞り出すように言った。

「いいや。そんな事はしない。」

「俺もだ。」

俺と尚文がクズを挟むように椅子に座る。

「今更、ワシに何ができるのだ。ワシは名前の通りのクズじや。ワシのような愚王に国を任せては滅ぶ。お主らに任せる。」

「あ？何言つてんだ？お前。」

「聞いたぞ！女王はアンタに国を任せると！それでいいのかよ！アンタは愛する妻から託されたんだろ！この国を！だったらやれよ！」

尚文も声を荒げだす。だがクズは答えることなく俯いてしまった。

「お前の言い分はよくわかった。なあ、尚文。」

「ああ、そこまで言うなら俺達がやってやる。フォーブレイを滅ぼしてメルロマルクとフォーブレイは俺達のモンだ。そうなった場合、クズ。お前は真つ先に殺す。想像がつかない程の拷問の末に殺してやる。そうだ、来人。メルティどうする？」

「そうだなあ、性奴隷とかはどうだ？まだ幼いが今から仕込めば上物になるだろ。」

「だな。俺達が飽きた後は売っちまうのもいいな。なんせ元王族ってブランド付きだ。

そういうコレクターが喉から手が出るくらい欲しがるぞ。それに俺達が一生遊んで暮

らせる程の金が入ってくる。」

「ああ、決まりだ。それに俺達に齒向かう奴らは国ごと滅ぼしてやればいい。俺がこの手を振るだけで国は一夜で滅びるぞ！」

俺達が好き勝手な事を言うのに腹を立て、とうとうクズは立ち上がった。

「貴様らの好きにはさせんぞ！」

拳を握り俺達に殴りかかった。

俺達はそれを避けずにくらった。

いてえな、口の中から鉄の味がしやがる。

「ワシが：ワシが愛したミレリアの：！妻の愛した国や娘：この国に住まう民はワシが守る！」

「そうだ！その粹だぜ！賢王！」

「ならば再度問う。お前の妻は俺達に国を任せたと云ったのか？違うだろう？お前に任せたんだ！杖の勇者にして英知の賢王！お前が……何よりも愛した女の言葉を守れ！」

「そうじゃ：ワシは叡智の賢王にして杖の勇者：ワシの目は曇っておったようじゃ！」

「じゃが：それはもう晴れた。ワシがなすべき事は妻のそばでメソメソと泣くことではない！妻の愛したこの国を守ること！過去にワシがした事は到底許されることではな

い。そなたらもワシが憎かろう。じゃが、そなたらの力無くしては勝てん。力を：貸してください！」

クズは椅子から立ち上がり、ひざまづくど頭を床に擦り付け始めた。

「頭を上げてくれ。」

「上げませぬ！ワシがお主らにした事を考えれば：償つても償いきれませぬ！」

「もうわかったから。言葉じゃなくて行動で示してほしい。尚文もそれでいいだろう？」

「ああ、俺は女王にこの国に協力すると約束した。俺はそれを守るだけだ。」

「へっ！素直じゃねえんだからよ。さあ、立ってくれ。俺達の大切な人達を傷つけたフォーブレイを打ち負かしてやろうぜ！」

「はい！」ビシッ！

俺達に左手で敬礼をしたその時だった。突如、クズの右手が光りだし、光が収まると杖が握られていた。

「杖が：ワシをまた勇者と認めてくれるのか：」

「良かったですね、さてこれからはなんてお呼びすれば？」

「いや、クズで良い。これはワシがお主達にした事への一生をかけた償いじゃ。このままで良い。」

「わかりました。ではクズさん。会議はもう始まっています。共に行きましょう。」

「ああ。行ってくる、ミレリア。目が覚めたワシを見ていてくれ。必ず守ってみせる。」

そう言い残し、俺達は病室を出た。

52話

「これは、盾の勇者様、鎧の勇者様……と」

俺、尚文、ラフタリア、クズさんの順で来た事で会議室の扉の前に立つ兵士が驚く。

「国王様……!」

クズと呼ばなければならないはずなのに、それを忘れてしまう程のクズさんのオーラに兵士が奮い立つ。

「お待ちしておりました。こちらで会議中です。」

兵士が扉を開けてくれた為、俺達は入っていった。

「尚文! 傷はもういいのか?」

「ああ、鍊。俺はもう大丈夫だ。」

その尚文が退院したことよりもクズさんの方に注目が集まる。

「アレは本物か?」と。

「ワシも参加させてほしい。メルティよ、会議を続けてくれ。」

「は、はい!」

メルティにとっては実の父だが最近までは愚王の面ばかり見てきた為、違和感がある

のだろう。

「それでは続きを。」

そこから壁のボードに次々と書類を貼っていく。

そこには勇者達の間で確実にとされたタクトが元々自分たちと同じような異世界から来た人間だと言うことだ。

これは俺も異論はない。

銃、飛行機、そしてスチームパンク：どう見てもこの世界のモノじゃない。

俺がよく読む転生モノでも前世の記憶を保ったまま転生するのはよくあるもんだ。

まさか、それを目の前で見ることになるとはな。

「して、フォーブレイの飛行機とやらは何機来るんじや？」

「5機です。」

「5か。して勇者殿に聞きたい。飛行機に対する情報はないか？例えばお主らの世界ではどういう扱いだったかとかじゃ。」

「飛行機：私の国では戦闘機と呼ばれておりました。戦闘機にある装備として機銃と爆撃ですね。しかし飛行機にも弱点があります。」

こうして作戦会議を進めて解散となった。

俺は自身の街に戻り、会議を開いた。

そこでは街から傭兵部隊をメルロマルクに派遣すること、一部は街が襲撃された時用に残しておくことが決まった。

そうして決戦当日。

俺は広場に住民全員を集めて演説をした。

本来ならエクレールの仕事だが、俺が任せられた。なら：あれしかなろう。あの台詞を拝借するでしょう。

「おはよう。」

「今から6時間後、我々はこの世に生を受けてからの今までで最大の作戦をスタートすることになる。」

「この世界に生きる者。人間、亜人、魔物。我々は人種の違いを乗り越えて1つの目的のために結ばれる。」

「君達は自由を勝ち取り今ここに生きている。しかし我々は再び自由のために戦う。」

「圧政や弾圧から逃れるためではなく、生き延びるためだ。我々が再びこの地で生きていく権利を守る為に、勝利を手にしたのなら。」

「今日のこの日は！世界を脅かす者達に対して我々が！断固たる決意を示した日として記憶されるだろう！」

「我々は戦わずして滅びはしない！我々は生き残り、存在し続ける！」

「それが今日！そしてこれからも讃え続ける！我々が自由を手にする日だ！」

メルロマルク城にて。

俺達が移動してからすぐクズさんの戦前の宣言となり俺は慌てて列に入った。まあ、少し遅れる事は伝えていた為、問題はない。

現在、クズさんが壇上に立ち、話をしており、もう終わる所だった。

「伝令からの報告によると現在のこちらの被害は砦が一つ落とされただけ。だがそれは想定内じゃ。皆の者、用意はいいか！」

「はいー！」

今回はフォーブレイとの戦争と波が同時に来ている為、戦力を分散することになった。

タクト戦は俺と尚文と錬、波には元康と樹だ。クズさんは城に残って全体の指揮だ。きつと賢王ぶりを發揮してくれることだろう。

うちの傭兵部隊も3つに分け、タクト戦、波、俺の街と分かれてもらった。

数時間後、タクトは奪った砦から戦況を見ていた。

砦から見えるメルロマルクの城下には至る所からモクモクと黒い煙が立ち上っている。

「報告です！」

伝令がタクトの部屋に来る。

「タクト様が命じられた降下作戦は成功です！奴ら、勇者を波の方に多く分散していたようです。現在街に残っていた勇者が応戦していますが、依然こちらが有利なのは変わりません！メルロマルクが陥落するのも時間の問題かと。」

「ハッハッハッハッ！！成功だ！俺達に楯突くのが悪いんだよ！」

タクトが高笑いをあげていることで取り巻きの女達も共に喜ぶ。

「……………まあ、嘘だけだね。」

「は？」

伝令達が後ろから漂ってきた煙に包まれる。そしてそれが晴れた時には伝令達の姿はなく、俺達の姿があった。

作戦はこうだ。樹が闇ギルドへのコネでフォーブレイの伝令の装備を人数分集めてもらう。フォーブレイはかなりの歴史ある国だ。装備くらい手に入れるのは容易だ。

そこに俺のブラッドスタークの能力で顔や体つきを変えて、ラフ種達の力で匂いや気配を偽装する。

じゃあ、メルロマルクの城下に立ち昇る黒い煙は、なんだって？

アレは全部飛行機が撃墜された煙だ。

俺たちがグラウエイク鉱山から取ってきた巨大な鉱石をクズさんが上空に浮かべて、それをラフ種達が見えないようにする。これで空爆は封じ、機動力も奪う。

俺がブラッドスタークの変装でフォーブレイに潜り込んで確認してきたが、飛行機といつてもチャチなものだった。それに戦闘機じゃないタイプしかない為、急旋回なんてできるわけがない。

ならば、落下傘部隊を展開するだろう。そこで兵士達や、うちの傭兵部隊の出番だ。鉱石の上に乗ってもらって上から風魔法や矢の雨を降らせる。

万が一、撃ち漏らして着地されても下にも兵士たちや、うちの傭兵部隊が待っている。なす術もなくやられるだろう。

そして俺の街にもフォーブレイの空挺部隊が向ったらしいがセバス主導のもと、同様にラフ種の力で消した鉱石を浮かべ、上と下から狙い撃つことで被害はゼロに抑えられた。まあ、メルロマルク城下を襲撃してきたのと比べてほんの少ししか来ていなかった為、殲滅は容易だったようだ。

一部を捕虜にする余裕もあったようだ。

「つまりお前は終わりだ、タクト。残念だったな。」

「クズが言ってたぞ。お前がとった策は自分が考えた中で最も稚拙な策だとな。」

俺と尚文が煽った事でタクトは玉座の椅子を蹴飛ばしながら立ち上がった。

「いや？忘れてた。確か君達のもとに内通者を送り込んでんだっけ！」
タクトがオーバーなりアクションを取り始めた。

「内通者だと？馬鹿げたことを。俺達がそんなもんに引つかかると思うか？」
「いやいや、いるんだよ。一人。この際だ。教えてやろうか？うん？」

「それはな…」

5 3 話

「お前だよ。鎧の勇者ことライト・ダテ！」

タクトがビシツと俺を指差した。

は？

「いやいや、お前。嘘つくならもつとマシな嘘つけよ。」

「いんや？ライト。お前は元々俺がメルロマルクを探らせるために送り込んだ。知ってるぜ？お前は俺と同じで女神がこの世界によこした勇者だろ？」

「な!?何故それを!？」

「当たり前だ。俺は女神から聞いたぜ？ライトと名乗る勇者がいるって。」

「だが俺は知らん！お前なんて仲間じゃねえ！何故なら…」

「記憶がないからって言いたいんだろ？それなら簡単だ。俺とお前が接触する度に記憶を消してたからだ。そうすれば俺とお前の関係が疑われた時にバレねえだろ？」

「それに本来この世界の文献に五聖勇者なんて伝承はどこにもない！そりやそうさ！鎧は元々別の世界のものだからな！」

「全く笑っちゃまうぜ！」

「ハツハツハツハツ!!!」

突然エクレーールが高笑いを始めた。

「エ、エクレーール?」

「確かに笑ってしまふな。貴殿のバカさ加減には。」

「我らがそれを信じると思っているのか? 確かにライトが女神の手でこの世界に召喚されたこと、元々どれだけ文献を遡っても五聖勇者は存在しないことくらい知っている。だが…」

「ライトは貴殿のような腐りきった勇者の仲間ではなく、我らメルロマルク所属の勇者だということは信じている!」

「私はライトに命を救われた。あの時、彼が助けてくれなかったら: 私は死んでいた! ならば! 私はライトと共に生きる!」

エクレーールが己の言葉を吐き出した後に両肩にポン!と手が置かれる。

「それは俺たちもだ。」

「ピーター: ナーガ:」

「我らも同じです。ライトがいなければ死んでいたかもしれない。」

「ああ! ライトにはまだまだ恩を返さねえとな!」

その言葉にミコやターニヤも続き、それが尚文や鍊にもつながっていく。

「お前ら…」

俺は思わず目に手をやった。

俺は愛されてんなあ：そこまでは思わなかったよ：

「けっ！ やっぱ騙されねえか！ だが貴様らがいくら束になっても俺達には勝てねえぞ！」

「黙れ、テメエらは俺たちにとってはまだの通過点だ。踏み越えさせてもらおう！」

そのタクトの声でこの前の女達が一斉に銃を構え出す。

やろうと思えば全員潰せるが：尚文が何か考えがあるらしいから大人しくしておくか。

「それで？ また卑怯にも一斉射撃か？」

「あ？」

タクトがムツとした顔でこちらを見た。

「お前の中では知略かもしれないねえが、俺からしたら卑怯そのものだ。」

「そうか：ならいいだろう。このLv350の俺がお前ら全員相手をしてやる。」

なるほど。煽ってタクトだけを引っ張り出すか。考えたな。

「お前ら？ 何を言ってるやがる。お前の相手は俺！」

「尚文。俺も参加させてくれ。コイツをぶっ飛ばさねえと気が済まねえ！」

「と、いうわけだ。一人増えたところでどうとでもなるだろ？なあ、タクトさんよ？」
尚文が更なる挑発をかける。

「：ああ！やってやるよ！」

「タクト様！私達も戦いたい相手がいいます！」

そう言つて恐らく主力メンバーであろう狐耳やアオタツ種達が歩み出た。

「ああ、やっていいぞ！」

「だそうだ。お前達も行けよ。」

「相手してやってくれ。」

俺と尚文の横から仲間達が出てくる。

「ラクーンのスには一度思い知らさないといけないようじゃのう。」

「貴女には負けません！」

「ラフタリアちゃんがスなんて、貴女よっぽど自分に自信があるのね？たかが狐のくせに。」

「アンタはあたしが相手よ。ハクコ種！」

「うっせえ！雑魚！」

「僕も妹がいる。やろう、フオウル。」

「じゃあ、貴女が私と戦うのね？」

「ルカ種の女：アンタはここで殺す！」

「サディナ。私も共に戦おう。」

「竜帝の欠片を持つ者ね。ワザワザ私の元に戻ってくるなんてそんなに奪われないよね。」

「キュア！」

「ガエリオン！ここは俺も戦おう。」

「なら！俺も同じ龍としてお前らに協力するぜ！」

「フィロリアル。地を這う我等の宿敵、女王の末裔の息の根を止めるのはグリフィンの私だ。」

「わー、鳥さん？ネコさん？今度はフィーロ、負けないよ！」

「フィーロちゃん。あたしも一緒に戦っていい？」

「うん！いいよ！」

こうして相手が見つからないタクトの取り巻きの女達は流石に狭いのか、テラスから降りて砦内で連合軍や尚文の村の民、俺の街の民と戦い始めた。

「さて、タクト。言つとくが出し惜しみせず、最初から全力で来た方がいいぞ？モタモタしてるとフォウルがこつちに来て3対1になるぜ？」

「ふん！全力を出さずともお前らを捻るくらい訳ないが……いいだろう。死ねっ！」

タクトが武器を構えるより先に尚文が杖を構えて詠唱する。

『我、タダの勇者が天に命じ、地に命じ、理を切除し、繋げ、膿みを吐き出させよう。龍脈の力よ。我が魔力と勇者の力と共に力を成せ、力の根源足るタダの勇者が命ずる。森羅万象を今一度読み解き、彼の者等に全てを与えよ』

「アル・リベレイション・オーラX！」

「おおう・すっげえ・」

俺のステータスがみるみる上がっていくのを感じる。最高じゃねえか！

そしていまごろになってタクトの武器から光線が発せられる。

俺と尚文は横つ飛びで避ける。

あれは：ヴァーンズインクローか。馬鹿の一つ覚えみたいにポンポン唱えやがって。

俺はシヨットライザーを腰に装着する。

「フーン！フヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌ……ヌアッ！」バギン！

そしてアサルトルグリップの付いたプログライズキーをこじ開けた。

アサルトルバレット！

オーバーライズ！

仮面ライダー：仮面ライダー：

「タクト！貴様は俺達がぶっ潰す！変身！」

シヨットライズ！

俺の周りを狼が走り回り俺が握り潰すと鎧が変わる。

レディゴー！アサルトルフ！

” No chance of surviving. ”

（生き残る術などない）

今になって気づいたがさっきのヴァーンズインクローは生身で避けられるほど遅くねえ。つまり尚文のバフが効いてるってことだ。本当に尚文様様だな。

「……今のは一発で決めると面白くないからワザと外してやっただけだ。」

「負け惜しみかい？」

俺の一言が合図になったのかは知らないがタクトが爪を俺たちに振り下ろしてくる。

俺たちはそれを難なく避けていく。

やっぱりだ。奴の動きが遅く見える。

「尚文。いくら避けられるって言っても無理すんなよ。今のお前は盾の勇者じゃないんだ。当たれば痛いぞ?」

「・当たらなければ、どうという事はない。だろ?」

「そうだったな。」

こんな風に会話する余裕だつてある。

5 4 話

「はあっ！」

俺はショットライザーを撃ちながら走り、蹴りを叩き込む。

タクトは盾の加護がなくなった尚文から狙おうとするが尚文には避けられ、そこを俺に攻撃されていくという流れが作られていき、徐々にタクトは傷を増やしていく。

「守るしか脳がない盾の分際でよくやるな。」

「いいこと教えてやる。防御つてのは実は攻撃よりも難しいんだ。攻撃に合わせて防いだり、いなしたり…」

「今だ！セカンドスラッシュ！」

「よつと！」

「甘い！」

不意打ちを狙ったつもりだろうが、そんな見え見えの不意打ちに当たってやる訳ないだろ。

尚文には避けられた事で驚愕したところに俺が頭と胸に銃撃した。

「そういうのは隙とは言わないぞ。好きだけ撃ってこい！その分だけ威力を殺してや

る。」

タクトは：意味の分からん覚醒でもない限り俺達がやられる事はないだろう。

仲間たちでも見てみるか。やられる事はないだろうが、もしもの時は助けないといけないからな。

ラフタリアとミコと狐耳が睨み合っている。

「ラクーン種の間際で…」

「見たところアンタはフォクス種とツイーイル種のハーフラしいけどラフタリアに何の恨みがあるわけ？」

「ウルフ種は黙っておれ！変化で勝ったところで調子に乗るな！それにそんな珍妙な鎧など着よって！」

変化？過去になんか因縁でもあったのか？

狐耳：確かタクト曰くトウリナって名前だったな。そいつが細身の剣を出して変身したラフタリア、ミコと斬り合う。

ラフタリアとトウリナが分身や幻術などを駆使して戦い、なんとかミコもそれについていっている。ミコは鼻が利くからな。視覚で追えない分、嗅覚で補ってるんだろう。

ピーターとフォウルは：

「今すぐ降参するなら許してやるぞ！アオタツ種の女！」

「族長の私にその口を利くか。愚かな混血が。」

「俺のルーツに興味はないね。」

「そうだとも、フォウル。純血だろうが、混血だろうが関係ない。」

「ふん！我が姿を見せてやろう！」

アオタツ種のネリシエンの姿がみるみる大きくなり、東洋の龍の姿になった。

「この姿になれるのは族長の証！雑種のハクコとラビット種如きが太刀打ちできる相手ではない！」

そう言った瞬間、ネリシエンの口から水の弾が飛び出す。

しかし、ピーターとフォウルはそれを避け、ネリシエンの頭を挟むようにこめかみに蹴りを入れた。

「何かしたか？」

「遅い：遅すぎる。アオタツの族長はこの程度か。がっかりだ。」

「舐めるナアア!!!」

ネリシエンが水と風の混合魔法をピーターとフォウルの頭上に降らせる。

「ふん！」

「その程度か。」

ピーターの拳とフォウルの拳がネリシエンの腹に突き刺さった。

「あ……が……」

次はサディナとエクレールだ。

「サディナ殿。私は水の中では貴女のように戦えない。すまない。」

「別に気にしなくていいわよ！」

ネリシエンが放った水魔法の影響でエクレールとサディナ、サメ：シャテらしい：そいつが立っている場所は水中のようだった。

「お姉さんはいつも大切なものが危機に瀕した時にそばにいてあげられなかった……でも今はエクレールもいるし安心してらるわ。」

尚文がかけたバフのおかげでシャテの攻撃を難なく避ける。

「大切なものを守れなかった尚文ちゃんの気持ち……痛いほど分かるわ……」

「その余裕を崩してやる！」

サディナはシャテの尻尾の攻撃をあえて受ける。

「メイルシュトリームスピア！」

シャテの放った攻撃がサディナに迫る。

「サディナ殿！」

バチバチ……

「な!? ルカ種が雷!? そんなバカな!？」

「あら？ 私自分のことルカ種だつて名乗ったかしら？ 私あんな弱い種族と一緒にされたくないのよね。」

そう言いながら放った雷でシャテの攻撃をかき消した。

「貴女は私の八つ当たりの相手としてどれだけ耐えてくれるのかしら？」

そう言うときサディナの姿が変わり出す。

それは茶色のトドのような姿になる。

「さてエクレール。私の背中に乗っていいわよ。一緒に戦いましょう。」

残るは上空か。

レールディアと名乗る巨龍がガエリオンとその背に乗る鍊、ナーガと対峙している。

「お前等に竜帝の恐ろしさを叩きこんでくれる！」

「メガプロミネンス・ノヴァ！」

ガエリオンを超えるほどの業火を吐き出す。だがレールディアよ。俺の仲間はそのくらいできるんだよ！

「ドラゴニック・ブレイザー！」

ナーガの口から吐き出された業火がレールディアの業火にぶつかり業火に穴を空けるとそのままレールディアに迫る。

「くっ！」

レールディアはたまらず避ける。

勢いを殺しきれなかったレールディアの業火が錬とガエリオンに迫る。

「リベレイション・マジックエンチャントX！」

錬が掲げた剣に業火が吸い込まれていく。確か魔法を吸い取れると聞いたがドラゴンのブレスも対象なのか・てか、ガエリオンに騎乗する錬カッコいいな。竜騎士みてえじゃん。

最後にフィーロとターニヤだ。

「先祖たちが滅ぼしたはずの飛ぶフィロリアルが生きていたことにも驚いたけど、まさか人間も飛べるとはね。」

「なんのはなしー？」

「えへへ、あたしは飛ぶっていうか歩いてるだけだし・」

「ドライファ・トルネイド！」

「すばいらるすといく！」

「フライングエッジ！」

グリフォンとフィーロとターニヤの技が繰り出されていく。

55話

「よそ見してんじゃねえぞ！ テメエら!!!」

タクトが攻撃してきた為、それを避けて改めてタクトの方を見る。

どれだけ避け続ける俺達に攻撃し続けたのか、肩で息をしている。

「あ、ワリイ。お前のこと忘れてたわ。」

「貴様……みんな！俺に支援魔法を頼む！それでコイツらをぶっ潰す！」

「タクト様！」

「タクト様！受け取ってください！」

取り巻きの女達が次々と支援魔法をかけていき、みるからに強化されているのが分かる。

だが……まだ敵ではない。

「今まで散々コケにしゃがんで！」

『力の根源たる真なる勇者が命ずる。真理を今一度読み解き。彼の者を焼き払う炎の嵐を！』

「ドライファ・ファイアストーム！」

「ドライファア!？」

横で尚文が吹き出してんな。

「どうした？」

「いやいや、強化されたらしいからどんなのがくると思ったらドライファアだったからな。」

「あ！そうか！勇者にはリベレイションがあるのか。」

まあ、あいつは偽勇者だからアイツ基準ではドライファアが一番なのか。

だが詠唱が早いのは褒めてやるよ。

「くらえやアアアアアアアア!!!」

タクトから炎の竜巻が放たれる。

「頼んだぞ、尚文。」

「任せろ。」

『力の根源たる唯の勇者が命ずる。真理を今一度読み解き、彼の者を焼き払う嵐を散らせ！』

「アンチ・ドライファア・ファイアストーム。」

尚文がすぐに無効化の呪文を唱える。すると俺達に迫ってきていた炎の竜巻は、まるで蠟燭を吹き消したかのように消え去った。

「……は？」

「お前さ？ 仮にも強化されて自身満々で攻撃するつもりだったんだろ？ だったらリベレイションくらいは頑張れよ。ドライファで勝てるわけねえだろ。」

「なるほど・その杖！ 気に入った！」

バカだった。コイツバカだったよ。

尚文が杖をタクトに向けた瞬間、俺の視界に何かが映る。

それはヴィッチが尚文に向けて魔法を唱えようとしていたのだ。

「尚文。こっちは任せろ。」

「お前は殺す。」

俺はショットライザーの中でプログライズキーを開閉して必殺技を起動する。

アサルトチャージ！

「くらえ!!!」

マグネティックストームプラスト！

銃口から狼の形をしたエネルギー弾が飛び出しヴィッチへと襲いかかる。

「フェンリルフォースX！」

そしてそれに追従するように尚文の杖から光線が放たれた。

だがタクトとヴィッチに避けられてしまう。

しかし、そのタクトとヴィッチが避けた後ろには取り巻きの一人のメイドがおり、避けることができずに消しとんだ。

「外れたか。」

名前も知らないメイドがつけていたスカーフがヒラヒラと舞い、タクトの足元に落ちる。

タクトはそれを握りしめるとキツと俺を睨んだ。

「キサマアアアアアアアアアア!!!」

タクトが叫ぶと槌、鞭、刀、爪、投擲具を怒り任せに操って攻撃してくる。だが怒り任せゆえに単調な動きになった攻撃を避けることは容易い。

「貴様らは！エリーを！エリーを殺した！貴様らもぶつ殺してやる!!!」

送られて女性達も悲鳴を上げ始めた。

「よくもエリーを！彼女は俺が幼い頃からそばにいて！俺の初めての相手で！全てを受け入れてくれた！それをお前は！」

「うるせえ!!!ここは戦場だろうが！甘つちよろいこと言っつてんじゃねえぞ!!!それに元はといえばお前が避けたのが悪いんだだろうが!!」

「もういい……！貴様らは殺す！それだけだ！」

ここをコイツが物語のヒーローとかなら覚醒イベントの一つでも起きるけど、コイツ

は偽勇者だ。そんなものはない。

「エアスト・フロートミラー、セカンド・フロートミラー。」

尚文が杖を振ることでタクトの周りをフロートシールドが囲む。

「そしてツヴァイト・ファイア！ ツヴァイト・ウォーター。」

タクトが難なくそれらを防ぐ。

あ・そういうことか。

「どういうつもりだ！ 戦え！」

「戦ってるぜ？ ほら。」

その瞬間、タクトの背中に先ほど避けたはずのファイアとウォーターがぶつかる。

フロートミラーの能力であるスキルや魔法をこちらが指定した角度で反射するやつだ。

「じゃあ、分かりやすくしようか？ エアストブラスト！」

尚文の杖から光線が放たれ、それをフロートミラーが反射する。

タクトも避けるが、反射で光線が返ってくる為、更に避け続けなくてはならない。

え・面白っ！

「そうだ、タクト。お前さ？ 仲間の女達は大切か？」

「当たり前だろう！ 大切に決まってる！」

「じゃあ、俺達がお前じゃなくて女達を狙ったらお前は防御に徹さざるを得ないってわけか！」

「な・!?!」

その俺の言葉に気を取られたのがいけなかった。

「ブラストプリズン！」

ブラストで作られたプリズンが爆発してタクトは吹っ飛んでいき、玉座を壊しながら突っ込んだ。

56話

「まあ、俺たちは？そんな卑怯者じゃねえし？俺たちの気分次第では人質は取るつもりはねえから。そこんとこよろしく。」

「グレイプニルロープ！」

尚文がフェンリルロッドのスキルでタクトに鎖を巻きつけた。

「なあ、このくらいで死んでくれるなよ？まだフォウルが来てねえからよ？」

「タクト。ここで良いことを教えてやる。今から尚文はある技を撃つ。だがそれをお前がまともにくらえば大ダメージは必至だ。だがお前が奪った武器の中でいいのがある
だろ？そいつを使えよ。」

タクトは一瞬考え込んだが、何か思い付いたかのように盾を出した。

「フェンリル・フォースV！」

尚文の杖から極太の光線が放たれてタクトの盾にぶつかる。

流石、尚文から奪った盾だ。後ろの女達は無傷だ。だがタクトは？

「大ダメージじゃん！」

「お前：嘘付いたな：？」

「あ？嘘ついてねえよ。俺はこう言ったんだ。お前が奪った武器の中でいいのがあるだろ？そいつを使えよ。」ってな。俺は盾なんて一言も言っていないぜ？てつきりヴァーンズインクローを使ってくるもんだと思っただけだな！」

「みんな：俺は大丈夫だ：まだ：やれる：」

「タクト様に回復を！」

後ろの女達が回復魔法をかけていく。中には支援魔法もいるけどな。

「構え！」

一人の女の合図で全員がライフル銃を構える。

「撃て！」

全員が一斉に発砲する。

だが尚文は落ち着いた様子で防御を展開する。

すると驚くべき光景が映った。

なんと女達の弾が全てタクトに命中したのだ。

「これが変幻無双流の集と壁の力だ。お前が殺したアトラと編み出した奥義だ。」

「よくも！タクト様を撃たせたな！」

「撃つたのはお前らだろ？あそこで撃つたことはタクトがなんとかしてくれてるって

「悪魔……」

「あん？」

「この！悪魔！」

タクトの取り巻きの女達から口々に声が上がる。

悪魔か。久しぶりだな。俺も尚文といたことで悪魔の手先とか言われてたな。

「悪魔か。大いに結構。」

俺がそう言い返してる間にも尚文がまたタクトを回復させ始める。

「魔力が少ないな。」

そう言ってポケットから何かを取り出す。

お！あれは！

「させるか！」

女達の中から一人飛び出してきた。

あれは：影か。

尚文から奪おうとして：あ！潰した。

果汁が飛び出して辺りに濃厚な酒の香りが広がっていく。俺と尚文はなんともないが、近くでモロに吸った影はフラフラと千鳥足に立って倒れてしまった。

「フェンリルフォースV1」

尚文が変幻無双流を組み込んで更に極太の光線を放つと、とうとうタクトは耐えきれずに吹き飛ばされてしまった。

「お前ら、俺はそろそろめんどくさいから回復魔法かけてやれよ。お前らの仕事だろ？」
「言われなくてもやるわよ！」

女達がタクトに回復魔法をかけていく。

その隙に尚文が杖に魔力を込め始める。

さて、俺もやろつか。

パワー！

パンチングゴングプログラミングキーを起動してオーソライズバスターに装填した。

” P r o g r i s e k e y c o m f i r m e d . R e a d y f o r b u
s t e r . ”

「準備できたか！尚文！」

「ああ！いつでも！」

「プルートオブファー！」

「バスターダスト！」

「ラグナロク……バスター！」

オーソライズバスターから撃ち出されたゴリラの拳を模した大型のエネルギー弾とフェンリルフオースの比ではないほどのレーザーが混ざり合い、タクトが放ったブルートオブファーを消し飛ばし、タクトにぶち当たる。

勢いそのままにタクトを空中へと吹き飛ばしたのだ。

そしてバスターダストとラグナロクバスターはタクトを巻き込んだまま、ナーガとガエリオンと錬が戦っているレールディアにまで迫る。

「な・!?グウワアアアア!!」

「今だ!」

錬がガエリオンを足場にして飛び上がる。

錬の剣が赤く輝き、火の鳥を模したエネルギーを飛ばす。

そしてそれを挟むように赤い炎を纏ったガエリオンと青い炎を纏ったナーガが追従する。

まさに3匹の火の鳥がレールディアを貫いたのだった。

だが、まだ致命傷にはなっていないようだ。

ベシヤツ!

そして俺達は目の前に落ちてきた、ほとんどボロ雑巾と化しているタクトに目を向けた。

まだ立ち上がってくるのか。

「お前もすげえな。普通撤退を選ぶぞ？ここまでやられたら。」

「ふむ、ハンデをやる。ほらよ。」

タクトの目の前に杖を差し出した。

「とれよ。」

その瞬間、タクトの目の色が変わり、武器を爪に変えると杖を奪い取った。

「これで・勝てる！」

喜ぶタクトに対して鍊が上から尚文のために手に持つ剣とは別に腰にさしている剣を投げ落としてきた。

「尚文が剣なら俺も剣だ。」

俺はゴーストドライブバーを腰に巻き、アイコンを押した。

ダイブ トウ デイープ！

俺はドライブバーを開き、デイープスペクターゴーストアイコンを入れる。

ア—イ—！

ギロツトミロー！ギロツトミロー！

ゲンカイガン！デイープスペクター！ゲットゴー！覚悟！ギ・ザ・ギ・ザ！ゴースト

！

変身が完了して俺はディープスラッシュャーを掲げてタクトに向ける。
俺は仮面ライダーディープスペクターに変身した。

57話

「タクト・テメエは偽勇者だ。それを改めて俺達が教えてやる。」

ドスン!

何かが落ちた音がして転がってきた。

みるとネリシエンの首だった。ピーターが自身の剣を逆手から順手に持ち替えてフオウルも赤く染まった拳を振って血を払っている。どうやらピーターとフオウルが勝ったようだな。

「ネ・ネリシエン・」

「貴様らもかあ!!!!」

タクトが涙を流しながらフオウルに攻撃すべく走り出すが、ピーターが横から走ってきてレッグラリアットを決めた。

タクトが吹っ飛ばされ、ゴロゴロと転がっていった。

「ふう、やれやれ。ナオフミさん。杖はどうしたのです?」

「ハンデでやった。」

「ハンデですか。ではミコー!」

ピーターが走って行ってミコと入れ替わる形になる。それによりミコが走ってきた。
「どうしたの?」

「ああ、もし良かったらさ? ハンデとして小手を奪われてやってくれねえか?」

「いいわよ。流石に七星全部と四聖一つを奪ってなお、負けたら再起不能になるでしよ。」

そうしてタクトの側まで歩いていく。

「ほら! 人間。私から小手を奪ってみなさい!」

「バカにしゃがってええええ!!!」

タクトがミコから最後の七星武器を奪い取った。

これでタクトは全ての七星武器を手に入れたこととなった。

「ハツハツハツハツ!!! これで! これで全てが揃った! これで俺は最強だ! 誰も俺に敵いはしない!」

このタクトの宣言に残っている女達も拍手を送る。

「来い! この俺が! 俺達がお前らを倒す!」

「よし、フオウル。ここは任せた。」

「え!? じゃあライトさんはどうすんだ?」

「俺はそうだな: 邪魔な女どもを制圧するか。」

「な!?よせー!」

タクトが俺に組みつこうとするが、尚文とフォウルに捕まって引き倒されていた。

「くらえ!ペインフルスパーク!」

俺の頭にあるツノがバチバチと弾けだし、威力を気絶にまで弱めた電撃が飛び出した。

それが次々と女どもに当たり、バタバタと倒れていった。

「そ、そんな…」

「ほう、この銃はもらつていこう。何かしらに使えるだろう。」

「ライトちゃん!こっちは終わったわよ!」

サディナの声がしたため、そちらを見るとサディナが殆ど真っ黒焦げになった相手を片手で掴んで、今もなお雷撃をくらわせていた。

「気持ち分かるが…やりすぎではないのか?」

エクレールも若干引いている。

「まだよ、エクレールちゃん。まだ満足してないもの。」

「でりああああ!!!」

空から声がしたため、見上げると空からレールディアが降ってきていた。

その首にガエリオンが食らいつき、鍊が額に剣を突き立て、ナーガが組みつきレール

ディアは頭から地面に叩きつけられた。

この技はアレだ。ナーガが進化してからあまりにもリザ○ドンXに見えて仕方ないため、覚えさせたち○ゆうなげだ。

ゴキツ！

衝撃によりレールディアの首の骨が折れたようだ。

そしてターニヤとフィーロはというと：

「くっ！中々やるではないか！」

「まだまだー！」

「あたし達は負けない！」

戦況は見りや分かる。ターニヤとフィーロの連携の前ではなす術もなくなっているようだ。

さて、ミコは：

いた。トウリナつて奴もかわいそうだな。ミコとラフとラフタリアとピーターを相手にしてるもんな。

どうやら化かしあい平行線を辿っているようだ。ラフタリアとラフは幻覚を何とかできるし、ピーターは幻術はかけられないけど見破ることはできる、ミコは視覚に頼らずに嗅覚で追いついている。

お！ラフがラフタリアに：瓜二つだなあ。

「ラフタリア！これを使え！」

で、ラフが取っただと！そうか、あくまでもそつちが本物と思わせるためか：頭いいな。

「そつちかああ!!!」

トウリナがラフのもとへ走り剣を振り上げた瞬間、本物のラフタリアがトウリナを背中から突き刺した。

「な!?!そつちか：!」

そこからラフタリアとラフとピーターとミコの4人の連携でトウリナを追い詰めていく。

だがトウリナも負けていなかった。

大きな狐の化け物へと姿を変え始めたのだ。

そして、こつちはタクトがムクツと起き上がり始めた。

「まだだ！まだ負けていない！」

タクトの体から黒いオーラが立ち上がり始める。

あれは：カースか？いくらアイツの取り巻きを殺したとはいえ、勇者でもない奴が出せるとはな。

「力が足りないなら：奪えばいい。奪ってしまえば：俺こそが最強だ：」

「そう思ってる内はお前は雑魚だ。お前が標的に定めている鍊には勝てないぞ？」

「……力の根源たるタダの勇者及び一般人改め——盾の勇者が命ずる。」

「理を今一度紐解き、我が盾をここに。」

尚文が唱えるとバギン！と音を立ててタクトから光の玉が飛び出して尚文に入る。

尚文の腕には盾が戻ってきていた。

「バカな!?何故盾が!!!」

「ヴァーンズイン……!!」

タクトは鍊に定めていた狙いを尚文に向けた。

「クロー……!!!」

タクトから放たれたビームが盾にぶち当たる。しかし尚文はそれを耐え切ったの

だった。

「ど、どうして!?!」

タクトは盾を自身のスキルで穿てなかった事に驚くが、それよりも：

「何故だ！何故盾を奪えない！」

「言つたろ？お前は俺に勝てない。来人の言葉を借りるなら：お前は所詮通過点にしか

過ぎないんだよ。」

「さあ、お前に残った最後の希望を……奪ってやるよ。」

尚文はタクトに手を向ける。

「盾の勇者が命ずる。眷属器よ。我が呼び声に応じ、愚かなる力の束縛を解き、目覚めよ。」

「——汝から眷属の資格を剥奪する！」

タクトの手にあるツメが急に光り出した。

それだけじゃなく奴が持つ全ての七星武器が光り出した。

「な、なんだ、いったい！」

そして武器達が光の玉となってタクトから離れると願いを叶え終わったドラゴ○ボールのように飛び散った。

しかし、3つほど降ってくる。

「うわっ！」

「これ、なーにー？」

ラフタリアとフィーロから声上がる。

どうやらラフタリアは槌、フィーロはつめに選ばれたようだ。

そして小手は：ミコではなくフォウルに宿った。

「俺が：小手の勇者！」

「尚文さん！来人さん！いいところに来ました！早く波を！」

「聞いたか！行くぞ！」

ハリケーンニンジャ！

「変身！」

ガツチャーン！レベルアップ！

マキマキ！竜巻！ハリケーンニンジャ！

俺は仮面ライダー風魔に変身して走り出す。

「ライト！俺は亀裂を何とかできねえか行つてくる！」

ナーガが翼を広げて飛んでいった。

亀裂の根本に到着すると元康と、もう一人誰かが協力して戦っていた。

それは：

「その姿…鎧の勇者。貴方ですね？」

「グラス！何故ここに！」

俺は風魔双斬刀を突きつける。

「まで！来人！彼女は今は仲間だ！」

元康が敵をなぎ倒しながら答える。

グラスが協力しているだと？まあ、いい。理由くらい後で聞ける。

「今だ！ 出来る限り早く！ 波を抑えろ！」

「わかりました、お義父さん！ ブリューナクX！」

「わかった！ 輪舞閃ノ型・五月雨！」

「ドラゴニック・ブルーブレイザー！」

「シャイニング・クルセイド！」

「トールハンマー！」

「ラフー」

「キュアアアアア！」

「滅竜烈火拳X！」

「アクセルスマツシュ！」

「雷撃鞭！」

キメワザ！ハリケーンクリティカルストライク！

各々の必殺技を亀裂に向けてぶち当てる！

亀裂が大爆発を起こし、周りが見えなくなるほどの光が漏れ出し辺りを包んだ。

光が晴れると亀裂は閉じていた。

あとは：討ち漏らした奴らだけだ。

「あと少しだ！」

尚文の号令で皆が再び武器を握り直し立ち向かう。

そして、全ての敵を殲滅したあと、俺は改めてグラスに向き直った。

「お前は……」

「私も話したい。そちらの代表者は……」

グラスが辺りを見渡す

「ワシじゃ。」

クズさんが群衆をかき分けて出てきた。

「ワシがここにいる者たちの代表として、そなたと話そう。」

58話

俺達は城に移動して、会議室を用いて話をする事になった。

「今までのことをおさらいすると亀裂が閉じた後にワシらが見たことがない陸地があったが：あれはそなたの世界のものでいいんじゃない？」

「ええ、そうよ。でも完全に繋がってはいないわ。もしそうだったら滅んでるもの。ここも、私の世界も。」

「妻が残した手記によると、メルロマルクはかつて亜人の世界と繋がったことがある。今度はグラス殿の世界か。」

「じゃあ、俺たちが今まで波で戦っていた魔物はグラスの世界の魔物なのか？」

「ええ、ソウルイーターっていたでしょ？あれがそうよ。」

「そつちの世界は五聖がいて：眷属器もいるのね。」

「ああ、そつちもか？」

「こつちは：12個ある。でも四聖は3人死んだ。」

3人もか。

それから会議は進んでいき、グラスは世界が少しでも繋がってしまったことで敵対す

る意思はなく、協力してくれるようだ。

なら・そろそろあれを言うか。

「クズさん。そして皆さん。お話しがあります。」

「なんじゃね？ 来人殿。」

「俺を・五聖勇者から外してください。」

皆が驚いた顔で俺を見る。

「……理由を聞かせてもらえんか？」

「俺のこの鎧はメルロマルクのものではありません。元を辿れば別の：ガラスの世界とも違う世界のものです。つまり俺は勇者だとしても四聖でも眷属器でもありません。そんな俺が・五聖を名乗るのは違うと前々から思っていました。」

「後悔はないんじゃな？」

クズさんが俺の目を見る。

「はい。」

「・実はワシも知っておった。ワシも妻の手記や城内の書物を読み漁ったが鎧の勇者がメルロマルクにいたという記載はどこにもなかった。じゃが・」

「ワシはお主を勇者じゃと認めておる。これからは五聖でも眷属器でもなくなるが、そ

あなたは立派なこの国の勇者じゃ。これからも変わりなく支援は続けていくつもりじゃ。」

「この時をもつて、鎧の勇者ことライト・ダテの五聖勇者の称号を返上とする。これからは五聖勇者は名乗れぬが、同等の地位で扱うこととする。」

これでいいんだ。

会議が終わり、俺達は外に出た。

グラスは城預かりとなり割り当てられた部屋へと移動している最中に俺は声をかけた。

「グラス。」

「なに？」

「お前、言つてたろ？ 四聖の内、3人死んだって。あと1人は？」

「分からない。行方不明になった。」

「行方不明だと？」

「ええ、彼女は幽霊船の謎解きをしにいったのだけど、そのまま行方不明となった。」

「目星はついてるか？」

「もしかしたら：ミカカゲにいるかも。」

「ミカカゲ？」

「ええ、私達の国と敵対している国よ。」

「そうか。」

「分かった。俺が行く。グラスは俺の代わりに残ってくれ。」

「ライト!?! アンタなに言ってるの!?!」

「今は1人でも勇者がいる方がいい! それに: お前の大事な仲間なんだろ? なら助けなきゃ。」

(ライト殿! ワシじゃ! 今すぐグラス殿を連れて会議室に戻ってきてほしい!)

クズさんが焦ったように呼ぶため、俺達は再び戻る事にした。

そこで伝令から恐ろしい話を聞いた。

「なに? 魔物が活発化!?!」

「はい! 波の影響で魔物が急に活発化し始めた! かくうじて倒した冒険者の方によると倒したらカルミナ島が比喩物にならないほどのレベルがあがった!」

なんて事だ: さっきの会議で尚文から聞いたが奴らレベルが200はあつたらしいぞ:

59話

会議が終わり俺は町に戻ってきていた。

グラスの友である風山絆を探しに行くのだ。

「すまない、ライト。」

「いいんだ、グラス。俺達は仲間になったんだ。だろ？」

「ああ、共に絆を見つけよう。」

「それでいい。行くぞ、エクレール、グラス。」

今回の旅の仲間はエクレールとグラスだ。町長と副町長が行くのはおかしいと思うが、エクレールが自ら志願してきたのだ。

カメンライド！

「変身。」

「デイエンド！」

「エクレール、何かあるかは分からない。離れないように手を繋ごう。」

「う、うん。」

俺が手を繋いだことでエクレールの顔が赤くなる。

「あら？あなた達そういう仲だったの？」

「そういう仲？」

何言つてんだ？グラス。

「……どうした？エクレール。嫌なら離すぞ？」

「いや……いい……」

俺を送ってくれるピーター達がクスクス笑つてやがる。

「なんだよ。」

「いや、なんにも。」

「そうか、まあいい。じゃあな。」

俺はオーロラカーテンを開いてその中に入っていった。

オーロラカーテンを抜けた俺達は：

「なんで？」

「は？」

「ライト。私はこんな所には来たくなかった。」

俺達は牢屋に入っていた。

なんで？もしかしてグラスが探している絆はここにいんのか？

「大丈夫だ！ライト。私もサポートする！」

「何ぐずぐずしてんのよ。早く行くわよ！絆が待ってる！」

そう言つて檻を扇で斬り裂いて出ていった。

俺達も牢屋を出て隣の部屋を見る。

「なんだよ、これ。」

「本当に牢屋か？」

確かに鉄格子がはまっている。だが中は生活感が漂いすぎている。まるで捕まってるんじゃないかと生活してるんじゃないかと思うほどだ。

「なあ、ライト。ここは本当に牢獄なのか？どちらかというところと迷路のように感じるんだが……」

「だとしたら魔物が出るかもな。なんとかレベルを上げるぞ。」

俺達が歩いて行くと行き止まりに辿り着く。だが壁が七色に光っている。扉の形に。

それを開けて進むと驚いた。

「空だと……」

「どこかの島……だろうか？」

目の前には青い空、白い砂浜、カンカンと照りつける太陽があった。

「とりあえず迷宮は出たからな。向こうに草原がある。行こう。」

俺はエクレールを連れて歩き始める。

「エクレール、心配すんな。何があってもお前だけは守る。」

「…ありがとう…」

俺達が歩いていると白い箱みたいな魔物が現れた。

段ボールみてえなやつだな。

そいつが牙を向いて飛びかかってきた為、右腕からステイングヴァイパーを伸ばし、突き刺した。

麻痺毒だ。地面に落ちたまま身動きが取れない相手をエクレールが剣を逆手に持って突き刺した。

経験値を得たようだな。名前はホワイトダンボール。まんまだな。でもバルーンよりも経験値が多い。

それから敵を狩りつつ、素材を鎧に収納しながら歩いていくと目の前で釣りをしている少女がいた。その横にはグラスが蹲み込んでいる。

どうやら彼女が風山絆なのだろうな。

俺達の接近に気付いていないのか、ただ水面だけを見て釣りをしていた。

竿を投げ、糸を垂らし、魚が食いつくと釣り上げる。そしてまた竿を投げる：

その繰り返しである。

「なあ？アンタ…」

「静かに…」

声をかけるもグラスに静寂を求められてしまい、来人も黙る。

「見えたつ！てやあ！」

竿をあげると、それまでの獲物とは比べ物にならないほどの大物を釣り上げていた。

「主！釣ったドオオオ！」

「やったわね！絆！」

2人してキヤツキヤツして手を取り合い喜び合う。ひとしきり喜びあつた後に絆であらう少女が俺の方を見た。

「誰…」

そう言つて少女は固まってしまった。口をパクパクさせている。

「なんだ？」

「出たな！ブラッドスタークめ！戦兔の代わりにオレが成敗してくれる！」

「な！待て！落ち着け！」

▲
▷ ▲ ▲ ▲
▷

暴れる少女こと風山絆を落ち着かせて俺達は今絆の部屋つてか独房の中に座り、絆は魚を捌きながら話を聞いていた。

「ああ、グラスがお前のことを探しているな。仲間になった俺もこの世界に探しにきたってわけだ。」

「この世界？ 違う世界の人のなにどうやってグラスと知り合ったの？」

「実は昔グラスが俺達の世界に侵攻してきてな。そこで命の取り合いをしたんだ。今は協力してるけどな。」

「命の取り合い!? 何で!？」

絆は親友の暴挙におもわず持ってた包丁を取り落としてしまった。

「それは・・・」

「知らねえのか？ この世界と俺の世界は隣同士だ。俺の世界とこの世界が融合を始めて、それを阻止するには相手の世界を滅ぼす事だって、こっちの世界では常識らしいぞ。それでだ。」

口籠ったグラスの代わりに俺が喋る。

「知らなかった・・・ここに閉じ込められてる間にそんなことが起きてたなんて・・・」

知らない？ じゃあ、コイツはいつからここに閉じ込められているんだ？

この世界と俺の世界が同じ時の流れかどうかは分からないが、グラスが俺の世界に攻めてきたのはだいぶ前だぞ？ その時にはもうここに閉じ込められてたっていうのか？

「これからどうすんだ？」

「決まってる！俺はこの迷宮から出る！」

「それは俺も同意見だ。一時的だが4人で組もうじゃないか！」

60話

「だが、脱出するとしてもどうすればいいか分からない。絆。お前は何か手がかりはあるか？」

「ないんだよね、それがー」

絆があっけらかんとした感じで笑う。

俺は拳を握りながら持ち上げようとしたが、エクレールに掴まれて無理矢理降ろされた。

「では、絆殿。何か逸話はないか？人じゃなくてもいい。この迷宮から脱出したという話は。」

「うーん、ちよつと待って。思い出す。」

絆が考え込んだ間に俺はトランスチームガンをライフルモードにしてコブラロストフルボトルを装填する。

スチームショット！コブラ！

銃口からコブラを模したエネルギー弾が放たれ、壁を抉っていくが消えてしまった。そして、すぐに壁は修復され始めた。

「やっぱりダメか。」

「私は聞いたことないわ。」

「オレ：聞いたことがある…」

絆がそう呟いた。

「どこだ！絆！」

俺が絆に掴みかかり、続きを言うように言う。

「落ち着け！ライト！」

「絆に何するのよ！」

エクレールに引き剥がされ、グラスには手の扇で側頭部を思いつき叩かれた。

「昔ある魔物がここを出たことがあるって…」

「出たのか：ならば絆。お前はそいつがどうやって出たと考える？」

「うーん：そうだな…」

絆は考えこむ。

「魔物が巨大化、もしくは増殖して空間のキャパを超えたとかかな？」

空間のキャパだと？だとしたら空間ごとに湧くことができる魔物の数や質量が決まっているのか。

つまりキャパをオーバーするレベルだと崩壊して出口ができるかもしれないってわ

けか。

ならば！空間を壊せばいい。出来るじゃないか！今の俺なら！

「みんな。もしかしたら出られるぞ！ここから。」

「本当か！ライト！」

エクレールが俺の言葉に希望を見せ始める。

「どうやるの？」

「説明する前に絆に聴きたい。この迷宮で一番狭い場所に案内してくれ。」

絆に案内されて訪れたのは教会だった。

「教会があるのか？」

「よし！出ることが出来るかもしれない秘策を見せよう！絆。お前仮面ライダー好きか

？」

「大好き！」

「いい返事だ。見せてやろう！」

俺はブラッドスタークのまま、エボルドライバーを取り出した。

そしてブラッドスタークの変身を解き、エボルドライバーを装着し、エボルトリガーを掲げるとドライバーに挿した。

オーバー・ザ・エボリューション！

コブラ！ライダーシステム！レボリユーション！

俺はドライバーのレバーを回す。

Are you ready?

「変身！」

ブラックホール！ブラックホール！レボリユーション！

フハハハハハハハ！！

俺の姿が空間に吸い込まれるようにして消え、もう一度現れることで仮面ライダーエボル ブラックホールフォームへと変身が完了した。

「ブラックホール：そういうことだね！」

「絆：気がついたか。そうだ。俺は今からこの空間を攻撃して圧縮・崩壊・爆発を起こして無理矢理空間に穴を開ける！」

「な!? そんなことしたら無事じゃ…」

「よく気付いたな。エクレール。そうだ、俺死ぬかもな。」

「…考え直しなさい。」

グラスが俺の肩を掴むが、俺はそれを振り払った。

「だったら何か良い案があるか? ないだろ? ならばやるしかない。」

「お前らは俺が合図するまで部屋から出てろ。」

3人は渋々うなづくとして出て行くこうとするがエクレールだけ立ち止まった。

「残る。」

「正気か？ 最悪巻き込まれるぞ。」

「前も言ったはずだ。私はあなたと共に生きると。」

「：チツ！ 分かった。ならばせめて扉にぴったり背中をつけててくれ。絶対にそつちに

は被害は出さないから。だが万が一の時は俺を捨てて逃げる。いいな？」

「：分かった。」

「暗い顔すんなよ。俺を信じろ。な？」

「ああ。」

そう言うエクレールはスタスタと扉まで歩いて行き、もたれかかった。

「エクレール！」

「なんだ！」

互いの距離が離れた為、必然的に大声になる。

「生きてメルロマルクの地を踏むぞ！ いいな！」

「もちろんだ！」

「いくぞ！」

俺はグルグルとレバーを回す。

ready go!

ブラックホールファイニッシュ!

俺は跳び上がり空中で一回転すると壁に向かってライダーキックを決めた。

そして着地してすぐにキックの着弾点に水溜りくらいの大きさのブラックホールを発生させた。

そのブラックホールが次々と内装を吸い取っていく。

もつとだ：！もつと：やれ！

「ぬっ！三勇教会を吸い取ったものよりかは小さいが、それでも凄まじいパワーだ：」
その時だった。

突如迷宮の壁が破壊され空が広がった。それは迷宮の中で見た仮初の空じゃない。どう見ても本物の空だった。

「できた!!!やったぞ!!!」

「ライト！アンタ本当にやったんだね！」

「すごいよ！ライト！」

「そうだろそうだろ！私のライトは最高だろ！」

いつのまにエクレールが呼んだのか、グラスと絆が俺を褒める。

てか、エクレール。俺はいつからお前のものになった。

「いいか！みんな！この穴は俺の力で一時的に空いたものだ！俺が力を解除した瞬間に閉じるかも知れない！いくぞ！」

俺達は空けた穴から外に飛び出した。

61話

穴から飛び出した俺達を待っていたのは：

「うわああアアア!!!」

落下だった。!!!」

穴を空けたのはいいが、場所が悪い。地上30m。

「ライトオオオオ!今何メートル!?」

「くだらねえ事言つてねえで対策考えろ!!!そろそろ10メートルだ!!!」

「ならいける!!!」

絆が釣り糸を投げて建物の縁に引っかけ、それに俺達はぶら下がる事で無理矢理衝撃を無くした。

「あ、危ねえ…」

糸を離して俺たちは地面に降り立った。

見た感じ見張りはいねえな。

「絆殿。見張りはいないのでですか?」

「いないよ。だって普通出られないし。それよりエクレーアちゃん。オレには敬語じやな

くてもいいよ。」

「そうなのか。それよりも私の名はエクレールだ。エクレアではない!」

「そういや、エクレールって別の読み方したらエクレアだったな。また食べたいな」

「絆。せつかく出られたのよ。みんなに会いにいきましようよ。」

「うん、そうだね。オレも久しぶりに会いたいし。」

そして移動したのが城だった。

「オレの今の拠点かな。その王にも会わないとね。だからまずはそこからいかないな。」

俺たちが門まで歩いていくと衛兵が気付いた。

「うん?…?!?扇の勇者様に、横にいるのは狩猟具の勇者様?!これは知らせなくては!!!」

衛兵が走っていく。

しばらくして戻ってきて俺達を玉座に案内した。

周りに大臣や魔導師みたいなのがわんさかといるな。そして玉座に座る男は：

赤髪で見た感じは20代後半か。だが王には見えないな。タクトよりかは見えるけど。

「グラスに絆の嬢ちゃん。絆の嬢ちゃんに至っては今までどこにいたんだ?」

「実は…」

絆とグラスが説明を始めた。

「そうか、なるほどな。ミカカゲめ。やりやがるな。だがそれよりも帰ってきてくれてよかったぞ。それでだが…」

「後ろの2人は誰だ? …いや俺が先に名乗ろうか。」

「俺の名はラルクベルク・シクール。このシクールの王であり、鎌の勇者だ。」

「この男も勇者か。しかも鎌か。」

「俺の名はライト・ダテ。こことは違う異世界で鎧の勇者をやっています。」

「私の名はエクレール・セーアエツト。ライトと同じ異世界で私は騎士をしています。」

「ちよつと待て。お前今勇者って言ったか?」

ラルクベルクを中心に周りの大臣達がピリつきだす。

「なんだ?」

「それに鎧ついていやあ、前にグラスをボロボロにして帰した野郎じゃねえか!」

「グラス、絆の嬢ちゃん。どういう事だ? 何故連れてきた!!!」

「私が説明する。」

グラスがラルクベルクの目を見る。

「我々は元々異世界の勇者を滅ぼせば世界の崩壊までの時間が伸びる。そう聞いている。だが今は知っていると思うが世界は融合しかけている。繋がった今、我々は協力す

べきだと私と絆は考えている。」

「なるほどな。だが・」

「だがじゃない！」

口籠るラルクベルクに対して絆が言う。

「オレが捕まっていた間にこんなことになってるなんて知らなかった。でもこれだけは言える。勇者同士で争うなんて間違ってる！」

「シクール王。」

「なんだ、鎧の勇者。」

「俺とエクレール、そして元の世界に残してきた奴らは誰もこの世界との戦いなど望んでいない。絆とグラスが信じるシクールに対しては断じて害は及ぼさない事を約束する。」

「……分かった。絆の嬢ちゃんとグラスがそこまで言うんだ。2人に免じて信じることにする。」

6 2 話

ラルクベルクに一応認められた俺達は城を出て絆が次に行くところがあると言うのでついていく。

着いたのは図書館だった。

「図書館？なんだ、読書感想文でもあんのか？」

「違うよ……この館長に会いにきたんだよ！」

中に入るとこれはまた、大きな図書館だった。本が所狭しと並んでいる。少しは読んでみたい気になるが残念だ。俺はこの世界の文字が読めない。エクレールも同様だ。

「気にすることないよ。オレもまだそんなに読めないから。」

そう笑いながら歩いて行き、一つの部屋に入った。

そこには1人の少年が椅子に座って本を読んでいた。

「おや？絆とグラスではないですか。貴女が帰ってきた事は聞いていますよ。そしてここのお二人のことも。」

子ども？いや、何かが違う。

少年が手を差し出してきたため、俺は握り返した。

「お前：人間じゃないな？」

「へえ、初見で僕を人間じゃないと見抜くなんて大したものだね。」

ボフンと姿が変わり二足歩行のウサギに変わった。

「自己紹介が遅れたね。僕の名前はエスノバルト。図書鬼さ。そして船の勇者です。」

「貴方も勇者か。」

船か。て、事は移動とか？ストレ○グス的なやつか。

「それにしても絆。よく生きててくれましたね。では戻ってきた事ですし、こちらをお返ししましょうか。」

そう言つて一枚の木札を取り出した。

「あ！それ！持つててくれたんだ！」

「ええ、グラスから頼まれましたね。」

エスノバルトから受け取った木札に念じると木札が姿を変えてペンギンになった。

「クリスマス!!」

「ペン！」

「会いたかったよ、クリスマス！」

絆がクリスマスと呼ばれるペンギンを抱きしめた。

「グラス。なんだ、クリスマスって。」

「実は絆は対人戦闘能力が無いの。いや、完全に無いわけじゃ無いけどね。あの子の力が発揮されるのは対魔物戦。だからもし私達がいけないときに襲われたらって考えて護衛のために作ったのがクリスよ。」

「そうなのか、いいな。」

グラスが探している絆は見つかった。シクールの王にも俺達勇者には敵対の意思がないことも理解してもらえた。

ならば、そろそろ帰るべきだろうか。

みんな待つてる。

俺には：帰る場所がある。

「なあ、そろそろ俺、帰：」

「大変です！」

城の衛兵が飛び込んできた。

「どうしたのです。」

「グラス殿！若様が！若様が襲撃されました！」

「ラルクが!?確かラルクは四聖殺害を行った眷属器持ちの粛清の会議に呼ばれて会議中のはずでしょ!?!」

「確かにそうだ。普通そういう会議は警備がついているはずだ！それが何故!?!」
グラスと、王国騎士故にそういうのに詳しいエクレールが詰め寄る。

「確かに警備は万全でした！しかし実行犯は中にいました！至急！救援を！」
「分かりました！僕の船で行きましょう！」

63話

エスノバルトの船で急行した俺達が見たのは破壊された城だった。

「行くぞ!!!」

俺達が船から飛び降りて城の中に入ると1人の男に胸倉を掴まれて持ち上げられているラルクがいた。

「ラルク!!!」

「おやおや、また新たな勇者が来たな。それに1人は見たことのない勇者だな。」

そいつはラルクを地面に落とし、俺たちの方に向き直る。

しかし、グラスと絆は男の手を見て驚いた。

「その鎌……」

「なんで……!」

その男の手には鎌が握られていた。俺はラルクの鎌をはつきりとは見ちゃいない。だがあれは勇者武器の鎌だ。奪ったのか……? アイツが?

「波の尖兵って訳か。」

「その通り。この男の鎌は頂いた。次は……お前から取ってもいいな。」

「そうはさせない!!!」

絆がナイフを構えて突進するが、アイツが強いのは魔物相手であって、人間相手ではない。

それをアイツは一番分かっているが、自分が勇者ゆえに突撃した。

しかし、絆はナイフを持つ手と首を掴まれて動きを止められてしまった。

「ほう、最後の四聖勇者か。お前は連れて帰らせてもらう。」

「な!? ダメ!!!」

グラスが扇を構えて攻撃を仕掛けるが、奴はそのまま謎の転移系スキルを唱えて姿を消してしまった。

奪った鎌と絆を連れて。

「絆アアアアアア!!!」

そこにはボロボロになった城と絆を失ってしまったグラスの慟哭しか残されていないかった。

「ラルク!!! しっかりしろ!!!」

俺はラルクを抱えてすぐに医務室に連れて行った。

「不覚だったぜ・まさか襲われるなんてな・」

「若! お気を確かに!」

「大臣。頼みがある。..あの」部屋を開放しろ。頭数は多い方がいい。」

「：分かりました！お任せください！」

大臣は準備があるのか、ラルクを俺達に任せて走って行ってしまった。

「おい、何があるんだ？」

「ああ、明日になれば分かる。エクレール。明日はアンタも参加したらいい。俺が許可を出す。」

ラルクの治療に集中すると言うことで部屋から追い出された俺達は廊下を歩く。

クリスがいた。

「ペン..」

壁に手：いや羽根を突いて項垂れていた。

「クリス、あなたのせいではないわ。あの時は誰にもどうする事はできなかったの。」

グラスがクリスを慰めて抱き上げると部屋に連れて行った。

「俺達も部屋に戻ろっか。」

「ええ..そうだな。」

城の執事に案内された俺とエクレールは部屋に行き、扉を開ける。

だが、俺達は部屋を見て固まってしまった。

なんと：ダブルベッドだったのだ。

「は……？」

「え……？」

「どうしましたか？お気に召しませんでしたか？」

「いやいやいやいやい！！何でダブルなんだよ！」

「はい？お二人はそういう関係ではないのですか？」

「……違うのだが……」

「そうですか。しかし、今日はもう部屋がここしか残っていません。」

「仕方ない。ここです。」

さつきから俺しか喋ってないが、エクレールはダブルベッドを見て固まっていた。

そして執事が出ていき、俺達2人だけとなった。

「すうー……俺床で寝るから。」

「何を言う！私は騎士だ！遠征任務の時には地べたで寝る事だつてあつた！だから私が寝る！」

「何言つてんだ！お前は騎士かも知れねえが女を床に寝させて1人ベッドでねるなんてマネできるか！」

そのまま俺はエクレールと睨み合うが、エクレールが諦めたように言った。

「分かった。2人で寝よう。」

俺は右端、エクレールは左端に寝転び、お互いに背を向ける。

やべえ：俺女性と寝るの初めてだ：しかも歳上。

いや、別に歳上が嫌いって訳じゃねえ。そこは誤解しないでほしい。

いいか、ライト。横に寝ている女性は仲間だ。変な気は起こすな。

「ライト。」

「ひゃい！」

「クスクス。何今の。」

いきなり声をかけられた事で俺は声が裏返りながら返事をした。

「ライトは：召喚されてこの世界に来たんだったね。前の世界ではどんな風に暮らしてたの？」

「ああ、普通に学校通って友達と遊んでたな。平和だった。」

「そっか。前の世界に戻りたいって思う？」

「そうだなあ：あんまり思わねえな。前の世界では毎日毎日おんなじことの繰り返し。それよりはこの世界は毎日面白い。飽きないな。」

それから俺達はたわいもない話をし続けた。

「そうだ。エクレールは：エクレール？」

返事が無い。寝たか。

俺も寝ようとした時、何か俺の腕に触れた。腕に全ての神経を集中させて確認する。腕だ。

「う〜ん・」

エクレールが寝返りをしてきた。俺の方に。つまり俺の顔のすぐ近くにエクレールの顔がある。

マジマジと顔を見たことがなかったが、コイツ：

「整ってやがる。」

少し右に移動しようとしたが動けない。

いつのまにか俺の左腕はエクレールに抱きしめられていたようだ。

フヨン！

柔らか：

ダメだ!!俺とエクレールは仲間：俺とエクレールは仲間：

こうして人生初の眠れない夜が始まったのであった。

64話

結局、眠れなかった。

だつて俺：DTだからな？うん。

同じ年頃：だと思ふエクレールが隣で寝てたんだぜ？良い匂いするし：

「ライト。大丈夫か？」

「心配するな。エクレール。それよりも今日は勇者武器の選定だろ？気合入れて行つてこいよ。」

「ああ、任せろ。私が手に入れる。」

両手を握つて、意気込むエクレールに笑いながら俺は扉を開ける。

「うオオオラアアアアアア！！！！」

「はい、次。」

城中だと思ふ数の兵士が並んでいた。

皆、武器に手をかけては、落胆して帰っていく。

「よう、ライトの坊主。」

「ラルクか。」

「ラルク。これは何の武器を引っこ抜こうとしてんだ？」

「刀だ。」

刀。日本の武器だ。俺が異世界に行ったら使ってみたい武器ランキングの上位にいる武器だ。

「コイツは前に俺やグラス達だけで倒した相手が持ってた武器なんだ。奪い返してから未だに誰も選ばれなくてな。困ってたところだ。」

「と、話しているところでお前のツレだぞ。」

その時、ドツと歓声があった。

「どうやらお前のツレらしいな。選ばれたの。」

俺はその言葉を聞き、一目散に群衆をかき分けると鞘に入った刀を両手に持って固まっているエクレールがいた。

「ライト……」

「エクレール。」

「やったぞ！ライト！これで私も勇者だ！これで君の隣に立つて戦える！」

そう言いながら俺に抱きついてきた。

「うわっ！」

新たな勇者の誕生だ！とか騒ぐ奴らを後にして俺はラルクに頼んで訓練場を貸して

もらった。

「エクレール。まずは刀を抜いてくれ。」

エクレールは刀を抜いた。

思った通りだ。

「抜き方はそうじゃない。まず鞘の鯉口：ここだな。そこを左手で握る。」

「こうか？」

「そうだ。次に左手の親指を錨に当てて少し押し出す。」

「次に鞘を水平にする。」

「そして躊躇わずに一気に引き抜け！」

「えい！」

エクレールは言われた通りに思いつき引き抜いた。

「おお・・・」

「ここで躊躇って抜くと刃が中で傷つくんだ。そして気づいてると思うが、この引き抜きでまず攻撃ができる。居合という。」

「今からお前に刀での戦い方を教える。だが時間がない。よって実戦で覚えてもらう。」

カメンライド！デイエンド！

俺は仮面ライダーデイエンドに変身してカードを2枚ずつ、計4枚をカメンライドす

る。

カメンライド！ガタツク！

カメンライド！ゼロノス！

カメンライド！アクセル！

カメンライド！ブレイブ！

「さて剣を使うライダーを召喚した。コイツらと組み手だ。組み手してもらおう。」
「正直この選択は自分でもどうかと思ってる。短時間で強くなるとはいえ。」

「構わん！やってくれ！」

「エクレール！」

「言っただろう！私は共に戦うと！それは生半可の覚悟では言っていない！」

「そうか！！すまなかつたな。いくぞ！エクレール！」

「どんとこい！ライト！」

65話

あの後、俺は刀スキル以外にも他のフィクション作品の刀術を教えた。

○天御剣流とか葦○流とか柳○新陰流とか。

時間が無いって言ったけど意外とあったわ。エクレールが優秀で、教えたらスポンジのようにどんどん吸収していく。

組み手も1対4だったのが、1対10でも勝てるようになってきた。気づけば夜になっていた。

そして今俺達は出発前夜に城の庭で野外パーティをすることとなった。

「お前。酒はいけるのか？」

「酒か？俺は・まあまあだな。」

「まあまあか！はっはっはっ！今日は飲むぞ！！」

「やめなさいよ。介抱するこっちの身にもなつて。」

さつき知り合ったばかりのテリスだ。

テリスは晶人で額に宝石が埋まっており、宝石の力で戦うらしい。珍しい人種だ。

そして招待された吟遊詩人達が演奏を始め、場はどんどん温まっていく。

途中で吟遊詩人も飲み始めてラルクがその1人と飲み比べを始めてしまい、2人同時に撃沈してしまった。

「もう・やつぱり・」

テリスがため息をつきながらラルクを引つ張って行った。

俺も出てきた飯を食べて酒を飲みながら話していると急遽、吟遊詩人達が困った様子なのを見つけた。

「参ったな。」

「どうしました?」

「いや、今日の前で寝ているコイツなんだけどな?最後に披露する曲のメインパートを弾くんだよ。だが、こんな調子でどうしたものかと・」

エクレールがジョッキを手に現れる。

「すみません。楽器はなんですか?」

「バイオリンです。」

「・なら私がやろう。昔、父から教養として習ったのだ。」

エクレールは吟遊詩人からバイオリンと楽譜を受け取り調律すると椅子に座って弾き始める。

「おお・」

見事なものだった。ここまでとは：

最初は怪訝な様子で見っていた吟遊詩人達もこれは本物だと顔を見合わせて、合わせるように弾き始めた。

こうして夜は空けていった。

「よし！お前らいくぞ！」

全体の指揮はもちろんラルクがやる。どうやら酔いのダメージは次の日に来なかったようだ。

指揮と行っても今回絆の奪還に向かうのは俺、エクレール、グラス、ラルク、エスノバルト：そしてテリスだ。

この計6人で向かうこととなった。

城から馬車が出されて交代で御者をする事になり、今はエクレールがしている。

「それで？エスノバルトも武器を取られたのか。」

「ええ、不覚でした。自分が不甲斐ないです。」

ラルクだけでなくエスノバルトも自身の武器である船を取られてしまっていた。だから今回の移動は馬車で言うらしい。

そして絆を誘拐した輩がいると言われている街に着いた俺達は驚愕の事実を知った。

「はあ!?!絆がまた誘拐されただど!!アイツなんなんだ!!ピー〇姫かよ!!」
ラルクとグラスとテリスが仕入れてきた情報はこうだ。

絆を誘拐した輩はこの街に潜伏していた。しかし新たな輩が、そいつを襲い絆を奪還していたというのだ。これはグラスが絆を誘拐した輩を締め上げて白状したことだ。ついでに鎌も返ってきたそうさ。

「で、そいつはなんだ?勇者か?」

「勇者かどうかは分からないけど、楽器の眷属器を持つてたつて。」

楽器?それも武器になるのか。まあフィクション探せば楽器で戦う奴いたな。俺の好きなライダーにも。

「こりゃ、振り出しだな。どうする?一度戻るか?みんな。」

ラルクの提案に全員は渋々賛同し、一度城へと戻ることにした。

一度来たから城と、この街ならば俺の瞬間移動でなんとかなるからな。

俺達はトランスチームガンでシクールに戻り、楽器の勇者探しになった。

そして夜が明け、俺達は会議室で話していると目の前に光の玉が現れた。

「誰だ?これ。エクレールか?」

「私ではない。テリス殿か?」

「いえ、私ではないわ。」

そうこうしているうちに玉が弾けて俺達を光が包んだ。

思わず目を閉じてしまい、次に目を開けた時はボロボロの廃墟の中にいた。

「俺達は城にいたはず…」

辺りを見渡すもどう見ても城ではないことが分かる。

俺とラルクとで辺りを探索するも俺たちしかいないことがわかった。

すると急に目の前の鏡が光り始めた。

このボロボロの廃墟の中で目立つほどの立派な鏡だ。

その光がどんどん強くなり、また俺達は光に包まれる。

目を開けると俺達はある国の城下町が一望できるほどの丘に立っていた。

スチームパンクっぽい雰囲気を感じる。まるでタクトの：似ている。

「……だな。」

ラルクが俺の横に来て言う。

「かもな。」

66話

それから俺達は作戦を練ることにした。

その後、グラスとテリスが偵察に行くことと確かにこの国は楽器の勇者が牛耳る国らしい。

て、事は城の中に絆がある。

「まず絆がどこにいるかだ。あれだけ広い城だ。探すのも大変だ。」

「ああ、今回は城への潜入組と城下町への潜入組の二つに分かれよう。その為にライトの坊主とエクレールの嬢ちゃんにはこれを着てもらおうか。」

そうやって渡してきたのは2組の甲冑。銀と黒の甲冑だ。

それを受け取り、着替えて戻ってきた。俺が銀色、エクレールが黒だ。俺は先に鎧を着てるから銀を選ばせてもらった。

「俺は城の方に潜入するよ。透明になれるし、なんなら人にも乗り移れるし、化けることもできる。」

「お前そんなことができるのか。」

こうして城への潜入は俺とグラスとクリスが行うこととなった。あとは情報収集と

なった。

「さて、どうする？ 今日行けそうなら、そのまま奪還してやろうかって腹づもりなんだが？」

「もしそうなら私だってそうするわ。でもそれにはどこにいるかが分からないといけな
いわ。」

俺とグラスは喋りながら歩く。これも自然な冒険者に見せる為だ。

その間にもクリスがサーチし、クリスの後について歩く。

「ペーン！」

「クリス、何か分かったの？」

グラスがしやがみ込み、話を聞く。

「うん。うんうん。分かった。」

「なんて言ってるんだ？」

「地下だって。」

「地下か。」

地下か。これは迷路になってそうだ。敵だつてもしかしたらクリスを知ってるかも知れねえ。なら探知されたとしても簡単に辿り着けないような状態にしてるだろう。

「地下の入り口は〜」

「あれね。」

グラスが指を指した方を見る。

「多いな。」

「多いわね。」

「ペン。」

兵士が5人ほど前に立っていた。

嚴重すぎるほどに。これは間違い無いだろう。

「近づくのもダメそうね。」

「俺がやろうか？変装して。」

俺はトランスチームガンを手に持ち、自分の顔を変える。

この顔は石動惣一の顔だ。

「じゃあ行つてくるよ。」

俺は歩いて行く。

「あのう：すいません：」

「あ？なんだ！お前は！」

「道に迷つてしましまして：宿屋はどこでしょう？」

「は？知らねえよ！それよりも入ってくんな！出てけ！」

兵士は俺を睨みつけながら恫喝する。

「ええ、すみません。ところでその後ろには何かあるのですか？5人で守ってらっしゃいますか？」

「おっさん！お前には関係ないだろ！失せろ！さもないと痛い目みるぞ！」

「ひええ！これは！すいませんでした！！！！」

俺はピューと走って逃げていった。

そしてグラスと合流した。

「貴方、意外と演技派なのね。」

「だろ？俺もぶつつけ本番でよくやったもんさ！」

その後、俺達は丘にまで戻り、城下町から戻ってきた仲間達と合流して話し合いになった。

そこでエスノバルトが気になるものを提示してきた。

「これは楽器の眷属器持ちの名前が書いてありました。名はミヤジ ヒデマサ。」

「ミヤジ ヒデマサか。名前的に俺や絆と同じ転生者か。」

「そのようですね。しかし、彼は異質な存在です。何故なら彼は四聖召喚時に巻き込まれて召喚されたと。」

巻き込まれ？そんなことがあるのか？確かに俺が読んでた転生モノの中には巻き込

まれもあつたが：

「その後、彼は失踪し、次に姿を表したのは楽器の眷属器の選定の際のようですね。そこで眷属器をみんなの前で引き抜いたわけです。そこで彼は自身が異世界人であると公表したようです。」

「気になるな。こつちはどうか知らないがライト曰く四聖武器：ライトのは厳密には違うが、その武器を持つことで異世界人は言葉を理解することが出来ると聞いている。彼はその間、どうやって・」

「そうだ。エクレールの言う通りだ。召喚は普通は武器に選ばれたから起こるんだ。そもそも巻き込まれなんて起きるのか？」

「それは：なんとも。もしかしたら記事が間違ってる可能性もありますので。」

「次は俺たちだな。」

ラルクが声を出した。

「俺とテリスで聞いて回ったんだが、そのミヤジつて野郎は今日は城にいるみてえだ。」
「最後は私だな。」

エクレールだ。

「私は情報集めならギルドだろうと踏んでギルド内で粘った。しかし手に入った情報はエスノバルトが言ったことと同じだ。だが気になる事はあつた。」

「何があつた？」

「聞き覚えがある声でした。あれは……イツキ殿のところのいたマルド……とか名乗る男の
声に似ていた。奴はカルミナ島で、私に対していやらしい顔で接してきたからな。ぶん
殴つて追い払つた。」

「アイツか。だがこちらの世界に渡る手段がないだろう。波の尖兵でもあるまいし。」

「他人の空似だとは思うが……」

67話

「だいぶ情報が集まってきたな。ライトの坊主、グラス。結論から教えてくれ。忍び込めそうか？」

「頑張ればなんとかなる。5人いる見張りを誰にもバレずに仕留める必要があるがな。あと次、ライトの坊主って言ったらしばく。」

今はちょうど夜だ。夜のうちに絆を奪還、その後シクールに逃げる。もし余裕が有れば絆の力でミヤジを糾弾し、討伐。

「しかし、絆を人質にされたら……」

「人質か。されても殺しはしないだろう。殺せば新たに四聖の召喚が可能になる。それは向こうにとつてデメリットではない。」

「そうだな。人質は生きているからこそ、有効なんだ。死んだら意味を為さない。」

「ラルク、安心しろ。何かあった時は俺が全ての汚名を被る。どうせ俺はこの世界の人間じゃない。いくらでも被ってやるさ。」

「ライト……」

「俺が提案する作戦はこうだ。まず俺とグラスとエクレールとクリスで地下に侵入す

る。そこで絆を奪還。」

「その間、残りは龍刻の砂時計に接近して暴れてくれ。陽動が目的だが制圧してもいい。」

「もし、龍刻の砂時計の方に武器を奪う者がいたらどうしますか？」

テリスが最もことを言う。

「それかあ。考えてなかったな。」

「構わん！」

「ラルク。」

「要するに奪われねえようにすればいい。だろ？」

ラルクが俺の方を見てニヤリと笑う。

「まあ、かなり無茶苦茶なことを言っているのは分かってる。正直いい作戦ではない。だがやるしかない。」

その夜、俺達の作戦は決行された。

俺は仮面ライダーデイエンドに変身して様子を窺う。

見張りは相変わらず5人。

俺は空に向けて銃を撃つ。

見張りが何事かと光弾の方を見た瞬間、俺達は駆け出し、見張りを制圧。

縛りつけて物陰に転がしておいた。

中に入るとメルロマルクの地下みたいな岩肌ではなく、まるでコンクリートに囲まれた地下道が現れた。

警報装置は：ないと信じたい。

俺達は走る。

しかしクリスが途中で止まった。

「ペン！」

「どうしたの？クリス。うんうん。扉に触れるな？」

「テレポートの罠？」

テレポートか。どこかに飛ばされる。

「どんな罠でも力技で何とかなると思ったが：テレポートは流石に無理かもな。」

「どうするんだ？」

「扉を破壊：しようかと思う。」

俺はダイエンドライバーを扉に向ける。

「いや、もしかしたらミyajに会えるかもしれない。乗ってやる。」

そう言い、グラスは扉を開けた。

すると俺達は光に包まれ、視界が一瞬で切り替わる。

そこには武器を持った男女が5人いた。

その中に一際目立つ黒服黒髪でバイオリンを持つ男が歩いてきた。

「お前が異世界の武器の勇者か。」

そいつが呟く。

キザったらしい野郎だ。

幼さが残るが、クールそうな外見を持つ野郎だ。

「そう言うお前は楽器の眷属器に選ばれた宮地だな。」

「これはこれは。お初にお目にかかります。宮地秀正という者ですよ。」

礼儀正しそうに見えて慇懃無礼だ。

「お前らは無断でこの国に密入国しただけでなく、城内に押し入り、挙句、龍刻の砂時計を襲撃。例え勇者だとしても許されざる大罪だと私は思いますか?」

「何を言う。お前らが絆を拉致したテロリストだって事は分かってんだ。それに絆が作り出した式神が語っているぞ。なあ? グラス。」

返事がない。

俺は隣を見るが、そこにはエクレールしかいなかった。

「な!?!」

「ああ、分断させてもらいましたよ。」

「話を戻します。ですから私達は知らないと何度も言っているのですがねえ。これだけ潔白を訴えているのに、この仕打ちとは：風山 絆とその仲間達は何をしてもいいと考えているようだ。同じ勇者として悲しい限りです。」

「黙れ。四聖暗殺に加担した痴れ者の癖によくもそんな被害者ヅラができる者だ。厚顔無恥とはまさにこの事だな。」

「貴方はこの世界の別の世界の勇者なんでしょ？なら大人しく帰ってくれませんか？」

「そうも言つてられねえんだな、これが。ほら、俺の横にいる騎士さ？この国の眷属器に選ばれたんだわ。」

そう言つてエクレールの方を見るとエクレールはアピールするように刀を抜いた。

「つまり仲間が選ばれちゃったから無理だし、絆やグラス、ラルクにテリスにエスノバルトは俺のダチなんだよね。だから見捨てられねえ。」

「ふん！馬鹿馬鹿しい。」

「お前がバカバカしいとか思つてんのはどうでもいい。教えろ。何故、絆以外の四聖を殺した。」

「アイツらは自分が強くなつたように振る舞うからよ？目障りだったんよ。だから殺した。」

「それだけか？」

「それだけだ。」

コイツはダメだ。

俺はカードをデイエンドライダーに挿して行く。

「おしゃべりはここまでだ。死ね…！勇者！！」

宮地の声とともに兵士がなだれ込んできた。

カメンライド！キバ！

カメンライド！レイ！

カメンライド！イクサ！

カメンライド！G4！

兵士達と俺が召喚した仮面ライダー達の乱戦が繰り広げられる。

カメンライド！歌舞鬼！

カメンライド！ゲイツ！

カメンライド！剣！

カメンライド！パンチホッパー！

「更にダメ押しで行くぜ！」

カメンライド！BLACK RX！

カメンライド！コーカサス！

カメンライド！電王！

カメンライド！アギト！

俺は計12人の仮面ライダーを召喚した。過剰戦力かもしれないが気にしない。

68話

宮地がバイオリンの弦を弓で擦るとバイオリンの音色とともに音符型のエネルギー弾が俺達：いやエクレールに迫ってきた。

「エクレール！」

俺はエクレールを押し倒すように飛びつき、エネルギー弾を：いや当たった。

「ぐっ…」

「ライト！」

「ふふ、狙いは違いましたが当たりましたね。思わぬ誤算です。しかし結果的にはいい。」

「何言ってるやがる…」

俺が立ち上がると同時に俺の鎧から光の玉が飛び出し、変身が解除された。

タクトの時と同じ！って事はコイツ！！！！

宮地：テメエも波の尖兵か。

俺は辺りを見渡すが、召喚したライダー達は消えていなかった。とうやら全て奪われたわけではないようだ。女神様々だな。

「おや？僕としては鎧を全て奪うつもりでしたが一部しか取れませんね。まるで何かに守られているようだ。」

「では…これをマルド。君に。」

そう言い、指で光の玉を操ってマルドに与えた。

「うオオオオオオオ!!!力が!!!みなぎる!!!」

マルドの鎧の胸部分に俺の鎧に似た模様が刻み込まれた。

そしてその身を重厚な鎧が包んだ。

一瞬身構えたが、俺は落ち着きを取り戻した。そうだよな、この世界出身の奴が仮面ライダーを知ってる訳ないよな。

俺は急いでステータスを確認する。

まだだ。ブラッドスタークだけになってる：

仕方ない。

俺はブラッドスタークに変身して迎え撃つ。

「おらっー!」

ガン!

俺は奴の胸に右ストレートを叩き込むが少し凹ませた程度にしかならない。

「流星ですな!ミヤジ殿!」

「そうでしょう？マルド！」

マルドが気持ち悪い笑みを浮かべながら宮地を褒め称える。

「いやはや・流石ですわ！」

俺達はその人物の顔を見て驚いた。

「な・どうして・！」

「ビッチ・テメエは何人いるんだ・ゴキブリかよ。」

「ゴキブリとは失礼ですね。私は何度でも甦る。まさに！神に愛されているのですよ
！」

うっわ！気持ち悪っ！ど○森の如く、踏み潰してやろうか！

コブラ！スチームアタック！

銃口からコブラ型のエネルギーが飛び出し、宮地達に迫る。

「むっ！ミヤジ様！ここは私めが！」

マルドが両腕を交差してコブラの前に躍り出る。

マルドに当たった瞬間、大爆発が起きる。

煙が晴れ、そこには。

「嘘だろ・！」

鎧の腕の部分が黒く焦げたマルドがニヤリと笑いながら立っていた。

見たところ、奴にダメージはなさそうだ。あつたとしてもHPをミリ削っただけだろう。

「さて、今度はこつちの番です!!!」

マルドが俺達に腕を向ける。その瞬間、肘から先が俺達に向けて射出された。

「ロケットパンチかよ!!!」

俺とエクレールは避けるが、まだ追ってくる。

「追尾式ですよ！さあさあ!!! 踊りなさい!!!」

アイツ：キャラ変わりすぎんだろ。

「きゃっ!」

「エクレール!!!」

左腕がエクレールの顎を捉えた事で一回転しながら地面に叩きつけられた。

エクレールは刀を杖代わりにしてなんとか立ち上がろうとするが、脳震盪のせいで思うように力が入らない。

それを見たのか、俺に来ていたロケットパンチは急旋回でエクレールへと向かう。

「マズイ!!!」

俺は急いで走り、エクレールのもとにたどり着く。

しかし、ロケットパンチはすぐそばにまで来ている。

俺はそのままエクレールを抱きしめる。

鎧は防具。ならば：エクレールを守る防具となろう。

バギツ
!!!

69話

音はしたが、いつまで経っても衝撃が来ない。

どういう事だ？

俺はエクレールを抱きしめたまま、首だけ音がした方を向く。

そこには光の玉がフヨフヨと浮いていた。

「な、なんだ…いつたい。」

「なんなのですか！これは！」

宮地達が驚いてやがる。どうやら奴らも知らねえようだ。

(手を伸ばして！鎧の勇者！ライト！)

誰だ！どこから声が…その光の玉？

…いいだろう。乗ってやる！

俺はその光の玉に手をのばした。

その光の玉は俺の腕を伝って螺旋状に動き、俺の鎧に取り憑く。

その瞬間、俺の鎧が輝き始めた。

そして光が晴れた時、俺の鎧のプレート部分の左半分が鏡に変わっていた。

ー装備に変更があります。ー

変化 ミラーアーマー

能力解放 反射 鏡生成

反射：まさに鏡だな。待てよ：まさか：

ピンゴ。やっぱり解放されてた。

これを使えば2人は葬れる。ならば：決まってる。

俺は目の前に鏡を生成する。

そこにカードデツキを構え、腰にベルトが巻きついた。

「変身。」

俺が選んだライダー：仮面ライダーオーデインに俺は変身した。

「まだ、変身できるのか：小癩な！」

「死ねえ！ 蛮族!!」

取り巻きの女の一人が暴走気味に俺に襲いかかってきた。

俺はオーデイン専用武器、鳳凰召錫ゴルトバイザーにカードを一枚挿入した。

ソードベント！

空から剣が2本降ってきて俺の手に収まった。

「オラッ！」

女が振り下ろした剣を左手の疾風で受け止める。

「なっ!!?何で!!!」

「何で?は!なんでかはあの世でゆっくり考えろ!」

俺は疾風で受け止めていた剣を弾き女の体勢を崩したところで烈火で首を斬り落とした。

斬り裂いた首が胴体から離れ宮地達のもとまで転がる。

「:考えたところで一生分からねえだろう。テメエの足りない頭ではな。」

アドベント!

俺は更にカードを挿入し、今度は契約モンスターであるゴルトフェニックスを呼び出した。

「やれ!」

ゴルトフェニックスは爪で宮地とマルドを掴むと近くの窓を通って消えた。

「エクレール!後は任せた!」

「うむ!頼まれた!」

エクレールの返事を聞き、俺も走って後を追うように窓に飛び込んだ。

俺が飛び込んだ先では宮地とマルドがゴールドフェニックスと格闘していた。

「この！クソ鳥!!」

「いい加減落ちろ!!」

全然攻撃当たってねえし、弾かれてるし。たまに転ばされてるし。

まあ、いいや。『アレ』できないから気づかせるか。

「よう！雑魚共！待たせたな！」

俺の声に二人が振り返る。

「何のつもりだ！」

「どこだ、いったい！」

「ここ？ミラーワールドっていう鏡のように反転した世界だ。人間は俺達以外いない。

さて！デスゲームと行こうじゃないか！」

俺はマントがあるように仰々しく言う。

「お前からVS俺で決闘だ。この世界では生物は、仮面ライダーじゃない限り、ものの1分で消滅する。でもそれじゃ面白くないから：特別に10分！それだけ時間をやる。ここを出たければ、それまでに俺に勝ってみせろ。」

俺の言葉に2人は武器を構えなおす。

「さあ！ゲームスタートだ！」

俺は疾風と烈火の二振りの剣を構える。

「死ねえ！」

宮地がバイオリンを鳴らし、音符のエネルギー弾を飛ばす。

「当たる訳ないだろう。」

俺は軽々と避けて体勢を立て直す。

「ならば！ 数撃ちや当たる！ だ！」

宮地は芸術のかけらもないくらい無茶苦茶に弾き避けられないほどのエネルギー弾を飛ばす。

「はあ…はあ…どうだ…！」

「音ならこれだ。」

俺はカードデッキから一枚取り、読み込んだ。

ナスティベント！

俺の近くにゴルトフエニックスが飛んできて、一声鳴いた。

口から発せられた鳴き声が音波となり空を埋め尽くすほどの音符のエネルギー弾を一斉に打ち砕いた。

「なにつー！」

「それだけじゃないぞ！」

音波は止まることなく宮地を包み込んだ。

「グワアアアア!!!」

宮地[!]が吹き飛ばされて地面を転がる。

「ミヤジ殿!」

マルドは宮地を一瞬見て俺に斬りかかる。

俺はそれをいなしながらカードを一枚読み込んだ。

トリックベント!

「増えただと・!」

奴は真ん中の俺に斬りかかるが、すぐに左右の俺たちがマルドに斬りかかる。

そこからマルドは分身の俺と戦い始めるが、中々勝負がつかない。

「よし!分かった!特別ルールを加える。お前ら2人で殺し合え。勝った奴だけ特別に出してやる。」

それを聞いたのか、マルドは斧を下ろし、まだ立ち上がれていない宮地に近づいていく。

「お・おい!マルド!貴様!」

「悪いな、ミヤジ殿。いや、ミヤジ。俺だつてまだ死にたくねえんだよ。」

宮地はバイオリンを弾こうとするが、マルドが手首を踏みつける方が早かった。

ペタツペタツ

「何故だ…」

通れないのだ。

「どういうことだ！何故出られない!!!」

マルドは来人を見るが遺体は消えている。

「おい!!!俺を出せ!!!」

マルドは叫び、暴れる。

だが現実是非情である。指先の崩壊が始まったのだ。

「よー」

マルドはその声に振り返る。

「な…何故だ…何故…お前が生きている…」

マルドは信じられなかった。

そこには確かにこの手で首を刎ねた来人がいたからだ。

「ああ、あれか。あれは俺の分身だ。」

少し時を遡る。

マルドが宮地にゆっくり近づいていた頃。

「さて、俺の方もやるか。」

俺はカードデッキから一枚取り、読み込む。

クリアーベント！

俺は分身を一体だけ残して透明化する。

そして案の定、マルドは分身を俺だと思つて首を刎ねた。

「と、つまりそういうことだ。それと言つてなかったが、この世界を出入りできるのは俺のような仮面ライダーと、ゴルトフェニックスのようなミラーモンスターだけだ。お前から人間は俺たちの手を借りないと行き来できないんだよ。」

「つまりここから出る為には俺を殺すのではなく、俺を説得してここから出してもらうしかなかった訳だ。」

「騙しやがったな…」

「騙す…？何言つてんだ？気づかなかつたお前が悪いだろ？」

俺の言葉に崩壊し始めているマルドがプルプルと震えだし、急に発狂し始めてしまった。

「うおおおおおおお！！！！」

自身の手を持つ斧を振り回して周りの窓や鏡を次々と破壊し始めた。

破壊し終えたときには殆ど顔は見えなくなっていた。

「これでお前は出られない。精々この世界で死ぬんだな！」

そう言い、マルドは完全に消滅した。

消えた瞬間に光の玉が飛び出して俺の中に入る。

ステータスを見る限り、どうやら鎧が帰ってきたようだ。

そして何故か斧も。

「やれやれ。」

俺は能力で鏡を精製して元の世界に戻った。

「てやつー」グサツ!

戻った時に目に入ったのは辺りが消し炭となった玉座とエクレールが、どこぞの狼のように刀でビッチの首を貫いているところだった。

70話

時は来人がミラーワールドに旅立った頃まで遡る。

エクレールは一人残り、ビッチと対峙していた。

「ビッチ。もう諦めて投降しなさい。」

「はあ？アンタ馬鹿じゃないの？する訳ないでしょ！この私が！」

「それにビッチなんて呼ぶんじゃないわよ！私はマルティよ。」

「そう言い、マルティは片手剣と盾を構える。どうやら無理矢理服従させている武器はないらしい。」

「やれやれ、まだ自分の罪を認識してないようね。」

「ええ！私は偉いのよ！つまり何をしても許されるの！行きなさい！」

ビッチと剣をエクレールに向けると、何処からか兵士達がエクレールを守るように揃い立ち、各々武器を構えて向かってくる。

所謂、伏兵だ。

「可哀想に。愚かな者に仕えたばかりに。」

エクレールも刀を構えて立ち向かう。

「相手は女一人だ！やれるぞ！」

そう叫んだ兵士をエクレールは真っ先に斬り捨てる。

「男や女がなんだ!!!ナメるな!!!」

兵士が不意打ちを仕掛けるが、真っ先に気づき、振り向きざまの一閃をくらわせる。

(遅い・遅すぎる！ライトとの修行でのライダー達と乱戦をする無限組み手で戦ったブレイド殿やデンオウ殿に比べたら遅すぎる！)

(その中でもRX殿との組み手は一番辛かった。RX殿が操るリボルケインもとてつもなかったが一番はそれを操るRX殿の気迫だ。あの御仁と戦えた経験は確実に私の自信となった。)

戦いながらあの時を思い出す余裕さえエクレールにはあつた。

その時、近くの窓から光の玉が現れ音楽を奏ではじめる。

「チッ！あのミヤジって奴やられたのね！ほんつと！使えないわね！」

(聞いたことがない曲だ・だが不思議と気分が高揚してくる・確か・私が無限組み手をしているときにライトが鼻歌で歌ってた曲だ。)

「確か、1人vs多数の場合に使える刀術が・・こうか。」

エクレールは両手で構えていた刀を片手で持つ。

「てやあ!!!」

そこからは群がってくる雑兵共をバツタバツタと斬り倒していく。

音楽の力がエクレールに力を与えている：その事には気が付いていないがエクレールはいつもより体が軽く感じた。

そして最後にそれを率いていた隊長が剣を構えて突進してくる。

それをいなす。

「成敗。」

振り向きざまに相手の肩を踏み台にして飛ぶ。

「ドラゴン・ハンマー・ストライク！」

そのまま落下重力を生かして刀を斬り下ろしたのだった。

それを怯えながら見ていた最後の兵士は泣きながらエクレールに背を向けて逃亡を図った。

エクレールは自身に群がってくる雑兵、隊長も合わせて1001人を斬り捨てたのだった。

これは後に後世まで語り継がれるエクレールの武勇伝！

【異世界から来た夜叉の1001人斬り】と。

「ドライファ・ヘルファイア！」

刀の血を払っていた所に特大の火球が飛んでくる。それを避けるエクレール。

そして返り血を浴びたまま、次はビッチを睨みつけた。

「不意打ちね。やっぱりライトの言った通りだ。アンタは不意打ちが大好きらしいわね。」

「勝てばいいのよ、勝てば。それにアンタはメルロマルクの騎士でしょ？なら私を敬いなさいよ。」

「それは無理だ。貴女には敬うべきポイントが一つもない。」

「死ねえ!!!」

ビッチは頭に血が昇ったのか、エクレールに対して斬りかかる。

何度か斬り結び、感じた感想は落胆だった。

ビッチが弱すぎるのだ。

エクレールは一度刀を鞘に納める。

その行動をナメられてると感じたビッチはここぞとばかりに反撃を狙う。

その太刀筋は刺突だ。

それを迎え撃つように突進しながら抜刀し、右斜め上への斬り上げで剣を弾き、そして少し角度を変えた左斜め下への斬り下ろしによる追撃をくらわした。

「葦名十文字!」

その刃が狙うはビッチの腕。見事、剣を持つ方の腕を斬り飛ばした。

「私の勝ちだ!!! 蒸発しろ!!!」

「天瞳流! 天月・霞!」

その場で火球を斬り飛ばす。

「な!? 火球を!? そんなバカな!」

ビツチは火球が真つ二つに斬られ、切り口からエクレールが見えたが、その瞬間に姿が見えなくなる。

それもそのはず。ビツチを始末するための本命の技が残ってるからだ。

「ライトニングクラップ! アンド! フラッシュユー!」

エクレールの姿が消えていきなりビツチの前に現れる。

そして魔力の膜ごと、ビツチを斬り裂きながら通り過ぎる。

そして振り向きざまに今度こそ完全に始末する為に刀を首に突き刺したのだった。

71話

「やったな、エクレーール。」

「ああ。私の勝ちだ。」

エクレーールはこちらに歩いて来ようとするが突然ペタンと座り込んでしまった。

「どうした？」

「わ、悪い。腰が・抜けた。」

「ほら。手を貸せ。」

来人はエクレーールの手を立ち上がらせた。

その時、グラスが玉座に入ってきた。

「ライト！エクレーール！無事だったか！」

「なんとかな。お前背中は・。」

「ええ！絆よ！石にされてるから背負ってきたのよ。」

「こっちは宮地、その他の排除を完了した。戻るぞ。」

—————

「感謝するぜ！ライト！エクレーール。」

そして俺達が元の世界に帰る日が来た。

あの後、絆を石から戻したが宮地の奴。絆に怠惰のカーズの呪いを植え付けてたせいで復活したものの無気力ゆえにだらけきっていた。

だから俺達は考えた。

結果、絆が一番好きなもの：それは釣りだ。それ故に釣りをひたすらさせて呪いを解く事に成功した。

「ライト、エクレール。向こうでも頑張つてね。」

「グラス。気をつけてね。」

「任せろ。」

「任せて。」

「任せて、絆。」

グラスと絆は抱き合い、約束し合う。

俺は仮面ライダーディエンドに変身してオーロラカーテンを開く。

そのカーテンに包まれて俺達は元の世界へと帰還したのであった。

カーテンから出て辺りを見渡す。

「街に帰ってきたのか。」

俺達は街の門を潜る。

「ライト！エクレール！グラス！」

すぐに俺たちの方に走ってくる奴らがいる。

「おお!!!ピーター！ナーガ！ミコ！ターニャ！」

久しぶりだ。奴らと会うのも。

「あれ？お前ら武器変わってね？」

そうなのだ。ピーターは片手剣と盾から玉に、ナーガは仕込み棍から釘抜き付きハンマーに、ミコはツメから筆に、ターニャは：短剣が2本になっていた。

「よくぞ！聞いてくれたな！」

ナーガが前に出て胸を張る。

「実はライト達が旅立った後から、ちよくちよく波の尖兵と名乗る不審者が現れ始めたんですよね。」

「でもソイツらが弱いなの！普通に返り討ちにして武器を奪ったのよ。そしたら大体勇者武器なのよね。」

ああ、だからコイツらの武器は違うのか。

「つて事はお前ら勇者なのか？」

「はい、私は玉の勇者。能力によって戦士や僧侶、魔法使いなどを選択して戦うことができます。このとき、戦士装備や僧侶装備などはあらかじめ登録しておくに変更された時

に自動で変わります。」

「俺は鈍器の勇者だ。斧やソードメイスに変えられる。もちろん金槌や棍にも。」

「私は筆の勇者。筆に書いたものを具現化して戦うことができ、書いたものはストツクとして5枚まで残しておく。」

「あたしは短剣の勇者。隠密系の技が使える。」

「そうか、お前らも勇者か！」

「そうか！という事はまさかエクレールも：」

エクレールは刀を見せる。

「私は向こうの世界で刀の勇者となった。更にライトにも変化があつた。」

「ああ、俺は本来は鎧の勇者だったんだが、向こうの世界で鏡の勇者にもなった。ほら、こんな風に。」

来人は自身の變化した鎧を見せる。

「左胸部分が鏡に：」

「それよりもさ？なんか人少なくなええか？」

そうなのだ。明らかに人通りが少ないのだ。前はもつといたはずだ。

「ライト。聞いてください。波が世界各地で起こっています。しかもその場には波の尖兵と思われる者が多数見受けられます。その為、セバスや、他の戦える者は他の勇者達

と共に鎮圧に向かっています。」

「俺たちも勇者だからって事で部隊率いたんだぜ？」

「ええ、いつも私がやってる狩猟部隊よりも遥かに多いのは苦勞したわね。」

ピーター達の話曰く、各国に波の尖兵と呼ばれる者達の情報が届いた。

そこで国から注意喚起として

① 貴族や王族出身で特に勉強をした訳でも無いのに改革的な発明や作戦をするような者

② 山籠りを始め、国の記録も無いのにLvの限界を突破した者

③ 過去に見た事も無い能力を人前で使った事のある人物

これらに該当する者はとりあえず捕縛しているらしい。

最初は他国から俺を捕縛すべきではという話も上がったらしいが、女王が宥めてくれたらしい。

「分かった。明日から俺も波に参加するよ。」

「少しいだらうか。」

ずっと黙っていたグラスがしゃべる。

「私は過去にあなた達と戦ったわよね。私の世界の玉座に転がっていた死体の中に、こ

ちらの勇者と行動を共にしていた女がいたと思うのですが、あれはなんですか？」

「ああ、アイツか。」

俺はビッチの今までの悪行を教えた。

「なるほど。何処の世界にも同じような輩はいるのですね。」

「同じ？ お前のところにもいるのか？」

「ええ、3人いますよ。最初は四聖勇者に取り入って毒牙にかけていましたよ。絆は女性ですので対象外だったようですが。その後は：眷属器勇者の愛人をしてますね。」

「それ攻めてくるとかないよな？」

「自分から来る事はあまりないので：大丈夫ですね。」

波のカウンターを確認する：まだ1週間あるな。

それまでにレベル上げしねえとな。

まだ解放できていないのもあるし。

72話

1週間後。

俺達はだいぶレベルが上がった。ライダーもブックにあるやつは全部解放できた。この日までも波はあつた。

だがいずれも小さい。何故なら波の尖兵がいなかったからだ。

そして俺達は波の発生場所に召喚された。

その直後、タイムカウンターが動いた。

01:30

「な!?!」

始まったばかりだぞ!?

「急ぐぞ!」

何かが起きてしていると察知した俺達はすぐに現場へと急行する。

「貴方達!!!」

たどり着いてすぐにグラスが俺達の輪から抜け出して走り出した。

ちらほらと見たことがある奴らがいる。ラルクの所の兵士か！

「申し訳・ありません・奴らが・い！」

ボロボロになった兵士達が指差す方には亀裂があり、そこからぞろぞろと人が出てくる。中には巫人や魂人までいやがる。

そいつらは二手に分かれて、こちらに武器を構えている団体と亀裂に手を翳す団体に分かれる。

するとまた時間が早められる。

アイツらのせいか！

「今すぐ止めるぞ!!!」

尚文がリベレイション・オーラX、樹がアル・リベレイションダウンXを唱える。

残りは遠距離攻撃が可能な者達が一斉に攻撃を放つ。

こちらにもミコが筆で書いたストックから弓を出し矢を番えて射る。

カキン！

だが、それらは奴らに届く前に見えない壁によって阻まれてしまった。

「あれは異能者の能力です。破壊不能の防壁を出す能力です。欠点としてはあちらも攻撃が出来ないといった所です。」

俺達が異能者達を睨んでいるうちにも波からワラワラと魔物達が湧いてきている。

つまり異能者共と魔物共の両方を一辺に相手するつて訳か。

「さあ！シエル様！更なる新世界と力を授かる時です。共にがんばりましょう！」
初めて聞く声にしては勘に触る声やしやがる。

「グラス。あれか！」

「そうね。アイツよ。」

俺は奴らを見ながらプログライズキーを鳴らす。

アークスコーピオン！

「変身！」

プログライズ！アーク！

Destraction! Ruin! Despair! Extinction!

アークスコーピオン！

” The conclusion after evil climbs the top of the highest mountain of rocks.

（悪意が導いた結論は高き岩峰の頂へと至る。）

俺の足元からノイズに包まれて仮面ライダーアークスコーピオンへと変身が完了した。

そして俺の周りにアタツシユカリバー、アタツシユシヨットガン、アタツシユアロー、サウザンドジャツッカーが地面に刺さるように現れた。

「攻撃するぞ!!!」

「鳳凰烈風剣X!」

「ブリューナクX!」

「フルバスターX!」

鍊の剣から業火の如く燃え盛る火の鳥が飛び出し、二元康の槍から光の槍が飛び出し、樹が弓から持ち替えた銃の銃口から極太のレーザーが飛び出し異能者の壁に突き刺さる。

「くっ!」

壁を抑える異能者の顔が苦しそうなものに変わるが、まだまだぶち破れそうにない。「お前だけに良いところはやれねえな!」

壁に守られている異能者の一人が壁に干渉したことで攻撃は逸れていつてしまった。

「まだまだいくぞ!!!」

「玉変換! 戦士! シャイニング・クルセイド!」

「スローイングスラツシユX!」

「具現化! 鳳凰の息吹!」

「スターダストブレイド！」

「サウザンドナイフ！」

俺はその辺に刺さっているアタッシュユアローを取り、プログライズキーを挿す。

” Progrise key confirmed. Ready to utilize.”

スコピオンズアビリティ！

ステイングカバンシユート！

尚文の方でもスキルを放つたらしい。

俺達のスキルが壁に殺到し、土煙があがる。

すぐに土煙が晴れ、壁が崩壊しているのを確認した。

「今だ!!!後ろの奴らをやるぞ!!!」

そこからは、殆ど覚えていない。

皆、無我夢中で戦った。

しかし無情にも：

0：00

タイムリミットだ。

ワインレッドだった空は鮮血の如く深紅に染まり、波が扉のように大きく開かれてし

ま
っ
た。
。

73話

何かがくる!!

ブラックホールのように飲まれるか!

地割れが起きて全てが地の底に沈むか!

俺達は身構えるが、何も起きなかった。

「さあ!今こそ女神様の降臨だあ!!!」

転生者の内の誰かが叫ぶと、あの女:ビッチ2としようか。ソイツが淡く光り始め、宙に浮き出す。

そして、どんどん光が強くなり、その光がなくなつた時、そこには1人の女がいた。

なんだ:?:初めて見るはずなのに、どこかで見たような:?:

「皆様、ありがとうございます。皆さまの活躍で私はやっと、この地に舞い戻る事が出来ました。」

「私はあなた方をサポートする為に自身の分身をこの地に遣わしておりました。それはそちらの方も同様です。」

そちら:?:つまり俺達の方:

・なるほどな。

「つまりビッチ・いやマルティ・メルロマルクって訳だな。」

俺の推理に皆が驚く。

特にクズさんが一番驚いている。

なるほどな。通りでメルティや女王、そして改心したクズさんとは似ても似つかない訳だぜ。

「私の名はメディア・ピデス・マーキナー。あなた方は随分マルティを酷い目に遭わせたようですねえ。」

「さあ！みなさん！かの者達は私の分身を知らなかったとはいえ、筆舌し難い程にまで苦しめた蛮族です！遠慮はいりません！やってやりなさい！我が神兵よ！」

メディアの声に転生者達が沸き、武器を構えて突撃を開始した。

「総員！応戦だ!!!」

尚文が叫び、こちらにも武器を構えて突撃を始める。

「死ねえ！神に仇なす蛮族め！」

剣を構えた男が俺目掛けてその剣を振り下ろす。

「消えろ！」

俺は挿したプログライブキーをもう一度押す。

すると右脚にデストアナライズが巻きつき始める。

「エクステインクションインパクト！」

俺の中段蹴りは敵に当たり、近くにいた転生者達を巻き込みながら爆発した。

「神が相手ならこれだ!!!」

「真カースシリーズ発動！」

俺の腰にゲーマードライバーが巻き付き、俺は紫色の大きなガシヤットを鳴らした。

ゴツドマキシマムマイティX!!!!

「グレードビリオン！変身！」

マキシマムガシヤット！

ガツチャーン！ フウウウメエエツウウウ

最上級の神の才能！クロトダーン！クロトダ!!!!!!

ゴツドマキシマムエーツクス！

「いくぞ!!!」

俺は太陽光を集めたレーザーを放ち、味方を巻き込まないように辺りを照射する。

しかし、それをメディアは見ていた。

「ほう、あの男が厄介ですね。」

俺は奴に聞こえるように叫ぶ。

「答えろ！何故、波を起こした!!そのせいでどれだけの人が死んだと思ってる!!!」

「何故って？決まってるじゃない。私自身が強くなる為よ。貴方達でいうところのレベルアップよ。ただそれだけ。それに犠牲はつきものって言うじゃない？」

それだけ・？それだけの為に・
許せねえ。

「第一、貴方達勇者は多すぎるのよ。何人が死んでよ。」

「させるか!!!」

俺はみんなを守る為に前に出る。

「来人!？」

「尚文か。やっぱり考える事は同じか。」

「あら、残念。」

「絶対必中、絶対即死『インフィニティ・デストロイヤー』貴方達は死んだ。」

メディアがそう言った瞬間、尚文がさらに俺の前に出て防いでくれた。

「はあ・本当は力を使うから嫌なんだけど・」パチン!

メディアが指を鳴らした瞬間、俺達は死んだ。

文字通り、一瞬でHPが0になったのだ。

「めんどくさいから、貴方達の過去、現在、未来、並行世界、分岐世界、その全てに向けて攻撃をしたわ。」

体が徐々に細切れになっていき、俺の意識も遠のいていく。

そして完全に途切れる瞬間、ある声が聞こえた。

「そうはさせない。」

それを最後に俺の意識は途切れた。

74話

「う・うう・」

俺は意識を取り戻した。

体がある。俺は細切れにされて死んだはず：

「気がついた？」

声が出た為、俺は辺りを見渡す。

辺りを見渡して分かったが、ここは俺が最初に来た場所。女神の部屋だ。

「よかった・完全に消滅させられる前に、ここに連れて来れて。」

「・ターニヤ？何故ここに？」

俺の目の前に座っていたのは女神ではなく、ターニヤだったのだ。

「え？あ・姿戻してなかった。」

「コホン。ある時は貴方を転生させた女神、またある時は没落した家の元盗賊。」

「それが私よ。」

「……………」

「あれ？反応が悪い。」

「おい、一応確認しとくぞ。あれはお前とは関係ないんだな？」

俺がそう言うのとターニヤは怒った顔をする。

「一緒にしないで。あんな邪神なんかと。」

「そうか：すまん。」

「ターニヤは元々死産の予定だった。でも私がその子になりかわった。私の半身を送り込んだの。そこはアイツと一緒かもね。」

「それよりも。アイツは強い。私が介入してもいいけど、勝てない。それに滅多に表舞台に出てこず、いつも裏から糸を引き、その世界を操ってきた。いつも足取りを掴めた頃にはその世界は滅ぼされた後だった。」

ターニヤは悔しそうに拳をギュツと握る。

「少し私の話をするわ。私は以前は違う世界の神だったの。でもある日メディアが攻めてきた。私は必死になって世界を守ろうとした。神として出来るギリギリの介入までしたわ。でも奴には及ばなかった。傷を一つだけ、つけるのが精一杯だった。」

「貴方でも勝てるか分からない。」

「だから貴方には選択肢を与える。一つ目は記憶を保ったまま元の世界に戻ることに。世界を救った訳じゃないけど、それほどのことを貴方はした。何か一つ願いを叶えて戻すわ。」

「2つ目は記憶を消して元の世界に戻す。ここでの記憶は綺麗さっぱりなくなるわ。」

「なあ、その選択肢だが：3つ目はないか？」

「3つ目？」

「ああ、この世界に残ってあの腐れ外道をぶっ潰すってやつはよ？」

「ふふ、やっぱりそれを選ぶと思ったわ。一つだけ勝つ方法がある。ウエポンブックで未解除のページを開いて。」

俺は言われたとおりにそのページを開く。

「これだろ？こいつだけどうやっても解放されないんだ。」

「それは特殊条件を達成しないと解放されないわ。」

「1つ目はブックの全ライダーを解放。2つ目は魔王のエキスを摂取すること。」

「1つ目はクリアしたが2つ目はどうするんだ？どこから：」

「貴方はすでに持ってる。」

「は？」

ターニャは立ち上がり俺のところまで歩くと俺の左肩に指を当てる。

左肩：？あ！そうか！

「リュウジか。」

「そうよ。あの時、貴方は彼に深々と剣を突き立てられたわよね？あの時にエキスが

入った。そして3つ目は私の力よ。」

「今からそれを唱えるわよ。」

「いくわよ。時を司る王よ、全ての頂に君臨する者よ。女神ターニアが命ず。最善最高の王として、かの者に力を与え給え。解放！」

その時、俺の体の中の何かが駆け巡るのが分かる。

「うぐっ……」

「耐えて。貴方ならできる。」

「はあ……はあ……」

「成功よ。ウエポンブックを見て。」

そこには最後のページに色がつき、新たなライダーが解放された。

「貴方のウエポンブックは常に進化する。終わりはない。」

やっとなんか解放できた。しかし俺はふと気になった事があり、聞いてみた。

「気になったことがある。何故俺は鎧と鏡の武器を2つ装備できている。」

「それは……貴方が女神によって召喚された存在だから。厳密には違うけど……その面だけ見たら、ある意味貴方は波の尖兵でもあるわ。でもこれだけは言える。貴方はあんな下劣な存在ではないわ。」

「そうか、俺が波の尖兵じゃない事が知れただけで良かった。俺はアイツらに良い印象

「は一つも持ってない。」

「じゃあ、戻すわね。貴方は力を手に入れた。でも油断しないでね。」

「任せろ。」

俺は椅子から立ち上がり、再び扉を開けた。

—————

「ライトを・ライトを返せええええええ!!!」

エクレールは来人を失った悲しみから一心不乱に刀を振り回していた。

「この身が滅ぼうとも!!!メディア!!!貴様に!貴様に!矢報いてやる!!!」

「やれやれ、そんなに会いたいなら会わせてあげるわ。」

メディアがエクレールの死角からレーザーを撃つ。

だが、そのレーザーが当たる事はなかった。

突如、軌道上にブラックホールが現れ、レーザーを吸い込んだのだった。

「なに!?!」

「このブラックホール・まさか!」

「残念だったな、メディア。俺は殺せないぜ?」

「ライト!」

「どうやって・確かにお前は消したはず!」

「この世界に絶対はない。ただそれだけだ。」

「くっ：まあ、いいわ。今日のところは退くわ。また明日よ。」

そう言うのとメディアは赤い亀裂を生み出し、その中に転生者達を入れると消えた。

75話

城に戻った俺をピーター達が出迎えた。

「本当にライトですか？」

「疑ってんのか？」

「そりやそうだ。アイツこの世界で死んだ奴を復活させて手駒にしてやる！」

「ナーガの言う通りよ。敵の中に何人三勇教の残党に殺された街の人達を見たか？」

「ああ、彼らをもう一度斬らねばならないと悟った時は手が震えた。」

ターニャ・ターニアは何も言わない。俺が本物だと知ってるから。

「それなら私が判断致しましょう。」

「セバス。」

「私ならば貴方が嘘をついているかどうか分かります。」

「貴方は本物のライトですか？」

「ああ、本物だ。」

「……間違いないですね。まあ、メディアが私の分析を掻い潜ってくる程ならば分かりませんが。」

追求が終わり、俺の潔白が分かったところで俺は1人自室に戻る。

「この力・俺は使いこなせるんだろうか。」

話を聞いた感じでは、俺が死んでから復活するまで1週間経ったようだ。

1週間もの間、奴らと戦い続けて死んだ奴がメディアの手駒として生き返る。

聞いた話ではアトラも復活したとか。

「どうかしてるぜ。死者を弄ぶなんて。」

だが、明日でそれも終わりにしてやる。俺はそう誓い、眠りについたのであった。

次の日、俺達は再び戦場に赴く。

もう既にメディアとメディア率いる転生者軍が陣を敷いていた。

「みなさん！愚かな人達が来ましたよ！さあ！滅ぼしてしまいなさい！」

さて見せるとしようか。

俺の腰がバチバチと光りだし、金色のベルトが現れた。

そして俺を中心に巨大な金色の時計が地面に現れる。

「変・身！」

俺はベルトの両端を叩いた。

祝福の刻！

最高！最善！最大！最強王！

逢魔時王（オーマジオウ）！

俺の現時点での：ターニアから聞いたが平成の最後のページに書かれてあるオーマジオウに変身したのであった。

「それがどうしたのです！行きなさい！」

メディアが命じて俺を潰そうと転生者達が殺到する。

「あの力！欲しい！」

「俺のものだ!!!」

俺は無言で手を払う。

それにより俺に向かってきていた転生者達が消えてしまった。

「!?!」

俺に殺到してきていた転生者達が急ブレーキをかけて止まる。

そりやそうだ。ただの手の動きだけで目の前にいた奴らが消えたからだ。

尚文の号令でメルロマルク軍が突撃を始めた。

俺はすぐにメディアのもとまでたどり着く。

「よう！クソ女神。お前を消滅させにきたぜ。」

メディアが空中に巨大な手を召喚して俺に殴りかかる。

「甘いんだよ。」

俺は拳の軌道上にブラックホールを出し、それを消す。

その時、あちらこちらの軍勢から声上がる。

「な!?!なにを!?!」

「尚文がやったか。」

俺は昨日寝たため、作戦会議に参加できなかった。

だから今日説明された。

俺がメディアの注意を惹いている内に尚文が無理矢理従わされている武器を解放する。

あの感じだと、こちら側に何人か選ばれた奴が出たか。

「把握しました。武器を奪ったのですね。ならば取り返すまで!」

メディアがほくそ笑みながら力を行使する。

しかし、俺が平然としているのを見て顔を青くする。

「なんだ? 休憩時間か?」

「何故貴方は奪われないのですか!」

「さあ? 知らね。」

嘘である。因果律を弄り無効化させているだけだ。

その時、周りから声が聞こえる。

「お、おい。どうする…?」

「勝てくないか?」

そう言う声がチラホラと聞こえたと思うと転生者達が逃げ始めた。

「ふう・仕方ありませんね。」

メディアも俺の前から姿を消した。

(ライト。)

「ターニア?」

(今、私は貴方の心呼びかけてるの! 奴は本拠地に戻った。座標は送った。尚文と錬と元康と樹とラフタリアも向かってるわ!)

「分かった! 俺も続く!」

俺はクウガからビルドまでのライダーを召喚して戦いに向かわせるとすぐに尚文達の後を追った。

追いかけている最中に鎧が一瞬ピリついたが、すぐに収まった。

「やろう・何か仕掛けてやがるな!」

俺は更にスピードを上げ、向かってくる転生者達を轢きながら急いだ。

76話

「間に合った…」

良かった…まだ誰もやられてない…

「何故だ!?何故、力が!!!」

「俺達やグラスの世界の四聖武器がこの世界に楔を打ち込んだ。これでお前は这个世界に結びつけられ、更に神としての力は無くなったぞ!!!」

「おのれええええええええええええええええええええええ!!!」

メディアは剣を手に出現させて尚文に斬りかかる。!!!

「ふん!」ガキン!

俺は高速移動で動き、ザンバットソードで受け止めた。

「鎧の勇者!もうここまで!」

「お前の行くところはバレバレだ。よう諦めろ。お前は滅びる運命だ。」

「黙れ黙れ黙れ!!!私は!!!女神だ!!!やられるはずはない!!!」

メディアが体内の魔力を練り始め放つ。

「ディフェンスリンク！流星壁！」

尚文のスキルが光り、全ての魔法を阻む。

「0の槌！」

尚文の後ろから飛び出したラフタリアの槌がヒットし、メディアのこめかみから血が流れる。

「よくも！私の高貴な顔に傷をつけたな！」

メディアの剣がラフタリアに向かう。

「私の剣は無制限倍速を無限にする究極の最強剣技！お前に見切れるはずは無い！」

そう言い、剣を振り上げる。

「クロックアップ！」

俺は武器をクナイガンに変えて高速移動で振り下ろされた剣を弾きメディアを斬りつける。

「はあっ！」

な!?ラフタリア!?ついてきてやがる・

ラフタリアも通り過ぎながら殴りつける。

クロックオーバー！

「お前の無限はその程度か？遅いな。」

だがラフタリアは攻撃の手を緩めない。

「貴女には数限りない恨みが、それこそ星の数ほどあります。貴女さえいなければ私も何も知らず、平和に……私の周りにいる人々の全てが、理不尽な悲しみに涙する事はありませんでした！」

「貴女は自分がどれだけの事をしていっていると思つているのですか？　世界を意のままに操り、苦しめ、生きようと足掻く者をあざ笑つて、災害を起こして……その果てにこれですか！絶対、絶対に許される問題ではありません！」

鍊達は？俺はそちらを見ると必死に見ようとして追いついていない3……いやいつの間にか来ていたフォウルを含めた4人がいた。

「アル・リベレイション・オーラ極！」

尚文の支援魔法でようやく4人も追いついてきた。

「グングニルMAX！」

「じゃあ俺も！神魔滅殺撃MAX！」

元康の槍が顔を、フォウルの拳が胸にヒットし貫通した。

槍が通り、メデイアの頬からツツと血が流れる。

「楽に死ねると思うなよ!!!」

「こっちもいるぞ!!!」

「バリアブルメサイアMAX!」

「流星剣MAX!」

錬の剣がメディアアの剣を弾く。そして懐に飛び込みゼロ距離で無数の星が刺さる。

「アルテミスMAX!」

尚も抵抗するメディアアの胸に矢が刺さり、爆発する。

おお! 派手だねえ!

「みなさん! 下がって!」

そう言う樹の持つ弓の形が変わり、弓がついた銃のような形に変わる。

「ムーンライトバスターMAX!」

銃口から極太のレーザーが放たれ、メディアアを包む。

「おのれえええ!!!」

「ですが、まあいいでしょう。まだ世界は沢山ある。精々仮初の平和を楽しむことね。」

その言葉に俺は吹き出してしまふ。

「お前バカか? 楔で逃げられねえって言ってんだろ? 頭沸いてんのか?」

「殺す!!! 絶対に殺す!!!」

勝ち誇った目がつり上がり、俺達に敵意を剥く。

「かいぎーねいるまつくすー！」

俺達の後ろから刃状のエネルギーが飛び、メディアを斬り裂く。

「フィーロー！」

「ごしゅじん、まにあつたよ!!」

「我らも行くぞ!!!」

俺の仲間が追いついたな。

「玉変換！戦士！ギガブレイクMAX！」

「ボルケニックハリケーンMAX！」

「具現化！四霊の息吹MAX！」

「スターダストブレイドMAX！」

「サウザンドナイフMAX！」

「全員退避！」

俺は上空から隕石を降らす。やろうと思えば無数に振らせるが仕留めるために一個に集中だ。

「そんなもの当たる前に避ければ…」

「ディメンションウィップ！」

突如何者が振るう鞭が逃げようとするメディアの足を捕らえる。

「やっと追いつきましたよ！ライトさん！」

「追いついたわよ、ライト。」

「ラック！ネロ！」

ラックの手には斧、ネロの手には鞭が握られていた。

「ラック！私が抑えているうちにやりなさい！」

「ありがとう！ネロ！」

「グランドスマツシユMAX！」

「追いついたぞ！ナオファミ殿！」

クズさんが杖を振るい、隕石を凍らせる。

「これは妻が得意とした氷と炎の境界じゃ！」

「私だつて！」

メルティが演奏魔法で更に隕石にかかる魔法を強くする。

「離せええええええええ！！！」

メディアは必死に鞭を斬ろうとするがラフタリアがさせない。

「グラビティハンマー！」

「ぐふっ…」

ラフタリアが振り下ろしたハンマーにより更にメディアが地面に縛られる。

隕石が炸裂し、辺りに大爆発が起きる。

その瞬間にピーターとクズは同時に魔法障壁を張る。

煙が晴れるとメディアは泣いていた。

「パパ…どうして私にひどいことをするの?」

メディアはマルティの声を使い、呼びかける。

クズは一瞬閉じた目を開き、言い放つ。

「黙れ! 貴様のような人々に災厄をもたらし、その不幸を笑うものなど私の娘ではない

! 貴様は悪魔だ!」

「者ども! 正念場じゃ! 畳みかけるんじや!」

「ドリッド・スラツシュ! スローインMAX!」

リーシアが斬り込み、そして距離を離して短剣を投げつける。

「白鯨・勇魚撃、最大!」

サディナが水で構築した水のクジラにモリを突き立てて水を大量に降らせる。

「私を忘れてもらっては困ります!」

「劍舞極ノ型・無、最大！」

グラスが連続で斬りつける。

そして水が来る前にグラスは退避し、大量の水がメディアに降り注いだ。

「いい加減にしろよお!!!」

「貴様ら全員魂すら残さずに殺してくれるわ!!!その後：この世界ごと消してくれるわ!!!」

メディアがスピードを上げ始める。

尚文も周りに魔法をかける余裕がないのか、今動けるのは俺と尚文とラフタリアとアトラだけだ。

「絶対必中、絶対即死『インフィニティ・デストロイヤー』お前等は死。過去、現在、未来、並行世界、分岐世界、因果律、この世の全ての事情にも何者にも阻止出来ず、ただ、消滅あるのみ！無限、永遠、亜光速でもたらされる死を思い知れ！」

メディアの全身全霊の神の一撃が放たれる。

「やっちまえ！尚文！」

「おおお!!!」

尚文が盾を構える。

「あっはっはっはっはっは!!!言ったわよねえ!!!絶対即死って!!!死んだわ!!!」

「しかし、この攻撃は尚文や尚文が味方だと認識している者達に対して効果はなかったのであつた。」

俺は未来ノートにサラサラと文章を書く。

「アトラ！やるぞ!!!」

「はい!!!」

「増幅反射!!!」

「どりああああああ!!!」

受け止めたメディアの攻撃をそのまま跳ね返す。

まさか跳ね返されると思つてなかつたのか、メディアは避けられずにモロにくらう。

「私の攻撃を!!!だが、これは私の力!!!私は死にはしない!!!」

「耐えられるか:!!!」

「尚文!!!任せろ!!!」

俺はベルトの両端を叩く。

すると俺は黒や金の光や炎に包まれる。

終焉の刻!!!

俺はそのまま飛び上がり、ライダーキックの体勢に入る。

「逢魔時王必殺撃!!!」

キックが顔に炸裂する。

「わざわざ攻撃に入ってくるとは!!!よほど死にたいらしいな!!!」

「無駄だ。この攻撃は尚文が味方と認識している者にはくらわん。それに俺の加護が死なせない。その傷をつけた者の加護がな！」

「加護：傷：そうか!?あの小娘!!!」

「完全に消え去ってしまったえ!!!」

俺は顔を蹴り抜き、宙返りで尚文のもとに着地する。

「こんな…こんなことって!!!」

メディアアは大爆発を起し、完全に消滅したのであった。

「やっと終わったか…」

「ああ。」

「思えば俺が思い描いていた愉快な冒険譚とは違ったな。」

「それは俺もだ。だがこれはこれでよかつたろ？」

「まったくだ。」

「勝ったのか？」

「ああ。」

エクレールが俺のそばまで来たため、そう答える。

「俺達の・勝ちだ！」

尚文がそう告げ、辺りには歓声が巻き起こった。

こうして長きに渡る戦いは終わったのであった。

77話

城下町に帰ってきた俺達を皆祝福した。

まず門に入ったところからパレードのようになっていた。

勇者様、ありがとう！

こんな声が城に入るまで続いた。

メルロマルクにも大きな変化があった。

人間、亜人が入り混じって俺達を祝福している。あんなに亜人を差別していた街とは思えない。

それにしても勇者20人か。多いな。俺が知ってる物語では一番多い。

あまりにも数が多いため、5つに分けて入場した。俺達は尚文の前、最後から2番目だ。

ラックとネロは俺の街に住んでるため、俺のパーティー扱いとし、グラスは尚文のパーティーということにした。

寝られると思ったが、今から世界が平和になった事を祝ってパーティーをするらしい。

勘弁してほしい。

：諦めるか。

諦めたことで無理矢理テンションを上げて俺はパーティに参加し、料理を食べ始めた。

何人か貴族が俺のもとへ挨拶に来た。

是非、娘の婿にだとかだ。

まあ、考えとくとだけ言っただけ言っただけ帰ってもらった。

「なんと！ナーガ！お前は師匠の息子だったのか！」

「師匠？悪いな、俺：親の顔を知らねえんだ。物心ついた時には奴隷だったから。」

「そうか：師匠は素晴らしい人だった：私も師匠のような武人になる為によく修行したものだ。」

そうか、ナーガの父親ってエクレールの師匠だったんだな。知らなかった。

「エクレール!!!」

酒が回って酔っ払ってる鍊がエクレールのもとまで歩いてくる。

「な、なんだ！レン！」

「俺は世界が平和になったら言うつもりだった！」

「俺と付き合ってくれ！」

その大胆な告白に一瞬城内の時が止まるが、ザワザワと声がしだす。

「劍の勇者様が刀の勇者様に告白したぞ。」

「劍と刀だろ？釣り合うんじゃないか？」

「その：お前が私に告白してくれた事、嬉しく思う。だが私には心に決めた人がいる！」

エクレールはそう叫ぶと、歩き始める。

何故か、俺がいる方向に。

「わ：私は：幼き頃から劍と共に生きてきた：世の男が望むお淑やかな女性には程遠い
・でもそれでもライトの事が好きだ！」

「私と：結婚してほしい!!!」

マジか：知らなかった：

鍊の方を見ると俺の事を泣きそうな顔で見ている。あ：泣いた。

「ああ。これからもよろしくな。」

俺はそう言ってエクレールを抱きしめた。

数日後。

セーアエツト領。

「なあ、俺似合ってるか？着られてないか？」

「バツチリですよ、ライト。」

「ああ、かつこいいぜ！」

「似合ってますとも。」

俺はピーターとナーガとセバスと控室にいた。もちろん新郎のだ。

俺とエクレールは、とうとう結婚することになった。

樹とリーシアの結婚式で大体の流れは確認したが、参加する側と主役側だと、こうも違うのか。

ナーガ率いる建設部隊が急ピッチで教会を建設してくれた。よくやってくれたよ。

コンコン

「ライト様。新婦様の準備が整いました。」

俺は椅子から立ち上がり、新婦の控室まで歩く。外にはミコとターニヤ、リファナがいた。

「凄いわよ、彼女。」

「綺麗だった……」

「私もいずれ……」

そしてドアノブに手をかける。

「ヤベツ……吐きそう……」

「吐くなよ!？」

俺は飲み込んで目を閉じる。

スー……ハー……

「よし……」

深呼吸を済ませて俺は部屋に入る。

そこには、こちらに背を向けて座る女性がいた。

俺に気がついた、その人は俺の方に向き、ニコツと笑いかけた。

エクレールだ。長くて美しいストロベリーブロンドの髪は綺麗にまとめられ、いつも最低限しかしていなかった化粧もプロに任せたお陰でいつもより違って見える。

「あの……似合って……いるだろうか……」

「え?……あ……ああ!似合ってるとも!」

そこからお互い恥ずかしくて喋る事が出来なくなり、式が始まった。

神父を務める住人があのセリフを言う。

「ライトさん。あなたは今エクレールさんを妻とし、神の導きによつて夫婦になろうと
しています。」

「汝 健やかなる時も 病める時も 喜びの時も 悲しみの時も 富める時も 貧しい

時もこれを愛し 敬い 慰め遣え 共に助け合い その命ある限り 真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います。」

「エクレーールさん。あなたは今ライトさんを夫とし、神の導きによつて夫婦になろうとしています。」

「汝 健やかなる時も 病める時も 喜びの時も 悲しみの時も 富める時も 貧しい時も これを愛し 敬い 慰め遣え 共に助け合い その命ある限り 真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います。」

力強く、凜々しい声だ。

エクレーールを守る為ならば俺は神でも悪魔でも何でも戦つてやるよ。

俺とエクレーールの声に神父はうなづく。

「それでは指輪の交換と、誓いのキスを。」

顔を朱に染めたエクレーールの左手を取り、その薬指に指輪をはめる。

エクレーールもたどたどしい手つきながら同様に俺の薬指に指輪をはめた。

エクレーールのペールをあげて顔を出す。

緊張からか目を瞑るエクレーールの耳元で誰にも聞こえないくらいの声で囁く。

「エクレール。愛してるぞ。」

その声で目を開けたエクレールは嬉しそうに微笑み俺と同じくらい小さい声で言った。

「私も愛しています。ライト。」

そして俺達は唇を重ねる。

教会の中は拍手喝采に包まれる。

みんなに祝福されながら俺は誓う。

この先、何があっても俺はエクレールを守り続ける。命をかけて君を守り続けるんだと。

番外編 78話

エクレールと結婚して数ヶ月後。

セーアエツト領はますます発展した。街の名はフラツシユとなった。意味は言わずもなが俺のライトという名を光のライトだと皆が勘違いしたからだ。

尚文が作ったロックバレーとも交易が始まった。

その後の俺達だが。

ピーターは街の自警団を率いた。奴のお陰で街は平和だ。

ナーガは建設会社【龍】を作った。そして奴には春が訪れた。相手はネロらしい。

ミコは部隊を率いて狩猟をしつつ、街の外の警備をしている。

エクレールは刀の勇者と町長の両立にてんてこ舞いらしい。そして腹には命が最近宿った。

ターニャは未だ蔓延る奴隷問題をたまに樹とリーシアと解決すべく尽力している。

最近もひとつ組織を潰してきたらしい。

セバスはこの街の相談役となった。彼のお悩み相談室は好評らしい。

リファナはあの日、自分を火事から守ってくれた今は亡きポールの意志を継いで、病

院を立ち上げてこの街の医者になった。

そして俺は今・

「会いに行きたいって言ったの本気だったんだ。」

パンパンのリュックを背負い、紙袋を持ってターニアと一緒に廊下を歩いてた。

ここは天界にある監獄だ。そこを法を司る女神ネメシスさんの先導のもと、ターニアと共に歩いている。

「彼には面会は伝えてあります。ですが誰が来るかは言ってませんので。」

「そうですか。まあ会えるだけいいです。お互い誤解したまま別れましたから。」

「まあ、今回は牢屋ではなく特別に部屋を用意しましたので。そこで会ってください。」

俺は部屋の前にたどり着く。

「入っていいのか?」

「ええ。ですがターニアさんはやめた方がいいかと。」

「何故ですか?」

「彼：女神っていうものが嫌いなんですよ。色々あったので:」

コンコン

「来たのか? ネメシス。」

「はい。」

ネメシスさんが先に入り、俺達は中に入る。

「あ？誰かと思えばお前か。勇者ライト。」

「あの時ぶりだな。魔王リュウジ。」

俺達は睨み合いながら近づいていく。

そしてお互いの拳が届く距離まで近づく。

「ちよつと！喧嘩は！」

「止めるわよ。ネメシス！」

ガシッ！

「助かったぜ。お前のおかげでメディアに勝てた。」

「作戦とはいえ、悪かったな。騙すような真似して。」

俺達はお互いに握手を交わした。

「あれ？一触即発じゃ？」

「男は殴り合うと友情が深まるんだよ。」

「ああ、言い方は悪いが女には分からねえことかもしれねえな。」

「ハッハッハッハッ」

!!!!!!!

「で？そのリュックと紙袋なんだよ？」

「これか？なんだかんだと・・」

「いいから見せて。」

「チエツ！わかったよ。」

俺はゴソゴソとリュックを開けて中から大量の酒とおつまみを取り出して並べていく。

「おお!!!ワインにブランデー、ビールにウイスキー！すげえ！でも、これなんだ？」

リュウジは見たこともない酒瓶達を手取る。

「右から俺の仲間のナーガと作った龍の火酒、妻のエクレールと作ったホリデー・オブ・ナイト、そして最後がルコルの実で作った巨人の盾だ。最後のやつはルコルの実を一個丸々入れてるからな。あるお得意様や命知らず達に勧めてる一品だ！」

「盾：ああ。尚文か。」

「そうだ。」

「そしてまだ聞かれてないけど紙袋を出すぜ！これだ！」

俺は勢いよく出して静かに床に置いた。

「Wiiじじいアアアアアア!!!」

「おおおお!!!お前どつから!!!メルロマルクで作ったのか!!!」

「違うな。ターニアに持ってきてもらった。」

「ターニア？ああ、ネメシスの同僚だ。」

「ターニア？」

「ターニア・J・ローズブレイドです。」

「アンタ女神か。見りゃ分かる。で？そのミドルネームのJって本当にJだけか？」

「ええ。」

「嘘ね。」

ターニアの発言にネメシスが答える。

「ちよっ!？」

「ほほう、俺はターニアの本名さえ初めて聞いたが、Jは略なのか。で？本当は？」

「ああ、それはね……」

「分かった！分かったから……私から言わせて……」

ターニアは必死になってネメシスを止めて顔を赤くしてモジモジしながら答えた。

「………ジョースターよ。」

ジョースター!!!

「プフッ。」

あ！リュウジが吹き出した。

「アツハツハツハッ!!! ジョースターwwww」

「だから言いたくなかったのよ!!! 小学生の頃に、保護者から自分の名前の由来を聞いてこようって宿題が出て、勿論聞いたわよ! ターニアはローマの殉教者をもじったもの、ローズブレイドは代々私の家に咲く薔薇の葉っぱから。」

俺達は段々声が大きくなるターニアを黙って見る。

「ここまではよかったわ。素晴らしいわ。だからその流れで聞いたのよ。、 ジョースターはどこから来たの?」って。」

「そしたら父が立ち上がって書斎から一冊の漫画を取ってきて言ったわ。、 このマンガの主人公から取った、 って。冗談じゃないわよ! なんて大切な一人娘に漫画の主人公の名前をつけるのよ!!! そりゃ私だって読むわよ!!! 今となつては好きな漫画だから!!」

「でもそれとこれとは別よ!!! 次の日の宿題発表が恥ずかしかったわよ!!! 今でも忘れないわ!!! 私が発表し終えた後に笑った水色髪の女神のことを!!!」

それを言い切ったターニアは一瞬あの時の女神の笑いが頭の中で流れた。

(ターニアってば……ププツ……ミドルネームの由来が書物の英雄ならまだしも………マンガの主人公って……プークスクス!!! 超笑えるんですけどー!)

急にターニアの目のハイライトが消えて俺の足下に置いた酒瓶を一つ取ると片手で

栓を抜き、ゴクゴクと呑み始めた。

一気に空にするとドン！と床に瓶を割れないように叩きつけた。

「ゲームやるわよ。さあ！早く繋ぎなさい!!」

「だが、残念だ。テレビがない。うちのはただのゲームや映画観る用の壁に埋め込むタイプの所謂モニターだからな。持ってこれなかった。」

「心配するな。ここにがある。」

そう言いリュウジはリモコンを取り出してスイッチを押した。

すると天井からスルスルと映画館レベルのスクリーンが降りてきた。

「ここは会議室だからな。ほら配線貸せ。つなぐから。」

俺とリュウジで配線を繋いでゲームを起動した。

「さて何やるんだ?」

「その前に乾杯だ。」

俺が酒を注ごうとしたらリュウジが横から瓶を取る。

「ほらよ。」

「ありがとうな。ほら、お返した。」

リュウジの手から瓶を取り、注いでやる。

「選んでくれ。」

俺は紙袋に入れたソフトを並べていく。

「おお!!!ス○ブラに、マリ○パーティに、Wiisポ○リゾートに、桃○にマリ○カー
ト! 全体的にマリ○要素が強いが: パーティゲームの醍醐味じゃねえか! せっかくだ
からスマブラやるぜ!!!」

「俺のスマブラは無茶苦茶だぜ! なんと! 今までのキャラ&新しいキャラが搭載されて
るんだぜ! つまりswitc○版のス○ブラが遊べるんだぜ!」

「ス○ツチが何か分からないが、とにかく凄さは伝わってくるぜ!」

「じゃあ、俺はピットな。」

「じゃあ、俺はメタナイトだ。」

「私は: リンクで。」

「サムス使います。」

来人がピット、リュウジがメタナイト、ターニアがリンク、ネメシスがサムスを使用
して大乱闘が始まったのだった。

—————

「ハツハツハツハツ!!! 一番乗りだぜ!!!」

「俺の赤コウラが及ばなかつたか。」

「やっぱりライトが勝ったわね!」

「くう・賭けが外れた・」

今は俺とリウウジがマリ○カートをし、ターニアとネメシスはどっちが勝つかを賭けながら酒を飲んでいる。

「あ！そろそろですね。では私達はそろそろ帰ります。」

そう言い、ネメシスとターニアは立ち上がった。

「ライトさんは帰る時になったら受付に行ってください。そしたら私が道を開きますので。」

そう言って部屋から出ていった。

それと入れ違いに悪魔が2人入ってきた。1人は山羊の下半身でチンピラの様な顔、もう1人は凛々しい顔立ちをしており、蠅の様な頭に虫の羽根を生やした奴だ。

「誰?」

「お！アザゼルにベルゼブブじゃあないか！どした？お前ら、奉仕活動は？」

「終わったで？ほんで暇やから遊びに行こか？つてなつたんよ。」

「ええ。それに異世界の勇者が来ていると聞きましたので少し顔を出そうと思った次第ですよ。」

アザゼルにベルゼブブで。ガチじゃん。ソロモンじゃん。

「俺は鎧の勇者、ライト・セーアエットです。」

「セーアエツト? お前日本名はどうした?」

当然リユウジが聞いてくる。

「俺、結婚したからさ。それで妻は親戚はおろか、家族がいない。だから伊達になつちまうと家が滅んじまう。だから俺が変えた。所謂、婿入りだ。」

「へえ、結婚か。そりやなんかやらねえとな。」

「我々が置いてけぼりなのですが。」

「ああ、こいつは俺を止める為にわざわざ異世界から乗り込んできてよ? まあ、結果的には俺が勝ったんだけど。だがコイツは強いぞ? なんてつたつてコイツ2回俺のこと殺したんだぜ?」

「あんさん、2回も殺されたんかいな。」

「で! 今は別に敵対する理由はねえからな。仲良くなつたつて訳だ。」

「そうだ。お前ら暇だろ? Wiiやろうぜ!」

「Wii?」

「ああ、Wiiかいな。」

そこからは、また4人でWiiをやりまくり結果だけいうと解散した時には朝日が登る頃だった。

「楽しかったぜ。リユウジ。それに2人も。」

「ああ、俺もだ。」

「たまに英雄が乗り込んでくるんやけど、あんさんみたいな奴やったらいつでも歓迎するで?。」

「ええ、私も楽しかったですよ。」

俺とリュウジはガツチリと握手を交わす。

「またな。」